
コッコさんふらぐめんと(おまけ詰め合わせ集)

田山歴史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コッコさんふらぐめんと（おまけ詰め合わせ集）

【Nコード】

N3586D

【作者名】

田山歴史

【あらすじ】

この物語は、全部終わった後に残された色々なものを面白おかしく語るための物語。彼とみんなと幸せと、あったかもしれない結末をもんじゃ焼きのようにごっちゃにしてまとめた、ただそれだけのお話である。……ので、なるべくなら『僕の家族のコッコさんつヴあい！』を読了してからお読みください

第一話：僕とみんなと幸せと（前書き）

というわけで、ある意味では新連載ではない物語。

第一話は初心者でもそれなりに読めるようになっておりますが、なるべくなら『僕の家族のコッコさん つづあい！』を読了してからお読みください。

第一話：僕とみんなと幸せと

では、まずは軽いジャブから。

私の名前は山口コッコ。月ノ葉光琥と呼ばれることもあるけれど、そっちはまああだ名みたいなもので、今はこっちの方が本名みたいなものだ。

服装はいつものように、着るのにいちいち時間のかかる可愛いメイド服。

黒のワンピースにエプロンドレス、カフスとカチューシャと純銀製のイルカのブローチを身につけて、歩きやすく丈夫なブーツを履いて、私はいつものように部屋を出る。

まあ、部屋とはいっても私が勤めている宿屋に作られた従業員が寝泊りする部屋なのだけれど……ある意味、監獄という気がしないでもない。

「……やれやれ、かな」

この宿に来た時から口癖のようになってしまった言葉を呟きながら、私は歩き出す。

今は朝の六時。普通の人起きて活動するには少々早い時間だけれど、私の相棒というか主というか恋焦がれている相手というかキツネというかこの宿屋の店主というか……まあ、そんな感じの存在を起こすために私はそれより早く起きているわけだ。

前の職場（古いけどそこそこ豪華なお屋敷）に居た時は、もっと自由奔放にやりたいことをやっていたのだけれど、そのせいで色々面倒なことになって、私は今こうしてツケを払い続けている。…つまり、自業自得で損をしているわけだ。

ホント、なんであんなコトをしたんだろう。四年前の自分にもし
出会えたら、フルパワーでぶん殴ってやりたい。

さて、それはともかく、私はいつも通りに目的の部屋に到着する。
毎朝のように部屋を訪れてはいるけれど、毎朝のように心臓が爆
発しそうになる。

ああ、開けたくない。今日はどんなドッキリが待ち受けているや
ら……。

「失礼します」

「……………んー」

嫌な予感が、私の背中を走り抜ける。

どうやら、彼は極めて不機嫌らしい。彼が不機嫌だということは、
つまり彼が不機嫌になるようなことがあったということで、それは
大抵私にとっては愉快なことじゃない。

ついでに言えば、彼は不機嫌だからといって人に当り散らすよう
な人ではなく、かといって仕事にいちやもんをつけるわけでもない。
ただ……心臓に悪いことを平気でやらかすようになる。

「えっと、失礼していいですか？」

「……………心の準備ができたならどうぞ」

「……………」

うう、帰りたい。今すぐ部屋に帰ってお茶飲んで寝たい。

仕方なく弱気をねじ伏せて、私はドアノブに手をかけて扉を開け
た。

開けなきゃ良かったと、毎度後悔してるのだけど。

不機嫌そうにぼんやりと欠伸をしながら、彼はベッドに寝転がっ
て小説などを読みながら、ぶかぶかとタバコをふかしていた。

短い髪に鋭い目つき、傷跡の残る左目は瞳まで赤く、右目は真っ
赤に充血している。今日はなぜか普段はしていない眼鏡をしている。
服装は猫柄の甚平。とてもではないが成人男性が着る服とは思えな

かったが、彼は可愛いものが異様なまでに大好きなので、普通のその甚平を着て眠っている。

問題なのは、彼じゃない。

問題なのは、彼の隣で心地よく眠っている同じような寝巻きを着た少女の方だ。

彼女は私の同僚で、名前は黒霧冥。垂れ目が似合う可愛い顔立ちと胸の辺りがちょっと羨ましい女の子で、とても優秀……というより、なんでもできるメイド。彼の右腕のような役目をしている。

ただ、神出鬼没すぎて普段なにをやっているのかよく分からない。普通の仕事をやっている時もあるし、丸々三日ほど宿を留守にすることもある。

まあ、それはともかく。

えっと……もしかして、そういう状況なんだろうか？

「コッコさん、一応言っておきますけど違いますから、拳を握るのはやめてください」

「この状況は勘違いする余地もないんじゃないかと思えますが？」

「んー……まあ、そうかもしれないですね」

不機嫌そうな顔のまま、それでも優しく冥さんの頭を撫でて、彼は口元を緩める。

「信じるも信じないも自由なんですけど、これは仕方がないことの一つです」

「……どういう意味ですか？」

「コッコさんと同じです。心の傷に心の病。一生治らないものと向き合わなきゃいけないことが、世界にはたくさんあります。冥のこれだって似たようなものです」

一生治らないものと向き合う。

四年前の私にはその覚悟がなくて、結局暴走して迷惑をかけた。

今は覚悟があると思う。傷と向き合う覚悟は、ちゃんと決めたと思っている。

「コッコさんは本質的には強い女性です。でも、冥はそうじゃない」

「……………」
「詳しいことは省きますが、やったことは残ります。一生ついて回ります。……後悔してるぶんだけ、心の傷として。これもその一つです」

なんとなく、分かったような気がした。

前の職場にいた時、私はそれなりに早い時間で眠っていたのだけれど、それにも関わらず冥さんが『一緒に遊びませんか』と言って部屋にやってきて、そのまま一緒に寝てしまったことが何回かあった。

今になって思えば、あれは伏線だったんじゃないかと思う。

その日に限っていつも冥さんを構っているはずの人が、徹夜仕事で冥さんに構う暇がなかったのだから。

「……冥さんは誰かと一緒にじゃないと、眠れないってことですか？」

「今はそうでもないらしいんですけどね。一ヶ月に一回か二回くらい、不安定になる時期があるそうです。……ま、この程度なら許容範囲内だから別にいいんですけど」

ゆっくりと溜息を吐いて、彼はちらりと時計を見た。

「冥、そろそろ起きる時間だよ」

「……………」

「冥」

「……あと、ごぶん」

「ほう……そんなにおはようのちゅーがご所望か、ウチのメイドさんはんは」

「っー?」

一瞬で目を覚ました冥さんは、眠ったままの姿勢から腕の力だけで跳躍。そのまま空中で体を捻って一回転し地面に着地した。

そして、何事もなかったかのように恭しく礼をする。

「おはようございます、ご主人様」

「おはよう。昨日はよく眠れたかな？」

「はい、そりゃもつぱちぶぎゅっ!？」

最後まで言わせることなく、彼は冥さんの頬をつねり上げた。

「よし、体調はいいようだな僕のメイド。それならさっさと服を着替えて仕事に行くといい。言っておくが、毎度の通り生殺されて僕はそれなりに不機嫌だ。今から機嫌をさくつと直して仕事にかか
るから、君もいつも通りによるしく」

「ひゃい。ごひゅひんはま」

彼が不機嫌を隠そうともしないのに対し、顔色一つ変えることなく、むしろにこにここと笑いながら応じる冥さん。

……なかなか混沌とした関係の二人だった。

それからはさすがというかなんというか、二人はあつという間に身支度を整えた。冥さんは一旦部屋に戻って私よりもデザインが控え目なメイド服を着て再登場し、彼は一旦私を退室させてから、いつも通りのダークスーツに着替えた。

「じゃ、とりあえず仕入れはこんな感じで。友樹とアンナさんの所には話は通してあるから。その通りに頼む。なにかあったらいつも通りに連絡するように」

「宿泊客が少ないのがちょっと問題ですね。集客はどうしましょうか？」

「なに、正義の味方や自分を悪だと言い張っているお人好しは金貯め込んでる連中がほとんどだからね、上客を一人か二人捕まえてくればすぐに採算は取れる」

「外道っぽい手法ですねえ」

「そのあたりは、『普通』の側に属することができなかった代償みたいなものだよ。仕方ないと割り切ってもらう代わりに、この宿じやゆつくりとくつろいでもらうだけさ」

「了解、ではその通りに」

二人がどんな打ち合わせをしているのかまではよく分からなかったけど、わりとあこぎなことをしているのは、よく分かった。

うーん……これも成長と言えるんだろうか。

そんなこんなで手早く打ち合わせを終えて、冥さんは一礼を残し

て部屋を出て行った。その後姿を見送ってから、彼は首筋を「キキ」と鳴らす。

「やれやれ……さすがに寝不足はちょっと辛いかな」

「コーヒーでも煎れましょうか？」

「んー……まあ、これから出かけるからコーヒーはいいや」

「外出ですか？」

「うん」

「……………ん？ 今ちょっと女の直感らしきものに引っ掛かったよ
うな気がする。」

いや、でも気のせいだろう。彼はダークスーツのまま準備を整えているし、鞆に入っているものも、ぱっと見では怪しいものは一切存在しない。

でも……なんだろう。こう、言葉にはできない違和感が付きまとっている。

「じゃ、ちよつと行って来るよ。帰りは明日になるから」

「あ、はい。……行ってらっしゃい」

彼は口元を緩めながら、いつものように部屋を出て行く。

ドアが閉まり、私はなんとなく苦笑する。

「まさか、ね」

「そのまさかだったらどうするね、メイドさん」

「いえいえ、彼の好みのタイプは働き者でかつ綺麗で自分に敵しい女性です。それ以外の女性には一切にしかなびかないという徹底っぷり。彼の好みにドストライクな女性なんて、この宿でも4人しかひゃああああああああああああああああっ!？」

「うむ、驚くのが遅くて実にいい感じだぞ、メイドさん」

いつの間にか、本当にいつの間にか、彼女は私の背後に立っていた。

緑の外套に同色のベレー帽。膝裏まで届く長すぎる黒い髪、つり目、黙ってれば十人中五人が可愛いと評する顔立ち、スレンダーな体つきはなんとなく針金を思わせる。

確かこの宿の宿泊しているお客様の一人で、名前は確か……。

「そう、人呼んで奇ノ森ぜつむ（仮名）！ 職業は名探偵だっ！！」
「さーで、今日も一日忙しくなりそうですねえ」

「ふっ、私にそんな口を聞いていいのかな、メイドさんっ！ 私の名前は奇ノ森ぜつむ（仮名）。ありとあらゆる縁やら物やら人やらを探し出す、本当の意味での名探偵！ 人の秘密とかそういうのもお見通しなんだぞっ！。……そうだな、今日のメイドさんの下着の色は淡い水色でぐぶっ!？」

私の放ったボディブローをまともに食らい、ぜつむ（仮名）さんは倒れ伏した。

「……き、客に容赦なく手を上げるとは。さすがは彼の雇用する女性だ。全員例外なく容赦がなさすぎる」

「……………」
私ならともかく、みんなにまでなんかしようとしたのか、この人。怖いもの知らずというか、なんとというか。

「冥ちゃんはおっぱい大きいね、触らせて」って言ったら音速で殴ってくるし、舞ちゃん先輩は「腰細いですね、触らせて」って可愛く言ったら糸で逆さ吊りにするし、ロリ京子さんはなんか私の顔を見ただけで嫌そうな顔をする上に食事は手抜きだし、美里S貴婦人はなんかやたら可愛い服を私に着せようとするし、キツネ先輩は「宿泊料は一泊3000円な」とかひどいことを言うし」

「……殺されても仕方がないような気がします」
私は口元を歪めて思い切り溜息を吐いた。

というか、従業員のほぼ全員にセクハラを働いてよく生きてたものだと思う。

言葉から察するに、奇ノ森ぜつむ（仮名）という少女は彼の後輩で、ついでに言うならそのコネを使ってこの宿に泊まっているらしい。

自分に敵しい女の子が好きだけど、実は年下には滅法弱かったりする。

「泊三千円は、かなりどころか明らかに破格だ。」

「まあ、それはそれとしてだメイドさん。彼の動向についてなのだが、興味はないのかな？　なんか浮気とか、そういうのって気にならないかな？」

「うーん、気にならないと言えば嘘になりますが、そういうのを過剰に気にするのもアレかなあって思いますしね。」

「め、めいどサン？　なんだか貴女の指が私の首を締め付けているんだケドツ！」

「あー……でも、ちよつと気になってきちゃったかな？　でも、私にも仕事があるし、彼の後を追うわけにはいけないし、どこかにいる探偵さんが『自主的』に教えてくれるんだったら、私としても不安が消えて万々歳なんだけど。」

「教えます、教えますから……お願いだから殺すのは、ぐふっ」

顔が真っ白になった頃合を見計らって、私は自称名探偵の首を離した。

「……げほっげほっ、うう……なんてメイドさんだ。死ぬかと思っただ。キツネ先輩がどーしてあんなになってしまったのか、理由の一端を垣間見たような気がするぞ。」

「それで、彼は普段外出した時なんかはどこでなにをしてるんですか？」

「私を殺しかけたのは華麗にスルーして本題に入るとはなかなかできることじゃないと思うよ、Vメイドさん。」

Vつてのはヴァイオレンスの略かなんかだろうか。

「うーん……さすがに毎回ストレートパンチっていうのも芸がないから、そろそろ別の方面でアプローチをした方がいいのかもしれない。」

「……やっぱり、締め技か？」

「Vメイドさん。少なくともそれだけは違うと言っておく。」

「しかし、締め技なら多少の手加減はできますが、関節技や技巧を凝らした打突となるとこれはもう致死率も高くて非常に危険なんで

すよ?」

「頼むから暴力から離れてくださいっ!!」

さつきまで厚顔不遜だった少女が、半分泣きながら懇願してきた。まあ、そこまで言われて殴るのはただの鬼畜でしかないので、教育的指導はここまでにしておこう。それよりも、今は聞かなければいけないことがある。

「それで、彼はどこに出かけたんですか?」

「いやいや、Vメイドさん。それを聞く前に依頼料とかそういうものを」

「気功の達人になると、五百円玉で檜の板を打ち抜くことも可能だそうですが、それはご存知ですか?」

「な、なんでも暴力で解決するのはよくないと思うんだっ!」

「しかし、私も手持ちはそんなに多くありませんよ」

「なら、ここは割り勘ってところだな」

「でしょうねエ」

今一番聞きたくない声が、耳朵を打つ。

振り向くと、そこには小さな巨人のコックさんと、一見淑女に見える彼女がにやにやと笑いながら立っていた。ちなみに、二人とも目は笑っていない。

小さな巨人のコックさん。宿屋で料理全般を取り仕切っている彼女。名前を梨本京子という。可愛い顔立ちに身長百四十三センチという、小学生と見間違えんばかりの小柄な人だが実質は一番の大人な人だ。私もちよくちよくお世話になっている。年齢は24歳で今が一番の女盛りといったところで、とても羨ましい。ロリ、ちっちゃい、可愛い等の言葉にとっても敏感。根深いコンプレックスらしい。

一見淑女に見える彼女。宿屋を実質取り仕切っている彼女の名前を橘美里という。身長は167センチ。ほっそりとした体つきに反し、出るところは出て引つ込むべきところは引つ込んでいる美女。腰まで伸ばした髪のお団子にしてまとめている。温和な微笑を

絶やさないう菩薩のような人に見せかけて超絶DS。彼のとの年齢差は12歳で、たぶんシヨタコンだと思う。現在の年齢は32歳。特技は合気道五段に見せかけた、なんだかよく分からない超絶気功術。青竜刀くらいなら素手でへし折れるのではないだろうか。

「コツコちゃん？　なんだか悪意を感じるのだけど、気のせいかしら？」

「いえ、全然さっぱりまったくの気のせいでしょう。それはともかく、二人は一体なにをしているんですか？」

「ああ、山口を探してたらなんか面白そうな話をしてるみたいだから、一口乗ろうってわけだ。最近暇だしな、刺激はほどほどにっわけだ」

「彼が外出してる時、なにをしてるのかちょっと気になりますしね」
そんなことを言いながら、二人ともさつきからちっとも目が笑っています。

うーん……藪を突いて虎と竜が出た、みたいな気分だ。

と、私があらゆる意味で困っていると、自称名探偵が申し訳なさそうに口を開いた。

「あのー……ところで、依頼料の件なんだけど」

「1000円ずつでいいですかね？」

「えー？　あたし昨日こいつに昼飯奢ったぞ？」

「そもそも、宿に飾ってあったイミテーションの絵画を破った時点で2万円ほどの罰金なんですけど、その辺はいかがお考えでしょうか？　お客様」

「……すみませんでした。無料で結構です」
自称探偵は泣いていた。

なんかもう、これ以上にないってくらいに泣いていた。

ああ、世は無常。こうして弱い者は強い者に搾取されるのだった。まあ、普段の行いの賜物とも言っけれど。

そんなこんなで、追跡開始。

宿のことはちょうど大学が休みだった冥さんの姉に頼んでおいたので心配はない。

さすがに宿屋の制服で外出するのは抵抗があるので、私たちは私服に着替えている。私は白の上着と紺色のロングスカート、美里も似たようなもので地味めなセーターとロングスカートにカーディガンを羽織っている。

ただ、なぜか京子さんだけは紺色のワンピースという可愛い服装だった。

軽やかにギアチェンジをしながら、運転席に座った京子さんは口元を緩める。

「どうやらけっこう遠い場所だな。微妙に道が整備されてる山奥。ちよつとした村って感じだな。寂れているわけでもなく、人が多いわけでもないって感じ」

京子さんの車に設置された液晶画面には地図が映し出されている。一見カーナビゲーションのようにも見えるが、実は彼に取り付けられた発信機の場所を地図上に映し出すというシステムである。どう考えても一介のコックが所有する技術ではないけれど、それを深く考えてはいけない。

「釣りでもしてるんでしょうかね？」

「ま、そんな呑気な事態だったらいいんだけどな」

「あの人の場合、女の子が絡む問題はむしろ少ないですからね。放つて置くとあつちこつちに顔を出しては人に説教をして立ち去って行くような人ですから」

後部座席に座っている美里は、なんだか困ったように苦笑していた。

「寂しがり屋のお説教屋さんなんですよ。努力してるのに報われな
い人、努力しなければいけないのに足りない人、才能があるくせに
程々で諦めてる人。……そんな人たちに腹を立てて、言った後で『
なにやってんだか』みたいに後悔してる」

「心が狭いんだろうよ。つたく……毎度毎度人騒がせな」
そんな風に言いながら、京子さんは吸っていた煙草を灰皿に押し込んだ。

まあ、京子さんはそんなことを言いつつも宿の面子じゃ冥さんの次くらいに彼にやられている人なので、どっちかといえば浮気の方を心配してるんじゃないだろうか。

前の職場と比べると、さりげなく甘える頻度が増えるし。

この前、私に調理場を任せておいて、作ったデザートをうきうきしながら差し入れしに行つて、にこにこしながら帰つて来ていたりしたし。

ホント……京子さんは甘い時はとことん甘くなっちゃう、可愛い女の子なのだ。

「山口、なんか失礼なコト考えてない？」

「いえいえ。そんなことはありません。……で、探偵さん。彼について知っていることがあつたら、今回のコト以外にも色々教えてもらえませんか？」

「あつはつは、知りたいんだつたら追加料金をいただきたいところですねっ！」

「じゃあ、みつやの割引券。1000円ぶん」

「カツ井&そば(うどん) 定食の食券。現金に換算すると1000円ぶんくらい」

「えつと、じゃあ岩盤浴の割引券。2000円ぶん」

「あんたら情報の価値とかなめてないっ!？」

自称名探偵はもう半泣きどころか、泣きが入っていた。

それでも貧乏性なのか、あるいはこれ以上の利益は望めないと踏んだのか、私たちが渡したものをきっちりと受け取つて、重々しく口を開いた。

「あ………なんとというか、最初に断つておくけどキツネ先輩はとにかく最低だ。高校時代なんていくら私がコナかけても鼻で笑つて嘲笑するし、そのくせ舞先輩には大学までべつたりだし、竜胆先輩や

ら山田先輩をめっちゃひいきするし」

「普通ですね」

「普通だな」

「普通ですねえ」

「それが普通つてのはありえんでしょ、人としてっ！」

自称探偵さんはかなり本気で叫んでいたが、彼は基本的にそういう男の人だ。

女性に関しては、好みの女性はものすごくひいきするけれど、好みじゃない女性に対しては辛辣なことこの上ないという、なかなかいい性格をしているのだった。

まあ、ある意味では最低と言えなくもないけれど。

「三条院みたいな大きな所とも繋がりがあるみたいだし、意味もな
く孤児院に顔出してるとし、喫茶店でなにやら可愛い少年と会ってた
し、最高におっかないハッカーとちよくちよく会ってるみたいだし、
それに、仕事からみだかなんだか知らないけど、最近じゃなんかこ
う……包容力溢れる女性とちよくちよく会っては楽しそうに話して
るみたいだし」

「……ふむ。どう思いますか、二人とも」

「前半部分はいつものことだが、後半部分がちと気になるな」

「あの人の知り合いの女性は大抵見目麗しい人ばかりですけど……
大体が変人か奇人ばかりですからね。包容力と言われると、私以
外心当たりがありませんね」

「美里、一応言っておきますが貴女に包容力はありません。皆無で
す」

「自分の娘にべったりで、今も隙あらばあいつに甘えまくる女のど
こに包容力があるのかちと疑問なんだがよ」

「それを言うのなら、コッコちゃんや京子ちゃんだって同じようなも
のでしょう？ コッコちゃんはヴァイオレンス系だし、京子ちゃん
はロリなもの」

「私の場合は教育的指導です。大体、彼を殴りつける人間がいなか

ったせいであそこまでねじれて曲がつて歪んで人間としてちよつと面白い感じになつちやつたんじゃないですかね？ 京子さんも美里も、その辺は甘いですから」

「その辺は否定できん部分があるが……まあ、あれだ。色々あるし仕方ない」

京子さんは、煙草を灰皿に押し込んで苦笑する。

少し考えてから、私は思ったことをぼつりと口に出す。

「色々つていうか……単に、好きすぎて殴れないだけじゃないですかね？」

「ぶっ!？」

驚きのあまり、思い切りハンドルを切ってしまう京子さん。

車は追い越し禁止の車線をあつさりと乗り越えて隣の車線へ。そこにちよつどいいところにトラックが突っ込んできた。

「うおおあああああああああああああああああああつ!？」

京子さんが雄叫びを上げ、信じられないようなハンドル捌きでトラックをぎりぎり回避。そのまま停止することなく最高速度で走り抜け、あつという間にトラックは見えなくなった。

「おー……すごいですね、京子さん。今のはさすがに肝が冷えました」

「……山口。あたしらを殺す気か？」

「いや、だつてそこまで動揺するとは思わないじゃないですか」

「うるせえよ。……つーか、四年前は山口も似たり寄りたりだったじゃねーか。この四年で一体なにがあつたんだよ？ 男と付き合つたりして耐性でもできたのか？」

「男性と付き合つたことはありませんけど……まあ、流されるまま生き地獄を味わうよりは、素直に生きた方が人生つて楽しめると思いません？」

「……本当になにがあつたんだ？」

「聞きたいなら詳細をお聞かせしますが……本当に、聞きたいですか？」

「いや、いい。ごめん」

京子さんは私の顔色で全てを悟ったのか、これ以上の追求を諦めて車の運転に集中し始めた。

うん、本当に京子さんは空気の読めるいい人だ。

私だって……楽しそうだからという理由で異世界の秘法とか賢者の石とか訳の分からないものを探した経験など人に話したくはない。確実に頭がおかしいと思われる。

「まあ……私のことはともかくとして。美里、彼の方はどうなっていますか？」

「そろそろ追いつくわ。……とはいえ、こんな所にどんな用事なんだか」

美里の言う通り、私たちが今走っているのはのかな田舎町の一角。周囲を見渡せば一面の田んぼで道路が開通しているのが不思議なくらいだった。

「結構いい所じゃないですか。都会の喧騒から離れて休養するにはうってつけです」

「そーだな。釣りもできそうだし、キャンプとかもいいかもしれない」

「あの人のことですから、別荘でも作ってそうですねえ」

「先輩のことだから、浮気相手の1人や2人くらい作ってそんな気もするケド」

ぼそつと呟いた自称探偵の言葉に、私は思わず口元を引きつらせる。

「あはは、悪い冗談です。彼がそんな怖い真似ができる人なら、今頃世界の二つや二つくらいは支配してもおかしくないですね」

「全くだ。もしもあたしがあいつの立場だったら、絶対にそんな真似はしないね。撲殺か斬殺か惨殺か……とりあえず口クな死に方はしない」

「気がついたら遠距離からの狙撃で頭が吹き飛ばされてましたってことも、十分に考えられますしねえ」

「……………」
私たちがどんな顔をしているのかは分からなかったが、自称探偵は顔を真っ青に染めて黙ってしまった。ちらりと京子さんと美里の方を見ると目がまるで笑っていないかったので、もしかしたら私も似たような顔をしていたのかもしれない。

まあ……………なんだ。

人間には理性を保っておける限界値というものが存在するわけで。「ま、彼を見つけてから対応を決めましょうか。取り越し苦労だと思えますけど」

「だろうな。…………… たく、感情つてのはこれだから厄介だ」

「最悪のイメージと理想のイメージ。それらはあつて然るべきですから、仕方がないでしょう。幸せな日々はいつ壊れてもおかしくないけれど、幸せに生きようと努力することは誰にだってできるでしょうから」

美里の言葉に、私と京子さんは口元を緩めて頷いた。

苦勞する日々。決して平和ではないけれど、私たちはそこそこ幸せだ。

その中心にはみんながいて、彼がいる。一般的な『幸福』とは違うかもしれないけれど、私たちはそれでおおむね満足している。

あとは、嫉妬とか羨望とか妬みとか恨みとか、人間関係なら当たり前のように無視できる程度の痛みを適当に解消すればいいだけ。

それだけで幸せになれるなら、本当に安いものだと私を含めて全員が思っている。

ただそれだけのことだ。大したことじゃない。

「あの……………お三方。なんで貴女たちはそこまで先輩を信頼できるんだい？」

信じられないものを見る目で私たちを見つめる自称探偵は、本当に不思議そうに聞いてきた。

「だから…………… 私たちは、いつもものように当たり前に、平然と答えた。『ま、惚れた弱みってやつかな』」

ただそれだけの当たり前なことを、口に出して笑い合った。

「ぶえつくしよいつ！」

風が冷たいせいか、あるいは誰かが噂しているのか、なぜか大きなくしゃみが出た。

「あー……今日はなんか温かいものでも食べようかなあ」

「へへ、ずいぶんと余裕じゃねえかキツネ。そんなんで俺に勝てると思ってるのか？」

「そつちこそ、そんな様で僕に勝てると思ってるのか、小僧？」

「ぐげつ！」

僕に挑みかかってきた高校生の少年の背中を容赦なく踏みつけて、僕は言い放つ。

僕が今居る場所は、ある民荘の裏庭。学生や社会人に月額1万円という破格のお値段で部屋を提供してくれるその民荘は、それなりの年代が経過しているにも関わらずよく整備されていて、ついでに庭のほうも綺麗に整えられている。

「なあ、ほむらまきよし火焰正義。お前は頭が悪いのか？ 僕に挑みかかってきて負けるだけならまだしも挑発するなんて愚の骨頂も極まりだ。ここは命乞いをする場面であって、意地を張る場所じゃない。生き延びなきゃ意味なんてねえんだよ」

「……うるせえ。俺は、強くならなきゃいけないんだよっ！」

「やれやれ」

一回どころか十回ほど痛い目を見たのに分らない。あるいは……分かってはいるが止められない理由があるか。どちらにしる馬鹿には違いない。

まあ、そういう馬鹿は嫌いじゃないけど。

止められないなら……何百回でもへし折ってやるまでだ。

彼の背中から足をどける。口元を緩めて笑いながら、僕は間合いを取った。

「さて、じゃあ十二回目の勝負といこうか正義の味方。お前が正義を主張するのなら、この僕程度は突破してもらわないと困るんでな」
「抜かしてろ、キツネえっ！」

木刀を握り締めて、少年は吼える。一昔前の僕のように。

精悍な顔立ちにツンツン頭。少しだけ童顔。体は鍛えているのかそれなりに引き締まっていて、事務仕事に忙殺される僕よりも運動性能は高い。剣技及び体術の心得もある。少なくとも空手を齧っている程度の人間じゃ、火焰正義の足元にも及ばない。

及ばないからいつも通りに凌駕する。

足元の砂を蹴り上げる。真っ向から突っ込んできた正義は即席の煙幕を避けることもできず、思い切り突っ込んだ。

正義の足が止まったのを見計らって、僕はゆっくりと間合いを詰める。

「おらあっ！」

とはいえ、目潰しはこれで3回目。あらかじめ予想していたのか、正義は砂をかけられた時点で既に目をつむって目潰しを防いでいたらしい。躊躇なく近づいてくる僕に向かって木刀での刺突を放ってきた。

それを、あっさりとかわす。

「狙いは悪くない。が、それを予測してりゃなんぼでも対処はできる」

ただの想像力。先を見越して手を打っておいただけ。

両足を大地にどっしりと構え、拳を正義の胸に添える。足から腰へ、腰から肩へ、肩から腕へ、腕から拳へ。全身の力を使って、正義の胸を打ち抜く。

「がっ!？」

たったそれだけで勝負は決する。正義は絶息して地面に膝をついた。

「ぐ、くうっ」

「甘い。なにもかもが全部甘い。どうして敵がお前の必殺を読んで

いないと思つた？ どうして敵がお前の必殺をかわせないと思つた？ お前の年月はたかだか16年。僕の年月はたかだか20年。しかし……4年もあれば、いくらお前が強かろうが経験値で凌駕されて当然だろう？」

「く……そ」

「今度手合わせする時はもう少しましになつてろ。……何回も繰り返すが、僕程度は越えてもらわないと困るんだよ」

吐き捨てるように言い切つて、僕は正義を助け起こすことなく歩き出す。

元々、ここに来た目的は正義を叩きのめすことじゃない。

ちよいと生きるのに難儀している後輩の、住処を探しに来ただけだ。

「相変わらず容赦がないね、さすがあいつの息子つてところかな」
縁側で正義が容赦なく叩きのめされている所を見ていたこの民荘の管理人は、口元を緩めて笑っていた。

細い目に長い髪。戦闘能力は僕の知り合いには珍しく皆無で、特殊能力の方も僕の知り合いには珍しく、なんにも備えてはいない。路傍の草のように地味で、花には成り得ない十人並みの顔立ち。少しだけ細い目が特徴的と言えば特徴的。身長も極めて平均的。スタイルの方もおとなしめ。……だが、それでも誰よりも彼女は綺麗だった。

その女性の名前を、夜叉黒螺旋やしやくろくせんという。……名前に関して色々突っ込みを入れてはいけない。

「その《あいつ》っていうのが、僕の父親と母親どちらを指しているのかはあえて聞きませんが……で、螺旋さん。後輩のことですけど、こちらに入居させてもらえますか？」

「ま、根は悪い子じゃなさそうだからね、こちらで引き受けるよ」

「ありがとうございます」

僕が頭を下げると、螺旋さんは口元を緩めた。

「お礼を言いたいのはこのっちの方だよ。キミが色々な人を紹介して

くれたおかげで、この民荘は潰れずに済んでいるんだからね」

「お客様の中には訳ありな人もいますけど、いつまでも宿の方に居座らせているわけにもいきませんからね。持ちつ持たれつってことですよ」

「あはは、じゃあそういうことにしておこうか」

螺旋さんはクスクスと笑うと、不意に不敵な笑みを浮かべた。

「キミは幸せだね」

「……かもしれませぬね」

「そう思うんだったら、幸せをくれる人を大切にするんだよ？」

「はい。分かってます」

僕はしっかりと頷いて、頭を下げた。

夜叉黒螺旋。恐らく、本当の意味で強い女性。

強くて弱くて儂くて強靱で。自分を大切にしてお人も大切にできる人。たぶん、世界でも最高に属するほどいい女だと思うけれど、彼女を幸せにするのは僕の役目じゃない。

誰か、彼女に匹敵するくらいにいい男、どっかにいなえかなあ。

「それじゃあ、今日はこのへんで失礼します」

「うん。またいらっしやい。今度は釣竿でも持って、みんなで遊びに来るといい」

「はい」

頷いて、僕はゆっくりと歩き出す。

歩きながら僕は僕のために口元を緩めて笑う。

「さてと……じゃ、どっか楽しい場所でも行ってきますか」

どうせ、京子のことだから僕の服に発信機くらいはつけてあるだろう。

もちろん、並大抵のことでは動かないだろうから、炊き付けたのは後輩か美里つてところか。もしかしたらコッコさんも来るかもしれない。

「信用されてねえなと嘆くところが、愛されてるなあと惚気るところか……微妙だね」

まあ、どちらにしろ心配されていることには変わりない。

螺旋さんにも念を押されてしまったことだし、みんながここにやってくるんだっいたらもうついでにどこかに遊びに行くのも悪くない。

「ま、惚れた弱みだしね」

口元を緩めて空を見上げる。

いつも通りに真っ青な青空は、見てて憎々しくもあり清々しくもある。

僕は見慣れた空を見限って、ゆっくりと前に向かって歩き出した。

さて、それじゃあいつも通り。

豊かで幸せでみじめだったらしく格好悪く。穏やかでいつ壊れてもおかしくない日常。

そんな楽しい日々を、生きていこう。

と、綺麗に締めようと思ったのだが『先輩にはこんな美女どもに好かれる資格なんてねーもん』とばかりに嫉妬に狂った後輩が三人にないことないことを吹き込んでくれやがったおかげで、コッコさんに殴られるわ京子に頬をつねられるわ美里にぶん投げられるわで危うく死にかけた後、全力でぶちキレて後輩を追い回す羽目になったりと、色々大変な目に遭うことを、その時の僕は知らなかった。

第一話：僕とみんなと幸せと……END

第一話：僕とみんなと幸せと（後書き）

というわけで、ジャブ終了。

次回からはAランクエンド集スタートです。

Aランク第一話は冥ちゃんEND。猫のお城に住むある青年と、
—
人のメイドの物語。

よろしかったら見てやってください（笑）

冥エンド：つながれた小指（前書き）

入社2年目を越えると仕事が増える。たったそれだけの理由だけど、たったそれだけで時間がなくなる。小説に関わる時間が減る。考える時間が減るってことはそれだけ新しい世界を生み出すことが困難になる。

ただ、それとこれとは関係なく、約束は約束。自分から言い出した以上は果たさなくてはいけない。

と、いうわけで冥エンド。恐らく作成までに一番時間がかかった作品に仕上がりました。

忘れていた人も初めての人も、読む機会があればお楽しみあれ覚えていた人はありがとう。貴方にこの物語を捧げます。

あと、田山歴史は元気です。死んでません。たぶん（笑）

冥エンド：つながれた小指

注1：ここから先の物語は完全なるアナザーストーリーです。ありえたかもしれない未来、マルチエンディング等が嫌いな方はご遠慮ください

注2：時間の経過、人間関係、周囲の環境の変化などによって人の考え方なんてものは簡単に変わります。20歳越えても成長しませんが嫌いなものだって数年経ったら食べられるようになってしまいかもしれません。よって、『 の性格がかなり違うんですけどおおおお！』 というツツコミは却下です。そういうものとしてお楽しみください。

注3：Aランクエンドです。最終話より4年後の話になります。

エンディング条件。

- ・ 本編における黒霧冥の因縁の排除。なお、この条件に関しては高倉天弧の力が及ぶ範囲内の出来事なので自動排除可とする。
- ・ 黒霧冥の究極メイドフラグ成立（執事スミスとの対決に敗北し生存すること）。
- ・ オーレリア救出作戦失敗（四人揃わないと自動失敗というか発生しない）。
- ・ 上記作戦失敗による双剣の一時継承。
- ・ 好感度に関しては本編参照のこと。見れば分かると思うが、天弧・冥に関しては天井知らずにバカスカ上がるので今回は度外視とする。
- ・ あとは……まあ、高校編で舞さんとのフラグを立てないように頑張るべし。

以上を踏まえて、ご覧下さい。

Aランクエンディング・冥編：つながれた小指

野を越え山越え谷越えて、七つの海を越えた先、黄金郷のその向こう。

世界の彼方のその先に、ぽつんと城が一つだけ。

どこの誰にも見つからぬ。理想の果てのその先に、お城はひっそり建っている。

だってそうだろう。全ての人がその前に足を止める。野で平穩に屈し、山を登れずに諦め、谷を越えられず挫折し、海の暮らしも悪くないと言いつ聞かせる。

黄金郷を見つけた者もその先の道程などに興味は持たない。

だから誰にも見つからぬ。そこは一つの理想郷。猫が愛する白き城。

その名も名高きダイにゃんこキャッスルである。

電車を乗り継いで3時間。腰が痛くなつた頃に到着した駅は改札と切符売り場が一つあるだけの無人駅だった。

「よいしょつと」

荷物を電車から降ろして、私は一息ついて歩き出す。

手荷物はトランクが一つだけ。迎えはあるはずだけど、あくまで極秘裏に。今回のミッションは私の命を賭けるに値する、それはそれは重要な任務なのだ。

「しっかし……なんていうか、本当になんにもないわねこっちは」

周囲に広がるのは田んぼやら畑やら……田んぼやら畑やら。あ、民家発見。

私が今いるのはドがつくほどの田舎で、便利さや過ごしやすさといったものからかけ離れた、ごくごく普通の農村だった。

「うーん……見渡す限りの緑一色ってのもなかなかオツなもんね」
もちろん駅にタクシーが停泊しているわけもなく、周囲に宿泊施設のようなものがあるはずもなく、それどころか道路標識すらもほとんどない。道はおせじにも広いとは言えず、普通乗用車よりも原付バイクの方が多いという有様だった。

少なくとも、私はここじゃ生活できない。せめてネットができる環境が近くにコンビニがないとかなりきつそうだ。

……うん、あいつがいたら間違いない苦笑してやがることだろう。忌々しい。

と、私が妹の彼氏の憎たらしい笑顔を思い出していた、その時。

「やつほー、まーいちゃん！」

馴れ馴れしいというか腹立たしい、旧友の声が響いた。

声の方向に振り向いて、私は思わず口元を引きつらせる。

煌びやかな色彩の和服に、艶やかな黒髪を後ろで結い上げた美少女。瞳は大きく顔立ちは細く、羨ましくなるくらいに仕草が色っぽい。正確には私と同じ20歳だから美女と形容すべきかもしれないけど、精神年齢と見た目を重視してあえて美少女と呼ぼう。

彼女の名前は刻灯由宇理。見た目だけなら完全無欠の日本系和服美女。

あいつが好みそうな強くて弱い女。

まあ、それはともかく。……私は、その時信じられないモノを目にしていた。

「由宇理。あなたの乗っているそれはなに？　リサイクル原料かなんか？」

「あたしの車ツスよ。去年中古で買ったんすけど、これがなかなかいい走りを見せてくれるんだよねえ」

車。自家用車。愛車。ぐるりと思いを一回転させて、私は思わず頭を抱える。

バンパーは修復不可能なまでに陥没し、ドアは開くのか開かないのか分からないくらいの半壊状態。屋根はなぜか根こそぎ吹き飛び、鼓膜を破壊するような嫌なエンジン音が鳴り響く。タイヤのサイズが微妙に違うのか、走る度に奇妙な振動を起こしているあたりが、その物質がまごうことなき廃棄物であることを物語っている。

いや……えっと、なんていうか。

私は車好きでもなんでもないし、走ればなんでもいいやと思ってるケド、いくらなんでもこりゃねーだろという有様だった。

「由宇理。とりあえず、ドライバーチェンジ。私が運転するから」「ふ、さすがは舞。あたしの愛車を速攻で運転したくなるだなんて素晴らしい。狐なんて思い切り顔をしかめながらあからさまに舌打ちとかしやがるんすよ」

「……まあ、とりあえず鍵貸して」

狐と呼ばれた彼の気持ちは痛いほど良く分かったが、あえてここは口には出さない。

廃車寸前の車を見れば分かる。恐らく、由宇理は凶悪なまでに車の運転が下手だ。機嫌を損ねて『あたしが運転するツス』などと言い出された点で、確実かつ濃厚な死が待ち受けていることだろう。

由宇理から鍵を受け取って、私は運転席に座る。

外見とは裏腹にキーを差し込んでひねると、やっぱり嫌な音を立ててエンジンが始動。幸いなことにクラッチの操作が面倒なマニュアル車ではなく、普通のオートマ車だったので車の運転は簡単だ。ブレーキを踏んでギアをドライブへ。

と、アクセルを踏み込んでから、奇妙な違和感に気づいた。

「……あの、由宇理？」

「なに？」

「なんていうか、その、ブレーキがスカスカするんだけど？」

「ああ、ブレーキはぶっ壊れてるから静かにぶつけて止めるのがコツス」

「いやあああああああああああああああ！？」

ありえない言葉を聞いて、私は思わず叫んでいた。
その時には、スピードメーターの数字は既に時速60キロを指していた。

死を覚悟した時速60キロを通り過ぎ、ようやく時速10キロになった時点で、私は安堵の溜息を吐いた。

時速10キロというのは下手をすると自転車にも追い抜かれてしまふ速度だけど、命に比べれば自転車に追い抜かれようが、そんなものは屁でもない。

「ずいぶんと安全運転なんスねえ。ちよつち驚いちゃった」

「……八つ裂きにしてやるうかしら、このアマ」

「あつはつは、相変わらず冗談が上手いねえ、舞ちゃんは」

朗らかに笑われ、私は思わず由宇理の首を絞めそうになったけど、理性を総動員してなんとか自分を押さえつけた。

今、由宇理を殺すのは簡単だけど、それをやってしまふとのどかな田舎で一人ぼっちという最悪の事態に陥ってしまう。由宇理の案内に従って車を走らせてきたけれど、森に入って抜けた時点で私の方向感覚は完全に失われている。元来た道がどこかも、ここがどこかも分からない。

「あのさ、由宇理。一応確認しておきたいんだけど本当にこっちでいいの？」

「道筋としてはちよつとずれてるツスけど、買い物とかしなきゃいけない場合はこの道が一番近いんすよ。舞ちゃんだって再会の記念にお酒くらいは飲むでしょ？」

「んー……お酒は一応持ってきたけど」

「ほう。私なんて最近飲まないとやってらんないツスよ」

「なんか嫌なコトでもあつたの？」

「いや……なんつーか、最近ちよつと色々悩み事があつて」

「へ？」

由宇理が悩み事とは珍しい。雪でも降るんだろっか？

と、私が失礼なことを思っている、いきなり某怪盗三世のテーマソングが大音量で鳴り響いた。

一瞬音に反応して携帯電話に手を伸ばしそうになったけど、ふとあることを思いついて手を止める。

30分ほど前に確認したけど、このド田舎では携帯電話なんて使えないはず。コンビニはないわ、今も見渡す限りの田んぼと民家がぼつぼつあるだけという文明から遠く離れた異空間。もちろん、異空間なのだから携帯電話はいつでも圏外だ。

その異空間の中で、由宇理はポーチから携帯電話を取り出した。

「はい、こちら由宇理。……って、香純ツスか？ ああ……まあ、わりと退屈だけど悪くはないツスよ。え？ 早く帰って来い？ いやあ、まだちよつと色々あるしもう少し……へいへい、りよーかい。来週には一旦戻るから。うん。あー……じゃ、とりあえず切るわ。うん。はい。じゃあ、そっちはよろしく。ばーい」

端で聞いてても普通の会話だったけれど、由宇理は携帯電話を切ると同時に思い切り溜息を吐いた。

「うー……やっぱり帰らなきゃいかんのか。面倒ツスねえ」

「わりと楽しそうみたいだったけど、不満でもあるの？」

「んー、まあちよい説明が難しいんだけど、あたしは今とある芸術家の家に居候させてもらってるんすよ。今の電話の相手は、その芸術家の恋人ツス」

「……なんか複雑そうね。芸術家って確か友樹の妹さんでしょ？」

「そうツスよ。あたしにメイド服を無理矢理着せようとしたりするのが玉に瑕だけど、それ以外はわりと普通の人ツス」

「メイド服を無理矢理着せようとする人類は普通とは呼ばないわ！」

「ちなみに、厄介なのはどっちかっていうと恋人の方で、私がメイド服を着ているとなんだか嫌なコトを思い出しちゃうらしく、すぐに騎士剣で刺しに来るんすよね」

「刃傷沙汰どころの話じゃないわよそれは！」

どうして私の周囲の人間は口クナ人生送ってないんだろうか？

ちなみに私は違う。違うったら違う。今回のだって大学が夏休みに入ったから、妹とその彼氏であるストコな男がどうしているかをちよつと見に來ただけだ。

「……ねえ、由宇理。狐と冥ちゃん、今どうしてる？」

「仲良くしてるツスよ。時折喧嘩もしてるけどじゃれあいの範疇ツスね。ま、メイドとご主人様で彼氏と彼女なんだから、その程度は問題ない。問題があるとすれば……城の住人に対してちつとも優しいくないことくらいツスね」

「城の住人？」

「ま、見てのお楽しみってことで」

由宇理はそう言って苦笑した。

なんのことだかよく分からなかったけど、私はとりあえず口元を緩める。

仲良く楽しくやっているのなら、それで十全だ。

風は心地よく、風景は穏やか。車は砂利道をガタゴトと揺れながら進んでいく。

さて、それじゃあ久しぶりの里帰りといきましょうか。

外から見ればそれなりに広い邸宅。塀にぐるっと囲まれた日本家屋と道場と温泉。縁側と門のあたりには、今日も日向ぼつこの猫でござつた返している。

そこが今の僕の家。青い猫に無理矢理押し付けられた、その名も高きダイにゃんこキャツスル。唯一にして無二の、猫の城である。

畳敷きの道場で、僕は彼女と向かい合っていた。城と同じように青い猫が僕に押し付けた少女で、名前を氷雨影文^{ひさめかげふみ}という。

「いつでも来ていいよ、氷雨ちゃん」

「……分かっています」

氷雨ちゃんは目を細めて、僕を見つめている。

漆黒の髪をうっかり冥に切らせてしまったせいでおかつぱにまめられた彼女は、見た目は10人中5人くらいが美少女と言っただろう顔立ちをしているが、目が鋭すぎるのと、生真面目が行き過ぎているせいで、どうにもお堅い印象を受ける女の子だ。

胴着と袴という、ちよつとした格闘をするにはちよつどいい服装の彼女は、摺り足でジリジリと間合いを詰めてくる。

言っまでもないことだけど、単純な身体能力では僕は彼女に敵わない。

それでも、彼女は僕に負け続けている。

僕は眼帯をつけたままのハンデ付きなのに、負け続けている。

「氷雨ちゃん」

「なんででしょうか？」

「もっいいや」

「え？」

その一瞬で十分すぎた。

僕はあっさりと間合いを詰めて、氷雨ちゃんの腕を取って引っ張る。

「ひゃんっ!？」

引っ張ると同時に、彼女の足を払って転ばせた。

人を投げて転がすのは難しい。力を加えれば反射的に抵抗するし、抵抗している人間を倒すというのは困難を極める。それを覆すのが、技術というものだ。

彼女は人になってから日が浅い。そして、経験値では圧倒的に僕の方が上だ。

「なんつーか……ね。一言でも二言でも言いたい気分だけど」

「……どうぞご自由に」

「はっはーっ! 僕とまともに闘り合おうなんざ100億年早いんだよアホ猫が! 大体、中学生程度の体格の女の子が、まともにやって20歳成年男子に勝てると思っただのかっつう話だよ? アレしか、この師匠を越えなきゃ私はお役目を果たせないとかそんな感

じ？ 自分は特別意識丸出しでちょーみつともねえ！ おまけに僕ごときにこんな簡単に負けちゃってあーもう笑うしかねーよ、ひゃーっはっはっはっア！！」

「どこの悪役だアンタはあああああああああああああああああ
！」

懐かしい声と共に、僕の後頭部に衝撃が走る。咄嗟に手を伸ばして受身を取りながら地面を転がったおかげでダメージは少なかったケド、下手をすれば死んでいる。

と、そこで不意に気づく。この一撃は高校時代によく食らっていたものにそっくりだった。

「むう、この蹴りの速度と的確な一撃は……もしかして、舞か？」

「残念ながらその通りよ、この馬鹿男！ 本当はこっさり様子見るつもりだったけど、いくらなんでも虐待を見過ごすほど、私は人間捨ててねーのよ！」

「虐待とは失礼な。これは度の過ぎた悪ふざけだ」

「自覚があるぶん悪質じゃない！」

「ごもつともな言葉だった。」

まあ、虐待に見えても仕方がないのかもしれないが、一応こちらにも言い分つてもんがあるわけで。

僕はゆっくりと息を吐いて立ち上がり、まだ倒れている氷雨ちゃんを見つめる。

「氷雨ちゃん。一応言っておくけど、やりたくないならやらない方がましだ」

「……………」

「反論がないようなら今日これでお終い。汗流しておいで」

「……はい、師匠」

氷雨ちゃんはぐったりとうなだれながら立ち上がり、唇をきつく噛み締めて道場を出て行った。とてもとても悔しそうだったけど、僕からはなにも言えない。

氷雨ちゃんから目を離して舞に視線を戻すと、やっぱりというか

案の定というか、舞はとても怒っているようだった。

「で……一応聞いておくけど、遺言はある？」

「冥ともつといちゃらぶしたかった」

「……前々から思ってたケド、テンは本当に開き直ると羞恥心とかそのあたりの大事なことを全部無視するのよね。……つたく」

舞はゆっくりと溜息を吐いて、僕を真っ直ぐに見つめた。

「久しぶり。元気だった？」

「うん。そっちも息災みたいでなによりだ」

少しばかり懐かしくなって、僕は口元をつり上げて笑った。

舞はいつも通りに僕を睨みつけるだけだった。

「それで……テン。冥ちゃんが来る前に聞いておきたいんだけど、アンタ今なにやってるの？ 京子さんも美里さんも、テンが急にいなくなっって心配してたんだから」

「別に失踪っってわけでもないんだけどね。まあ……なんていうか、せつかく冥とずっと一緒にいるって誓ったわけだから、今まではきなかったことをやってやろうと思って」

「今まではできなかったこと？」

「そう。……あの人がいて、みんながいた時にはできなかったこと」
原点回帰にも程度つてもんがあるけれど、僕はそれがやりたかった。

下らなくて楽しくもない。それでも、冥がやりたいことと僕がやりたいことは重なっていて、ずっと一緒にいたいという願いも同じだった。

だから……この城を引き受けた。

代行だけど、あの青い猫の役目を請け負った。

「今の僕は、メイドという名の可愛い妖精を笑顔で騙す極悪人。猫の城の主にして正義の代行者さ」

馬鹿馬鹿しいほど大げさな名乗りを上げて、僕はいつものように笑った。

テンに案内された部屋はそこそこ広い畳敷きの客間で、よく手入れが行き届いているのか埃一つ落ちていなかった。

トランクを下ろして、私はぼんやりと窓から外を見つめる。

緑ばかりの、面白くはないけどのどかな風景が広がっていた。

「正義の味方……ね」

あいつらしいと言えば確かにらしい。

妹の彼氏である高倉天弧という男は、子猫の皮を被ったエイリアンのような男で、基本的には誰にでも優しくそうに振舞っているけれど誰よりも厳しい。もちろん女の子にも容赦がない。例外なのは家族と、冥ちゃんと、私を含めた昔の友達くらいだろう。

ひねくれ過ぎて一周して捻れながら真っ直ぐになったような男なのだ。

「なんか、妹にものすごい貧乏くじを引かせてしまった気分」

正義の味方。正義を守る人。

テンにとっての正義とは、恐らく自分の好みに合わない全てと、冥ちゃんと、あとは女子供に害を成す全部だろう。

あの氷雨ちゃんと呼ばれていた女の子にどんな事情があつてここにいるのかはいまいち分からないけど、多分それもテンの好みに合わないことなんだろうと思う。

「ホント……毎度毎度面倒なことしてるわよね、あいつも」

ゆっくりと息を吸って吐いて、私は外の景色から目を逸らす。

さてと、極秘任務も失敗に終わったところだし、それならそれでプランを変更。なんと言つてもここには体の疲れに良く効く温泉があるらしい。

途中で立ち寄った店で買ったタオルセットを手に、私は部屋を後にする。

と、廊下に出ると、なぜかそこには毛並みの青い可愛い猫がいた。

「じゃあ」

まるで挨拶するように一声鳴いて、猫は私の顔をじっと見つめる。

むう……可愛い。可愛いけどここは撫でてはいけない。人間というか全ての生き物がそうであるように、頭の上に手の平をかざすようなことは攻撃を意味する。

とりあえず、威嚇しないように「にゃあ」と返して手を振っておいた。

「にゃーん」

「はいはい、私は今からお風呂に行くから、また後でね」

足にすり寄ってくる猫を適当にいなしながら、私は歩き出す。

しかし……最初に見た時から思っていたけれど、この家には猫が多い。門のところにもたくさんいたし、縁側のあたりなんて猫でこつた返していた。

……近くにキウイかマタタビの木でもあるんだろうか？

「ん？」

考え事をしていた私は、不意に足を止めた。

窓からは縁側が見える。縁側は相変わらずたくさん猫が丸まって眠っていた。

そんな中で一人だけ起きているのは柱にもたれかかったままあぐらをかいてハードカバーの分厚い本を読んでいるテンで、あぐらをかいている彼の足にしがみつくように、猫の顔がプリントされた甚平を来た女の子が幸せそうに眠っていた。

言うまでもなく、女の子は私の妹だったわけで。

「……ま、私の目も節穴じゃなかった、かな」

自然と口元が緩む。

昔、幸せになりたいと祈った時期があった。

たくさんの人を殺して、手を真っ赤に汚して、心を磨耗させて、それでも生きようとした。生きる資格なんてとつくのとうに失っていたことは分かっていたけれど、それでも生きようとした。誰も殺したくないから誰かを殺して、血で血を洗って生き続けようと足掻き続けた。私も冥ちゃんも、誰かを殺して生きてきた。

そんな時に、私たちはそいつに出会った。見るからにお人好しな

そいつを利用してやろうと私は近づいた。いざとなったら殺してお金を奪って逃げてやるくらいのは思いながら、同情を引くように取り入った。

馬鹿馬鹿しいことに、そいつはそんなこと全部お見通しだった。

生き抜くために選択肢がないなら、別に誰を殺してもいいだろうとそいつは言った。

責任を背負うのは自分自身なのだから、なにをしてもいいのだと。甘くもなんともない厳然たる事実。人を殺した痛みと重みも背負っていけばいいとそいつは言い放った。

重みに耐え切れなければ、死ぬだけだというのに。

自業自得の繰り返し。一步でも踏み外せば地獄に落ちるサーキット。自殺するように回路を回し、邪道も正道もお構いなしに、破綻していることを自覚しながら、そいつは歩き続けて走り続けた。自分の大切なものに引導を渡しても、生き続けた。

誰よりも優しく強く在るために。

誰かのために、生きていた。

「……さて、と」

感傷に浸るのはここまでにしておこう。私には色々やることがある。

まずは温泉に入る。それから夕飯の天ぷらを食べて、高校の思い出話に花を咲かせたりなんかしながら、今のことを話そう。京子さんはなぜか日本酒とか本格的に作ってるし、美里さんは意味不明にも私と同じ大学生なんてやってるし、陸は色々と追い詰められてるし、章吾さんはまあ色々と楽しそうな日々を送っているみたいだし、虎子も楽しそうだし、委員長こと恵子だってそうだ。

楽しかった日々と楽しくなりそうな日々、想いを馳せるのも悪くはない。

「まあ……その前にちょっとだけやりたいことができたみたいだけ

ど、ね」

人の気配がしたので振り返ると、そこには胴着姿の可愛らしい女の子がいた。

テンには氷雨ちゃんと呼ばれていた女の子。どういう経緯でここにいるのか、どういう女の子なのかも私は知らない。はっきり言ってしまうには一切関係ない。友達の知り合いの女の子程度の間柄でしかない。

それでも……口出ししたくなるのは、性分か因果か。

私が振り返ると、彼女は何事もなかったかのようににっこりと笑った。

「こんにちは、お客様。先程は見苦しい所を見せてしまい申し訳ありません。私の名前は氷雨影文。この城にて奉公を行っている黒猫です」

「こんにちは。私の名前は黒霧舞。大学生よ」

「ダイガクセイ？」
「ただの肩書きで世間的にも意味はないことよ。あんまり気にしないで」

うーん……どうやら、色々ものを知らない子らしい。世俗に疎いというか、知りたがりというか。昔の冥ちゃんにちょっと似ているかもしれない。

……あることないこと吹き込んだら楽しそうだけど、テンに怒られそうだ。

「それで、氷雨ちゃんは私になにか用事があるのかしら？」

「え？ いえ、挨拶に伺っただけで特別な用事はないんですけど…」

…」

「ふうん？」

私は目を細めて彼女を見つめる。

彼女は、丸い目をこっちに向けてただだった。

仕方なく……流儀ではないけれど、私は自分から切り込むことにした。

「ねえ、氷雨ちゃん。ちょっと聞いていいかしら？」

「なんででしょうか？」

「やりたくないならやらない方がましって、どういうこと？」

「……………」

案の定、氷雨ちゃんは黙ってしまった。

まあ、話したくないことだと予想がついていた。最初から予想ができていた。

彼女がテンと向かい合っている時には、もう分かっていた。

「話したくないなら話したくないでいいわ。これはただの私の見解。私はね、やりたくないならやらない方がましなんて思えない。世の中ね、やりたくないことでもやっている人の方がたくさんいる。自分の責任で、自分の仕事で、だから自分が果たさなければならぬって思っただけ、歯を食いしばって、精一杯やっている。……私はね、そういうのもいいと思うの。逃げ出さず、強がっていてもいいと思うの。」

「……………」

「知らないからこそ知ったように喋れるのよ。」

私は口元を緩めて、パタパタと手を振った。

「知らないから無責任なことが言える。知ってしまったえば責任を負う。知っていてなお無責任なことが言える人間は死んだ方がましなタイプの人間だから相手にしなくてもいい。……私は、そこまで愚かなつもりはないわよ。」

「……………」

氷雨ちゃんは目を伏せる。眉間に皺を寄せて考えているようだった。

やがて 彼女は、口を開いた。

「私たち氷雨一族は代々ある血筋の人間を見張っています。その人間たちは本来は人間ではありませんでした。猫が彼等と出あった時、彼等は人の戦神でした。アヤカシを殺すために生まれた一族でした。殺すために生まれたのに一匹の猫又を助けてしまいました。自分の

命を犠牲にして、氷雨一族を助けてくれたのです」

それは、よくある話だった。

助けてくれたから恩義を返す。ただそれだけのいい話だった。

役目を背負う者の心を無視した、都合のいい話だった。

「父様もお祖父様も、先祖代々に渡り私たちは彼等に仕えて恩義を返してきました。彼等が暴走すれば身を挺して護ってきました。それは私たちの誇りです。何事にも換え難い、私たちが守ってきた…誇りなのです」

「……そうやって、自分に言い聞かせようとした？」

「っ！？」

先回りした私の言葉に、氷雨ちゃんはとても驚いていた。

ホント……なんていうか、テンが放っておけなくなるのも頷けるってもんだ。

この子、事情は違うけどウチの妹にそっくりなんだもの。

「お家の事情とか、誇りとかそういうもので自分を納得させようとしてるみたいだけど、それじゃあ氷雨ちゃんは納得できないでしょう？ 今の状態で氷雨ちゃんは彼等を守り切れると思う？」

「……いえ、できないと思います」

「やりたくないことをやっている連中だって、多少なりとも自分なりに納得やけじめをつけて仕事をやってるもんよ。逆を返せば、納得しなきゃ人は仕事なんてできない」

大人だって子供だってみんなそうだ。友達がいなきゃ学校に行かないし、お金がもらえなきゃ仕事になんて行かない。逆を返せば、理由と覚悟と納得さえあれば人間は地獄の中だろうとも不敵な笑顔を浮かべて生きられる。

そう 氷雨ちゃんに必要なのは納得だけだ。

ほんの少し考えて、私は口元を緩める。二番煎じだけど、これはこれで悪くない。

「そうね。……いつそのこと、キャラクターを偽ってみるのも悪くないわ」

「へ？」

「たとえばそうね……鎖かたびらに草鞋に覆面。そんな奴がある日高笑いと共に『お主を守りに来たでござる』とか言い出したら氷雨ちゃんならどう思う？」

「……えつと、帰れって言うと思います」

「でしょ？　そこまで阿呆っぱい奴を側に置いておく理由なんてこれっぽっちもないし、逆に守って欲しいとも思わない。……でもね、もしも、もしもそいつがとんでもないお人好しで、無理矢理家に居座る忍者を追い返すこともできず、捨てられている猫をうっかり拾っちゃうような奴なら……それは、守る価値のある奴だと思わない？」

「……………」

無茶苦茶な言葉を、氷雨ちゃんは啞然としながら聞いていた。

まあ……昔私がやっていたことの焼き直しで二番煎じだけど、妹がこの方法で可愛くなった上に彼氏まで作っちゃったんだから、あながち間違った方法でもないと思う。

私は口元を緩めて、氷雨ちゃんの頭をポンと叩いた。

「ま、重責とか責任とか家の事情とか誇りとか、とりあえずそういうのは置いて、まずは氷雨ちゃんが納得できるように、好きにやれば良いと思うわよ」

「……好きに、ですか？」

「うん。だってそっちの方が楽しいでしょ？　やっぱり楽しいのが一番よ」

「……………」

嫌々だろうとなんだだろうと、途中で楽しくなれば問題ない。

一度きりの人生だ。多少は楽しくなければ罰が当たるってもんだろっし。

うん、そうだ。この子にはもう少しばかりその辺のことを徹底的に叩き込んでやらなくてはならないだろう。

私は氷雨ちゃんの肩をがしっと掴んで、にやりと笑う。

「まあ、色々と言いたいこともあるし、甘ったれた根性を叩き直す上でも裸の付き合いってのは欠かせないと思うわけよ。……というわけで、ちよつと温泉まで付き合いなさい。背中くらいなら流してあげるから」

「え、えつと……実は私お風呂はちよつと苦手です」

「うん、分かった分かった。おねーさんに全部任せておきなさい」

「ちよつ!?!? なんですかこれ?! ゆ、指一本動かせないんですけど!」

「技術としてはあんまり大したことない黒霧流拘束術だから心配しないです。ちゃんと後で解いてあげるから」

「にゃあああああああああああああああつ!」

私にズルズルと引きずられるまま、氷雨ちゃんはちよつと涙ぐんでいた。

さて、お風呂の友も見つかったところで、日常の疲れを癒しに行きましょうか。

既に日は落ちて周囲は真っ暗。昼間は猫でござた返すこのお城も、今は僕の他には冥も含めて4人しかいない。もつとも、普段は4人以上に氷雨ちゃんはあまり話したがりでないので、由宇理がしゃべりまくる食卓なのだけだ。

ちなみに由宇理はちよつと買出しに出かけているので今はいない。代わりに冥の話し相手をしているのは舞だった。

「へえ、京子さんってお酒造ってるんですか?」

「うんうん。なんだか急にはまり始めたらしいのよね。あ、ちなみにチーフは大学生やって……私と同じ学年だわ」

「相変わらずチャレンジャーですね。チーフは」

舞の話を聞いているのは、僕のメイドこと黒霧冥。黒縁の眼鏡に黒いワンピースに白のエプロンドレスというオーソドックスなメイド服にヘッドドレスと袖にはカフスという、まさしく『メイド』と

呼ばれるにふさわしいでたち。

僕の彼女というか伴侶というか……まあ、そういう大事な存在。ちなみにメイド服は僕の趣味ではなく彼女の趣味なので、勘違いしてはいけない。

……和服とか着てくれないんだよなあ。

そんなことを思いながらも、包丁を動かす手は止まらない。

この辺は子供の頃からの習性のようなもので、もう目をつぶってもオムレツくらいなら作れるんじゃないかと思う今日この頃。

というわけで、今日の夕飯は農家からのおすそ分けがあった山菜の天ぷらと、これまた近所の農家からおすそ分けのあった鶏の胸肉を使った唐揚げと真つ白いご飯と豆腐とワカメの味噌汁で、材料が新鮮なおかげか僕のように適当に料理を作ってしまう人間でもかなり美味しく作れてしまう。

その鶏さんが今朝まで存命だったことはもちろん承知の上だけど、それでも美味しいのだから仕方ない。

命を美味しくいただく。それが、生き行く者の責任ってもんだ。そうこうしている間に唐揚げと天ぷらが完成。気がついてみると油ものばかりのような気がしないでもないけど、そこは素材の新鮮さで補ってもらおうとしよう。

食卓におかずを運ぶと、舞はちょっと嬉しそうに口元を緩めた。

「お、相変わらず美味しそうなん作るわねアンタ」

「唯一の取り得みたいなんだからね。あ、天ぷらの方はお茶漬けにしてちよいと醤油足らしても美味しくいただけるから」

「冥ちゃんにご飯とか作ってもらわないの？ メイドなのに」

「ウチの食卓は基本的に交代制になっています。明日は私が作りますよ」

冥はにこやかにそう語っていたが、ご主人様に作ってもらったご飯の方が美味しいというよく分からない理由で決して台所に立とうとしないことはあえて言うまい。

家事もきっちりこなすし、とてもよく働いているし、料理を作ら

せればかなり美味しいものを作ってくれるのだけど、なぜか作るうとしない。

前に一度聞いたことがあったけど、その時は『誰かに作ってもらった料理の方が100倍くらい美味しいので』とかなんとか。

気持ちには分らないでもないけど、果たしてそれはメイドとしてどうなんだろうと思う今日この頃。。

「じゃ、そういうことでいただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「……………いただきます」

珍しくご飯の前にお風呂に入った氷雨ちゃんは、なんだかくったりしていたがそれでも食欲はあるのか、脱力しながらも唐揚げに箸を伸ばしていた。

僕も負けずにふきの天ぷらに箸を伸ばすと、不意に舞が口を開く。

「ねえ、テン。こっちの近況の方はさつき話した通りなんだけど、そっちはなんか変わったこととかあった？ 私が聞いて面白い話とか」

「面白い話ねえ……………」

はて、なにか面白い話なんてあったらだろうか。

みんなと連絡を取り合っていないわけでもなく、親友どもともちよくちよく遊びに行ったりもする。かといって冥を放っておくこともなく、わりと生活の方は楽しい。

なにかから話したものと少しばかり悩んでいると、不意に冥が口を開いた。

「ほら、ご主人様。最近とてもめでたいことがあったでしょう？」

「めでたいこと？」

「赤ちゃんができたじゃないですか」

にこにここと、冥はとても嬉しそうに笑いながら言った。

うん、そうだね。確かに最近子猫が生まれた…………でも、ちょっと待て。

そのタイミングでその言葉は確実に誤解をぐえ。

言い訳無用とばかりに、いつの間にか僕の首に細い糸が巻きついている。

舞の方を見ると、見る者を凍りつかせる恐ろしい笑顔を浮かべていた。

「はい、みんな集合」 黒霧舞ちゃんのKILLING TIME、はっじまつるよ」

「……ちよ、待って。身に覚えはまだないってどうか」

「嘘を吐きなさい、ハゲ男。20歳男子がメイドとか側に置いて手エ出さないわけないでしょうが。むしろそっちが自然よ」

舞はきっぱりと言い放った。容赦もなにもあったもんじゃない。

昔とは正反対だが、それ故に舞はさらに苛烈に僕を締め上げる。

「それとも……アンタまさかこんなに可愛い子が側にいるにも関わらず、まだキスしかしてませんか、そーゆーふざけたコトを言うんじゃないでしょうね？」

「い、いやあ、そんなコトはないですよ？」

まだだ。舞の目はまるで笑っていない。もしもここで『いや、別にそーゆーのは24歳くらいからでよくね？』などと下手なコトを言えば僕の首が飛ぶ。

既に話がすり替わっているけれど、舞はそんなことはまるで気にしないだろう。むしろ彼氏彼女になって4年も経つのにになにやっつんだお前はと言われた後で、見るも無残な残虐極まりない方法で殺されそうだ。

「で、冥ちゃん。テンはこう言っているけど実際のところはどんなの？」

「んー……普段は物腰柔らかく、僕のメイドとかほざいているわりに独占欲は薄く、むしろ人に尽くすことを是としているようなきもーいご主人様です」

「お姉ちゃんばっかりずーるーい！ 私もごひゅじんはまとべたべたするー！」

やたらハイテンションな笑い声を上げながら、舞はなぜか僕の首を絞めにかかり、冥は僕に抱きつくふりをして腰を砕きにかかる。

舞に首を絞められ、冥に体を揺さぶられ、薄れ行く意識の中で僕は硬く心に誓う。

この城では酒は断固禁止にしよう。持ち込みも禁止にしよう、と。

もしも、守らねばならないものがあるのなら、それは命を賭して守る価値のあるものにするべきだろう。そうでなければ無制限に守り続けることになる。志は磨耗する。心も魂も、削りつくされて終わり果てる。

猫たちは家に帰り、縁側には僕と冥だけ。冥は僕の膝を枕にぐっすりと眠っており、舞は邪魔をしちゃ悪いからと早々に眠りについた。

街灯すら設置されていない田舎の夜は、とても静かではつきり言つて怖い。それでも気候はちょうど良くて、空を見上げれば空に浮かんだ月と星がとても綺麗。

猪とか熊とか出た時は、マタギ（狩りをする人。季節になるとお肉を調達してくる）のおっさんにうっかり惚れそうになってしまつたくらいにやばかった。

「だからまあ……この場にいられるのは都会っ子じゃ無理なんだよ、駄眼鏡」

「……相変わらずだね、高倉。君も昔は眼鏡だったくせに。……つていうか、なんで今は眼帯なのさ？」

「浮気して女に刺されたんだよ」

「……嘘だね」

「……嘘だけどさ」

正面の闇夜から姿を現すのは黒い人影。

黒縁眼鏡に黒のコート。上から下まで全部真っ黒で、顔と手足は細く目は垂れ目。口元はいつも真っ直ぐ。性格は生真面目に加えて努力家。己に油断せず、才能を磨くことに躊躇せず、ただ前だけ見据えている馬鹿男。

脇見ばかりの僕とは対照的な……元3馬鹿の一人。

「久しぶり、キツネ。元気にしてた？」

「元気さ。元気すぎて恋心と一緒に右目を落としてきちまったくらいには、な」

「あっはっは、浮気じゃなくてそういうことならいつか絶対にやると思った」

「死なすぞ、クソ眼鏡」

軽やかに笑われて、僕は口元を引きつらせる。

相変わらずのイタチっぶりだ。おまけに計算高くて女の子にもてるくせに距離感を取るのが絶妙に上手いという変態性能。あまりのむかつきっぶりに意味もなくインネンをつけて殴りかかっていた昔が懐かしい。

「で、俺の人生の路傍の石がなんの用だ？ どーせ女がらみだと思っけど」

「ある意味正解だね、それは。……ここに、僕らの家族が養生してらって聞いてね。会いに来たんだよ」

「残念だが、会わせるわけにはいかねえな。どーせお前のことだからちゃんと言わないと納得しないと思うから言っちまっけどさ、今の彼女はとも動けるような状態じゃない。喋れるような状態でもない。多分、弱つてるところをを家族に見られたくもないだろうさ。せめて5年後にまた来い」

「キミならそう言うだろうと思ったよ、親友」

「お前ならそう言うだろうと思ったよ、悪友」

そいつは笑い、俺は笑う。三日月に照らされたそいつの笑顔はとても綺麗で、多分俺はそんな笑顔など歯牙にもかけない獰猛な笑みを浮かべている。

苦しい時や辛い時ほどそいつは綺麗に笑うのだ。

いつも通りと、割り切つて。

「相変わらずだ。相変わらず君は楽しそうだな、キツネ。はっきり言えば、僕はそんな君に嫉妬していたし羨んでいたし恨んでいた。計算馬鹿で他人に甘えることすらできない僕には……本当に君が妬ましかつたよ」

「お前こそ変わらない。いつもすかした顔をしながら当たり前のように茨道を歩く。誰かを助けて誰かを殺さず、当たり前のように一番苦しい道を歩んでいる。俺はお前になんかなりたくなかつたし羨ましいとも思わない。……ただ、綺麗だと思っただけだ」

泥まみれが美しい。血だらけが綺麗だ。苦笑だらけの人生に乾杯。誇るといい。その醜い生き様は……まるで日本刀の刀身を思わせるほどに、鋭利で鋭く可憐で儂い。

それはただ、鋼の意志を持った男の生き様だから。

「つていうかさ、なんで膝にメイドとか乗せてるの？ それはなんつーか人としてありえん。どんな勝ち組？ どんなことすればそんなことになるの？ 久しぶりに会った早々で言うのも失礼かと思つたケドやっぱり言わせてもらおう。ありえん」

「年上の女性に甘くしまくつて右目抉られるところなる。お前こそ、話に聞いたところによると、なんだか女で色々と苦労してるそうじゃねーか。着物がやたら似合う黒髪の妹さんは元気か？ 今度写真くれ」

「……キツネ、本当に君は変わらないな」

「色々変わってるさ。3分で食べられるカップなヌードル程度のマインナーチェンジだけだな。知ってるか？ あの即席麺は具とか麺とか少しずつ改良してるんだぜ」

口元を緩めながら、僕はメイドを起こさないように膝から頭をどかす。冥は酒に弱いし、客人ではなく交渉人としてやってきた親友を再起不能にしたくない一心で一服盛つておいたからしばらく起きることはないだろう。

少し痺れた足をほぐすように伸ばしてから、拳を前に出し正眼に構えた。

「さて……それじゃあ、城のルールには従ってもらおうか親友。俺を倒さない限り彼女に会わせるわけにはいかん。筋を通したけりや力を示せ」

「……あんまりそういうのは好きじゃないんだけどね」

イタチの眼鏡は口元を緩めて、ポケットからあるものを取り出した。

紐のついた五円玉だった。

「暴力沙汰は苦手だから……僕の流儀でやらせてもらうよ、キツネ」

「いや、五円玉でどうするんだよ？ まさか催眠術……で、も？」

「残念ながら……これは催眠術じゃない」

イタチが苦笑したのを見た。それが最後だった。

「ただの追体験さ。他の誰かの自分のね」

あれ？ おかしいな……なんか、ふわふわするぞ。

……あれ？

ある日、猫が落ちてきた。

自由落下の果てに僕らの前に落ちてきた青い猫は、ボロ雑巾によく似ていた。

放って置くのも後味が悪いので介抱すると、その猫は苦笑しながらこう言った。

「ありがとうと言っておこう、物好きな人間」

とりあえず、その猫が素直じゃないことはよく分かった。

その青い猫の怪我はかなりの重傷で、少なくとも10年ほどは治療に専念しなければならぬような状態だった。体だけじゃなく神経気孔が損傷しているとか何とか、よく分からない話だったけど、

とにかく重傷なものには変わらない。

猫は少し悩んでから、僕らにこんな話を持ちかけた。

「なあ、物好きな人間。理想郷に行きたくはないか？」

面倒だしその話の流れだと戻れなくなりそうだから嫌だと言うと、猫は猫らしくふてぶてしく尾を振りながら僕の目を見据えた。

「空気を読め、青年」

猫にたしなめられてしまった。ちよつと人間として情けない。

結局面倒というほどのことでもなく、戻れないこともないので、僕はいくつかの条件と引き換えに、青い猫から理想郷を譲り受けることにした。

もつとも、その理想郷に面倒なことが転がり込んでくると気づいたのは、城に住み始めてからのことだったけど。

漆黒に包まれた次の瞬間には、僕は別の場所にいた。

理想と夢と現実と。その狭間に僕はいる。

ある世界では、僕は舞さんと一緒にいた。二人で飽きるまで騒いでいた。

ある世界では、僕は京子さんと一緒にいた。結婚式だった。

ある世界では、僕は美里さんと一緒にいた。新婚みたいだった。

ある世界では、僕は友達と一緒にいた。みんながそこにいた。

ある世界では、僕はバイトをしていた。それは純然たる過去の話。選ばなかった世界。選んだ世界。量子力学だかなんだかでは、あらゆる可能性は選択された瞬間に『全ての可能性が選択される』という結果を持つ。僕はそういう学問を学んではいけないけれど、きつと……そういう選択をした僕もいるってことだろう。

量子力学なんて眉唾ものだから全然さっぱり全くこれっぽっちも信じちゃいないが。

「で……あの人と一緒にいる世界はないってことは」

僕一人では、その世界を選ぶことはできない。

誰かの助けがなければ、その世界が存在することもない。
そもそも……今ここでこうして冥を選んだ僕に、それを見る資格はない。

未練を残して明日を繋ぐ。

残した未練は心の痛み。痛みのぶんだけ人はきつと強くなれる。
たくさんの世界を見て、それぞれの世界がそんなに悪くないことを確信して、僕はゆっくりと立ち上がる。

懐かしい夢を見た。みんなと笑い合った夢を見た。もう過去のことだったけどあまりにも楽しくて名残惜しくて……それでも、僕は屋敷から外に出た。

「さて……と」

「行くんですか？」

「うん。なかなか悪くない夢だったけど、僕の現実は外にある」

振り返りはしない。そこにいるのは、僕が求めるメイドではない。それでも、振り返ったら、そこには僕が追い求めた誰かがいるはずだった。

だから振り向かない。未練は残すが振り返りはしない。

「なんでもありの世界で……それでも貴女のいる世界はどこにもなかった」

「ええ。でも、私がここにいてってことは、きっと誰かが坊ちゃんを助けてくれたってことなんですよ。たくさんの人が助けてくれた……そう、思います」

「そうだね」

口元を緩める。前を見据える。

「それじゃあ、行って来る。いつも通りに」

「行ってらっしゃい。いつも通りに、貴方らしく」

一度も振り返らず、俺は後ろに居る誰かに向かって手を振った。

どこかで見たとような屋敷の門をくぐって外に出る。まるで4年前のように楽しい場所。みんなが笑顔でいられた場所を離れて、僕は歩き続ける。

やがて、辿り着いたのは約束の場所。

田舎臭くて古びた屋敷。温泉と道場と家屋があるだけの、ちょっと大きな日本屋敷。

門を守るのはお人好しの猫たちで、日向ぼっこをしながら欠伸をしている。

庭を回ると縁側には子猫や雌猫たちが平和を楽しんでいる。

その猫たちに囲まれながら、彼女は僕の方に振り返って、満面の笑顔で迎えた。

「お帰りなさい、ご主人様」

そんな世界を選んでみた。

そんな世界を望んでいた。

望んで叶った世界には、いつも通りに彼女がいる。

だから僕は、いつも通りに笑って、いつも通りの返事を返す。

「ただいま」

ホント、お人好しっつーかなんっつーか、汚いものを見過ぎたそいつの夢は、本人の願望通りに綺麗だったっていうかこれじゃあ精神攻撃とか意味なくね？ と突っ込みたくなっただけど、30秒ほど見ない間にポロポロになっていたのでやめておいた。

冥は起きていない。少し寝苦しそうにしているだけだ。

上から下までポロポロになったイタチは、首だけを動かして笑った。

「あのさ、キツネ……。この家には忍者でもいるのかい？ なんかこう……鎖帷子に草鞋を履いて背中に忍者刀を背負った女の子に『うるさいでござる』って言われて殺されそうになったんだけど」

「いや、なにその不審人物？ そんな変態とお友達になった記憶は

ないけど……それより大丈夫か？　なんかもう立って歩くのも辛そうだけど」

「ごめん、立つことすら無理」

「……やれやれ」

仕方なく、肩を貸してやるとイタチはフラフラしながらも立ち上がった。

口元に浮かんでいるのは、いつも通りに苦笑だった。

「あはは……やっぱり慣れないことはするもんじゃないね」

「全く持ってその通りだ。荒事は俺と友樹が担当。お前は影で逃げる算段とか立てておいてくれりゃいいんだよ。んで、バレンタインの本命チョコは友樹が30個でお前が1個。俺は0個で義理が少々つてのがお約束だろうが」

「……正直、僕にはその少々が死ぬほど羨ましかったけどね」

「馬鹿言え。俺にはお前の1個の方が断然羨ましかったね」

「まあ……あれだね」

「どっちもどっちってところだ。気にすんな」

俺は笑う。同類相憐れむというやつかもしれないけど、それでも笑う。

イタチ眼鏡はいつも通りの苦笑を浮かべて口を開く。

「ねえ、キツネ。君はなんかやりたいことってある？」

「守りたい女もやりたいこともある。今は幸せだよ」

「……そっか」

「ああ、そうだよ。お前はどうなんだ？」

「……僕は、よく……分らない」

イタチ眼鏡は、ようやく小学校の頃と同じように不器用に笑った。似合わない苦笑よりも、そっちの方が似合っているとは言わなかった。

「どうしたらいいのか分からない。どの道を選べばいいのか分からない。誰も悲しませたくないし辛い思いもさせたくない。……でも、僕にしか助けられない人がいる」

「……………」
それはどこかで聞いた話。誰も笑えない切羽詰った物語。
それでも…………俺だけは、どこの誰もが笑えない物語を笑い飛ばし
てやる。

「駄眼鏡。一つだけ言っておくぞ」

「え？」

「うるたえるな。前を向け。お前がやりたいことはなんだ？ お前
がやらなければならないことはなんだ？ 願っているだけじゃ始ま
らない。迷っているだけじゃ始まらない。願いも迷いも必要だが…
…始めるためには振り切らなきゃいけない」

「……………キツネ」

「好きなコトをやれ。ケツは持ってやる。お前は俺の親友だからな
当たり前のことを言い切って、俺はにやりと笑う。

無責任な言葉なのは重々承知している。それでも、言わなければ
ならなかった。高倉天弧は誰かの味方。青い猫が抱いた正義の代行
者なのだ。

友達の決断を助けることは…………俺が俺であるために、当然のこと
だから。

俺が真っ直ぐに親友を見据えると、イタチは目を伏せて口元を緩
めた。

小学校の頃のような、綺麗でもなんでもない微苦笑。それでも、
多分そいつにはその笑顔が一番似合っていた。

「ありがとう、キツネ。存分に利用させてもらおう」

「おう、自由にしろ。その代わりお前の妹の着物姿の写真寄せせ」

「嫌だね。全然趣味じゃない同級生の写真ならいいけど」

「ハ、八方美人のお前がそこまで言うとは、実に楽しみだ」

俺は笑ってイタチ眼鏡も笑う。

自分たちを誇るかのように、小学校の時のように、笑い続けた。

二泊三日の里帰りはあつという間に終了した。

途中で眼鏡の黒い人やら、帰ってきた由宇理やら、由宇理を追いかけてきた香純ちゃんやら、まあ色々な人が訪れて結局それなりに騒がしくなってしまったけど、あの屋敷にいた頃と似たように、楽しく笑い合える日々だった。

少しばかり名残惜しくなるくらいには、楽しかった。

……と、まあそんなことを思ってしまうのも、行きと帰りで安全性が違いすぎるせいがあるいは単純に寂しいせいか。その辺はちょっとばかり微妙だったけど。

駅前で車を降りて、私は背伸びをしてから口を開く。

「ねえ、テン。とりあえず次に来た時は頼むから由宇理じゃなくてアンタが迎えに来てくれない？ あの車はさすがに怖すぎるわ」

「そうする。まさかあんなボロ車で人を迎えに行くなんて暴挙に出るとは思わなかったんだよ。由宇理の奴、二人乗りくらいなら楽勝なでっかいバイクも持つてるから」

「……………」

最初からそれで迎えに来いと、後で言うておこつ。

後部座席から見る田舎の風景は、来た時と全く同じように見える。それでもこの三日で分かったことは、なにもないように見えるのかな田舎であつても実際にやっていることは都会と変わらず、むしろ田舎の方が下手すると忙しいってことだった。

みんな……忙しくも楽しそうではあつたけど。

と、私が感慨にふけっていると、冥ちゃんが口を開いた。

「姉さん、また遊びに来てくださいね。姉さんならいつでも歓迎しますから」

「うん。……今度はみんなで来るわね」

当てにならない口約束は、きつと当然のように確約になってしまつたろう。

今度は雪が降る頃に、みんなと一緒にお酒でも飲みながらつても、悪くない。

「じゃ、そろそろ時間だし行くわ。乗り遅れるともう一泊しなきゃならないし」

「はい、姉さん」

「道中気をつけてね、舞」

「はいはい。じゃ、行ってきます」

『行ってらっしゃい』

二人の声に送られて、私は駅に向かって歩き出す。

販売機で切符を買って、少しくたびれた椅子に腰掛けて、一日に二本しか来ない電車を待つ。その電車に乗って半日もすれば、私は私の居場所に帰ることになるだろう。

と、その時だった。

「あれ？ 黒霧さんも今日帰りですか？」

「あ、どうも。イタチさん」

待合室に顔を覗かせたのは、眼鏡と黒い衣装が印象的な人。テンの昔の知り合いだか親友だかで、そういえばずっとイタチさんと呼んでいたせいで本名の方は聞いていない。

彼は綺麗な笑顔を浮かべながら、私の隣に座って口を開く。

「や、ちよつと友人に会いに来ただけだったのに思わず長居しちゃいました」

「楽しかったから、ですよね？」

「……まあ、そうですね」

「テンはそういう場所を作るのが上手いですよね。私が昔勤めていた職場もあいつが取り仕切ってたんですけど……やっぱり、楽しかったです」

楽しかった思い出。楽しかった過去。みんながいたあの時。

戻りたいとも思う。戻れないとも思う。戻っちゃいけないんだとも、思う。

それでも 思うことがあるとすれば。

「でもね、それじゃあ駄目なんですよ、きっと」

「え？」

「私が楽しかったのは、きつとテンが頑張っていたから。私は自分のことだけで手一杯だった。だから、これからは私が頑張らなきゃいけないんです」

そう、私は私のけじめをつけるために、これから頑張らなきゃならない。

まずは次のことを考えよう。次は京子さんと美里さん、あとは手が空いていたら章吾さんや陸を連れてくるのもいいかもしれない。もちろんお酒は持参で、みんなでわいわい騒ぎながら、またあの時のように笑い合うのだ。

そこにはもちろん あのはか女もいなきや駄目だ。

土下座でもなんでもして、絶対に連れてきてやる。

と、私がそう心に誓っていると、イタチさんは口元を緩めた。さつきまでの綺麗な笑顔じゃなくて、ごくごく自然な笑い方だった。

「あはは……なるほど。キツネやあのメイドの子が入れ込むわけだ」「へ?」

「いやあ、黒霧さんって面白い人なんだなって思って」

イタチさんはそう言って、本当に嬉しそうに笑った。

彼がなにを言いたいのがよく分からなかったけど、私はとりあえず暴言らしきものを吐かれたのはよく分かったので、頬を引きつらせて微笑んだ。

「イタチさんも面白いですね。なんか、テンと似たような部分があります」

「あつはつは、あいつと一緒にされるとは心外だな。今すぐ訂正してください」

「嫌です。なんかイタチさんってなんか拳動が胡散臭いし。ぶっちゃけて言いますと、いっぱいいっぱい生きてる感じがなんかちょっとアレですね。長所が指が細くてせくしいな所しかありませんし」

「あつはつはつは……女の子をぐーでしばきたいと思ったのは初めてだ」

「いえいえ、こつちも男の子を蹴り飛ばしたいと思ったのはテン以来ですよ」

あつという間に空気がギツチギチに悪くなる。

私は笑い、イタチさんも笑う。不自然さなどどこにもなく、そこにあるのは悪意と殺意くらいなものだ。

さて……それじゃあ、テンにそっくりで意地っ張りな男をからかいながら。

名残惜しみながら、私の現実せかいに帰りましょう。

氷雨ちゃんの様子がおかしくなったのは、おおそ2日ほど前のことだった。

目が鋭くなった。ござる口調になった。それまでは使っていないが、つた奇妙な術を躊躇なく使うようになったし、修行にも力が入っている。服装は鎖帷子に草鞋に背中に忍者刀というわけの分からないいでたちだったけど、そんな彼女は容赦なく強かった。

『師匠、私の実力は既に貴方を越えているでござる。しかし、料理等の技術面で学ばなければならぬことがあまりに多すぎるので、今後はそのあたりをご指導のほどを。……そして、ここにいる間は貴方たちは私が守るでござる』

僕をボコボコにした後、彼女はそう言って道場を出て行った。

手も足も出ませんでした。

ござる口調の忍者に手も足も出ないってのはある意味自然かもしれないけど。

「あー……」

舞の奴、一体全体彼女になにを吹き込んだんだろう？

忍者なら音速で走れとか、手裏剣は必殺必中だとか、忍者たる者忍法程度使えなくてどーするとか、弱みがあるんだつたら徹底的に責めるとか、守りたい奴は自分で選べとか、選べなくて気に食わないなら土壇場で裏切れればいいとか、そういう外道なことを吹き込ん

だよな気がしてならない。

もーちよつと師匠気分でいたかったんだけどなあ……残念。

「やっぱり、姉さんと呼んで正解だったじゃないですか」

「ま……そうなんだけど、さ」

いつの間そこにいたのか、倒れた僕の顔を覗き込んでいるのは、自称僕のメイドこと黒霧冥だった。

氷を入れたビニール袋を僕の頬に当てながら、彼女はにつこりと笑う。

「大体、ご主人様に荒事は向いていないんですから、無理しなくてもいいんですよ」

「そうだけどね。……ハードルは高くもなく低くもなくが理想的だから少しは鍛えておかないと。楽々越えられても、困るからね」

「弟子想いですね」

「師匠に似たのさ」

僕はゆっくりと体を起こし、しばらくはメイドにされるがままに傷を冷やしてもらっていた。

真っ直ぐにメイドの目を見る。冥は少しだけ微笑んで口を開いた。

「どうしました？」

「ん……ああ、なんでもない。可愛くなって思っただけ」

「おだてても着物は着ませんよ？」

「知ってるよ」

冥の頬に触れながら、僕は口元を緩める。

ちゅーでもしようかと思っただけど、昼間なので自重した。

代わりといっちゃんんだけど、冥の背中に右手を回して抱き締める。

左手は、冥の手を握った。

「……冥」

「なんですか？」

「僕は君が好きだ」

「……知ってます」

冥は僕の手を握り返して、囁くように言った。

「私も、貴方が好きですよ。ご主人様」

Aランクエンディング・冥編：つなかれた小指 END

Aランクエンディング・京子編：バックスクリーン直撃弾 続

く

冥エンド：つながれた小指（後書き）

次回は京子エンド。四ヶ月は開かないと思うけど、気長にお待ちください

京子エンド：バックスクリーン直撃弾（前書き）

はい、そういうわけで一ヶ月ほどで仕上がりました京子エンドです。楽しみにしてください。皆さんには本当に感謝を。これが初めてという方は僕の家族のコッコさん つづあいを読了してください。となお楽しめます。

なお、コメントに関してなんですが本当に申し訳ないことに作者オーバーワークのため書く暇がありません。その分の時間は作品の執筆につき込ませていただいていますので、ご了承ください（泣謝）

京子エンド：バックスクリーン直撃弾

注1：ここから先の物語は完全なるアナザーストーリーです。ありえたかもしれない未来、マルチエンディング等が嫌いな方はご遠慮ください

注2：時間の経過、人間関係、周囲の環境の変化などによって人の考え方なんてものは簡単に変わります。20歳越えても成長しませぬ。嫌いなものだって数年経ったら食べられるようになってしまいかもしれません。よって、『 の性格がかなり違うんですけどおおおお！』 というツツコミは却下です。そういうものとしてお楽しみください。

注3：Aランクエンドです。最終話より4年後の話になります。

注4：上記の注は美里さんエンドから省きます。あとがきから読む人はいても3話から読む人はいねーだろと踏んでのことです。あと、この小説を読むのが面倒な人はエ の10巻を読めばいいと思いました。誰がなんと言おうとターシャは可愛すぎます。

注5：田山歴史は森薫先生を全力で応援しています。

エンディング条件。

- ・本編における京子と美里の仲を取り持つこと。なお、左記の条件が満たせない場合、自動的にバッドエンドになるので注意。
- ・お屋敷から離れた後、京子さんと一緒のアパートに引っ越したりしないこと。どっちかっていうとそれは美里さんのフラグです。
- ・オーレリア救出作戦失敗（四人揃わないと自動失敗というか発生しない）。
- ・仕事が忙しい彼女のために、なるべく時間を作ってあげよう。
- ・忙しいのであんまり会えないけど無理を言うのはやめよう。男も忍耐。女も忍耐。

・何百回でも繰り返すけど、高校編で舞さんとのフラグは立てないように。

・タイトルの時点でコメディ臭がぶんぶんしますが、むしろコメディ的には前座のような気がします。ぶっちゃけBランクエンドの方がもがもが。

以上を踏まえて、ご覧下さい。

Aランクエンディング・京子編：バックスクリーン直撃弾。

サブタイトル：婚前イベント・京子ちゃん争奪頂上大決戦

第一戦：アルティメットメイド・芳邦鞠&白の魔法使い・有坂友樹。

第二戦：アルティメットメイド・黒霧冥&大学生・黒霧舞。

第三戦：史上最強・高倉望&無双乙女・橘美咲。

第四戦：地上最強・高倉織。

最終戦：大学生・橘美里。

なんてことが、一ヶ月前にあった。

肌は荒れ、艶がなくなり老いを知る。

別にそこまで老けてはいないのだけど、私は最近苛立っていた。

「……なあ、テン。あたしらって付き合ってたどれくらい経った？」

「そろそろ4年くらいかな」

私の彼氏……高倉天弧はお茶を飲みながらぼんやりと言った。

場所は駅前の喫茶店。顔なじみが働く店でコーヒーが上手いのが唯一の取り得のような店で、私は久々に彼氏と顔を合わせていた。

もつとも、私は今性に合わないOLなんぞをやっているせいで色々忙しい。今日も午前中に会社に呼び出されて、今ようやく戻って来たところだった。

テンはその間文句の一つも言わずに、本棚にある本を読破しながら私を待っていた。

……あまり罪悪感を感じる方じゃないけれど、さすがに心苦しかった。

「えっとさ、テン。さすがにここはあたしの奢りにした方がいいかなー……って」

「や、別にいいよ。僕もバイトとかやってるし。久しぶりのデートなんだから、もーちよいリラックスして楽しんでもいいんじゃないかな」

「……………むう」

昔は私のほうが気を使っていたのに、今じゃ立場は逆転していた。そう、今じゃすっかり立ち位置が逆転してしまっている。普段あまり会えないことに苛立っているのはむしろあたしの方だし、会えないなら会えないでテンの方が私の予定に合わせてくれる。それが心苦しくて、休日出勤とかあると『いつかその焼け野原のような頭を本当の荒野に変えてやる』と念じながら部長の湯のみに雑巾を絞る毎日である。

今日は見たい映画があったのに……午前中は私の見たかった映画を見て、午後からは買い物をする予定だったのに。

……いい加減に、ジヨロキユア（2008/04/25現在で八バネ口を越えたとされる調味料。もちろん辛味的な意味で）でもお茶に混ぜ込んでやった方がいいんだろーか？

「京子。どうしたのさ、なんか不機嫌そうだけど？」

「……休日の午前が丸々潰れりゃ少しばかり不機嫌にもなるだろ」
「まあまあ、過ぎた時間はお金に代わったと思えばそれでいいじゃないですか。人間社会に生きる限り、お金は無駄にはなりませんし」
「休日手当ではつかねーんだよ、ウチの会社」

「……………へえ」

と、不意にテンの目つきが剣呑なものへと変わる。

そして、ポケットから一瞬で携帯電話を取り出して、どこかに電話をかけた。

「あー、もしもしあくむさん？　こちらキツネの電話ですけど。あ、はい。木野村ファイナンスっていうクソ生意気な企業がありましてね。なんとか穩便にぶっ潰してくれとありがたいんですけど。え？　京子の勤め先だろって？　いやいや……人の恋路を邪魔する奴は企業だろうが概念だろうが踏み潰せって母さんが」

「ストップ！　待て、その教えは一から十まですごく間違ってる！」

「お金が払えなきゃ命で償ってもらうしかないじゃないか。なあに、このご時勢に中小企業の一つや二つ潰れたって大したことはないよ。むしろ耐性がつく」

「どんな耐性だよ！？」

目はまるで笑っていないテンの笑顔は、冗談など一欠片も存在しないことを物語っている。

いや、確かに今務めている会社には義理も恩義もないし、同僚の神経はおおむね腐ってるし部長は気持ち悪い笑顔でセクハラやパワハラを繰り返すし、給料は正直多くないし、仕事が多量に多いわりに休日出勤は禁止されてるくせに普通に出勤しなきゃいけない空気だしで全然いいところはないが、さすがに潰されるのはちょっと後味が悪い。

「テン、気持ち嬉しいがいきなり勤め先を潰すのはやめてくれ。給料入らなくなるし、次の勤め先探すの面倒だし」

「一緒に会う時間は増えますけどね」

「……………い、いやいやいやいや！ それでもアレ、ほら大人の責任とかそういう大事なものがあるからね！」

八、なかなかやるじゃないかテンのくせに。ものすごく悩んでしまったじゃないか。

そりゃ転職を考えないでもないけど、転職するとしたら杜氏とかになつてしまうわけでそうなるとお金やらなにやらで色々と面倒だし、なにより本音を言えばあたしの都合でテンを振り回したくない。

…………… 転勤先にも普通についてくるんだもの、こいつは。

「ま、まあとりあえず気に食わないから叩き潰すつてのは子供のやることだからな。頼むから自重してくれ」

「じゃあ、会社を潰すのはやめにするよ。その代わりに、京子に嫌がらせを働く同僚のクソ女どもと変態部長は破滅させていいよね」

「……………え、ああ……………うん。……………じゃない！ 納得しそうになつちゃつたけどそれも駄目だ！ とりあえず潰したり滅ぼしたり消したりつていうのは却下！」

「はい。まあ、京子ならそう言うと思ったケドね」

テンはそう言つて、笑いながら私の頭をぐりぐりと撫でる。

まるで子供扱いのような気がしなくてもなかつたが、こいつの愛情表現つてのは大体こんなもんだ。冥という私の友達でこの男のメイドも似たような扱いだし。

……………ちなみに、メイドというモノに違和感を持つてはいけない。

疑問に思つた時点でアウトである。

(しかし……………この現状はなんとかしなきゃな)

仕事が忙しいのはまだいいとしても、私の都合ばかりに合わせてもらうのは良くない。はっきり言えば毎日会いたいというかぶつちやけずつとくつついていたいくらいには惚れているので、なんとかこの状況を打開しなくてはいけない。

現状の財力その他等の武器を使用した時に、私が実行できる最善手。それは

「いつそ……ど、同棲してみる、とか？」

24歳になりました。お金もまあそこそこ。テンもバイトしてるし、私も社会人。

社会的にも一緒に住んで違和感はない感じがする。

しかし……口に出してみると、なんとというか、その。

思いつきり自爆したような気がする。

顔を上げるとテンは呆気に取られたのか口を開けてポカンとしていた。

一瞬で恥ずかしくなって、私は思わず慌てふためいた。

「いやいやいやいやいや！ やっぱなし！ 同棲とかあれだ！ まだ早いしな！」

「ん……確かに同棲だとちょっと面倒だね。近所の目もあるし……ぐっ、だ、だよなあ！」

近所の目と言われてちょっと傷つくあたし。お前は私と近所の目とどっちが大事だからあと怒鳴りつけたい衝動に駆られたけど、それをやってしまうと確実に『京子に決まってるじゃん』と言われて同棲まで押し切られる可能性がある。

この男、ぼんやりしてるように見えてあたしが絡むと老若男女容赦ない修羅に変貌する。実行に躊躇がなくなるというか、ある意味で感情的になるというか。普段は周囲にも他人にも配慮できるように、それを全部放棄する。

それだけ愛されると思えばいいのかもしれないけど……なんつか、取り扱い要注意の爆弾を扱っている気分になる。

まあ……そんな男に惚れているあたしの方が性質が悪いかもしれないけど。

と、不意にテンは腕組をして窓の外を見ながら言った。

「でもまあ、時間が取れないのも事実だね。最近あんまり会えないし」

「だからって会社は潰すなよ？」

「あれは冗談だよ。……まあ、そろそろ頃合なのかな」

「だから潰すなって！」

「いやいや、そっちじゃなくてさ。同棲の方。同棲だと色々面倒だし、大学生と社会人だとなんとも折り合いが悪いし、中途半端なことしていると舞とか美里が怖いし、冥にも頭引つ叩かれそうだし」

「……同棲の話で女の名前が3人ほど出てきたあたりで、私の怒りは頂点だぜ」

「うん、だから同棲はやめておこうってコト」

笑顔できっぱりと言われて、私は少々へこんだ。

いや、まあいいんですけどね？ 今でも会えているわけだし、寂しい時にもわりと側にいてくれますしね？ 判っちゃいるんだけど感情が納得しないっていうか。

判っちゃいるけどね……なんか腹が立つ。

テンはそんな私を見て、にっこりと笑って言った。

「じゃあ、いつそのこと結婚しようか？」

……………へ？

「同棲はめんどいし体裁が悪いケド、結婚ならしつかりした約束だからね。これならちゃんとしてるし、中途半端なこともしてないし、なにより僕の望みが叶えられて万々歳じゃん。……いやあ、正直いっ言い出そうか迷ってたんだよねえ」

……………あれ？

「えっと、京子？ 聞いてる？」

「……………ああ、うん。聞いてる」

「やっぱり駄目？ 僕は京子以外の人とくっつくつもりはないんだけど」

「えっと……駄目じゃないし、嫌でもない。うん、オッケー」

「ああ、良かった。じゃそれはそれとして今日は午後から遊びましようよ。予定の方はこっちで詰めておきますし」

「……うん」

……あれ？

……あれ？

いや、あの。ちよつと……結婚？

結婚つてアレか。夫婦とか、子供とか……えつと、ええ？

「あ、それとこれは指輪。安物だけど、口約束だけじゃ説得力ない
と思っただんで」

「……ありがと」

渡された銀の指輪を見ても、なんだか現実感が希薄だった。

結局、私が我に返ったのはデートが終わって家に帰って、シャワーを浴びてもらった指輪をまじまじと見つめた後のことだった。
もちろん、パニックに陥ったことは言うまでもない。

結婚。人生の墓場とも呼ばれる、一つの区切りのようなもの。

16歳の前に成長が微妙な感じで終了し、さらに付け加えるなら若い頃にやらかしたことで旧友にも会えなくなり、ああこりや女の幸せとかそういうのとは一切合財無縁になったなあと思いつつながら生きてきて24年。まさか男からプロポーズされる日が来ようとは考えもしていなかった。

いや、まあ嬉しくないと言えは嘘になる。嘘になるっちゃなるんだけど、正直どうしたらいいのかよく分からんというのが本音だ。

……ホント、どーすりゃいいんだ？

結婚というものにマニュアルやテキストは存在しない。それでも先人の意見は参考になるだろうということ、あたしはある場所に向かっていた。

通称、魔王皇の城。処女の血をすすり若さを保っていると専らの噂のある魔女が住む、造りのいい邸宅の前に私は立っていた。

「ちっ、さすがは30過ぎても未だに合コンに参加しようって魔女だけはある。この家を作るのに、何人の人間の人生を食い潰したの

か分からないぜ」

「あの、京子ちゃん。いくらなんでも人の家の前で人聞きが悪すぎることを呟かないでもらえるかしら？」

「あ、お帰り美里。合コンはどうだった？」

「京子ちゃん？ いい加減にしないとぶっ飛ばすわよコラ」

青筋を立てちゃいるがそれほど怒ってはいないらしく、私の友人と呼べないこともない女は、苦笑しながらも私を家に招きいれてくれた。

橘美里。信じられないことに現役の大学生。見た目は美女に見えないこともないが、趣味はおかしい。娘は溺愛、好きな男は殴り放題となんかもう見た目とは裏腹に心の中は真っ黒な女。そのくせ有能なのが憎らしいといふかなんというか。

まあ、子育てはべらぼうに下手だけど。

「京子ちゃん。とりあえず、新婚さんがこんな所に来ていいのか聞いていい？」

「あー……まあ、テンには了解は取ってるよ」

「それならいいんだけど」

案内された客間は掃除が行き届いていたし、家具の類も品揃えがいい物ばかりだった。香水かなにかを使っているのかいい匂いもするし、窓からの景色も申し分ない。

むう……いつの間にか生活水準が向上してやがる。美咲（娘）がいる間は六畳一間のアパート暮らしだったくせに。

「美咲も高校生になってあのアパートも手狭になったことだし、ちよつと友樹君に頼んでいららない物件を回してもらったのよ」

「いらないうって……ここ、かなりいい立地条件じゃねーか」

「ええ。一目見て気に入っちゃったから、色々とこねていちゃもんをつけて、ついでに芳邦さんに友樹くんの女性遍歴の一部を暴露しよつとしたら笑顔で貸してくれたのよ」

「……………」

そんなあからさまな脅迫に逆らえる人間は、そういないと思う。

出されたコーヒ―は当然のように美味しいが、その味がどんな血と屈辱の上に成り立っているものかはもう考えないようにした。

自分もコーヒ―を口にしながら、美里は口元を緩めた。

「それで、京子ちゃん。今日はどんな用事でここまで来たのかしら？」

「えっと……実は」

「まさか、いきなりプロポーズされて、パニックになった挙句一人取り残された気分になっちゃって、仕方ないから今後のこととかを私に相談しに来たわけじゃないわよね？」

「……いや、まあそうなんだけどもさ」

「ハッ」

うつわ、鼻で笑われたよおい。超殺してえ。

「もう、京子ちゃんってば、あれだけいちゃらぶしておいて今更結婚に尻込みって……正直馬鹿なんじゃないかって思っちゃうじゃない」

「あの、美里。あたしゃわりと我慢強い方だけどさ、今ちょっとナイーブになっちゃってるからこれ以上言われると44マグナム（拳銃）が火を噴いちゃうんだけど」

「好きなら結婚しちやえばいいじゃない。結果なんて後からついてくるわ」

「……………」

正論だった。なんかもう、ぐうの音も出ないくらいに正論だった。いや……えっと、確かに好きですよ？ でもこう、なんていうか不安で仕方がない。

テンのことは財力的にも男としても非常に頼りになる男だと思ってるけど、それとこれとはまた別問題なわけで。

なんていうか……上手く言葉にできないけど、これでいいのかな？ と思う。

あたしの悩みを見て取ったのか、美里は微笑みながら口を開いた。「ねえ、京子ちゃん。結婚ってなんだと思う？」

「……人生の墓場っていうか、一区切りっていうか……そんな感じ」
「うん、確かによくそう言われるけど、全然違いわね」

美里は、あつさりと世間の常識ってヤツを自信満々に否定した。
そして不敵な笑顔を浮かべて、きっぱりと断言する。

「結婚してもね、結局のところはなにも変わらないのよ。ただ、二人の距離が少しだけ近づいて、色々なことを共有できるようになるだけ」

「……そうかな？」

「もちろん、共有できるぶん苦痛も多いわよ。生活習慣だって違つたろうし、相手が自分の思っているような人間じゃなかったりする事だってある。誰だって好きな人の前じゃ格好をつけたがるけど、距離が近づいたぶんだけ誤魔化しは通用しなくなる。誤魔化したら誤魔化したぶんだけ反動がきつくなる。結婚っていうのはつまり、全然違う他人を『家族』として受け入れられるかどうか。問われるのはただそれだけなのよ」

「……」

非常に含蓄がある言葉に、あたしは感心するだけだった。

うーん、さすがに経験者の言葉は一味違つた。これが真ならものすごい理想論を言いそうだし、舞なら現実的過ぎて夢のないことを言いそうだ。

恋愛と結婚は違つた。あたしなりに分かっていたつもりだったけど……分かっていなかったのかもしれない。

コーヒークップをテーブルに置いて、美里は微笑を浮かべた。

「ねえ、京子ちゃん。聞くまでもないことだけど、結婚は嫌じゃないのよね？」

「うん。それは嫌じゃない。……あいつの弱いところも悪いところも大体分かっているけど、それでも、私はあいつが好きなんだと思う」
「なら……後は彼次第かしら、ね」

美里は微笑みながら……不意ににやりと口元を緩めた。

「それじゃあ、彼の覚悟を試しましょう」

「へ？」

やたら嬉しそうな美里の横顔は、邪悪に歪みまくっている。

私はこの時点で美里に相談したことを大いに後悔したのだった。

京子の転勤先に着いて行ってしまった僕だけど、一応これでも大学生。通勤方法は新幹線を利用するという、一介の大学生には考えられないほどのブルジョワっぷりだったけど、貯蓄の方も屋敷で貯めこんでおいた分がかなり残ってるので新幹線を利用した程度ではびくともせず、当面の生活にも支障はない。

もくもくと駅弁を頬張りながら、僕は車窓から外を眺めて溜息を吐く。

そう、今の問題はお金とか生活のことじゃない。よりもよってプロポーズした相手が、その状況にまるでついて来れていないということだろう。

「ま、なかなか思い通りにいかないってのはいつものことかな」

やったのは式場の下見だけで、今すぐに式を上げるわけでもない。いつそのこと僕が大学を卒業するまで待ってもらってもいい。

京子にはああ言っただけど、その間は同棲でも悪くはないし。

同棲でも……悪くはないし。

「お客様、窓の外を見ながらにやけるのはまるで不審人物のようなのでやめていただけないでしょうか？　ただでさえ黒の眼帯で不審人物っぽいのに」

「あつはつは、そう言われてもこの状況でにやけるなって方が人間的に無理……」

そこで、僕は言葉を完全に見失った。

真っ黒いエプロンドレスに、真っ黒なフリフリレースを使用したエプロンドレス。目元には正体を隠すためか、あるいは楽しんでいる確信犯なのか、黒い蝶を象った煌びやかなマスクをつけている……えっと、怪しいメイドが立っている。

いや、まあメイドっていうより鞠さんなんだけども。

「あの、鞠さん。……なにやってんですか？」

「今の私は黒蝶メイド仮面。鞠さんなどという可憐な妖精などではありません」

「……20歳過ぎた女性が『可憐な妖精』とか言っちゃうのは果たして人間としてどうなのか、ちよつと突っ込みたいところなんですけど」

「黙りなさい」

笑顔で発言を拒否されて、僕は思わず口元を引きつらせる。

うーん……メイドのくせに相変わらずの傍若無人。親の顔が見てみたい。姉妹の顔は見れるけど、彼女等も負けず劣らず傍若無人なのでこれはもう血筋なのかもしれない。

「で、今日は一体全体なんの用なんですか？ 僕、これから大学に行かなきゃいけないんで寄り道とかしている暇はないんですけど」

「それは愚問というものです。貴方が京子さんにプロポーズをしたことは、既に橘さんから連絡が入っています。……そう、その時に私は思いました。『天弧さんのくせに結婚なんて生意気だ』と。私はキスすらしたことないのに」

「完全に八つ当たりじゃねーかつ！」

思わず怒鳴りつけてから、僕は思い切り溜息を吐いた。

なんとというか……この人と友樹だけは、何年経っても変わらないのかもしれない。

「そういうわけで、恨みと妬みと憎しみの炎から『Yeah！ 二人はパピヨン・ジェノサイドハート』は誕生したのです！」

「……もう一人いるのかよ」

色々突っ込みたい所は多々あったけど、それよりももう一人いるらしい被害者に、僕は同情するしかなかった。

もちろん、言うまでもなくもう一人の蝶々仮面はあいつだからだ。

「さあ、そういうわけで出番ですよ友樹様。二人である裏切り者をとっちめましょう」

「ひつく。お願い……お家に帰して。もうやめてよ……」
「いきなり泣いてるんですけどおおおおおおおおおおお
おおっ!?!」

真っ白なメイド服にモンシロチョウを模した可愛らしい仮面を強制的に着用させられた白髪の20歳美青年は、もうなんか見てられないくらいに泣いていた。

ホント……相変わらず加減してもんを知らねーな、このメイドは「馬鹿じゃねーのアンタっ!?! 味方のハートをジエノサイドしてどーするっ!」

「馬鹿とは失礼ですね。泣き顔が可愛けりやなんでもいいんですよ」
「泣き顔って言うてる時点で最悪じゃねーか! ホント……なんつか結構前から言おうと思ってたケド、鞠さんの愛情は色々とおかしいぞっ!」

「まるで蜂蜜のように甘いですね。自覚のある相手に事実を突きつけた程度で、動揺するとも思いましたか?」
「……………」

蜂蜜のように甘いのはどっちのことやら。

男女の間に友情が存在するのは分からない。ただ、自分の中で強硬に『友達』だと主張できる内は、友情は確かに存在するものなんだろうと思う。

鞠さんと友樹の関係はもっと深い。友達でも恋人でもなく、『同士』が正しい。

誰よりも太くて強い。そういう絆が二人の間にはある……と、僕は思う。

それでも、だ。

「なあ、鞠さん」

「なんででしょうか?」

「そろそろ、無駄話と時間稼ぎはやめないか? 用件だけ簡潔に伝えて欲しい」

「京子さんを取り戻したければ私たちを倒してみなさいと、橘さん

が

やっぱり、仕掛け人は美里か。

薄々予想はできていた。京子が真つ先に相談するだろう相手は恐らく美里だ。

美里なら、今の僕の実力を試すことくらい平気の平左でやるだろう。あの人はなんだかんだ言っただ京子には甘い。

京子を守り切れない僕なぞ、笑顔で叩き潰してくれるだろう。

僕は口元を緩めて、眼帯を引き千切る。

「私『たち』ってことは、他にもいるってことだな？」

「はい。貴方に縁故のある女性のほとんどが集まっていますね」

「なるほど。……章吾や陸の関係者が来たらどうしようかと思っただが、女性ならなんとかなる、かな」

「凡人の貴方が、どうやってなんとかするつもりですか？」

鞆さんは、笑顔のまま腰に差した黒い刀に手をかける。

僕が筋の一筋でも動かせば、彼女は間違いなく僕を一刀両断にするだろう。

相変わらず、甘過ぎる。

僕はにやりと笑う。いつも通りにふてぶてしく。

「どうした？ メイド。刀は抜かないのか？」

「……貴方、なにを」

「特別なことはしていない。あらかじめ、抜けないように細工しておいたのさ」

前日に、友樹の家に忍び込み、鞆さんの刀と鞆を簡単には抜けないように、強力な接着剤でくっつけただけ。

言ってしまうばそれだけのこと。

そう……こんなこともあるつかと、用意しておいた。

ゆっくりと立ち上がり、眼帯をポケットにしまって眼鏡をかける。

「さて、それじゃ始めよう。これが試練と言うのなら、その全て

ことごとくを叩き潰し、僕は僕の好きな女性のために全てを賭けよう。いつも通りに」

着替えるのは0.3秒で済む。叩き込まれた技術がそれを可能にする。

背筋を伸ばせ。顎を引け。常に一步先へ。僕の好きな誰かに恥をかかせない程度に。

皺を作るな。情けない所は見せるな。タキシードの襟を正せ。

前を向け。かくあるべしと定めて生きる。

基盤は既にある。究極の執事を見本に生きてきた僕にとって、それは呼吸をするより容易のはずだ。メイドだろうがなんだろうが、『誰かに尽くす』という職務ならば……この僕の右に出る存在はない。

故に……僕の天職にして積み上げてきたものを最も生かせる道は、ただ一つ。

「僕の名前は高倉天弧。一人のために生きる、紳士」
ジェントル

武器はペーパーナイフ。それ以外は邪道。

色は少しばかり邪道だが、師匠にもらった真っ赤なペーパーナイフをくるくると回しながら、僕は目を細める。

「さて、それじゃあ行くぞ正義の味方。あいにく……今の僕は甘くないぞ」

「やれるものならやってみなさい。貴方ごときが私に勝てると思うのかしら？」

「……………」

勝つ？ 負ける？ そんな二元論に未だに拘っているから。

だから お前らは一步も進展しないんだよ。

そして、僕はいつも通りに自分なりの戦いを開始した。

これは、1年前にあったこと。

長い黒髪に真っ黒な瞳とほっそりとした肢体という、日本の心を体現したような容姿の師匠こと、倉敷戯式を見つけて出して3年。

彼女が居候をしている家の道場で今までの修行の成果というかおさらいを見せたところ、師匠にあっさりとした口調でこう言い渡された。

「うん。もういいわ、弟子。免許皆伝。貴方に教えることは何一つない」

あまりにもあっさりし過ぎたので、最初はなにを言われたのか分からなかった。

「えっと……いきなり皆伝とか言われても。なんか奥義とかないんですか？」

「ないわ。そもそも、武術の奥義っていうのはゲームや漫画のような『余人が真似できないものすごい技』じゃなくて、数年程度の修行で身に付かない精神的な境地のことを指すのよ。……少なくとも、倉敷流に奥義や秘伝は存在しないわ。元々護身術が行き過ぎた人体破壊術みたいなもんだし」

長い髪をかき上げながら、師匠は口元を緩める。

「ねえ、弟子。皆伝を授ける前に一つ質問をしていいかしら？」

「なんででしょう？」

「貴方に好きな女の子はいる？ 誰か一人、彼女こそ自分が命を捧げるに相応しい相手だと思える……そんな女の子が」

「はい」

ここで『いいえ』と答えれば、師匠は少し拗ねるような仕草を見せながらも皆伝を授けていたのかもしれないと、今なら思える。

それでも……僕は自分の心の思うままに返事をした。

京子のが好きだから、きっぱりと言い放った。

師匠はそれを聞いて、笑って言い放った。

「ならば 今まで教えたことは、全部忘れなさい」

そして、そんなトンでもないことを言い出した。

僕が啞然としてみると、彼女は悪魔のように笑って口を開く。「倉敷流に奥義はないわ。……でも、『戯式流』には全てが揃っている。卑劣で卑怯が売りの倉敷流をベースに、私が極めて昇華したのが『戯式流』……通称『我流・戯式』。心理や策略や相手を読むとか、そんなちんけな技じゃない。基本技から超必殺技まであらゆる全てが揃い踏み。女を守るのにつけてつけの極意を、私は知り尽くしている。限界の向こうは無量大。卑怯愚劣に戦って、真正面から叩き潰す力を私は知っている」

師匠はそう言い放ち、僕に向かって手を差し出した。

「さあ、貴方が守りたいのはどこのどちら様かしら？」

……やれやれだ、と溜息を吐く。

これだから、師匠はたまらない。弟子にすら平気で嘘を吐き、嘘の技術を叩き込む。

弟子が誰か一人の正義の味方である時に限り、本物の技術を叩き込む。

そう……守りたい女一人のために戦う。それこそが、本当の漢の姿だから。

僕は躊躇なく師匠の手を握って、笑った。

「僕が守りたい女は梨本京子。伝説を無理矢理背負った、可愛い人です」

「ならば守りなさい。思うがままに我がままを振るい、好きな女を守りなさい」

これからまた地獄が始まることを、師匠の笑顔が告げている。

僕は笑って、その地獄を受け入れた。

拉致されて、気がつきやなぜか景品に。

目が覚めると、そこは見渡す限りの大草原だった。

空は青く、民家などどこにも見えない。そのくせ森が広がっているわけでもなく、草が伸び放題というわけでもなく、人が思い描くような……そんな草原が広がっていた。

……あれ？ あたし死んだ？

一瞬そんなことを思って寒気が走り、次に思い浮かんだのはあたしが死んだらあいつがどうするのかということ、その時点であたしは慌てて起き上がった。

と、起き上がってようやく自分の異常に気づいた。

手足はがっちりと手錠と足枷で固定されており、なぜか服装は白いエプロンと黒のワンピースという、いわゆる『メイド服』を着せられて胸には『賞品・もってけどろぼー』と書かれた札が下がっている。

……いや、何の冗談だ、こりゃ。

「あら、京子ちゃん。おはよう」

「おはよう美里。つーかまず聞かせる。あたしになんか恨みでもあんのか？」

顔を覗き込んできた女、橘美里に食ってかかったが、美里はあたしの怒りなんぞどこ吹く風で、にっこりと笑うだけだった。

「別に京子ちゃんにも彼にも恨みはないわ。単純に、二人がちゃんと幸せにやっついていけるかどうか、ちょっと試してみたいだけよ」

「……試す？」

「そう。京子ちゃんにはあんまり自覚がないみたいだけど、京子ちゃんを包む状況っていうのは、実はそれほど良いものじゃない。むしろ悪いかもしれないわ。この世界は寛容だけど、いつ追い出されてもおかしくない。……伝説というのはそれほどまでに重いものだから」

「……………」

伝説。英雄。そんなモノになりたかったわけじゃない。

でも、ならなきゃ友達を助けられなかったから、仕方なく伝説になっただけ。

結局は世界に嫌われて、助けた友達みんなに忘れ去られたけど。

「……重いからなんだ。あたしはあたしなりに納得した。それでいいじゃないか？」

「その重荷を、彼にも背負わせるつもり？」

「……………」

美里の言葉に返事はできなかった。

伝説になることはあたしが決めたコト。あたしが納得したことだ。でも……それを、テンに背負わせていいんだらうか？

あたしが勝手に決めたことに……あいつを、巻き込んで。

「迷いがあるなら、前を見なさい」

「……美里？」

顔を伏せた私に対して、美里は真っ直ぐに前だけを見据えていた。「前を見て待ちなさい。貴方の夫となる男は、伝説に並び立とうとするただの凡人。地獄を飲み込んで前に進み、愛する女を守るために戦う一人の漢」

「……………」

「私は答えを既に言ったわよ、キョーゴ。夫婦として、あるべき選択をしなさい」

決然と前を見据えて、美里はきっぱりとそれだけを言い放った。

あたしはその横顔を見つめて、口元を緩めた。

ホント……このお嬢様はいつだってどこだって、強くなっても弱くなってもあたしの尻を容赦なく蹴り上げやがるんだから。

「了解した、美里お嬢様。あたしは、あたしの男を待つよ」

「それでいいわ、キョーゴ。前を向いて、私が敗北する姿を焼き付けなさい」

そう言っつて、美里はいつものように笑った。

前を見据えて、あたしのことを思いやるように笑い続けた。

昔から、女の子はあんまり好きじゃなかった。むしろ苦手だった。

殴るし群れるしすぐに泣くし。そもそも、世界的に男より優遇されているのがなお腹立たしい。なにがレディファーストだ。それらは発祥から現在までの長い時間をかけて、『自分たちは優遇されるべきよね？ そうよね？ そうでしょ？』という環境を作り上げていったに過ぎない。優しくされて当然だと、そいつらは腹の底で男を笑っている。

そつに違いないと思いつけてきた。小学校卒業くらいまで思っていた。

つい最近までは、腹の底ではずっとそう思いつけていたのかもしれない。

師匠を見つけてから半年後のこと。高校三年の秋ごろ。

右目を失って、恋も居場所も失って、高校に復帰してからの日々の毎日はそれなりに楽しくて、屋敷にいた頃には及ばないまでも楽しくて……だから、少し気落ちしていた。

僕が望んだ毎日は、こんなに簡単に手に入るものだったんだなあと思つた。

そんな時、京子は唐突に僕の所に遊びに来た。

屋敷にいた時のように当たり前に朝食を作り、昼からは車を運転して市街に出かけて買い物をして、夕方には普通に家に戻ってきて、夜には帰つた。

色っぽい展開なんて何一つなかったけど、僕と一緒にいる間、京子は煙草も吸わなかったし、買った品を僕に持たせようともしなかった。普通に出かけて、買い物をして、美味しい物を食べて、ゲームをして、ちよつと名残惜しくも手を振って帰る。

そつというのが、楽しくて仕方ないみたいだった。

デートでもなんでもないけれど、当たり前で些細で楽しいことが……本当に、心の底から嬉しくて仕方ないようだった。

京子が遊びに来て3回目の時、僕は京子と格闘ゲームをやっていた。京子はある限り強くはないけれど、手加減をすると怒るので手加減抜きだった。

「いや、なんつーか。テンはこういうのは本当に強いな」

「……そーだね」

「ん？ なんだ、あたしが弱いから楽しくなさそうな顔してんな。しかし、残念ながら今日はあたしが得意なレースゲームを持ってきたから、こいつでボコボコにしてやんぜ。これでも巻いたら物理的にボコボコにするかもしれないが」

楽しそうに笑いながら、京子はレースゲームを取り出す。

その笑顔は……なんていうか、あまりにも綺麗で明け透けで。

僕の方がもうそろそろ限界だった。

「京子。あのさ……ちょっと聞いていいかな？」

「なに？」

「付き合ってくれない？」

「どこまで？ コンビニ？」

「どこまででも。京子の愛想が、尽きるまで」

「……………」

京子はしばらく考え込んで、それから顔を真っ赤にして煙草に火を点けた。

「深読みかもしれないけど……それって、告白？」

「うん」

「いや……えっと、なんで今更？ そりゃあたしは今も好きだけど、返事もなんにもくれないもんだからてっきり自然消滅なのかと思ってたぞ？」

「なんつーかね……分かったんだ」

「なにが？」

「どうして女の子が優遇されるのかとか、とにかく色々」

「？」

京子は不思議そうな顔で僕を見つめて、首をかしげた。

僕は分かってしまった。

結局のところ、男つてのは本当に馬鹿な生き物で、目の前で楽しそうに遊んでいる女性をもっと楽しませたいとか笑顔が見たいとか、

そついう単純で当たり前な理由で一生を捧げる程度は簡単にできるんだなあということだけだった。

そりゃ優遇されるわけだ。女性が悪いわけじゃなくて、男が馬鹿なだけだもん。

まあ……僕に限っては、とつくの昔に京子に惚れていたってだけのことだ。

今更と言えば、今更のことかもしれない。

「で、どう？ ……僕としてはこのまま楽しい友達付き合いでもOKなんだけど」

「どうもくそもYESだ馬鹿。友達付き合いとかテキストなことはしないぞ。……ついか、どんだけ待たされたと思ってやがる？」

「……一途だね。ふられるかと思ったのに」

「お前よりまだ、馬鹿野郎」

「じゃ、今日からよろしく」

「おう。……って、告白していきなりやらしいことかすんなよ？」

「あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは」

「ちゃんと否定しろ」

「ごへんはない。ひよっほはんはえまひた（ごめんなさい、ちょっと考えました）」

頬をつねられながら、僕は口元を緩めて笑う。

笑いながら、今度こそ間違えないように歩いて行こうと思った。

彼女を幸せにしよう、と思った。

「ねえ……京子。一応付き合う前にこれだけは言っておきたいことがある」

「ん、なんだよ？」

「とりあえず……まずは、一歩から。」

僕は京子を真っ直ぐに見つめて、最初の言葉を口にする。

「僕も友達付き合いじゃ嫌だ。僕は、京子のが好きだから」

こうして、僕らは恋人になった。

第一戦：アルティメットメイド・芳邦鞠&白の魔法使い・有坂友樹。

決戦の場所は大草原。メイドが見も知らぬ他人に気を利かせて、僕らを強制的にそこに移動させた。テーブルクロスを翻して視界を覆った瞬間には草原に移動していたのだが、原理については一切考えない。

現実に移動したのだから、原理なんぞどうでもいいだろう。もちろんそこはただの草原ではなく、僕の『縁者』とやらが僕の血を見るために待ち受けていることは想像に難くない。

まあ、恐怖なぞ一寸もない。前に立ちはだかる者は、全部まとめて叩き潰すだけだ。

どんな手段を使っても。

「……あのさ、親友」

「なんだ友樹。恐怖に恐れおののいてなにも言えなくなったか？」

「うん、今日のところは本当に降参する。降参するからお願ひ助けてへるぶみー」

「無理だ。本当にごめんなさい」

僕は謝った。謝るしかなかった。

鞠さんを含めて10人ほどの女性に囲まれながら、友樹は涙目だった。

「うーん、話には聞いてたけど集まるとさすがに壮観だねえ。さすが正義の味方」

「まあ、全員似たようなもんだらうけど。騙されてるのは重々承知の上だしね……それでも、むかつくことには変わらないけど」

「お、さすがは金持ち。財布の中身がすげェ！」

「おーおー本当だね。あ、写真とか入ってる。……って、野郎同士

じゃん」

「……仲良きことは美しきかな。BLばんざーい。クレジットカードばんざーい」

「その前に、みなさんやることがあるでしょうけど……ね」

「撲殺は駄目だから、羽ペンとかでくすぐつちやいましてよ」

「ちよっ！？ さりげなく言ってるけど、それは古代の拷問に実在してるぞっ！？」

「仕方ありません、友樹様。……自業自得だから100回殺してやる」

「な、なあみんなとりあえず落ち着こう！ まず目が怖い！ 女の子は笑顔じゃないといけないと思うな！ あとはほら、こんなにいい天気だから！」

まるで目が笑っていない彼女たちに詰め寄られ、友樹はもう泣いていた。

ひぎやあだかくぴゅらぎやうだか聞き取ることすら不可能な笑い声が響く中で、僕は目に浮かんだ涙を拭いながら、悠然とその場を立ち去った。

さらば、我が親友。

お前はまさしく我が終生の友であった。

いや……ホント、なんていうか。

ごめんなさい。

第一戦：アルティメットメイド・芳邦鞠&白の魔法使い・有坂友樹。

戦闘結果：悲しみを乗り越えて完全勝利。

第二戦：アルティメットメイド・黒霧冥&大学生・黒霧舞。

次の相手は予想通りというかなんというか。自称僕のメイドこと

ちゃんとシユヴァルツイエーガルって名前があるし！」

「……しゅばるついえーがる」

あんまりといえればあんまりな名前に、僕は思わず絶句する。

なにがすごいって、ペットにそこまではっちゃんけた名前をつける舞がすごい。

「舞、さすがにそれは人間として行っちゃいけない領域に達しているような気がする」

「姉さんって本当に色々なんでも小器用にこなすんですけど、ピンポイントでネーミングセンスが最悪だったりしますからね」

「冥ちゃん。少なくとも今日は私の味方なんだから、弁護くらいはして欲しいと思うのは人として間違っているかしら？」

言いながら、舞はシルクの手袋を身につける。男装にその仕草はとんでもなく似合っていたのだが、その目に映る覚悟と決意に僕は一瞬だけ気圧される。

「さて、それじゃあ御託はここまで。元屋敷に仕えるメイドとして、そしてなにより京子さんの友達としてアンタの力をここで計らせてもらおうわ」

「以下同文。今日の私たちは、貴方の友ではなく障害とお考えください」

「やれやれ……しかし、なんつーか誰も彼も拳で納得したがるねえ」

「一番手っ取り早く、分かりやすく、京子さんを守るのに必要な力ですからね」

冥が剣を構え、舞が糸を風に乗せる。

僕は頬を掻きながら、彼女たちに相對する。

状況はいつも通りに僕が不利。周囲に遮蔽物がない大草原とはいえ、冥と舞の異能は僕の力量を軽く凌駕する。二人とも、どんな隠し技を持っているのか分かったもんじやないし、僕が京子さんにふさわしくないと分かればいっそ抹殺することも辞さないだろう。

とはいえ、負ける気はさらさらない。

「分かった。それじゃあ……かかって来い！」

真っ赤なペーパーナイフをくるくると回し、僕は口元を緩めて笑う。

冥と舞は互いに頷き、一步を踏み出した。

『ひあああああああああああああああああああああ
!?!』

そして次の瞬間、叫び声だけを残して二人の姿が消失する。

「……む。流石は師匠から習った必殺技だ。こうかはばつぐんだね」
僕はふところから煙草を取り出して火を点けながら、そんなことを呟いてみた。

後で絶対にタコ殴りにされるんだろーなと思ったケド、気にしないことにした。

第二戦：アルティメットメイド・黒霧冥&大学生・黒霧舞。

戦闘結果：勝利。決め技『戯式流設置術・必殺芸人落とし』

二回戦を楽勝し、続いて三回戦。そろそろ出てくるだろうなと思っ
ていたら案の定出てきた僕の妹こと高倉望は、問答無用で襲いか
かってきた。

真っ赤な髪に真っ赤な瞳。肌は抜けるように真っ白で、その辺は
父さんに似ていなくも無い。顔立ちは母さん譲りで文句なしの美人
高校一年生になった我が妹は、30分だけなら母さんすら凌駕する
という、まさしく『史上最強』と化していた。

当たれば体が四散しそうな一撃を、ただの技術だけでかわし続け
る。

攻撃を考えるな。考えるのは相手の構造だけでいいと師匠は言う。
『簡単なことよ。……元々、人の体を維持するには無理がある』

体を支えるには不安定な二足歩行。手を自在に扱えるという利点
はあるが、器用さと引き換えにその腕は他の動物よりも力では劣る。
成人男性だろうが、野生動物に素手で勝つことは不可能。草食動物

にすら負けてしまうのが、僕ら人間だ。

いかに速度があるうとも、力があるうとも……僕らは『人型』という弱点を有する。

「ほいっと」

「ひゃああああああああああつ!？」

拳を繰り出してきた速度を殺さず、そのままの勢いで腕を引き足を払う。

たったそれだけで望はバランスを崩すが、超人的な身体能力を持つて地面に手を着くと同時に空中で方向転換。無理な姿勢のまま僕に向かって蹴りを放つ。

その蹴り足の側面を、掌で打って方向を逸らしながら妹の体に蹴りを放つ。

もちろん全力で蹴ったりはしない。ちょっと痛がってもらえば十分だ。

妹の顔が痛みに歪んだところで間合いを離して、僕は口元を緩めた。

「久しぶりだけど……強くなったね、望」

「あら、お兄様こそどんな魔法を使ったのかしら？ 以前手合わせした時とは別人のような動きですけど」

「段違いなのは当然だ。今の僕は京子のために生きている」

「……なるほど。母さんみたいな理由ですが、確かに納得ですね」

につこりと、まるで美少女のように笑いながら望は正眼の構えを取った。

「では……多少の嫉妬心と共に、史上最強・高倉望。いざ尋常に参ります」

妹が一步を踏み出す。今までの戦いはじゃれ合いのようなものだったけど、ここからは違う。妹は……望は本気で僕を殺しにかかってくる。

史上最強、ね。

「甘いんだよ、妹」

肩書きごときで、兄に勝てるつもりでも思ったか？

「え？」

不意に妹がバランスを崩す。それはあらかじめ仕組まれた予定調和。

草を結んで作っただけの、簡単にも程度つてもんがあるトラップ。僕があらかじめ作っておいた、ただのちんけな罠。

「さて……行くぞ、妹。平凡なる愚劣、その身に刻め」

妹の胸に掌を添える。狙うのは鳩尾だが衝撃はほんの些細なもの
でいい。

体の内部のバランスを崩せれば、それで十分だ。

「ふっ」

呼吸と共に掌を突き出す。人間を10センチほど押し出す程度の力で妹を押し出す。たったそれだけのことで、あっさりと勝敗は決することを僕は知っている。

単純なコトだ。高倉望は、『戦闘』ができるほど丈夫ではないのだから。

体調を完璧にコントロールして、30分が精々。そのコントロールも望の超人的な技術があつてこそだ。コントロールさえ崩してしまえば……戦えなくなる。

地面に倒れた望はげほげほと思ひ切り咳き込んで、体が引きつるほどに咳き込んで、ようやく落ち着いた頃にゆっくりと息を吸った。少しだけ血を吐いていたあたりでかなり心配になつたけど、不敵に笑つた口元は母さんそっくりだった。

「やれやれ……やっぱり、勝てないか」

「ま、そりゃそうだよ。こっちは人生がかかつてるから」

「うん……まあ、分かつてたけどね」

望はそう言つて笑つた。少しだけ満足そうだった。

そして、不意に口元を引きつらせて口を開く。

「あの、お兄ちゃん。もし今の攻撃のタイミングで誰かがお兄ちゃんを襲撃していたら、結果は違っていたと思わない？」

「そーだね。さすがにおにーちゃんもそれは防げないな」

「うん……そりゃそうだよな。絶対に防ぎようがないから狙ったんだけどな。……で、不意打ちの方はどうなったのかな、みっちゃん？」

「あつはつは、ごめんごめん。ケータイ見てたらチャンス逃しちゃった。てへ」

言いながら草むらから登場したのは、僕とも顔見知りな美少女。

お洒落なTシャツと腿のあたりまでざっくりと切ったファッションというよりも、健康的なお色気が優先される服装を違和感なく着こなす彼女の名前は、橘美咲という。

今にも死にそうなのウチの妹とは対極的な、健康的な美人。健康的過ぎて色々と方向性を見失っているような気がするが、その辺は僕とは一切関係がないので良かった良かったと思う今日この頃。

相変わらず執事あの人は女で苦労してるんだなアと思うと、泣けてくるけど。

携帯電話を片手に、美咲ちゃんは楽しそうに笑っていた。

「いや、実は最近目をつけてる男子がさ、今度一緒に映画を見に行かないかって誘ってくれちゃってるわけよ。こんなチャンスは滅多にないから、つつい」

「……どうしよう。味方なのに、ものすごく殺したい」

「僕としては、野郎のツンデレって殺意の対象にしか思えないけどね」

「ねえ、二人とも。『南海の超決戦。バモラVSプリティアザミ』ってどういう映画知ってる？　なんか予告を見た限りじゃ派手なフラッシュと妙に生々しいセリフで有名なアニメーションらしいんだけど」

『……………』

僕と望は目を合わせて、同時に溜息を吐いた。

それは脈が無いどころか女として見られてないんじゃないだろうか？

僕らの思いは共通だったけど、人としてそれを口にすることはできなかつた。

「お兄ちゃん。恋愛って楽しいものなの？好きな人とかもないからよく分からないし、母さんとかみっちゃんとか見ると楽しそうに見えないんだけど」

「ん〜……そうは言っても、僕も恋愛の経験なんて京子としかないんだけど」

「付き合ってた楽しい？」

「そりゃあんまり楽しくない時もないとは言わないけど、京子可愛いと京子柔らかいとかがそういうので一気に吹き飛ぶあたりが男の単純さを物語ってると思いいねえ」

「……お兄ちゃんって本当にピンポイントで正直よね。あきれ返るくらいに」

「望は気になる男の子とかいないの？」

「いないこともないかもしれないと思う、今日この頃なのでした」

なにやら神妙な表情で顔を逸らし、ゆっくりと溜息を吐く我が妹。どうやら、望は望で大変な日々を送っているらしい。曖昧かつ自分でも自分の気持ちがよく分からないあたりなんて……昔の僕にそっくりだ。

ま、恋愛談義はそこそこにして、僕は僕の彼女を取り返しに行きましよう。

「じゃ、今回は僕の勝ちってことで先に進むね」

「いいけど……お兄ちゃん、織母さんに勝てる見込みはあるの？」

「あっはっは、望。君のお兄さんは愛のためならなんでもできる男だぞ。今、この時点で母さんにはとっくの昔に勝利しているのさ」

「……なるほど、確かにそうね」

僕と望は口元を緩めて笑う。

高倉家最恐にして長である彼女こと、僕らのばっちゃんは孫の顔を見るためならなんだってしてくれる。

その時点で、既に母さんは敵ではないのだった。

「では、妹。次に会う時までにはいい男の一人や二人は見つけておくように」

「はい、お兄様。次に会う時には甘い話でもお聞かせください」

僕らは手を振って久しぶりの再会と別れを楽しんだ後、別々の方向に歩き出す。

さて……それじゃあ行ってみよう。

最後の戦いだ。

第三戦：史上最強・高倉望&無双乙女・橘美咲。

結果：圧倒的勝利。高倉望（撃破）。橘美咲（コネとツテによる買収）。

第四戦：地上最強・高倉織。

結果：圧倒的勝利。『ばっちゃん。いきなりだけど孫とか欲しくない？』

草原を歩きながら、僕はぼんやりとこれまでのことを考える。

ついでに、これからのことを考える。

酔狂でもなんでもなく。僕は京子に惚れている。べた惚れと言い換えても過言じゃないって程度には 京子のためになら命を張れる程度には、彼女に惚れている。

ただ、それを京子が望まないのならば、命を張ることはしないだろう。

無傷のまま……地獄の底だろうが笑って歩いてやろう。

「本当なら、京子の笑顔に影差す者が僕の敵だ。……ただ、今回は

ちよつとばかり我慢ならないうつてのは、まあ偽らざる本音つてころだね」

「……相変わらず、一途ですねえ」

「性分でね。どうやら一度培った人格や性格はなかなか直せないものらしいよ」

正面には恐らくこの局面を作り出した彼女が立っている。

柔和な笑顔。30歳を越えたとは思えないほどの美貌ではあるが、DSは恐らく今も変わらないだろう。

情け無用の容赦なし。元屋敷のチーフこと橘美里は、いつか見たライトアーマー軽装鎧を身につけている。半身を包む上部そうな胸部装甲にちよつと風変わりな五指が自由に動くガントレットという現代にあるまじき格好は、美里さんによく似合っていた。

「乙女に戦装束が似合うというのは、ある意味暴言ではないでしょうか？」

「人の心を勝手に読むのはある意味暴力だと思いますがね」

「言うようになりましたねえ」

「誰かの夫になろうって思った男が、他の女性に優しくするつもり？」

「なるほど、分かりやすく大変によろしい。いつもなら100点満点です」

美里さんはにっこりと笑う。

目はまるで笑っておらず、どう見ても怖すぎる笑顔だったが、僕はその視線を真っ直ぐに見据えた。

美里さんは、不意に目を細めて口を開いた。

「天弧さん。一つだけ聞かせてください」

「なんででしょうか？」

「京子ちゃんに関わる限り、貴方には危険が付きまといまいます。今は沈静化していますが、京子ちゃんは間違いなく人間を超えた伝説。

いつの世も……伝説は、戦いが終わったら去って行く。それが伝説という存在ですから」

「だったら　俺がついて行けば問題ないな」

真つ赤なペーパーナイフをくるくると回して、俺は口元を緩める。美里は俺を真つ直ぐに見据えて、頬を緩めた。

「貴方にそれができるとでも？」

「ああ、できるさ。……なぜならば、それが僕の存在している理由だからだ」

指を離れたペーパーナイフが、高速で回転を始める。

「僕が生まれてきた理由　それは、京子の側にいることだ」

手を合わせて叩く。パンという軽い音と共にペーパーナイフは本来の姿を取り戻す。

それは真紅の大刀。ルビーのように鮮やかで、どこまでも透き通った赤。

神斬童子^{かみきりごうじ}。神はすなわち心。肉体ではなく心を断つ刀剣。

「試されるまでも、言われるまでもないんだよ、美里。俺は京子と添い遂げる。そのための努力ならいくらだって惜しむつもりは無い」

「純情ですなえ」

「純情じゃない。純愛だ」

些細な訂正をしてから、僕は赤き剣を腰ために構える。

「普通までしか到達できないのなら、『普通』のまま伝説と拮抗してやる。世界に存在するあらゆる技術、知識、道具、人脈、その他諸々の全てが僕の味方だ」

「……なるほど。つまり、『戯式流』とはそういう流派なわけですか」

その通り。師匠曰くの『戯式流』とはあらゆる全てを取り込む術に他ならない。

自分に無いものを自分のものにする。取捨選択はせず全部を自分のものにする。大量生産の大量消費。身につけられる全てを身につけて、その中から打開策を選択する。

こだわりを捨てる。お前のチンケな世界に用はない。

お前が大切にしているもののために、お前の全てを捨てなさい。

捨てた末に……その笑顔に価値を見出せるなら、貴方は伝説と並び立てる。

「なるほど、確かにそれなら京子ちゃんと並び立てるかもしれない。……そういうことなら、私も全開で貴方を殺しにかかっても、問題ありませんね?」

「異論はあるが、問題は無い。ラスボスとしちゃそれくらいでちょうどいい」

「では、行きますよ。これで幕引きです」

「ああ。悪質な好意に感謝しつつ……叩き潰してやる」
さて……これにて前置きは終了。

語り合う時間は終わり、後は殴り合いの時間だ。

美里は僕が京子にふさわしいか、彼女を守るかを試すために。

僕は自分のわがままで、京子と一緒にいたいから。……戦うだけのことだ。

『かかって、こいやあああああああああああああああ!』

俺は真っ赤な剣を振り上げながら、美里は拳を握り締めながら吼える。

己の大切なもののために、無駄な戦いに身を投じた。

草原の真ん中で縛られて放って置かれるのはかなり最悪な気分だったけど、美里が置いていった話し相手は、今までと今とこれからと、他愛も無いことを話してくれた。

あれから四年。あいつはまず四年前のことを謝ってから、私の話を聞いてくれた。

『彼と付き合っていくコツは、今思い返すと『挫けないこと』に尽きますね』

にっこりと笑いながら……そんな、えげつないことも言うてくれ

た。

相手のまごころを重荷に思うな。向こうは好きでこちらに奉仕してくれてるんだから、女王様気分で顎でこき使ってやればいい。

自分は間違えたけど、京子さんは間違えないように。

京子さんの好きな人を、幸せにしてあげてください。

「……やれやれ」

まだ合わせる顔はないと言って、あいつはテンが来る前に立ち去ってしまった。

なんつーか、しばらく見ない間にいい女になっちまってまあ。

「ったく……どいつもこいつも。あたしに全部押し付けやがってコソチクシヨウ」

少しだけ泣きそうになって、それでも涙を堪える。

結婚を申し込まれて泣きそうになっているあたしは、自分が思っているよりもみつともない女だったのかもしれない。

屋敷がなくなってからあたしは就職して、テンは負担が少なくなつたぶん高校生活に打ち込めるようになった。

一ヶ月くらいは会っていないけど、生活も安定し始めたので久しぶりに顔を拝んでやろうと高校に侵入してみた。こっそりと……

…テンがどんな学生生活を送っているのか見てやろうと思った。

「先輩、どうだ私のお手製弁当は。なかなか美味だろう？」

「塩辛くてくそまずい。あとなんかアンモニアの匂いがある。死ぬ」

「しないよっ!? なんで先輩はそんなに私を嫌うんだっ!? 変

態つてのはまあ否定する要素が少ないから否定し切れないとしても、先輩もそう変わらないだろ！」

「いや、僕は単純に藤原のこと嫌いだから。職業女子高生名探偵とか、名札に奇之森ぜつむとか意味分からないことが多すぎるから死ぬ」

「死なないよ！ 私にはまだまだたくさんやらなきゃいけないことがあるんだ！」

「萌えキャラの考察その1。語尾に『死ぬ』をつけてみる。死ぬ」

『語尾に死ねはどう考えても罵倒か殺意だよっ！』

『萌えキャラの考察その2。ドジッ子のパターンでニトログリセリンの調合に失敗』

『死んじゃうよ！ それ以前に萌えキャラはニトログリセリンは扱わないよ！』

『萌えキャラの考察その3。ツンぶつこころ。べ、別にあなたのための思っであんたを殺したわけじゃないんだからね！ みんなのためなんだから！』

『あだだだだだだだだ！ 地味に痛い地味に痛い！』

女の子の耳を掴んで上に引っ張るといふ暴挙に出たテンは、屋敷にいた時よりは楽しそうではあったが、なんだか荒んでいるようだった。

どうやら……自分の好みの存在以外にはやたら厳しいというのは本当らしい。

好み。嫌いではない。屋敷にいた時は分からなかったけど、ぶつちやけあたしはどれくらい好かれてるんだろうと少し気になった。

テンのことは今でも好きだけど、あいつはどう思ってるんだろう？

少しだけ気になったので、家に遊びに行ってみることにした。

遊ぶのはわりと楽しかったので、また行くことにした。

3回目の来訪で告白された。計算外もいとこころだった。

付き合ってから4年ほどで結婚を申し込まれた。

「どうしたもんかね……」

「やっぱり嫌？」

「嫌つつうわけじゃないよ。単に……なんであたしなのかなって思っただけ」

いつの間にか隣に座っていた阿呆に、あたしは本音を吐いた。

あたしの全部を背負ってくれるお人好しなんて、どこにもいないと思っただから。

そいつは……まるで子供のようになり得意げに笑って言った。

「僕が、京子じゃないと嫌なんだよ。それが理由じゃ駄目かな？」

相変わらず……はつきりとものを言う男だった。

横目でちらりとそいつを見つめる。恥ずかしくてそいつの目は見れなかった。

「後悔しても知らないぞ？ なんせあたしは伝説だから、有象無象の絶望やらなにやらが、あたしの首を今でも狙ってやがるからな」

「僕の愛を阻む障害の全てを排除する自信はあります」

「……ハ、言うようになっただじゃないか」

「好きな女の前じゃ見栄を張って師匠が言っただからね。本当はおしっこちびりそうなくらいにびびってるけど……京子に告白した時よりは幾分かましだね」

言いながら、高倉天弧はにやりと不敵に笑った。

まるで世界最強のように……まるで、一人の漢のように笑っていた。

少しだけ溜息を吐く。溜息を吐きながら覚悟を決める。

……そろそろ、いじけるのも潮時か。

「テン」

「なんですか？」

「結婚して。あたしも、ちゃんとアンタを幸せにする」

「……はい。僕も京子さんを幸せにしたいです」

告白した時とは逆かもしれないけど、似たようなやり取り。

テンは心の底から嬉しそうに笑いながら、私は苦笑しながら。

二人で道を歩んでいくことを決めた。

なんてことが、一ヶ月前にあった。

結局、私の事情で結婚についてはテンが大学を卒業するまで待つことになったので、婚約という形で落ち着いた。

仕事の方は相変わらず順調ということはなく、相変わらずのいつ

も通り。

当たり前のように朝起きて、仕事に行って、家に帰る。

ルーチンワークの日常に少しばかり変化があったのも一ヶ月前のこと。

左手の薬指にはめられた指輪の感触が、なんだか少しだけくすぐったい。

「バカツプルの仲間入りってところかね。……ま、別にいいけど」
会社帰り。駅から出たところでそんなことを呟いてみる。

そう……あたしの生活に少しばかり変化があったのが一ヶ月前。

その変化のおかげで仕事帰りは飲み歩きをしていたのが一転。仕事が終わるとすぐに家に帰るような人間になってしまった。

その変化は、本当に喜ぶべきものだろうと思う。

「さて、と」

これから色々あるだろう。もしかしたら、最悪のケースもありうるかもしれない。

それでも……私は覚悟を決める。

「さて、と」

口元を不敵に緩めて、私は自宅であるアパートの階段を一段飛ばしで上がる。

ポケットから鍵を取り出して、自分の部屋のドアを三回ノックしてから開けた。

部屋の中では、私の婚約者が味噌汁を作っていた。

婚約者こと高倉天弧は、私の姿を見るなりとびきりの笑顔で口を開く。

「お帰り、京子」

「ただいま、テン」

私もそれに応えるように、にっこりと笑った。

Aランクエンディング・京子編・バツクスクリーン直撃弾 END
Aランクエンディング・美里編・貴方のいるせかい に続く

京子エンド：ボックスクリーン直撃弾（後書き）

と、いうわけで次回は美里さんエンド。時間はどのくらいかかるのかは不明ですが、少なくとも四ヶ月はかからないといいな、と希望的観測を抱いております

美里エンド：貴方のいる世界（前書き）

大遅筆中。数ヶ月も待たせて申し訳ありません。
ちよつと覗いたら更新してたラッキー程度の認識で読み進めてくれ
ると嬉しいかもしれない（笑）

美里エンド：貴方のいる世界

注1：田山歴史はコメディ書きである。正確にはコメディを書けてない部分の方が圧倒的に多いわけだが、それでもコメディ書きだと主張したいところである。尊敬する作家先生は多数どころか5つほど両手が必要なのだが、コメディというかお笑いという分野ならば魔術師　Iフェンの秋田先生とき　竜シリーズの浅井ラボ先生と戯　シリーズでお馴染みの西尾先生となっているが、これはもうストーリーの組み立てとかそれ以前に『なにこの会話超面白れえ』という分野で尊敬している。最近で西尾維新先生の『傷物語』を読んだのだが、主人公の趣味が最高すぎて笑い死ぬかと思った。あのパンツ談義が読めただけで2000円近くのお金を出したことに後悔は無い。そういう意味ではアンサイクロペディア（ウィキペディアの悪意満載系。ネタとしてお読みください）とかも大好きなので、はつきり言って趣味が悪いとしかいいようがない。あと、あらぎさんのきちくつぷりはほんとうにじょうきをいつしているとおもいました。

注2：趣味が悪いのは読者にとっては心底どーでもいいことだとは思っただが、今回のエンディング群を書くに当たって、趣味の悪さのために思わぬ障害にぶち当たることになる。その障害は自分が小説を書いてから今まで一切合財手を出そうとしなかったジャンルに関連することで、別に書く必要はなかるうと軽く見ていたところもあった。

注3：はつきりと忌憚なく、きっぱりと容赦なく現状を把握するという目的で書いてしまえば、田山歴史はベタ甘えの恋愛ものを書いたことがまるでねえのである。

注4：冥エンドは舞の視点で描き、京子エンドは基本卑怯バトルでまとめるつもりでいたのでなんとか回避でき、恐らくその二人は人前でべったべたに甘える真似はせんだらうと思っていたのであえ

て描写しなかったが、今回の美里さんはちと事情が違う。さてどうしたもんかと考えて、仕方なく血を吐いてありのままを描くことにした。

注5：それじゃあ、頑張って甘い甘い物語を描いてみよう。話の都合上多少アダルトな流れになつてしまうので、その辺が苦手な人はごめんなさい。意味が分からない箇所はいつか学校で習うのでそのままにしておくのが吉。どうしても知りたい場合は自己責任で検索ソフトを使用してください。

注6：あ、最終話より4年後の話になるのでよろしく。

注7：なお、Sランクエンドの方では、『彼女』が生まれるのは親子喧嘩の一年後のことになります。

注8：別の長編執筆中のため、大遅筆中。どこかに投稿できたらいいなあとは思いつつも、さてどうしたもんかと悩む今日この頃。

テーマは『自己詐称』。

知らなければ諦められたことがある。

知ってしまったから諦められなかったことがある。

自分を騙してでも成し遂げたいことがある。

自分を裏切っても守りたいものがある。

それは、素直に生きることが許されなかった、一人の嘔吐きの物語。

……面白いテーマだと思うんだケド、どうかねえ？

エンディング条件。

・本編における京子と美里の仲を取り持つこと。なお、左記の条件が満たせない場合、自動的にバッドエンドになるので注意。

・お屋敷から離れた後、京子さんと一緒にアパートに引っ越すこと。

・オーレリア救出作戦失敗及び仙道火風戦死により、アパートが炎上。橘美里を始めとしたアパートの面々を救出し、執念のヒナギを全開フルパワーでボコボコにしようとする美里嬢を制止する。

・選択肢『この人は僕がいないと駄目だ』を選択。源さん家のシズカちゃんと同じ道を辿ってください。

・耳が痛くなるほど繰り返すケド、高校編で舞さんとの以下略。

以上を踏まえて、ご覧下さい。

Aランクエンディング・美里編：貴方のいるせかい

世界には、二種類の人間がいる。

それは朝が強い人間と、朝が弱い人間だ。

僕の恋人さんこと橘美里は、朝が弱いタイプに属する人間だった。正確には起きようと思えば起きれるがなるべくなら一秒でも長く寝ていたいなあと思っているような女性であり、この悪癖のために美里は娘である美咲ちゃんにそれなりの苦勞を強いてきたらしい。

ちなみに、その美咲ちゃんは僕の娘というわけじゃなく、美里の前の夫との間にできた娘さんである。僕とは昔からの知り合いで、美里と恋人になった今じゃ親子というより、もう一人妹ができたよ
うな感じだ。

「やれやれというか、なんとというか。毎朝面倒つちや面倒かもな」
キッチンでスクランブルエッグなどを焼きながら、僕は少しだけ溜息を吐く。

僕と美里と美咲ちゃんが住んでいる家は、僕の友人から召し上げた一戸建てはかなりの広さを誇り、駅から徒歩5分で到着するとい
う考え得る限り最高の立地条件を兼ね備えた家だ。これで月々の家賃が5万円なのだから、友樹には本当に感謝してもし足りない。

今度……由宇理と一緒に酒でも奢ってやろうか。

「あれ、パパ。朝からなんでそんなに黄昏てるの？　なんか辛いこともあった？」

「んー……辛いことというよりも、面倒なコトかな。楽しいから別にいいんだけど」

「あはは、パパってば相変わらずね」

「そつちもね、美咲ちゃん」

フライパンを片手に振り向くと、そこには僕の娘兼妹のような女の子が笑っていた。

橘美咲。見た目はどこからどう見ても健康的な元氣美少女。部活の助っ人をこなすほどのスポーツ万能だが、その反面計算や暗記がとことん苦手という典型的な性能を有している女の子。顔はまごう事なき美少女なのだが、少しばかり趣味がアレなせいで男の子にもてるという話はあまり聞かない。

そんな彼女は食卓につくと、いただきますと手を合わせてから遠慮なくトーストの上にスクランブルエッグを乗せ、ケチャップとマヨネーズをかけてかぶりついた。

「んー……おいひい」

「美咲ちゃん、口の周りが真っ赤で行儀が悪いよ」

「分かっちゃいるけどやめられないってね。大丈夫よ、外じゃやらないしママも家にいる時は大体こんなもんだったから」

「……前に美里が住んでた家の惨状を見た時から予想はしてたけどね」

散らかり放題の家の惨状を思い出して、僕は少しだけ溜息を吐いた。

プライベートがすっかりしていると仕事がグダグダになり、仕事がいっしょかりしているとプライベートがダルダルになり、両方ともいっしょかりしている人は大抵疎まれる。

前の職場というか、僕の家だった屋敷では美里は仕事もいっしょかりしていたし人望もあったので、プライベートがダルダルだった。

「ま、あんまりきつくは言わないけどその辺はちゃんと自己判断す

るようにね？」

「分かってますって。……っと、そろそろ時間だ」

「部活の助っ人だっけ？ 休みの日なのに大変だねえ」

「体を動かすのは嫌いじゃないから別にいいんだけどね。今日は野球部だからそんなに辛くはないし、一応練習にも少しだけ参加しておかないとまずいから」

「野球部の助っ人ねえ。小学校の頃に友樹がよく野球部の助っ人に呼ばれて、女の子にやたらともてまくってたのが癪だったから、ホームベースを落とし穴に改造したら顧問の先生と野球部の連中にもすごい勢いで怒られたな。友樹が落とし穴に落ちた時の顔は本当に傑作だったと思うんだケド」

「パパ、それは殺されても言い訳ができないと思うの」

スポーツ少女の美咲ちゃんは、凍りつくような冷たい目で僕を見つめていた。

うんうん、蔑みの視線が心に痛い。美咲ちゃんにはこの調子で、引きこもり気味の男をガンガン嫌ってもらいたいもんだ。

「じゃ、パパ、私はそろそろ行くけど……あんまりママを甘やかさないようにね？」

「りょーかい。そっちこそ、人のいい男の子にあんまり迷惑をかけるないように」

「ん、それじゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

今日も元氣ハツラツに、僕らの娘はあつという間に家を飛び出して行った。

家。僕と美里と美咲ちゃんが暮らしている家。美里が友樹から笑顔で巻き上げた、それなりに暮らしやすい場所。

今は……ここが、僕の居場所だ。

「さて……と」

口元を緩めて立ち上がる。食事も済んだし、そろそろ戦いの時間だ。

夫としての勤めを果たすのでしょうか。

「……で、旦那さん。貴方は私を起こさずになにやってんですか？」
「や、ちよつと起こすには早いかなーと思つて本読み出したらこんな時間に」

ちよつと不貞腐れたような顔で読書中の僕に声をかけたのは、僕の奥さんこと橘美里。ちなみに夫婦別姓なのは籍を入れていないせいだ。

年齢は32歳で、それを指摘すると本気で怒る。そのくせ若々しく見えるのは普段の努力があるいはなにか魔術的なものでも使用しているのか、僕には判別できない。見た目はとても美人で穏やかで貞淑で、いかにも『母性を持った理想の女性』のように見えるのだが、それはあくまで見た目だけのことで、実際はそんなでもない。むしろ『大人の女性の皮を被つた子供』と言い換えてもいいかもしれない。

「旦那さん。……なんだか、とても失礼なことを考えていませんか？」

「気のせいでしょ。ま、それはともかくおはよう美里。今日はいいい天気だよ」

「おはようございます、天弧さん。……それはともかく、なんで起こしてくれなかつたんですか？」

「よく寝てたから起こすのも悪いかと思つただけで、悪かつたかな？」

「……悪くはないんですけど、貴方に頼りっぱなしなのは、彼女としてはちよつと良くない気がします」

少しばかり拗ねたような顔で僕を見つめる美里。

ええ、その顔がものすごく可愛いから進んで家事をやっているわけだけど、それをおくびにも出さずに僕は口元を緩める。

「んー……まあ、それはそれとして朝食はなにを食べますか？ 僕

らはパンで済ませちゃったんですけど、昨日の残りのご飯とありますから雑炊や和食も可です」

「うーん、そうですねえ。『はい、あーん』ってしやすそうなのは卵雑炊ですかね」

「……朝からそれをやれつてのは拷問に近いんですが」

「じゃ、おはよのちゅーとかでも」

「はい」

……5分30秒ほどお待ちください。

再起動。

「じゃ、卵雑炊でも作るから、少し待っててね」

「旦那さん、さらっと流そうとしてますけど、朝からいきなりなんつーことするんですか……」

はっはっは、そんなこと言われても可愛かったんだから仕方ないもつとも、それを言ってしまうと下手をすると殺される可能性があるあるので、あえて黙っておく。ウチの奥方は褒めまくと照れ隠しに人を殴る癖があるので要注意なのだ。

と、そんなことを考えているうちにさくつと卵雑炊が完成。食卓に持っていくと、美里さんはなんだか腑に落ちないような表情を浮かべていた。

「なんていうか……毎度思ってますけど、天弧さんって本当にマメですよねえ」

「師匠や母さんにしこたま鍛えられたし、屋敷にいた頃にも色々あったしね」

屋敷。僕の昔の家。自分とみんなで作って、最後には僕が壊した家。

寄りかかってもたれかかって……甘えの末に壊れた家。

まあ……今更だけど、思うことがないこともない。

「天弧さん。また気分が暗くなるようなこと考えてますね？」

「人は過去を振り返り、己のやったコトを回想するもんさ。いつも通りと言えば、いつも通りだよ」

お茶を煎れながら、僕は口元を緩める。

昔に思うことがないでもないけれど、それはもう終わったこと。終わったことに思いを馳せて、今を見失うのは本末転倒ってものだ。

「それにね、僕は美里の顔を見れば嫌なコトは大抵忘れられるから」

「……それ、20年後にも同じことが言えますか？」

「うん」

なんの迷いもなく、僕はきっぱりと即答する。

32歳だろうが52歳だろうが、年齢なんて関係ない。僕は美里が美里だったから惚れたのであって、それ以上でも以下でもない。

しわくちゃのお婆ちゃんになるうとも、美里はきつと変わらない。そう……絶対に、僕の大好きな奥さんのままだろう。

僕がお茶を差し出すと、美里は顔を真っ赤に染めて拗ねたように言った。

「貴方はずるい人です」

「ずるをした覚えはないけどね……ま、美里が言うならそうなんだろう」

「私は……20年後も貴方を愛していただける自信がありません」

「ん、そういうことなら愛してもらえるように、努力は怠らないようにしよう」

僕はいつものように頬を緩めて、当たり前のように言った。

「僕は美里のことが好きだ。愛してる」

昔は言えなかった言葉。今も少しばかり恥ずかしい。

恥ずかしいけど、自分の想いを伝えるにはこれが一番手っ取り早い。

手っ取り早いぶん面倒で、いちいち相手のことを気になさなきゃいけない。

面倒で、楽しじゃないけど、僕はきつとそれを楽しんでいる。

自分のことを一番に考えられない僕だけど、美里の笑顔を見るのはとても楽しい。

その笑顔のために生きていたいと思える程度には……僕は、美里のことが大好きなのだった。

と、まあ最近の僕の生活はそんな感じで、こんなに幸せでいいんだろうかって感じなのだが、それは家庭内だけで実際のところは腐れ職場にいるせいで毎日が激務っていうかぶっちゃけそろそろやめたい。

アンナさんに紹介してもらった職場は高等学校で、僕はなぜか年齢を誤魔化して新任の教師として働く羽目になっている。

なぜ教師なのかとアンナさんに聞いてみたこともあったけど、アンナさんは「うーん……キツネさんには普通のスーツ以外ではテールスーツかメイド服しか有り得ないので、私の専属付き人でいかがでしょう?」と言われたので丁重にお断りしておいた。

……まあ、そんなわけで僕は今教師なんかをやっている。

「眼帯教師。この漢字ってなんて読むの?」

ボサボサの髪をショートカットに切りそろえた彼女（現在補習中）は、男子の間では『狂犬』で通っている女の子。背は167センチ。女子ではかなり高い部類に入り、運動能力もそれに応じてかなり高いのだが、可愛さを姉と比較すると月とマリアナ海峡の最深部くらいの差がある。

彼女の名前は竜胆心得。僕が副担任をやっているクラスの、お馬鹿さん筆頭である。

僕はにっこりと笑いながら、いつも通りに答えた。

「ああ、それはベディアスマリウスって読むんだ」

「キツネ先生。いくら私が知識の足りない女の子でも、そんなアグレッシブな読み方をする漢字が存在しないことだけは知ってるよ?」

「漢和辞書を引くといいと思うよ」

「……漢和辞書ってどうやって使うのか分からないんだけど」

「……」

まあ、気持ちはなんとなく分からないでもない。

画数や部首が分かるんだったら、その漢字を読むことくらいはできそうな気がする。

でもなあ……高校生にもなって漢和辞典の使い方が分からないってのは致命的だ。

それでも飲み込みは悪くないので、教えやすいといえそうなんだけど……問題児がもう一人いるのが問題か。

「高倉。オツサンはもう疲れた。帰ってビール飲みたい」

補習の担当教員のくせに机に突っ伏してだれまくっているのは、草薙神威という名前負けしまくっている不良教師。死んだ魚のような目と不精髭。着崩したよれよれのYシャツに啜え煙草（時折棒状のお菓子）という教師失格な男だ。

僕はゆっくりと溜息を吐いて、不良教師を睨みつける。

「草薙先生。テメエがテスト問題作るの遅れまくったせいで、僕の仕事にまで影響してるんだろーが。いいからさっさと作ってくれやがりなさい」

「はっはっは、どーしてもティガレックスが狩れなくてなあ」

「……」

僕が軽蔑の眼差しを向けると、草薙先生は思い切り目を逸らした。「い、いやだつてなあ。ゲームだろうがなんだろうが、難しい障害を越えてみたくなるのは男の性つてもんだ。つまり、なかなか狩らせてくれないティガレックスが悪い」

「いい歳こいてゲームばかりやってんじゃねーよオツサン。四の五の言わんとさっさとテスト問題作らねえと本気でしばくぞ」

僕がドスの効いた声で脅しつけても、草薙先生はケラケラと笑っただけだった。

「はっはっは、いかなぞ青年。人生はもつと大らかに楽しまんとな。この仕事が終わったら、綺麗なお姉さんたちとおしゃべりできる空

間に連れて行ってやるう」

「必要ないです」

「必要ないとは大きく出たな、おい。まさかとは思うが……お前のよーな眼帯男を好いてくれる変人女がどこかにいるとでも？」

「どこかにいるっつーか……一緒に住んでますし」

草薙先生の頬が、思い切り引きつった。

ついでに、頭を抱えていた心得ちゃんは無表情になった。

あれ……なんか、二人の僕を見る目が『人間 理解できないモノ』になったような気がするんだけど、気のせいだろうか？

「ハツハツハ、キツネくん。それはない。それはないよ。どーせアシだろ、モニターの向こうにいる美少女だろ？ 髪の色は赤とか緑なんだろう？」

「ぶち殺しますよ、オッサン。ちゃんと実在する女性ですよ」

「いかにぞ、青年。嘔吐きは俺に殺されるんだから」

「いや、嘘じゃないですつて。ほら、これ写真です」

僕が普段から持ち歩いている宝物（着物姿の美里さんの写真）を見せると、草薙先生は目を見開いて写真を見つめ、それから神秘的な顔つきになった。

「なあ、キツネ。弱みを握ったりとかそういうのはよくないと思うぞ？」

「どっちかっつーと弱みを握られてるのは僕のほうなんですけど……」

……疑うにしても、もうちよつと品性のある発言をしましょうよ」

「いや、だってこれはないだろ。オメーみたいな変人に、こんな綺麗な彼女がいるわけねーもん。現実世界舐めんなよ、小僧」

「……………」

なんかもう色々と面倒になったので、僕は草薙先生の頭を机に叩きつけた。

「そつちこそ現実舐めんなよ、オッサン。俺は定時に家に帰るためなら拷問すら辞さない男だつてことをそろそろ理解してもらえませんかね？」

「キツネ、目が怖いから勘弁してくれ。いや、まあ実はテスト問題作成なぞ一時間前には終わってるんだが、お前が『彼女います』とかふざけたこと言うから」

「草薙先生？」

「いだだだだだだ！」

指の関節を逆方向に曲げようとすると、流石に不良教師も悲鳴を上げた。

「いっそのままへし折ってやろうかとも思ったが、いくらなんでもそれをやってしまうと仕事をクビになってしまうので、仕方なく僕は手を離す。」

「……まあ、僕に彼女がいるってのもかなり信じ難い話なのも分かりますけど、本当に色々あったんですよ。その色々つてのを説明する気にはなれませんが」

「はい、キツネ先生！ 馴れ初めとか聞いてもいい？」

元気良く手を上げたのは補習の状態が芳しくない心得ちゃんだった。目がやたら輝いているのは……まあ、女の子だから仕方ないか。とはいえ、馴れ初めと言ってもどこから説明していいのかちょっと分からない。僕は少しだけ悩んで、屋敷のことは伏せながら思いついたエピソードを口にした。

「出会いは中学生の頃で、母さんの知り合いってことで僕とも顔見知りになった感じかな。当時は僕も中学生だったせいかな凶悪な馬鹿だったし、彼女の方も子供育てるのに手一杯で……当時は、あんまり好かれてはなかったかもしれないな」

「子供って……先生の彼女さんって、もしかしてバツイチ？」

「バツイチではなく未亡人が正解だね。前のご主人は病気で亡くなっただけだから」

「ふむふむ、先生もなかなかマニアックだねえ」

「それは否定しない。……ところで、心得ちゃん。そろそろ半袖の季節だね？」

「……な、なにが言いたいのかな？ 先生」

「いやあ……別に」

男が女子の半袖に多少以上の興味があるように、女の子なら男子の半袖にはそこそこ興味があるだろうと踏んでかまをかけてみたのだが、予想以上の反応でちょっとびっくりだった。

心得ちゃんの趣味はともかく、僕は少しばかり遠くを見ながら話を続ける。

「まあ……頑張り屋さんな人でね。端で見ても頑張りが行き過ぎて明らかにオーバーワーク気味で、このままじゃ間違いなく倒れるんじゃないかって常々思ってた」

「そこで先生が格好良く手助けしたってわけ？」

「いや、プライドの高い人だったからね。手助けなんて絶対に歓迎されないと思ったから色々と仕事に難癖つけたり、機会を見ては休むように誘導したくらいかな」

「先生、それって明らかに邪魔してたんじゃない？」

「うん、邪魔してた。それがばれた時はさすがに鼻っ柱をへし折られたけどね」

「……あの、先生。その鼻っ柱をへし折られるというのは、天狗になつてる若者が挫折を味わうことでしょーか？ それとも……」

「普通にぐーでぶん殴られたけど？」

「……」

心得ちゃんは今もうなにも言わなかった。ただ悲しそうに苦笑いするだけだった。

「キツネ先生、なんでそんな人と付き合ってるの？」

「女の人は強く可愛ければなにをやっても許されるんだよ。逆に、強くもなく可愛くもない女の子に容赦する必要は何一つないってことだね」

「……キツネ先生って思った以上に容赦ないよね」

「僕は、どんなことであろうとも努力できる人間こそが好きなんですね。テキトーに理由つけてサボったり、テキトーに生きるのは個人の自由だけど、それなら僕個人の好みで差別したり区別したりして

も別に構わないのさ」

「む……それじゃあ、私のことはかなり嫌ってるってコト？」

「成績の方は自業自得だとはいえ、補習に積極的に参加してるだけでも立派なもんだと思うよ。ね、草薙先生？」

「……んー、まあな」

草薙先生は気のなさそうな返事を返したが頬が少し赤いので単なる照れ隠しだろう。

ま、自宅ほどではないとはいえ、いい加減にやめたくなっているとはいえ、この職場もそこそこ平和だ。以前のように生傷が絶えないうってわけでもないし、急に殴りかかってくる人もいない。いる方がおかしいのかもしれないが、とにかくくない。

学期末には一年があと一ヶ月あればいいのにと思わなくもないけど……それを除けば休日もしっかりしてるし、給金だって悪くない。今日だってそう思っていた。

ドゴンー！

いつかどこかで、そんな音を聞いた気がする。

当たり前のことだが、バズーカを至近距離で打たれたような衝撃に耐え得るような作りをしているわけもなく、教室の扉がまるで紙のように粉碎する。

それと同時に激烈な殺意が解放。僕らは蛇に睨まれた蛙のごとく、その場で身動きが取れなくなった。

「タチバナ流戦技、塵雷砲・戒専じんらいほう・かいせん」

聞き覚えのある声が耳に届く。それは愛しい人の声。

多分、世界で唯一僕を殺す権利のある人の声。

彼女はゆとりのあるカーディガンにロングスカートという私服姿の彼女は、ゆつくりとした足取りで教室に踏み込んでくると、にっこりと笑った。

「こんにちは、あなた。殺しに来ました」

美里はまるで笑えない言葉で、そんなことを宣言した。理由を問いたただそうとして、僕はそこで気づいてしまった。

美里の背中に、見慣れない、赤ん坊が。

僕は少しだけ考えて、絶対に説得できないだろうことを覚悟した。

「……あのさ、美里」

「なんでしよう?」

「とりあえず、ドアを吹き飛ばすってのはわりとやりすぎじゃ」

「死になさい」

美里はにつこりと笑いながら死刑宣告をし、拳を握り締めて真っ直ぐに突き進む。

やれやれ……本当に、災難ってのはいつやってくるのか分からない。

ここに京子や冥がいれば力づくで止めてくれただろうし、舞がいれば穏便に済んだ。あの人がいれば真っ先に暴走して、美里はその歯止め役。

僕はいつも被害者だけど、自業自得で丁度いい。

……ま、これも自業自得か。

と、僕が覚悟を決めた瞬間、僕の目の前に誰かが立った。

「んー……なんつーか、な」

欠伸混じりに頭をかきながら、草薙神威はポツリと呟く。

「羨ましい話だ、本当に」

怒りに燃えた美里の拳が繰り出される。頭に受ければ即死。腕や足に直撃すれば確実に骨が折れ、肉が裂ける。腹に受けようものなら内臓破裂は間違いない。

草薙神威は半身に構えて、目を細めた。

「ひゃんっ!?!」

それは、ただの一撃だった。

カウンターでおでこを手の平で押すという、ただそれだけの一撃。それだけで美里はあっさり倒れた。傷一つ与えることなく、最短にして最速にして最良の方法で、彼は美里を無力化した。

草薙神威は欠伸をしながら、シニカルに笑って言った。

「じゃ、とりあえずなにかあったか話してもらおうか？」

その目は、『退屈な休日が楽しくなってきた』と物語っていた。

高倉天弧。新任教師のくせに、いきなり副担任を任されるよく分からない男。

ヤクザと見まごうばかりの鋭い目つきに、なにかもを嘲笑うようなふてぶてしい態度。特徴的なのが髑髏やら猫の肉球がプリントされた眼帯で、理由を聞いてみたこともあるが『昔やんちゃすぎて失明しちゃったんですよ』と軽く語っていた。

口癖は『嫌ならやめればいいんだよ』という最悪この上ないもので、大声のおしゃべり等、授業の邪魔をする生徒は容赦なく後ろ頭を引つ叩く。そのくせ携帯電話をいじったり、漫画を読んだり、早弁をしたり等授業の邪魔にならない程度の行為はあっさりで見逃したりしているためか、教師からの評判はあまり良くない。

ただ……遠慮しなくていいためか、生徒からの評判はそこそこだったりするあたり大人と子供の温度差を感じずにはいられない今日この頃。

「はっはっは、竜胆。そんな世の中舐めてるとしか思えないような男が、ものすごい勢いで修羅場に巻き込まれつつあるぞ。超楽しい」

「もの見事な修羅場っすね先生。私こういうのドラマ以外で初めて見るよ」

「黙りなさい、不良教師&スットコ生徒」

そのキツネ男の彼女だかなんだかよく分からない修羅に睨まれて、俺たちは一瞬で口を閉ざした。

高倉天弧の彼女、橘美里。

写真で見た時は物静かな美女にしか見えなかったが、今ここでこうして立っているその女を見ていても、付き合いたいとは思えない。むしろ初対面の人間を不良教師&ストコ生徒と平気な顔で呼べるような女とはお近づきになりたくもない。

彼女と書いて『飼い主』と読むような関係性なのかもしれない。

が、楽しんでいる俺たちとは裏腹に、高倉はなにやら難しい表情を浮かべていた。

「うーん……『貴方の子供です。育てるのに疲れました、後はお願いします』って置手紙があったって言われてもねエ。本当に身に覚えがないんだけどなあ」

「じゃー誰の子供なんですか？ このふてぶてしい顔立ち、ヤクザみたいに尖った目、どー考えても貴方の血筋でしょうが」

「いや、絶対に違うから。少なくとも僕じゃないことは間違いない」
「どうして断言できるんですか？」

「……それは、えっと、まあ心当たりがないというか」
「本当にないんですか？」

「あー……いや、うん。ないと思う。多分ないと思ったり思わなかったり」

「じゃああるんですね？」

「あ、あるようなないような……ないようなあるような？」

「どっちなんですか？」
「……えっと」

ものすごく気まずい表情で顔を逸らす高倉。橘美里とは決して目は合わせようとはしないあたり、なにやら深い事情を感じずにはいられない。

まア、男と女には色々ある。ここは俺が口を挟むべきところだろう。

「まあまあ、そんな攻撃的な口調で問い詰めても言いにくいこともあるでしょう。ここは穩便に、男同士腹を割って話を」

「黙りなさい、不良教師。脳髓ブチ撒けますよ？」

「……………」

この人超おっかねーんだけど。ヤクザの100倍こえーんだけど！いや……………ない。本当にない。なんで高倉がこの女と結婚しようと思っただのか一寸も分からない。この男実はとんでもないマゾなのか。そうでなきゃ理由がつかない。

とりあえず、ゆつくりと深呼吸し俺は頭をフル回転させる。

「まあ……………教師として言わせてもらえるなら、とりあえずその子の出自を確かめるのが先でしょう。そのためには拳DEゴンよりも対話が必要かと思ったり思わなかったり」

「銃器DEパンという手もありますか？」

「そこには殺意しかないだろ、どう考えても！」

おっかねーよ、橘美里って阿修羅本当におっかねーよ。

どんな人生歩んできたならこんな修羅鬼神と付き合おうと思えるようになってっちゃうんだろうかと少しだけ気になったが、触らぬ神に祟りなしなので聞くのはやめにした。

「と、とにかく！　まずは……………高倉、ちよつと来い」

「え……………あ、はい」

修羅鬼神様はものすごい目つきで俺のことを睨んだが、幸いなことに生徒がいる前でいきなり殴りかかってきたりはしなかった。

高倉を連れて教室を出て、真っ直ぐに教室の近くにある教務員室へ。

今日は休日なので誰もいないことは確認済みだ。

ゆつくりと溜息を吐いてから、俺は自分の席に腰掛けて煙草に火を点ける。

高倉も席に着いてから、ゆつくりと溜息を吐いた。

「えっと……………草薙先生。本当に色々すみません。ああなっちゃうと美里の奴、怒る一方で手がつけられなくなっちゃうって」

「だろうな」

男は理性の生き物。女は感情の生き物。どこの誰が言ったか知らないが、種族的に生き物つてのは大体そういう構造になっている。下品な表現をすれば、男は下半身が感情の生き物で女は上半身が感情の生き物なのだ。

種族的にヘタれている男は本能に頼らないと愛を語れず、種族的に攻撃的かつ情が厚い女には時として正論と理屈が通じない。

どちらが悪いわけじゃない。ただ、生きてきた結果そうなっただけのことだ。

大抵の場合……それは、どうしようもないことだったりするが。

「で……核心なんだが、本当に心当たりはないのか？ 男つてのは悲しい生き物だからな、仮に一夜の過ちだとかだったらフォロークン」

「まあ、十中八九在り得ないと思います」

「確証は？」

「……言わなきゃ駄目ですか？」

「駄目だ。人生つてのはそう軽いもんじゃない。どんな恥だろうが、ここはきつちり晒して無罪であることを証明しておかないと、今後一生後悔するぞ」

「……………」

高倉は深々と溜息を吐く。それから、口元を引きつらせて血を吐くように言った。

「人生のどこをどう振り返っても、心当たりと言えば美里以外にはないんですよ」

沈黙が落ちる。

それは、深くて重くてどこまでもどこまでも静かな沈黙だった。

「……えっと、つまりそういう解釈でいいのか？」

「はい。恐らくは想像通りの解釈で間違いないかと」

「酒の勢いとかはなかったのか？」

「ないです。自分で言うのもなんですけど、滅茶苦茶酒癖悪いらしいんで、酒は一口しか飲まないようにしてるんですよ。少なくともそういうことはないです」

「が、学生時代とかは？」

「高校の頃は親友三人で馬鹿やってみましたし、大学に入ってもなんかこう……好みの女性がいなかったというか、途中から美里一択になったというか、人生ってこういうもんなんだなあとしみじみ実感しつつもそれなりに幸せだから、まーいいやと」

やべえ、こいつ馬鹿だ。

単純一途どころの話じゃねえ。ゲームの主人公じゃねーんだから、もう少しなんかこう男女の付き合いという名の人生経験とか積んでもおかしくないはずなのに、そのあたりのプロセスを完全にすっ飛ばしてやがる。

付き合った女の数、一人。

……確かに、ある意味では恥ずかしくて言いにくい疑う余地もない。

「しかし……そうだとすると、あの赤子はどこのどちら様だ？ 顔

立ちが高倉にわりと似てるのは否定できない事実だと思っただが」

「それがネックですよ。似てなきやなんとでも言い訳できたはずなんだけど……ああ、いつそDNA鑑定でもすればいいのかな」

「一応言っておくが……確証があるうがなかるうがあんまり意味ないぞ。女ってのは一回疑いを持つと誤解だって分かった後も執念深いから。男もそういうところあるけど」

「その辺は美里と付き合っって決めた時に覚悟したんで大丈夫です。付き合った女が一人のくせに、どれだけ修羅場をくぐってきたのか、高倉はまるで当たり前のように言い放つ。

なんつーか……ホント、どんな環境で育ったらこんな男が育成できるんだろうか？」

世界つてのは広いなあ。本当に。

などと俺が少しばかり生きていく不思議と死んでいく不思議と世界の謎などをぼんやりと考えていると、不意に高倉は見たこともないような真顔になった。

「……いや、ないな。それはない。いくらなんでもない。ありえない」

「どーした、高倉。なんか、世界の終わりみたいなの顔してるけど、やっぱり心当たりでもあったのか？」

「ああ……えっと、僕には心当たりはないんですけど、ちょっと確認したいことが」

「そういうことなら確認して来い。万が一だろうが億が一だろうが、可能性を潰しておくに越したことはない」

「はい。……すみません、今度肉でも奢ります」

「気にすんな。後輩のフォローをするのは先輩の仕事だからな」

「ありがとうございます」

高倉は素直に頭を下げると、真っ青になりながら教務員室の奥にある給湯室に引っ込んでいった。

あの顔は心当たりを思い出したか、それともさらに重ねて最悪の可能性を思い出したか。どちらにしろロクなことにはならなそうだと、そこで不意にこちらを見つめる視線に気づいた。

溜息を吐いてゆっくりと立ち上がる。視線の主はあの修羅鬼神ではないようだが、ここでの会話を断片的に報告されると、後で俺が殺されたりするかもしれないので、念のために釘を刺しておく必要があるだろう。

足音を殺して、俺は教務員室のドアに近づき、一気に開いた。

「くっぺっ!?!」

全体重をドアに預けていたせいか、竜胆心得は蛙の潰れたような声を上げて地面とキスする羽目になった。

言い訳無用の説明不要。間違いなく俺たちの会話を盗み聞きしていたのだろう。

「なにやってんだ？ 竜胆」

「えっと……あのおねーさんが『善意で男連中を見張ってくれる可愛い女の子はいないのかしら？』って、笑いながら拳向けてくるから仕方なく」

「初対面なのにやりたい放題だな。高倉の彼女って本当に人間か？」

「赤ちゃんのあやし方はわりと慣れてるみたいだよ」

「……ますます怪しいな。実は、育児機能付きの殺人マシーンとかじゃねえの？」

「そうかもしれませんが。ウチの甥っ子は超弩級のマゾヒストですから」

鈴の音のように、穏やかで涼やかな声が聞こえた。

それは、紛れもなく聞いてはいけない声だった。

突っ込んではいけない。

突っ込んではいけない！

突っ込んだら負けであることを、今一番俺がよく知っている……！
俺と竜胆に察知されることなく、当たり前のように俺の隣に立っている女は、結い上げた髪に紺色の着物という、今の季節には少しばかり似合わない格好をしていた。特徴的なつり目に薄い唇と細い顔立ちも含め、総合的に見れば間違いない美女のそれなのだが、まず間違いなく、『化け物』に属する人間だ。

その化け物に臆することなく、竜胆は怪訝な顔をしながらも話しかけた。

「……っていつか、おねーさん誰？」

「たかくらみあり高倉未織と申します。みおりんとお呼びください」

「……」
そこで助けを求めるような目で俺を見るな、竜胆。

くそつたれ、誰だ『退屈な休日が楽しくなってきた』とかフラチなことを考えていた馬鹿な野郎は……って、俺か。馬鹿だ俺は。

俺がこの場からどうやって逃げ出そうか考えていると、未織と名

乗った彼女は無表情のまま、ゆっくりと口を開いた。

「実は……少しばかり困っているのです」

「オイオイ、こっちの展開も無視していきなり話を進めようとしてるぞ、この人」

「実は、姉さんが年甲斐もなく産んだ赤ん坊の子守が面倒になって甥っ子に押し付けようとしたら、とんでもない大騒ぎになってしまったのです」

「……今、俺は。」

「なにかとんでもないことを、聞いたような。」

「……つまり、アレか。今回のコトは全部アンタのせいだ?」

「はい。不可抗力ですがその通りかと」

「……置き手紙とやらは?」

「甥の女性関係が円満すぎてむかつくので、ちょっとした悪ふざけを」

「アンタの目にはあれが円満に見えるのか?!」

「色恋沙汰には一切縁がなく28年生きてきた女にとっては、あの程度はじゃれ合いの範囲だと思いますがいかがでしょうか?」

「いや、絶対に違う。じゃれ合いだとしてもライオンにじゃれつかれたら死ぬだろ。」

「俺と竜胆は恐らく同じことを思っていただろうが、飛び火が怖いので黙っていた。」

「必要のないことは口には出さない。社会を生きていく上での知恵の一つだ。」

「まあ……まあ、とにかく。アンタがちゃんと事情を話せば解決ってことだよな?」

「お断りです」

「断るなよ! 元々アンタが頼まれたことじゃねーか! なんかも修羅場とかそういうのはいいから、人としての責任を果たせ!」

「というか、今追われているので赤ん坊の世話などとてもとても」
「……追われてるって」

と、俺が口を開きかけたその時。体は反射的に動いていた。覚悟を決める間もなく、体は戦闘体勢へ移行。窓ガラスを叩き割って突入してきた黒い『なにか』に向かって、俺は躊躇なく半身に構えていた。

視界に入ったのは、年端もいかぬだろう童顔の少年。髪は金色、瞳は藍、服装はなぜか小学校低学年の子が着用するような上着と半ズボンといういでたち。物腰から察するに格闘術の類を習得している。

ただ……その目は死んでいる。

どこか遠くを見ている目。昔の俺とほぼ同じ、黒い絶望を見た瞳。少年はにこりともせずは無表情のまま、俺の隣にいる女を見つめていた。

「高倉未織さんは貴方で間違いないですね？」

「いいえ、私の名前は高倉織。職業は漫画家。旦那は浮気上手でしょっちゅう家を留守にします。息子が一人と娘が二人。赤ん坊を除いて大体性格は破綻してます」

「……嘘が超下手ですね、貴方」

嘘をあっさり看破した少年は気だるそうに溜息を吐いて、俺たちを見つめる。

「まあ、それはどうでもいいです。こちらとしては、出すもの出してくればそれで万事円満解決ですからね」

「そのために赤ん坊を攫って人質にしようなんて……外道ね、貴方」「なんとも言うってください。こっちはこれが仕事なんで」

そう言っつて、少年は悪意たっぷりに笑う。

確かに分かりやすい。

欲しいから、力づくで、奪い取る。

分かりやすいのはいいことだ。勉強を教えるのも分かりやすい方がいいし、仕事を覚えるのだから分かりやすい方がいい。シンプルイズベスト。実に素晴らしい言葉だ。

悪党だつて分かりやすいほうがいいだろう。

俺は口元を緩めたまま、前に出る。

「竜胆。その訳の分からないおねーさんを連れて教室に戻れ」

「先生？」

「そう、俺ア先生だからよ。学校で狼藉を働く悪党をぶん殴らなきゃならんのだ」

腕まくりをしながら、半身に構える。いつでも拳打を打てる構え。まったくもって柄じゃない。俺アもう28歳で、高校生のクソガキにとつちゃとつくのとうにオッサンで、それでも社会的にはヒョコもいい所で、今日だってビール飲んで肉でも食いながらテレビ見て爆笑して、風呂入っていい気分で寝ようと思ってたのに。

騎士の真似事なんざ……たくさんだと思ってたのに。

「んじゃ、テキトーに本気で行くぞ、クソガキ。鼻の頭をコキヤツとやられるくらいは覚悟しとけ」

「は？ いきなり出てきてなに言って」

ゴギャツ！

容赦なしに顔に叩き込んだ一撃で、少年は割れた窓から外へ投げ出された。

ちなみに、ここは3階なので放り出されればそのまま地面に真っ逆さまなのだが、ああいう手合いが自由落下ごときで死ぬわけはないので、俺は追撃をかけることにした。

窓枠に手をかけそのまま窓の外に跳躍。最後に見たのは竜胆の唾然とした顔だったが、まあそれはある意味では珍しい表情だった。

重力に従って俺の体は地面へと落下する。もちろんこのまま落ちれば下手をすれば即死だが、その辺は知恵と勇気でなんとかなる世界だ。

たとえば……クッションの上に着地すれば、かなり無事で済むのではないだろうか。

「うわあああああああああああああああつ！？」

知恵と勇気がたっぷり詰まった自由落下ドロップキックを、少年はなんとかぎりぎり……本当にぎりぎり避けた。

少年に避けられてしまったので、俺は仕方なく地面へ着地する。爪先から踵へ、踵から膝、腰、背、肩、首、頭と順番に着地し力を流すように受身を取る。もちろん受身だけでは重力に逆らうことは不可能だが、それは落下の途中に一瞬だけ窓枠に指を引っかけるという荒業で、落下スピードそのものを多少殺していればある程度は余裕だ。

普段はそこまでの無茶はやらないが……今回だけは特別だ。

ゆっくりと起き上がると、鼻血を垂らした美少年は思い切り顔を引きつらせた。

「な……なんなんですか、貴方は！」

「草薙神威。一介の教職員だ。ちなみに好きなものは春は焼酎、夏はビール、秋は日本酒、冬はウイスキー。季節を問わないのは焼肉と白いご飯。しかしアルコールとご飯はあんまり両立できないのが悲しいところだな」

「っ……分かりました。邪魔をするなら、排除します」

少年は少年らしくそう啖呵を切りながら、背中に手を回しなにかを取り出した。

どこに隠していたのか、それは、少年の身長を軽く超える無骨な長刀だった。

鞘も鏝もなく、刀身は曇っており、見た感じでは恐らくは刃も潰してある。ただひたすらに長いだけの刀。武器としての利点があるとするなら『長い』という一点のみ。

……なんてな。もちろんそんなわけはない。三階から突き落とされて無傷でいられる人間が、そもそも真つ当な武器なんざ使うわけがねーのだ。

「ああ、いいだろう。付き合ってやるよクソガキ。オッサンはもう疲れた。人生とか人間関係とかしがらみとかさあ、もう面倒でかなわねえ」

ホント……面倒くせえ。

こつやって』どつき合い』に生きているほうが100倍くらいは

楽で分かりやすい。

世界偽装開始。彼女より下賜され、廃棄された剣を虚空より引き抜く。

「正異を問わず、廃滅せよ」

剣の名はデストレイル。またの名を汚れし誇り。皮の鞘はポロポロで見る影もなく、柄には過剰だがあちこち欠けたり剥げ落ちたりしたりと欠損が目立つ。剣を引き抜いても刀身は刃こぼれでポロポロ。明らかに武器としては使用できない。

しかし……それは、代償と引き換えに力を差し出す剣だった。

こいつを使うと明日が辛くなるが……まあ、それはそれでどうでもいい。

赤ん坊を強奪しようとするような相手に、明日のことを考えて戦ってはられない。

「どちらに非があるか明らかなのに、貴方は彼女の味方をするんですか？」

少年が、呆れたように、あるいは感心したように呟く。

その言葉を聞いて……俺は、苦笑いを浮かべることしかできなかった。

生きて死ぬということは綺麗事じゃない。

生きている以上優遇なんてものはない。明日簡単に死んでしまうかもしれない。

今必死になってやっていることが、将来に役に立つ保証もない。どんなに疑問を抱いても、どんなに苦しんでも、腹は減るし明日は来る。

諸行無常と言い換えてもいいかもしれないが……俺はこう思っている。

「後輩が酒を奢ってくれるそうだ」

「は？」

「少年に非があるうが、あの女に非があるうが、そんなことはどーでもいいんだ。俺はただ、あの赤ん坊がちゃんと親元に戻って、そんで竜胆やら後輩やらと美味しい酒が飲めればそれでいいんだよ。それを邪魔する野郎に容赦はしない」

その場その場の行き当たりばったりだとしても、その場その場で必死になって足掻けばいい。諦めず、屈さず、怯えず……自分なりに、足掻けばいいのだ。

そう、それが人生ってやつだ。親に甘えるのはあの赤ん坊が始める最初の一步だ。

だから……せめて、一時的だとしても、手助けくらいはしてやるのが大人の役目。

「さて、おしゃべりはここまでにしておこう。行くぜ、小僧」

「分かりました。……関わったことを後悔しながら、死んでください」

死んだような目を向けながら、少年は一步を踏み出す。

そして、俺も剣を構えた。

死にたい気分だった。

いつそ死んでしまおうかと思ったが、それが許されないのは分かっていた。

僕の妹こと、高倉望に確認を取った後、僕は生きている心地がしなかつたけど教室に戻って美里に説明をした。

美里が抱いている赤ん坊は、僕の妹二号だということ。

ちなみに、名前はまだない。

「だから早急に考えなきゃいけないんだ。純和風でかつ下品でなく、それでいて慎ましやかな願いが詰まった名前を、今すぐ、この場で、母さんが変な名前を思いつく前に、スイーツ（笑）とか呼ばれない程度の、いい名前を！」

「あの……言いたいことは分かるんですけど、天弧さん。大丈夫で

すか？」

「僕は大丈夫。ちょっとこの歳で妹かよとかそんな気分で若干絶望気味だけど、なんとか大丈夫。僕はまだやれる。僕は不死鳥だ。僕は炎の中から蘇る」

「言っていることが徹夜明けの漫画家とほぼ一緒なんですが……」
その時の僕はどんな顔をしていたのか、それは美里の微妙な表情が物語っていた。

そんな彼女に心配をかけないように、僕はいつも通りになるように口元を緩めた。

「ま、そういうわけで一刻も早く名前を考えてあげないと、また僕や望のような犠牲者が増える一方だから、美里も協力してよ」

「えっと……協力するのはいいんですけど、その前に、ちょっと「ん？」

「その……ごめんなさい。早とちりしちゃって。私はてつきり、天弧さんが女性を弄んだ拳句に子供ができたと知った途端に見捨てたものだとばかり」

「……………」

美里が普段僕をどう見ているのか、よく分かる言葉だった。

「うーん、少しばかりシヨックだ。僕はどちらかと言われれば確実に弄ばれる方の人間で、付け加えるなら見捨てられる側の人間だ。」

「あのね、美里。はつきり言っちゃうと、僕は美里以外と付き合っただことはないから」

「冥ちゃんとはわりとべつたりじゃないですか」

「ご主人様っていうより、兄と妹みたいな感じだよ、ありゃ」

「舞さんともちよくちよく連絡取ってるみたいですし」

「友達なもの」

「京子ちゃんともしょっちゅう会ってるみたいですし」

「友達だもん。美里に聞かれたくない悩み事とかも色々あるし」

「他にも色々と女性の知り合いも多いみたいですし」

「友達と仕事関係……と、言いたいところだけど。なにか含みがあ

りそうだね?」

「いえ、ただの愚痴です」

言いながら、美里はそっぽを向く。

自分で謝っておきながら、日常の不満はまた別問題とばかりに怒り出すのは、まあ美里に限ったことじゃないだろう。女の子ってのは誇り高く、情け深く、感受性が豊かだから理屈ではなく感情が優先される場合が多々ある。

ただ、それは決して悪いことじゃない。

僕は頬を掻きながら、拗ねる美里を見つめて、頬を緩めた。

「えっと……つまり、ちょっと妬いてくれてるってコトかな?」

「いけませんか?」

「いけなくはないよ。美里のそーゆー正直なところは、結構好きだからね」

僕がそう言うと、美里は顔を真っ赤に染めた。

うーん……この場でうっかり抱き締めたくなるほど可愛い。可愛いがしかし今それをやってしまうと学校内で破廉恥な行為に及ぶ変態野郎以外の何者でもなくなってしまう。ここは自重すべきところだろう。

そう、せめて頭を撫でて手を握ってついでに頬を撫でる程度で済ませておかないと。

「……あの、天弧さん。確実に狙ってやってますよね?」

「なにが?」

「……もーいいです。貴方のあだ名はミスター生殺しです」

顔を赤く染めながら、美里はなんだか諦めたように溜息を吐いた。それから、さっきから赤ん坊の権利を放棄したかのように、ほとんど泣いたり笑ったりしない僕の妹の頬を突いて、口元を緩める。

「とりあえず、この子の名前を早急に決めてしましましょう。この子が天弧さんや望ちゃんみたいになっちゃうのは忍びないですからね」

「うん、そうだね」

さりげなく馬鹿にされたような気がするけど、それはいつものことだ。

まあ、美里に任せておけば大丈夫だろう。なんせ美里は美咲ちゃんを育て上げたほどの実力を秘めた女性だ。赤ん坊の名づけなど楽勝にこなしてくれることだろう。

美里は少し考えて、やがてポンと手を打った。

「高倉心愛ちゃん、なんていい名前だと思いませんか？」

「……美里、それは本気で言ってる？ そんなペットみたいな名前にして、子供にどれほど恨まれるのかとか考えて発言した？ あと、僕は名前に關してはものすごく敏感だから、あんまりふざけたことばっかり言ってるよと本気で怒るよ？」

「や……えっと、嫌ですねえ、冗談ですよ冗談。……だから、その今まで見せたこともないような冷たい目で見つめるのはやめてください」

美里は頬に冷や汗を流しながら、再び考え始める。

「えっと、じゃあ高倉純愛ちゃんとかいいんじゃないですか？」

「美里サン、わざとやってませんか？ 僕以上に悲しい名前をつけてどうするんですか？ 名前が悲惨だと人生に影響を及ぼすことをちゃんと分かってますか？ もしも美里がミサトリーナとか名前をつけられたら悲しいでしょう？」

「いや、これでも真面目に考えてますけど……えっと、分かりました。分かりましたから台所の黒い悪魔ゴキブリを見る時のような視線を向けないで下さい」

僕が本気で怒っていることを悟ったのか、美里は速攻で目を逸らした。

それから五分ほど熟考し、恐る恐る口を開いた。

「で、では……えっと、高倉」

「言っておくけど、これがラストチャンスだからね」

「た、高倉……」

僕の念押しに少し泣きそうになりながら、美里は意を決したよう

に口を開く。

「そう、たかくらギヤラクシィ高倉光源氏ちゃんとか！」

言ってから、美里は『これはないわ』と思ったのか、今にも泣きそうな顔で頭を抱えてしまった。

とりあえず、明らかに人間の名前ではなかったので、罰ゲーム発動。

僕は懐から高校時代によく罰ゲームで使用したある物品を取り出し、美里の頭に軽く乗せた。

うん、実に可愛い。これは例外に認めてもいいくらいだ。

「……あの、天弧さん」

「なに？」

「猛烈に嫌な予感がするんですが、今私の頭になにを乗せたんですか？」

「一度つけちゃうと24時間は取れない猫耳バンド。頭皮と一体化しているから、無理に剥がそうとするとえらいことになる」

「ちよっ!？」

美里は慌てて頭の上に手をやって、それから今にも泣きそうになった。

「……あの、今年で32歳になる女にこの仕打ちは拷問以外の何者でもないんですが」

「可愛いね」

「全然ちつともさっぱり嬉しくありません！」

「可愛いのに」

「だから、嬉しくありません。もっと別のことで褒められたいです」「可愛いから今度二人きりで旅行にでも行こうか？」

「……まさか、猫耳つけたままとかいいませんか？」

「いや、美里の浴衣姿が見られるだけで僕としてはお腹一杯だよ。

……だから、国内旅行だけは絶対に譲らない。温泉がないところも

却下」

「国内旅行で温泉がないところを探す方が面倒だと思いますけど……まあ、それはそれでちょっと考えておきます。天弧さんの仕事の支障にならない程度の旅行にしますよ」

「ん、よろしく」

僕は笑いながら、ちよつとだけ不貞腐れている美里の頭をポンポンと撫でる。

さて……それじゃあ明日のために少しでも真面目に考えよう。

その人を示す言葉。名前という名の、運命。

親の最たる身勝手にして、親の最たる願いが込められたもの。

「……やれやれ、だね」

さつきから全然泣かない妹の顔を見つめて、僕はこっそりと溜息を吐く。

僕の名前は高倉天弧。母さんが天使みたいだから天使でいーじやんと強行しようとしたのに対し、父さんがふてぶてしい面構えだから狐にしようと思発し、じゃあ二つ合わせて天弧でいいじゃないかというのが由来。

天を駆ける狐のように、ふてぶてしく笑って生きる。

そういう願いが込められていると……父さんから聞いたことがある。

子供に背負わせるには、ちよいとでかすぎる願いみたいな気がしないでもない。

と、なれば身近なところで綺麗な願いを含めつつ、字数やら漢字の画数やら色々と考えして考えなきやいけないわけだ。奇抜な読み方は当然却下。言うまでもなく変な意味を持つ言葉を使うのも駄目。

ふむ……となると、あと考えられるのは……。

「高倉意識なんてどうかしら？ 高倉の系譜に名を連ねる者として

は、そこそこいい感じの韻を踏んでいると思うんだケド」

「冗談じゃないね。アンタの提案する名前をつけるくらいなら、僕は母さんに全部委ねるさ。少なくとも、アンタよりマシな名前をつ

けてくれるだろうよ」

不意に響いてきた声に、僕は心の底からの悪意を持って返答する。振り返るとそこには悪意たっぷりに笑っている女が立っている。

高倉未織。母さんの妹。ばーちゃんのもう一人の娘。トラブルメーカーにして『借金製造者』。親戚との顔合わせに顔を出すことすらできない……僕の嫌いなタイプの女。

未織叔母さんはやりと悪意たっぷりに笑って、僕を見据える。

「あらあら、見ない間に随分と立派になっちゃってますね、甥っ子。数年前まで身を削るように生きていたのが、まるで嘘のようです」

「色々あつたからね」

「なるほどなるほど。……で、まあその辺の経緯は置いておくとして、とりあえずお金貸してくれませんか？ 5万円ほど貸してくれるととても嬉しいんですけど」

「……頼まれた赤ん坊を放置して、その上お金の催促とは……なんていうか、母さんが呆れ返るのも分かる気がするよ」

「貸してくれないんですか？」

「借りれるもんならね」

僕の言葉と共に、パンツとなにかが破裂するような音が響く。

単純なことだ。『頼まれた赤ん坊を放置』という時点で、僕が愛する彼女にとって未織叔母さんは敵でしかない。

僕が惚れた女は……橘美里は、なによりも子供の未来を重んじる女なのだから。

跳躍した美里のロングスカートがはためき、伸びた足が未織叔母さんを頭上から打ち据える。その一撃をガードしながら、未織叔母さんは笑った。

「あらあら、随分と賤のなっていない女性ですね。まあ、猫耳なんてつけてる時点で賤がなっていないのは目に見えてますが」

「……………」

あ、やべ。美里、本気で怒ってる。

音も立てずにふわりと着地。それから、無表情のまま未織叔母さ

んを見据える。

美里は、ゆつくりと半身に構えた。

剣を抜き放つかのように、敵を見据えた。

そんな美里を前にして、未織叔母さんはにこにここと笑っている。

高倉未織。人呼んで『累乗負債』。自分の趣味のために人に迷惑をかけ、自分の趣味のために莫大な借金を好き好んで抱えている変人。

戦闘狂人と書いてバトルマニアと読む。戦うのが三度のご飯より好きで、『戦い』に困らないために借金を背負っているような……極めつけの馬鹿野郎だ。

「拳法ですか。いいですね、そういうのは嫌いじゃありません。血湧き肉踊る修練の果てに、人の拳は凶器となる。……そういうのは大好きです」

「……そうですか。私は、戦うのは嫌いです。痛いし苦しいから」
「でも、貴女相当やりますよね？ 技術と力が伴った、完璧に近い一撃を『人間』から受けたのは初めてです」

人間ってあたりを強調するあたり、このド変態叔母さんがどの程度『戦い』ってモノを続けてきたのか……容易に想像できるだろう。未織叔母さんは本当に嬉しそうに笑って、美里を見つめた。

「では……高倉未織、推して参ります！」
やる気満々。どこからどう見ても熱血バトル漫画の主人公そのものだった。

僕はゆつくりと溜息を吐く。

「未織叔母さん」

「ん？ なにかしら、甥っ子。これからがいい所なのに邪魔はよくないと思うわ」

「選交代」

美里に妹を渡しながら、僕は前が出る。

「僕が相手だ。僕を倒せたらお金はいくらでも貸してあげるよ」

「あらあら、随分と大出血サービスじゃない、甥っ子。そんなにサ

「ビズされても、私としてはハンデをつけるくらいしかできないわよ?。」

「ハンデはもらうよ。未織叔母さんは僕に手出しはできないってことでよろしく。」

「……甥っ子。それはつまりサンドバック扱いなんじゃないかしら?。」

「手出ししたならばーちゃんに言いつける。ついでに父さんにも言いつける。」

「……………え。」

未織叔母さんの顔がこれ以上なく引きつる。

未織叔母さんが苦手としている相手はそんなに多くない。単純で簡潔で、戦うのが三度のご飯より好きな人なので、基本的に弱みを握られるというコトがあまりない。

が……未織叔母さんを育てたばーちゃんと、口を挟ませたら凶悪極まりない僕の父さんなら話は別だ。

拳で語るのは得意だが、口で語るのは苦手な人なのだ。

「黙って殴られてくれれば2万円くらいなら貸してあげる。僕を倒したら好きなだけ貸してあげるけど、その代わりばーちゃんと父さんに言いつける。……どっちを選ぶかは未織叔母さん次第ってことだ。」

「いや……えっと、ちょっと待って? あの、よく考えなくても女性をぐーで殴るっていうのは男性としてはアレじゃ……………」

「ああ、大丈夫。僕の中じゃアンタは女性のカテゴリには入らないから。」

「……………あれ? 思った以上に甥っ子が鬼畜野郎になってる?。」

「じゃ、とりあえず歯ア食いしばれ、バトルマニア。」

僕はにつこりと笑って、拳を振り上げた。

結果は……まあ、言うまでもないだろう。

今回の騒動の犯人を容赦なくぶちのめして、これにて一件落着。草薙先生はどこに行ったのか分からなかったのも、全部解決したことを心得さんに告げて僕と美里は早々に帰宅することにした。

僕の勤務地である高等学校までは、徒歩で20分程度だけど、猫耳の美里が大通りを通るのを嫌がったために遠回りでの帰宅となった。

「なんていうか……実際にしんどい一日だったね。死ぬかと思った」「とうか天弧さん。貴方の親族ってあんなのばかりですか？」「格好良い名前をつけようとして、微妙に失敗してる人は要注意かもしれない」

「……そーですね。まさにここに一人いますからねー。そーゆー人が」

ゆっくりと溜息を吐く美里を横目に見ながら、僕は口元を緩める。それから、未だに泣きやしない妹二号を見つめて、ゆっくりと息を吐いた。

「しかし、本当に泣かないね君は。将来がとても心配だ。人生の先輩として泣ける時には泣いておいた方がいいんじゃないかとアドバイスしたい気分だよ」

「多分、とんでもない大物か、もう世界に絶望してるかのどっちかだと思いますよ。……とりあえず、親兄妹にまともな人はいないっばいですから」

「……一応言っておくけど、僕と結婚したら美里もその中の一人として扱われるよ」

「結婚するかどうかなんて分かりませんもん」

「まあ……美里がしたくないなら、僕的にもそれで別にいい」

「……………」

寂しさと殺意が入り混じった、ものすごい目つきで睨まれた。

あまりにもすごすぎて、妹二号が少し涙ぐんでしまうくらいだった。

ほんの少しだけ肩をすくめる。それから、いつも通りに口元を緩

めた。

「冗談だよ。僕は、美里以外と一緒にになるつもりはないから。……
こういうコトに関しては奥手で不器用で一途で馬鹿だからね。君が
どんなに僕を疑おうとも、僕は美里のことが一番好きだよ」

「……だからっ、そーゆーコトを真っ直ぐに言われると、な、なん
かもうどうしたらいいのか分からなくなるじゃないですか！」

美里は顔を真っ赤に染めて怒鳴った。

はっはっは、本当にこの人はもう。……そういう反応が可愛らし
いから、ついつい恥ずかしいセリフを言ってしまうんじゃないか。

うむ、我ながら実に馬鹿ツプルっばい。

「ま、それはともかくとして、今日は家に帰ってハンバーグでも食
べようよ」

「なんでハンバーグなんですか？」

「昔からハンバーグはわりと好きなんだよ」

「子供っばいですね。……まあ、私も嫌いじゃないんで今日はハン
バーグで」

そう言いながら、美里はくすつと笑う。

僕もつられるように笑いながら、自然に美里の手を握る。

「じゃ、帰ろっか」

「はい」

美里も僕の手を握り返して歩き出す。

今日みたいな騒がしい日は珍しい。大抵は仕事に追われたり色々
なことがあって、それでも退屈に、苛烈な日々は過ぎていく。

「あ、そういえば天弧さん」

「ん？」

「この子の名前って、結局どうするつもりなんですか？」

「んー……一応考えてはあるけどね」

本人が気に入るかどうかは別として、僕なりに考えた名前がある。

「高倉友衛、たかくらともえなんてどうだろう？」

自分の幸せつてのは、結局のところ周囲の幸福だ。自分ばかり裕福で幸福でも、自分が大切にしている人が不幸なら、きっと自分は自分じゃいられない。

だから、友を守れ。家族を守れ。自分にとって大切な人を守れ。貴方にとって大切な人が幸福でありますように。

そして……なによりも、今ここに生まれた君が幸せでありますように。

僕がそう言うと、美里は苦笑しながら貴方らしいですねと言った。それから少しだけ強く手を握って、美里は笑いながらこんなことを言った。

「私は、そんな貴方のことが大好きです」

Aランクエンディング・美里編：貴方のいるせかい　E N D
Aランクエンディング・舞編　：今ここにいるばか　に続く

おまけ・小劇場、焼肉屋台での一幕。

会話のみでの進行になります。時刻は午後の9時ごろ、河川敷付近の屋台みたいな場所で鉄板の上で肉をジュージュー焼いてる絵をイメージしながらお楽しみください。

「はいっ！　そーゆーワケでアレだね！　なんかもう気がついてたら高倉とかその彼女とかはとくにドロップアウトしやがりましたですな！　刀傷こさえて戦った草薙神威先生の立場とかはどーなるのかと、そういうわけでビール。キンキンに冷やしたやつな」

「はいはい、お客さん」

「すまんね大将！ どうだ、竜胆。肉食って飲んでるか！？」

「うっす、先生。骨付き上カルビとか超美味しいっす。あ、あたしにコーラーっ」

「へい、コーラお待ち」

「あー……もう。もう嫌だ。なんで僕がこんな目に。ありえん。まぢありえん。就職した早々これだよ。ゆっくり職探した結果がこれだよ。ビール一つよろしく」

「はい、ビール一丁」

「……二万円かあ。あの甥っ子、容赦なく女性の顔をぶん殴るとは本当にいい度胸してきましたねエ。でも、母さんと義兄さんは本当に怖いなあ。芋焼酎一つ」

「お、姐さん。いい目してますね。今日がいいのが入ってますぜ」

「おろ、芋焼酎もいいな。オヤジ、なんかこうクセのあるチーズで一杯頼む」

「芋焼酎にチーズって合うの？」

「焼酎は懐の深い酒だからな、なんでも合うがこれといった決め手がない。それより小僧、お前明らかに未成年っぽいけど酒飲んでいいのか？」

「未成年って……僕、今年で一応29歳なんだけど」

「はあっ！？ 俺より年上じゃねーかつ！ どう考えてもその顔で29はねーだろ！ どの研究所で改造された人間ですかっ！？」

「素晴らしいですねえ。人間の科学はそこまで進歩してたんですね」

「……本当、それよく言われるんだけど。低身長で童顔でなにが悪い」

「おっちゃん。つくねと特上カルビ追加。あとグレープフルーツジュース」

「はっはっは、くじけるな小僧。いえ、年上の小僧。低身長童顔の男が好きな女もいる。いや、むしろそっちの方が多いからな」

「そーだね。……さっさと帰らないと彼女達が心配するから、もう

帰っていいかな？」

「帰すわけねーだろ小僧。今お前は俺の敵に決定した。つーか、彼女達ってなんだ？ 人間関係のデフレスパイラルかなんかですか？」

「別に、特定の誰かとは付き合っていないし」

「うっわ、最低だコイツ。おい、着物女。なんとか言っつけてやってくれよ」

「大丈夫ですよ。きっとこの人は、殿方の股間にぶら下がっているモノが人の10倍から100倍の戦力を秘めているか、単純に数が多いんだと思われまますから」

「アンタの方が最低じゃねーか！」

「下ネタ程度は普通でしょう。いえ、草薙先生はいつかそこにいる生徒ちゃんに手を出してちゃうような人ですから、下ネタは厳禁なんですかね？」

「生徒に手なんか出すか！」

「おっちゃん。この時価って書いてあるやまけいぎゅうって美味しいの？」

「牛肉大好きな他国の人々が絶賛するくらい美味しいよ。あと、それは山形牛と読むんだ」

「じゃ、それ一つ。あと、あたしは草薙先生とか本当に勘弁だから」

「俺だつて未成年は勘弁だよ。あと、生徒とかおガキ様過ぎてありません」

「じゃあ、28歳独身の着物が似合う美女なんかはいかがでしょうか？」

「……見た目はわりと好みなんだが、付き合った途端に全身が焼け爛れそうな大火傷を負いそうな気がする。予感とかじゃなくて確信できる」

「それ、正解。この人借金ものすごいから下手に手を出すと軽く死ぬるよ」

「ひどいですねえ。私、わりと尽くす女ですよ。惚れたら一途の貢ぎまくりですよ」

「……その貢物がどの程度の血と涙に濡れているのか、考えたくもないな」

「借金取りにとってはブラックリストの秘中の秘。呼吸する略奪魔だからね」

「おつちゃん、あとでうなぎの蒲焼三つほどお土産に包んで。あとこのキリマンジャロって飲み物なに？ 飲んだら進化とかできる？」

「コーヒーの銘柄だよ。あと、飲んでも進化はできねえなア」

「もー、なんていうか最近の殿方は冷たすぎます。なんかこう……冷たい手をそつと温めてくれるような優しい殿方はどこの世界にいるんでしょうか？」

「そーゆー殿方はいい女がとつくにゲットして、とつくに婿に行っていると思うし、とりあえずアンタみたいな地雷源に惚れる男はどこの世界にもいねーだろ」

「……じゃーせめて金づるでいいですから。資産的に100億くらいでいいですから」

「せめて金づるってあたりで日本語がおかしいよね、どう考えても「あくせく働くのもわりと悪くないぞ。一日の終わりの酒が美味いからな」

「嫌ですよ。女の子は……周囲の賞賛を集めつつ、楽しく生きてたいんですよ」

「そーだねエ。100億とは言わないけど、3億円とか欲しいね。

宝くじとか当たらないかなあ。そしたらこんな腐れ仕事速攻で辞めてやるのに」

「……おかしいな。高倉は酒は飲めないが仕事帰りの飯は美味い。また明日頑張ろうって気になるって賛同してくれただが」

「その言葉には天と地ほどの差があると思いまーす。甥っ子の奴、なんだかんだ言っただけで彼女さんいるし、ご飯もその人に作ってもらってるんですよ。クサナギセンサーはアレでしょ、どーせ居酒屋とかそのへんのファミレスで済ませてるんでしょでしょ？」

「いや、酒は風呂上りに飲むけど、フツーに自炊してるぞ。最近凝

つてるのは酒のつまみの手作り。最近では燻製チーズに凝っててなあ」

「あれ？ なにその沈黙。独身の男がチーズの燻製とか作ってたらなんかまずいのか」

「いや……ねえ。所帯じみてるっていうか、僕の口からはちよつと」
「ええ……なんていうか、その。気づいた方がいいかなって思うわ」
「おっちゃん。うな茶漬けと温かい飲み物でシメで。お勘定はこいつらが払います」

「こら、生徒。散々食っておきながら酔っ払った大人を放置して帰るんじゃないか。ここは大人の飲み物である酒を少し嗜んでおくべきところだぞ？ まあ、いい加減に夜も遅いしな。帰るんだったら家まで送るぞ」

「んっふっふ、帰り道に襲うつもり満々ですなー？」

「性質の悪い酔っ払いは黙ってる。大体、そんなことしたら俺が紹介したアパートの大家に殺されるっちゆんじゃ」

「んー……まあ、先生がどうしても送りたいならいいけどさ」

「じゃあそれでいいさ。最近では色々物騒だし、ここ数年は棒を越えて踏み外した存在をそれ以上醜くなる前にワイヤーでサクツと殺してくれる、『それは私のおいなりさんだ』が決め台詞の黒くて仮面で大きな鎌を持った、変態という名の紳士が出るらしいからな」

「……私が聞いたのはもーちよつと綺麗な都市伝説だったと思うけど、先生のそれ色々混ざってない？」

「混ざったんじゃない。混ぜたんだ。都市伝説とかって意外とおっかねーんだぞ？ テケテケとか100キロババアとかおいてけ堀とか百物語とか学校の怖い、花子さんが来たとかもうやってられねえ」

「意外とヘタレなところあるよね、先生。都市伝説じゃないのも混ざってるし」

「はっはっは、好きなように言うがいい。じゃ、お二人さん。俺アそういうわけでちゃっちゃんと帰る。また機会があったら酒飲もうぜ」

「今度は貴方の奢りですねー」

「そういうことなら、僕も付き合っよ」

「おう。じゃ、またな。ここの勘定はよろしく頼むわ」

「……『またな』ですつて。私達みたいな悪人に向かつて」

「そうだね」

「いい人ですね、あの先生」

「……………かもね」

「お金とか……………泥臭い話は明日にしません？」

「ここの奢りよろしく」

「……………あう」

「先生。ちょっと聞いていい？」

「ん？」

「お酒って美味しいの？」

「周囲の環境と飲む人間と作り手の愛情によつては美味しいこともある」

「……………あの、それつて要約するとまずいつてコトじゃ」

「美味いかまずいかは自分で決めることだからな。他人が絶賛していることでも、共感できないことなんざ腐るほどある。要は、自分がどう思っかつてことだ」

「先生のオススメは？」

「高校を無事に卒業できたら教えてやろう。ぶつたまげるほど美味しいのは保障する」

「ちつ……………先生のくせに生意気な」

「先生つてのはそういうもんだ。分かつたらもつと勉強して少し賢くなつて、それからゆっくりと自分の道を選べ。そーすりゃ俺も安心できるつてもんだ」

「はいはい、善処しますよ」

「次の補習は週明けだからな」

「はい」

かくて、それぞれの夜は更けていくのだった。

おまけ・小劇場、焼肉屋台での一幕　END

美里エンド：貴方のいる世界（後書き）

てなわけで、次回は舞さんエンド デラックスあとがき コッコさんゼロ 本編開始という流れになるかと。

そこまで行き着くまでにどれくらいかかるか分かりませんが、記憶から風化してなかったら嬉しいです（笑い）

舞エントド：今、ここにいるばか（前書き）

忘れた頃に更新してみよう、第四回目である。

病気が発病してしまい前後編になってしまったが気にしない気にしない。本当にごめんなさい。

舞エントド：今、ここにいるばか

注1：下らない前置きを試みよう。

注2：黒霧舞は真正の勇者である。この場合の勇者とは職業ではなく、電撃系魔法を使えるわけでもなく、ただ単純に『勇氣ある者』としての勇者である。悪しきを挫き弱きを助ける。そういう本物の勇者である。かなりいじつてもう別物になってはいるが、モデルとなったキャラクターからして既に勇者であった。

注3：しかし……大抵の場合、勇者や英雄というものは幸福にならない。たとえ諸悪の根源を倒したとしても、ハッピーエンドでは終わらず次の敵を求めるか、あるいは人の目に触れないようにどこかに旅立ってしまう。……それもまあ、指輪物語から延々と続くお約束のようなものだろう。

注4：作中でも何回か書いているが、強過ぎる存在は疎まれる。勇者という人種の場合大抵バランスブレイカーで、幸福になれずに終わるパターンが大半だ。デイスティン「ファロードとか、オルテッドあたりがそれ。デニム君は勇者でも英雄でもなくただ姉貴と四姉妹に振り回されるわりと不幸な少年。

注5：懐古乙とか言っちゃった人は、後で体育館裏まで来なさい。
注6：まあ、それはともかくそういう人間は確実に存在する。正義感に溢れ、前を向き、誰かのことを思いやり、故に自分のことを計算に入れないという人間は、どこの世界にも確実に存在する。ただの勇氣のみで自分を捨てられる人間は、確かにいるのだ。

注7：喪失を恐れるが故に、己を捨てられる人間は、存在する。

注8：そういう人間こそ幸福になるべきだと、どこかの誰かは思っていた。

エンディング条件。

・前置きが済んだところで、さらに前置き。

・これまで散々『舞さんとのフラグ』というセリフを書いてきたが、ごめん。あれは性質の悪い嘘だった。

・そもそも、この物語までに舞嬢との間にフラグなど存在しない。初期の予定ではメインヒロイン扱いのはずだったのだが（つまり、最初からコッコ嬢とくつつけるつもりはなかった。読者にとってはひでえ話である）あまりに勇者過ぎてヒロインどころかヒーロー扱いになってしまった経緯を持つキャラクターなので、考えても考えても隙がない。さらに付け加えるなら意地っ張りではあるがツンデレではなく、勇者のくせに現実主義者なのでガードが固い。難攻不落もいいところである。

・こんなキャラクターをよくメインヒロインに据えようと思ったものだ。コッコさんつヴあいう話目くらいを書いてる時点の自分を小一時間ほど問い詰めたい。

・さて……………本当にどうしよう。

・高校編突入。物語終了後から一年後の話。前の話までは普段は書かないノリだったので、今回からはコメディっぽく楽しく書いてやるのかと思う。

・海に行きたかったけど、結局行けなかったたので海の話を書こう。

・僕らの夏はまだ終わったばかりだコンチクショウ。

・乱痴気騒ぎはほどほどに。

以上を踏まえて、ご覧下さい。

Aランクエンディング・舞編：今、ここにいるだけか。

朝、軽快な鳥の鳴き声で目が覚める。

日差しは柔らかく、空気は澄んでいる。実にさわやかな朝だ。

「……うつぶ。飲み過ぎた」

なのに、アルコールのせいで気分は最悪だった。

私の名前は黒霧舞。成り行きで高校三年生をやることになった。最近の悩みは妹がおかしな道に足を踏み込んだことと、その妹の所有物である男の様子がおかしいこと。

まあ……以前と比べれば、穏やかで慎ましやかな生活なんだけども。なんかこう色々と理不尽な目に遭っているような気がしないでもない。

そう、例えば昨日。

あいつの屋敷が潰れた後、私は同僚の紹介でアパートを借りることになった。ボロアパートだが立地条件はそこそこ。駅もコンビニも近く悪くはない物件だった。

退職金もあるし、悠々自適な高校生活を……満喫できる、はずだった。

友人どもがちよくちよく訪ねて来なければ、もっと静かに暮らせただろうに。

いや、まあお節介とかはいいんだけど。いいんだけども。

昨日なんかは一晩中由宇理の愚痴を聞いていた。愚痴といっても大したことはなく、単に同居させてもらっているお宅の灰色の髪の毛の子が世話を焼きまくるので気を使って仕方がないとかなんとかその愚痴を聞きながら、由宇理が持ち込んだ日本酒なんかを飲んでしまったせいで頭が非常に痛い。

というか……高校生のくせに酒を持ち込んで飲むのはどうかと思う。

最近はずっとこんな調子のせいか、生活が乱れつつあるのは非常によくはない。

「……たく……今週は大掃除しようかと思ってたのに」

欠伸混じりに布団から這い出して、それから立ち上がろうと手を

ついた。

と、不意に。いい匂いが鼻腔をくすぐる。

うん、この匂いは間違いなく卵焼き。おかずはひじきの炒め物とほうれん草のおひたしに違いない。味噌汁の味噌は濃厚な白味噌だけど、これが意外と朝食によく合う。

朝食にここまで手をかける馬鹿野郎は、私の知っている中じゃ一人しかない。

意を決して立ち上がり、キッチンに続く引き戸を開けると、そこには案の定クマのエプロンに三角巾といういでたちの、見知った顔が朝食を作っていた。

私に気づいたのか、そいつは振り向いてにっこりと笑った。

「あ、舞。おはよう」

朝食を作っているそいつの名前は高倉天弧。今は『にっこり』と嬉しそうに笑っているけど、普段はふてくさく笑う極めて獰猛なナマモノ。不良未満優等生未満のところを行ったり来たりしている悪巧みをさせたら天下一品で、自分に厳しく他人にも厳しいという凶悪というかえげつない性格をしている。

特徴的なのは、左目にいつも髑髏か猫の肉球マークのついた眼帯をしていることだ。

別にそれは伊達でも酔狂でもなく、テンの奴は本当に左目が見えない。

私はその理由を知っている。それがテンの甘さが招いたことだったことも、知っている。そのために……テンが左目の他になにを失ったのかも、知っている。

眼帯を見つめながら、私はとりあえずゆっくりと溜息を吐いた。

「おはよう、テン。とりあえず色々突っ込みたいところがあるんだけどいい？」

「朝早くに由宇理に叩き起こされて、爽やかな朝食を作れって言わ

れてここまで引つ張ってこられた。ちなみに由宇理はトイレでしこたまりバスした後、アルコールを抜くためにさつきからバスルームで籠城中」

耳を澄ますと、バスルームの方から水の跳ねる音が聞こえてくる。人の許可なく勝手にバスルームを使って、おまけにシャワーで済ませずに堂々とバスタブにお湯を張って好き勝手に入浴しているらしい。

なんとというか……本当に殴ってやろうか、あの小娘。

「まあまあ、由宇理は由宇理なりにそれなりに辛いらしいから、多少のことは見逃してやってよ」

「前々から思ってたけど、テンって由宇理には色々と甘くない？」

「そうかもね」

サクサクと食事の準備を進めながら、テンはあっさりと認めた。

むう……なんとなく面白くない。冥ちゃんの所有物のくせに生意気な。

「ま、僕の知り合いはオフセンスに回ってる間は強いけどディフェンスに回ると途端に激弱になっちゃう人が大半だからね。世話焼きもご愛嬌ってところだ」

「そう？ 友樹君はともかく、由宇理はそんなことはないと思うけど……」

愚痴りはするものの、実際のところそれを酒の肴にして面白おかしく語るのが刻灯由宇理という女だ。ついでに言えば、人の家の風呂を勝手に使うような厚かましい真似も平気の平左でやってしまう。そんな女が精神的に弱いとはとても思えないんだけど。

と、そんなことを思っていると、バスルームに続く扉が不意に開く。

由宇理がお風呂から上がってきたらしいので、私はそちらに振り向いて文句の一つでも言ってやろうかと口を開いた。

すっぱんぼんだった。

水に濡れた体を隠しもせず、由宇理は私を見るなりにつこりと笑った。

「あ、舞ちゃんおはようツス。実はバスタオル持ち込むの忘れちゃってさ」

「いや、そういう問題でもないし。」

この女、自分でテンを呼んでおいてまるで意識すらしてないとはどーゆーことか。それともテンが男として見られていないのか。いや、それはそうと私と同じ程度には小さいかもしれないと思っただ胸のあたりの膨らみがそれなりの大きさなのはどうということなんだろうか？ いくら着物を着ていたとはいえ、私がそのあたりのことを見間違えるはずがないんだけど……。

「お、テン。朝からなんか美味そうなもの作ってるツスね」

「食べたけりや、さっさと服を着ろ。いくらなんでもその格好は刺激が強いから」

「んっふっふ、欲情するツスか？」

「あーそうだな。誘惑してるんだとしたら超一流だよ。……うん、ぬるくて甘い友人関係もこの辺で終了とは実に残念だ。責任を取る覚悟を決めなきゃなア？」

「あっはっは……目が怖いぞ親友　舞ちゃん、今すぐバスタオル貸して早く！」

さすがというかなんというか、テンは由宇理の扱い方を心得てるようだった。

タンスから取り出したバスタオルを引っ手繰るように受け取り、由宇理は慌ててバスルームへと戻って行った。さっきまでのほほんとしていたのとは打って変わって、顔は真っ赤だったし、かなり焦っていた。

それとは対照的に、テンは呆れ顔だった。

「やれやれ……ホント、あいつには女の子としての自覚が足りない。一度みっちりと説教してやるべきかな。裸でうろつかれるこっちの

るといふ奇妙な業を背負っている男で、僕の親友だけど男の敵だ。

成績もかなり良い部類に入り、運動神経も抜群。仕事をさせればそつなくこなす。ハイスペックで実に腹の立つ男である。

「……親友。なんかいきなり失礼なこと考えてないか？」

「考えてるけど、それもこれも僕の機嫌が悪いせいだから、あんまり気にするな」

「なんかあったのか？」

「朝っぱらからかなり刺激的なものを見た。そのせいで色々と気が散って仕方がない」

ゆっくりと溜息を吐いて、僕は自己嫌悪していた。

あえて言うまでもないケド、想像と空想と妄想というものは暴走する。もしかしたらもつと大人になれば楽々と制御できるようになるのかもしれないが、たかだか10数年程度しか生きていない僕にそれは無理ってものだった。

なんつーか……屋敷にいた頃はいつぱいいつぱいでそれどころじゃなかったけど、こうやって安定した生活を送っていると、色々考えてしまう。

将来とか勉強とか生活とか……恥ずかしいこととか、まあ色々。

「やれやれ……余裕があるってのも考え物だよな」

「ま、学生なんてそれが普通だろ。大体、前のお前は余裕がなさすぎたんだよ」

「そりゃ否定しないけどさ……なんつーか、考える時間が多すぎると、ありそうなことから在り得ないことまで色々考えちゃう自分がめんどくせーよ」

「ま、悩めるだけ悩んでおけ。どーせお前のことだ、悩み終わったらいつも通りふてぶてしく笑いながら歩き出すに決まってる。それすらできなくなつて、逃げ出したくなつたんだつたら真つ先に俺に言え。前みたいに逃げ場所くらいは用意してやるよ」

「ふざけんな、ばか白髪。誰がこんな青臭い悩みで逃げ出してたまるか」

僕がそう言い返すと、友樹は楽しそうにやりと笑う。

大体、こいつが用意する『逃げ場所』というのは大抵竜宮城みたいな所で、一度行つたが最後二度と戻れなさそうな場所に違いないのだ。昔、一度だけ行つたことがあるが、その屋敷の女の子は全員オレンジか銀に近い灰色の犬のような耳をつけており、全員着物で、主から従者まで全員例外なく孤独趣味のくせに寂しがり屋で可愛くか弱いという、僕の魂をうっかり揺さぶってしまうような連中ばかりだった。

ちなみに、あの場所がどこなのか今を持って不明だったりする。

ちらりと友樹を見ると、相変わらず楽しそうに笑っていた。

おのれ、メイドの尻に敷かれてるくせに生意気な。

「で、親友。お前が殴られるのはいつものことだからいいとしてもだ。とりあえず今考えなきゃならんことは、一学期が終わつた後なにをして遊ぼうかってことだ」

「んー……そうだね。そろそろ溪流釣りにもいい季節だ」

「はっはっは、なにを言っているんだいキツネ先輩。ここはやっぱり……思春期の男らしく、女性の水着目当てで海ふべっ!？」

雑音が聞こえてきたので、足払いをかけて転倒させた後、頭を踏みつけた。

「んー……そうだね。そろそろ海水浴にもいい季節だ」

「あのさ、親友。いくら嫌いだからって女の子にその仕打ちはいかがなものよ?」

「この生物が女の子? それはどこの妄言だよ、友樹」

踏みつけたまっくろくろすけをぐりぐりと踏みしめて、僕は大きく溜息を吐く。

僕の足の下にいる人間らしき物体は、藤原笹砂実子ふじわらささくみこという気持ちの悪い名前のはずだけど、なぜか奇ノ森ぜつむと名乗っている。気持ち悪い。なぜか女子高生探偵とか名乗っている。輪をかけてきもちわるい。顔はわりと可愛いし長い黒髪も僕好みだけど、いつもいつでもやたらえらそうなのが腹が立つ。死ねばいいと思う。物探し

の達人にして自称女子高生探偵と専らの噂でしたのむから死んでくれよ、藤原。

「……あの、先輩。なんか激烈な嫌悪が伝わってくるんだけど」

「それは藤原の被害妄想だよ。で、上級生のクラスになんの用？

友達がいらないから、仕方なくここに来たっていうんだっいたら少し遊んであげなくもないけど」

「友達はいるよ！ キツネ先輩と一緒にするのはいけないと思う！」

「友樹、こいつ友達いるの？」

「それなりにいると思うぞ。なんせ、失せ物探しの天才だからな。

先輩から後輩から同輩まで引つ張りだこだと、こいつと同じクラスの子に聞いたことがある」

「なるほど。良く言えば頼りにされていて、悪く言えば体よく利用されているんだな。いやいや、これは単純に僕って友達少ないから僻んでいるだけで、『ああ、利用されてるんだネ。でも本人が知らなきゃ幸せなコトだよ。だよ？』なんて思ってもいない」

「うわああああああああああああああああああああんっ
！」

ゴキブリのように僕の足の下から這い出した藤原は、手近なところで友樹に泣きついていた。まあ、友樹は股間のシンボルがついていない生命体にはおおむね優しいので、泣きつく場所としては間違っちゃいないのだが。

「うっ……キツネ先輩がいつにも増してひどすぎる。いつもならここまで私の心を傷つける前に軽やかなフォローが入るはずなのに。女殺しなのに」

「女殺しだった覚えはない。まあ、少しばかり不機嫌で藤原に八つ当たりしたことは謝ろう。……ごめんね？ 藤原だから、ついいじわるしちゃうんだよ？」

「はっはっは、素晴らしい媚び媚びっぷりだぞ、キツネ先輩。では、私は寛大な心で許してあげよう」

いつも通りにえらそうな態度で、藤原は僕のことを許してくれた。

うーん……毎度毎度思っているが、相変わらず面白い後輩だ。あまりに面白過ぎてついつい素の自分をさらけ出してしまってくるに……いじめがいろいろある。

まあ、僕の嗜好はさて置いて、とりあえず藤原が言いかけたことを思い出す。

「海に行くのは別にいいんだけどさ、いくらなんでも藤原と一緒に嫌だよ？」

「……あの、先輩。その言い方はフツーに傷つくんで、もうちょっとオブラートに包んだ表現をしてもらえるとこっちとしても助かります」

「ああ、語弊があったね。僕は太勢で騒ぎたいから二人つきりってのはちょっと」

「……有坂先輩。キツネ先輩って意外と寂しがり屋なんですか？」

「察してやれ。人間ってのは一人じゃ生きられない生物なんだよ」

友樹は目を逸らしてそれだけを言った。本当にありがたい親友だった。

ちなみに、僕ら二人が普段からつるんでいるのは、古い付き合いというのもあるが、おおむね同属相憐れむという感じだったりする。特に、友樹の場合は現在進行形で女性関係で苦労していたりするので、心が壊れないように愚痴を吐く環境が必須なのだ。

しかし……海か。夏祭りも楽しみだけど、海も悪くないかもしれない。

「ま、海に行くのはいいかもね。磯釣りや海釣りどっちがいいかなあ。この季節だといつそ溪流釣りもオススメだけど」

「親友。海に行くって言ったなら、普通泳ぎに行くもんじゃないのか？」

「釣り以外の目的で海に行くと、大抵遭難してサバイバルか、置いてけぼりにされてサバイバルになるから嫌なんだよ」

「……有坂先輩。キツネ先輩ってどんな人生歩んでるの？」

「そこは突っ込んだりせず、そっとしておいてやるのが大人っても

んだ」

「キツネ先輩。先輩ってどんな人生歩んでるの？」

「なんの躊躇もなく突っ込みやがったっ!？」

友樹がびっくりするのも無理はない。それは僕や友樹のように、人に誇ることができない人生を送っている人間にとってはまさに致命的な言葉。

しかし……ここでぐっと我慢するのも大人の条件。そう、僕は既に大学進学直前の高校三年生。今年受験もあるし、下級生ごときにムキになっている暇はないのである。

「ねえねえ先輩。どんな人生を歩んできたんだい？」

「はっはっは、しつこいぞ後輩　よーし、こうなったらおしおきとしてセクハラ混じりのEFB(Eternal Force B lizard あいてはしぬ)しか在り得ないな」

「ひあああああああああああああああああっ!？」

藤原の服の隙間に制汗スプレーを容赦なく吹きつける。ついこの間新しいものを3本ほど購入しているので、藤原は確実に死に至るだろう。

一点集中で吹き付けると凍傷になってしまうので、そこは気をつけておこう。なんだかんだ言っても女の子だし、肌に残るのは良くないのである。

3本きっかり使いきったところで、藤原は静かになった。正確には顔を真っ赤にして悶え苦しんでいるように見えなくもない。

あっはっはっは……本当に可愛いなあ、この馬鹿な後輩は。もっといじめたい。

っと、危ない危ない。これ以上藤原をいぢめてると僕のキャラクターが変質しちゃうかもしれないのでそろそろ話題を変えよう。

「それじゃあ静かになったところで、どこの海に行くか検討しようか？」

「……そーだな」

自業自得だと踏んだのか、それとも不機嫌な僕に突っかかるのが

嫌だったのか、友樹にしては珍しく、諦めたように溜息を吐いた。

まあ、友樹の言いたいことは分かっている。僕としても後輩に八つ当たりとは、我ながら情けないとは思っているのだ。

鞆に常備してあるノートパソコンを開きながら、僕は少しだけ目を細める。

「……いや、よく考えたら高校最後の夏休みに近所の海つてのもないよね」

「親友？　なんか妙なコト考えてねーか？」

「いや、別に変なコトじゃないよ。……単純に、誘わなきゃいけない子を一人忘れてただけかもしれないってことさ」

そう……よく考えれば、彼女も主要人物の一人なのだから、誘わなければ嘘つてもものだろう。むしろ後々恨まれそうな気がする。

僕はにやりと口元を緩めて、彼女を誘う方法を考える。

さて……楽しい夏休みになりそうだ。

高倉天弧という男の話をしてみよう。

まず目に付くのはつり目に眼帯という一般人には在り得ない特徴。体格はそこそこでわりと鍛えられている。頭の回転は平均的。運動能力はそれなり。格闘能力に関しては平和な日本という国に限定すれば突出していると言ってもいい。良く言えばオールマイティで悪く言えば全項目が平均的。性格の方はわりと残酷。好きな相手にはとことん尽くすが、嫌いな相手にはこれ以上ないくらい冷酷。弱みを握って脅すくらいのは平気の平左でやらかす。そういう意味では、ちゃんと相手をされている藤原ちゃんはわりと好かれていたのかもしれない。

人に甘えさせるのは大得意で、人に甘えるのは大の苦手。片目を失う原因になったのも、甘やかしちゃいけない人を散々甘やかしたせいで、本人もその自覚はあるらしい。

最近はなんだかぼーっとしていることが多いけど、今日はなんだ

か楽しそうだった。

「あつはつは、本当になんで君なんか誘っちゃったのかね、僕は！馬鹿か僕は！　ってそれ以前になんで無意味に遭難させたのかなあ、アンナさんっ！？」

「三日後に迎えが来る予定ですから、遭難ではありませんの」

「じゃあ教えてよ。……ここは一体全体どこなのさ？」

「ひ・み・つ」

「があああああああああああああああああああああ
！！」

……まあ、なんとというか。つまりはそういうことだった。

いつもの面子で海に行こうとテンに誘われた時は、またなんか企んでるんだろうなあと思ったものの、興味本位の遊び半分ではついていくことにした。

委員長と虎子は今回不参加だけど、夏休みはそれなりに長い。今回無理に誘わなくてもまた遊ぶ機会はたくさんあるだろう。ということで、参加者は三馬鹿＋アンナ嬢＋私＋藤原ちゃんの六人ということになった。

テンの目論見としては、遭難する心配のないそりやもう豪華な遊び場所を想像していたようだったけど、金髪碧眼のお嬢様はトンデモない場所を提供してくださりやがった。

場所は恐らく日本国内。拉致同然で連れて来られたため、場所の詳細は不明。近くに海があるのは確認したけど下手に動くとおっさり遭難しそうな心配がある。家が立ち並んではいるけれど、その全てが空き家で、一軒だけわりと綺麗な家が今回の私たちの宿泊場所だった。近くに温泉も湧いているらしい。

一週間後にはダムになっていそうな廃村。そんな感じのイメージで間違いない。

「やっちゃまったよ……こんなことならお金ケチったりせずに自分で安全な旅館に泊まれば良かった。なんで僕は金持ちの力なんて当てにしたんだろう。馬鹿だからか？」

「一度、こういうわびしい場所でみんなでお泊りしてみたかったですの。」

「えーん、えーん、殴りたいよう。殴って埋めてしまいたいよう。そういうことをほざくお嬢様は一回ギアナ高地とかアマゾンの奥地とか行ってみればいいのに。」

「……友樹先輩。キツネ先輩は本当に一体どういう人生を……」

「頼むから突っ込んでやるな。今度は本当に殺されるぞ。」

「……………」
友樹の悲痛な表情からさすがに察したのか、藤原ちゃんは口を閉ざした。

愕然として膝をつくテン、苦痛に満ちた表情を浮かべる友樹、居心地悪そうにしている藤原ちゃん、さすがに空気を察したのか額に一筋の汗を流すアンナ嬢。そして、一人元気なのはＴシャツにクラッシュジーンズといういでたちの由宇理だった。

「色々探索してみたけど、これならサバイバルにならない程度に楽しめそうツスよ？ 米もちゃんとあるし、薪はちゃんと割ってあるし、調味料はアホほどあるし、井戸水も調べてみたけど普通に飲めたし、とりあえず主食だけ確保できればOKツス。」

「あれ？ なんだ、思ったより大したことない状況だな。」
一体どんな状況を想像していたのか、あっさりとテンは立ち直った。

「で、主食はどうしようか？ この季節だと野草はそれなりだけど」「簡単なところだと釣竿と銚があつたから魚介類つてところツスね。」
一応猟銃とかもあつたけど、あれは野生の生き物から身を守る時に使うものツスカね？」

「多分そうだけど、猟銃なら師匠と一緒に狩りとかやってた頃に扱ったことがあるからなんとかなる。猪でもいれば、しばらく食事は困らないな。兎でもいい。」

「ちょ、いや、えっと、電気は通ってるし冷蔵庫の中に市販のカレーが入ってるはずですから、そんな無理にサバイバルにしなくても」

いいんですの！」

「そ、そうですね三条院先輩！　猪とか兎とか無理に狩らなくても！」

「カレーは保存食だよ。最後の手段と言い換えてもいい」

「兎や猪程度だったら、血抜きして過熱すればチフスやコレラの心配もないツス」

『いやいやいやいやいやいやいやいやいや！！』

ものすごい勢いで手を振りまくるお嬢様＋現代っ子コンビ。そもそもアンナ嬢は麦藁帽子に水色のワンピースとロングスカート。藤原ちゃんはテンに騙されて学校指定の制服で来てしまっているので、激しい運動は避けたいところだ。

ちなみに友樹はわりと動きやすいパーカーにジーンズ。私も似たようなものだ。

多分こんなことになると思ったので、虫除けのために薄い長袖である。

猪や兎のお肉は嫌いじゃないけど、女性陣二人がさすがにちょっとかわいそうなので、同じ女として口を挟むことにした。

「今日はカレーでいいんじゃない？　材料がなくなったら明日は魚を獲ればいいんだし、どうせ三日目には迎えが来るんだから」

「じゃ、今日はカレーで。夕食までは団体行動で遊びまくる方向でいいかな？」

「海でなにが獲れるか分からないツスけど、鮑とか帆立があると嬉しいツスねえ」

「……………」

さすがというかなんというか、見事な手の平の返しっぷりだった。ホントにまあ……仲いいんだから、こいつらは。

と、いつもならそこで口を挟んでくる白髪美少年がいないことに気づいた。

「あれ、そういえば友樹は？」

「隣の部屋でさっさと服を脱いで海に行っちゃいましたの。なんか

にやにや笑いながら『俺は自由だ……』とか呟いてて気持ち悪かったから、声はかけませんでしたけど」

「あ、知り合い以外誰もいない場所に来た時の友樹って大体そんな感じだから、気をつけて見てやって」

気をつけて見てやってという言葉が当たり前のように出るってことは、普段から気をつけて見てやっていているということに他ならない。高倉天弧は友達に甘く、好きな人に甘く、家族に甘い。

それでも……今では、甘えさせはするけど甘やかしてはいない。「それじゃあ、僕らも海に行こう。最後の夏休みだ、楽しまなきゃ損ってもんだろ」

保父さんのように暖かく笑って、いつものようにテンは言った。

「あははははははははは！　すごい、すごいぞここは！　俺たち以外は誰もいない！　無意味にナンパしてくるおねーさんもいないければ、なんかやたらと遊びに誘ってくる中学生もいないし、民荘の人妻もいないし、露店でトウモロコシ焼いてるねーちゃんにおまけされたりもしない！　自由、平等、自然！　ここにはなんにもないぞ！」

と、やたらとハイテンションなのは、僕ではなく僕の親友こと有坂友樹だった。

その親友は、普段は見せないような満面の笑みのまま「ヒヤッポーツ！」と奇声を上げながら海に飛び込んで笑いながら泳いでいた。……あれ？　なんだらう。心がとても痛い。

僕は目の前の無残な光景を直視しないように目を逸らして、溜息を吐いた。

「あのさ、親友。海を見て興奮するのは分からないでもないけど、そのテンションの上がりっぷりはいかなもんよ？　見てることしかも正直きつついんだけど」

「なにを言ってるんだ、キツネ！　絶対に俺とはくつつかないだろ

う女ども + お前しかないないというこの状況に置いて、テンションが上がるのは最早必然だろう！」

「いや、意味が分からないぞ？」

「あっはっはっはっは、鞠がないただけでもテンションが上がるってのに、今回は本当に誰もいないんだぞ？　これはもう俺の人生の中じゃすごいことだ。あのナンパのうざったさから解放されたとあっつちやあテンションが上がるのも当然ってもんだろう！」

「……………」

うん、まあ気持ちは分からなくもないけど、そのうざったさを感じられるのは在り得ないほどもてる男だけで、凡人の僕から見たら普通に殺したい。

なんだかんだ言っつて、わりと辛い目に遭ってる友樹は、普段絶対に見せないような輝くような笑顔で笑っていた。

鞠さんには悪いが、こんなに楽しそうな友樹を見るのは初めてだ。

と、満面の笑顔のまま、友樹は僕の首に腕を回した。

「と、いうわけでキツネ。俺はもうさっさと遊びたいからお前も付き合えよう！」

「友樹、とりあえず落ち着け。僕はまだ着替えていない。水着は下に着て来たけど、とりあえずお前が心配だから様子を見に来たんだよ」

「じゃあ、もう今この場で脱いじゃえよ」

「太陽に頭がやられたのかお前はっ！？」

調和と規律とお約束をわりと重んじるはずの友樹は、今回ばかりはぶっ壊れていた。

「馬鹿だな、キツネは。ここにいられるのはあと60時間くらいなんだぞ？　時間を無駄にしてどうする？　お前は一刻も早く俺と遊ばなくちゃいけないんだ」

「なにその決定事項っ！？　って、おいなんで僕の服を脱がそうとするっ！？」

「はいはい、分かったからさっさと俺と一緒に遊ぶんだ。…………でな

いと、俺の心が砕けちゃうかもなあ。最近、鞠のいぢめが苛烈になつてきてるし」

よく見ると、友樹の目はどんよりと灰色に染まっていた。いつかどこかで見たような気がする、死んだ魚のような目だった。

が、そんな表情とは裏腹に、友樹はてきぱきと僕の服を脱がせにかかる。

「ちょ、馬鹿じゃねえのかお前！ 服くらい自分で脱げるからやめんか！」

「いいからさつさとしろ。今だけでも辛い思い出を忘れさせる」

「つて、言いながらベルトを外すんじゃねえよ！ 頼むからやめろ馬鹿！」

「助けてくれよう。もう女で苦勞するのは嫌だよう。親友が女なら良かったのに……そうすれば、一日中メイド服で膝枕とかぶるえっ！？」

ゴシャツ！

明らかに本気としか思えない友樹の目と発想が怖すぎたので、思わず思い切りぶん殴ってしまった。

ぐらりと揺れた友樹は砂浜に倒れこんで動かなくなる。手加減はしてないけど、頬を殴った程度なので死にはしないだろう。

……いや、本当に怖かった。交際を迫るストーカーってああいう感じなんだろうか？ 友樹に限っては追う側っていうより追われる側だけど、ああまで疲れ切った友樹を見るのも珍しい。

うーん……友樹の所にいる女の子って、大体友樹に対してスパルタだから少しくらい優しくしてやるべきだったか。でも、メイド服は死んでも嫌だ。

まあ、とりあえずここは友樹の要望に忝えて、さつさと着替えてくるのが最善の選択だろう。たまには親友と遊んでやるのも悪くはない。

そう思って倒れた友樹を放つてきびすを返すと、そこには似合わないというか似合いすぎて腹の立つ、黒のビキニ姿の藤原が立って

いた。

なぜか……顔を真っ赤にしながら。

「お、藤原。もう着替えたのか？」

「……………ん、ああ。水着はアンナさんに借りたんだ、うん」

「気のせいか……妙な間があった気がするんだけど」

「いやいや、ちょっとびつくりしたただけだ。納得もしたから安心して欲しい。私は寛容な人間だからな。全てありのままを受け入れよう」

「……………ん？」

不思議なことになんとか非常に不愉快だぞ。殺意すら湧いてくるのはなんでだろう？

彼女はなんだか凶悪な誤解をしているような気がする。

「まさかキツネ先輩の趣味がそっちの方向だったとは。これなら、私になびかないのも納得というものだ」

「一応聞いておくけど、そっちの趣味ってどっちの趣味かな？」

「ははは、これは異なことを。それはもちろんボーズ・ラヴに決まってる……………」

足を払う。

倒れた所で腕を背中に捻り上げて関節を極める。

言うまでもなく、焼けた砂は超熱い。

「藤原。僕が一番嫌いなのは同性愛だって分かっててその言葉を使うなら、今日こそは容赦しないぞ？」

「いや、しかし先輩。今のは勘違いされてもおかしくないと思う。

そもそも、日常的に友樹先輩には蜂蜜のように甘いくせに、女子に対してはやたらと厳しい。これはもうアレしかないと考えるのは極々自然な流れ……いやすみません熱い痛いごめんなさい」

肩の関節を外すくらいに腕をねじ上げると、さすがの藤原も音を上げた。

「まったく……………この後輩は。人の弱点を見つけると容赦なく攻め立てるところがあるから、ある程度加減を教えてやらないといかんなあ。

僕が腕を放すと、砂まみれになった藤原は、目を細めて僕を睨みつけた。

「先輩。前々から思ってたケド、先輩は私に限らず女の子に対する気遣いが少々どころかかなり足りないと思う。……というか、先輩好みの女の子との扱いが違いすぎる」

「罵倒に負けず、侮蔑に負けず、陰口にも、視線の冷たさにも負けず、好みの女の子にだけ優しくする。そういう男に僕はなりたい」
「最悪だよ！」

藤原にしてはととてもとても正論なツツコミだった。

「女の子のネットワークはすごいんだからな！先輩みたいに、差別とか区別とか下心満載だと、すぐに見抜かれてハブにされちゃうんだぞ！」

「はっはっは、大丈夫だ。とっくにハブにされているから安心しろ。そもそも、嫌いな女にどれだけ嫌われようが知ったこっちゃねエし」

「全然大丈夫じゃないし！もう手遅れだし！そんなにひねくれたことばかり言ってるよ、私だって先輩を嫌いになるからな！」

「……や、やれるもんならやってみる。お前の恥ずかしい写真を公表するぞ！」

「普段から嫌いとか言ってるくせになんで脅迫するんだ！？」

いや、まあ実はそんなに嫌いじゃないからね。藤原と話していると楽しいし、いじめるのもいじめられるのもかなり楽しい。

しかし、それははつきりと口に出すほど僕は素直な人間じゃねえのだ。

「仕方ないじゃん。ちょっときつついこと言うとすぐに嫌われるんだから」

「きつついこと言わなきゃいいだけじゃないか！」

「だって、普通にしているとなんか妙に増長されるんだよ。バイトしてた頃なんか、周囲に知り合いとかいないから、普通にしたら女子連中に呼び捨てどころか『リアルホスト』ってあだ名つけられて本気で殴りそうになったし」

「……リアルホストとかあだ名つけられてる人の生活態度が『普通』とは思えない」

「よし、分かった。今から『普通』に接するからそれで判断してくれ」

そういえば、藤原相手に『普通』に接したことはない。

というか屋敷があつた頃の人たちや、母さんや父さんといった家族や、友樹や由宇理以外の人間と普通に接する機会があまりなかった。

この際だ。僕の『普通』がどの程度ずれているのか藤原に判断してもらおう。

かくして……今日だけ、僕は藤原に普通に接することにした。

結局、海では馬鹿みたいに遊び呆けることになった。

食料調達の方は由宇理に任せっきりにしていたのだけれど、由宇理は2時間ほどで全員ぶんの魚介類を調達し、その後は私たちに混ぜさせて遊びまくっていた。

遠泳に始まり、スイカ割りやらバーベキューやら、とりあえずアンナちゃんと三馬鹿がいればどんな環境でもわりと楽しく過ごせるようで、私も楽しんでしまった。

唯一、藤原ちゃんが終始恐怖に引きつったような顔をしていたけど、あれは一体なんだったのかはいくら聞いても教えてくれなかった。

まあ、大体想像はつく。またテンがなんかやったんだろう。

ホント……あいつの『普通』は全然さっぱり普通じゃないことをそろそろ自覚した方がいいと思う。

夕飯は私が作った。とはいえ、あらかじめ材料は揃っていたので、カレーの中に由宇理が獲ってきた魚介類を放り込んだだけだ。さすがというかなんというか、食材が新鮮だけにとても美味しかった。

柄にもなく、こんな楽しい時間が続けばいいのにか思っちゃう

くらいに。

けれど……当たり前のことだけど、楽しい時間は長くは続かない。

「肝試しをしましょうですよ」

世間知らずのパツパラお嬢様がそんなことを言い出したのは、夕食が終わった直後のことだった。

一瞬だけ時が止まる。それから、何事もなかったかのようにテンが口を開いた。

「よし、それじゃあ明日も早いしそろそろ寝よう」

「寝る前にUNOでもやるツスよ、親友。あたしの腕前を見せてやるぜ！」

「はっはっは、甘いな由宇理。遊び空間に放り込まれたこの俺こと有坂友樹のフルパワーを知らないな？ お前はすぐに敗北の味を知ることになるだろう」

「はいはい。奇ノ森ぜつむさんは脱衣UNOとかがいいと思いまーす」

「気持ち悪い提案は即刻却下します」

「気持ち悪いはひどすぎるだろ、キツネ先輩！ 大体、今日一日は私に優しくしてくれるんじゃないのかっ!？」

「優しくするんじゃないかって普通に予定だったけど、やっぱり却下。普通にしてもちっとも面白くない。むしろ怖がられてかなりショックだったし」

「……いや、だって怖いもの。リアルホストだったもの。残酷に優しいもの」

「あー……それはよく分かるツスよ、探偵。確かにキツネって普通に女の子に接してるとリアルホスト以外のなにものでもないツスね」
「友樹、僕はわりと女の子に優しくしたい男だけど、こいつらはフルパワーでぶん殴っちゃっていいよね？」

「すまん、親友。フォローできない」

全く持つてその通りだ。私もフォローしろと言われれば『不可能』と答えるだろう。

さて、全員和気あいあいとしているように見えるけど、その顔には『遊び疲れたもう眠いつていうか肝試しとか正気じゃねえ』と書かれている。もちろん私も同意見だ。

廃村。海岸近くの村。土地勘ゼロ。周囲は電灯すらない。

下手にうるつけば遭難すること間違いなしのこの状況で、肝試しなんてできるはずもない。

ちらりとアンナちゃんの方を見てみたが、にこにこ笑ったままだった。

……まるで、『余裕こいていられるのも今のうちですよ』と言われんばかりだった。

「みなさん、こんな話を知っていますか？ 実はこの村には……」

「はい、みんなちゅーもーくっ！ これからなんかこう、旅行にありがちな恥ずかしい暴露話大会を始めるから！ べ、別に肝試しが嫌だとかそういうことじゃないんだから、勘違いしないでよね！」

「一番、刻灯由宇理！ 一週間くらい前にキツネに全裸を見られました！」

「なんてことだ親友。まるでギャルゲーの主人公みたいじゃないか。気持ち悪いから今すぐ死んでくれよ！」

「黙れ、メイドの尻に敷かれているばかり白髪。そもそも由宇理の生活態度がフリーダムすぎるのが悪いんだろうが。つーか、なにかといえはすぐに家出するな」

「……いや、なんていうか四季さんと香純はモノの愛し方が異常だね？ 家出しないとやってらんないツスよ。昨日なんかあたしが二日家を留守にするってだけで刃物で」

「二番、有坂友樹！ 嬉し恥ずかし初恋の告白を親友に見られました！」

やばい話になると思ったのか、咄嗟に友樹が話題を変える。

……話題を変えるのはいいけど、思った以上に恥ずかしい思い出

だった。

「いやね……ホント、あの時は死のうと思ったぜ。こいつものすごい笑顔で全部見てるんだもん。いくら温厚な俺でもね、限度つてもものがあるから」

「そんな美味しいシーンを見逃す馬鹿はいないだろ？ あの時の告白は今もばーちゃん家に永久保管してあるから安心してくれよ」

「……あのさ、親友。そろそろ俺、親友とかやめていいかな？」

「馬鹿を言え。お前だって僕の初恋の人とフツーに付き合ってるじゃねえかコノヤロウ。お前と僕は一蓮托生。……絶対に逃がさないから覚悟しておけよ？」

「……………」

友樹はがっくりと膝をついた。それはどうしようもない絶望だった。

まあ、これはこれで友樹も悪いからある程度は仕方がないような気がするけど、テンの場合は初恋とか一切関係なく友樹をからかうことに命を賭けているところがあるので、なんにしる性質が悪い。

と、ここでさすがに痺れを切らしたのか、アンナちゃんはゆっくりと溜息を吐いて、私たちを睨みつけた。

「なにを勘違いしているのかは知りませんが、私は単に恐怖体験がしたいだけです。肝試しても百物語でも、背筋が寒くなればどつちでもいいんですの」

「あ、そうなの？ なんだ、てつきりアンナさんのことだから『サバイバル肝試し』とかなんとか訳の分からないことをやらかすんじゃないかと心配になっちゃったよ。でも肝試しだろうが百物語だろうが、恐怖体験だけは絶対に嫌だ」

「奇遇だな、親友。俺もジェットコースターとお化け屋敷だけは勘弁だぜ」

「……先輩たちに限らず、男の人ってそーゆーの苦手だよ。そういえば、昔、ダムに沈む予定の村があったんだけど」

「ははは、藤原。嫌だって言うてるのになんの脈絡もなく話し始め

るのは本当にどうかと思うぞ？ 殺されても仕方のない所業だ」

「その通りだぞ、藤原。いくら俺でも今のはちよつと我慢できなかったな」

「ふごおおおおおおおおおおおおおっ！」

高校生なのに、女子に向かって四の字固めと腕ひしぎ十時固めをかける男が二人。

というか、本当にあんたら大人気ないにも程がある。

さすがにこのまま放置すると藤原ちゃんが殺されかねないので、仕方なく私は口を開いた。

「まあ、肝試しくらいはいいんじゃない？ 二人一組で行動すればとりあえず問題はなさそうだし、場所も放置された神社だったら迷うこともないし」

「うーん……別にやるならやるでいいけどさ、殺人鬼とか出てきても知らないよ？」

「有坂先輩。本当にキツネ先輩はどういう人生を……」

「あーあ、言葉って本当に不自由だよなア」

友樹は藤原ちゃんと目を合わせなかつた。私もその一端を知っている人間なので、思わず目を逸らしてしまう。

本当に……高倉天弧って男は不遇な人生を歩んでいる。

ちよつと行き過ぎたところもあるけど、基本的には普通にいい奴だというのに。

思わず冥ちゃんを任せたくなくなってしまふほどに……いい奴だっというのに。

まあ、性格がどーしようもない位にひねくれてる所と、女運がかなり微妙なのがネックなんだけど。

「舞？ なんかものすごく腑に落ちない表情してるけど、どうかした？」

「別になんでもないわ。ほら、さっさとチーム分けして、肝試しするわよ」

「殺人鬼とか出てこないといいなあ」

「いや、出るわけないから」

こんな廃村の中を殺人鬼が歩いていたら、正直引く。空が落ちてくるくらいにありえない不安を抱えているテンをなだめながら、私たちは肝試しに興じることにした。

この時は、あんなことになるなんて思ってもみなかった。

あんな風にトモダチと馬鹿騒ぎした時代が、私にもありました。ちよつとだけセンチメンタルな気分になってしまうのは、私が歳を取ったからか、それともトモダチとは言えない同居人が多数増えてしまったせいで、友情というものに飢えているからか。それはちよつと判断できなかった。

「お化け役で鬼を雇うつてもアレだねえ……世も末かもね。お金持ちの考えることはつくづくよく分からないなア」

廃村から離れること十数メートル。森の中の隠れ家というより、猟師のベースキャンプのようなところに陣取って、私は口元を緩めた。

「じゃ、次はえつと……雌豹のポーズで背筋を強調する感じで」

「嫌だああああああああああああああああああああ！」

涙目になっているのは、鬼役で雇われた私の同居人こと鬼末真とおにすえまこという不吉な名前を持つ可愛い女の子。いつもはライダースーツにポニーテールという色気もへったくれもない格好なのだけど、今日は黒ビキニに鬼の角というコスチュームプレイをさせてみた。

んー……女性同士ってのはかなりアレだけど、涙ぐんでる顔を見るともつといじめたくなってしまう。ちゅーしてえ。

「まこちー、わがままは駄目だよ。ただでさえまこちーの趣味はお金にならないんだから、こつやつて体を切り売りしてお金を稼がないと」

「これは絶対に違うよ！ それに、私はちゃんとお金は稼いで……」
「それが私に還元されなきゃ、同じ事なんだよ？」

にっこりと笑うと、なぜかまこちーは恐怖に顔を引きつらせた。
嫌だなあ……そんなに怖がられると、ますますいじめたくなっちゃうじゃないか。

やらないけどね。まこちーは恥ずかしがらせてこそ輝く女の子なのだから。

「お財布はおにーちゃんがほぼ握ってるし、手っ取り早く500万円ほど欲しかったから仕方がないと言えばそうだし……ま、今回は色々と仕方がないってまこちーも納得してくれたじゃない？」

「いや……そうなんだけどさ、だったら私に全部任せて、ミナは家で待って」

「それじゃあ意味がないんだよね。というか、まこちーは情緒に欠けるから」

「じよ、情緒に欠けるって……」

「この前、おにーちゃんが酔い潰れた時に軽々担いで部屋に放り込んでたでしょ？ 実はおにーちゃんが吐くほど酔う時って、大抵誰かに慰めて欲しい時なんだよね。ま、おにーちゃんのことだから、どーせ不幸な女の子でもぶっ殺して鬱になつてたんだろーけど」

「……あの、ミナ。その言い方はさすがにちよつと……」

「事実だもん。言葉を曲げてても変えても、事実が変わりはしないよ」
「……」

まこちーは思い切り口を引きつらせていた。

自称魔法使いのくせに、とても甘々な思考の持ち主。それが可愛いとこころではあるんだけど、そこは私とは相容れない。

嫉妬深く凡庸な私は、現実を受け入れる以外に戦う術を知らない。「人はね、甘えたいし愛されたいし求められたいの。おにーちゃんだって、私の従姉だって、金髪さんだって、おばかハツカーさんだって、まこちーだって、私だってそれは変わらない。人によってその合図が違うだけ。……特に、おにーちゃんは昔から『自分にしか

できない』とかなんとか調子こいちゃって、そのぶんだけ負担を背負って、誰にも頼らず、誰にも求めず、一人で続けてきたから、今苦勞してるんだよ。それは自業自得で同情の余地は一片もない」

「……そんなことはない、思う」

「うん。私も本当はそう思う。でも、私は責める側の人間だからね」
あの馬鹿兄貴の周囲には、兄貴を責める人間が一人もいない。
だったら、身内である私が責めたって別に構わないだろう。

両親のうっかりミスで生まれてしまった私が、血の繋がっていない家族の咎を責めるのはお門違いかもしれないけど……それでも、責め立ててやらなくてはならない。

責任は取ってもらおう。

「じゃ、そーゆーことでさくつと行ってくるよ。一人ずつ拉致するから、まこちーは見張りの方をよろしく」

「……え？ あ、ちよつと、ミナツ!？」

徒手空拳の無手で小屋を飛び出す。武器はその辺で調達すればいいだろう。

せつかくのお化け役だ。若人にリアルな恐怖つてものを叩き込んであげよう。

せいぜい……足掻いてもらおうとしよう。

Aランクエンディング・舞編：今、ここにいるばかりか。END
Aランクエンディング・彼編：いやいやちよつと落ち着こう。に

続く

おまけ：次回予告。

相川美奈子は大魔王である。

こことは一切関係のない某物語で世界ごとおにーちゃんをぶつ殺

そうとした逸材で、当時は嫉妬が行き過ぎたヤンデレであった。

しかしそれから数年。恋が冷めて熱も冷め、おにーちゃんのこと
は凶悪に好きと言えば好きだけど、それでも世界と引き換えにする
ほどのもんじゃないよねえと、客観的な視線という大人になるため
に重要なものを獲得した後、やれやれと肩をすくめながら責任の多
重債務に喘ぐおにーちゃんを横目で見ながらにやにやしている女に
なった。

そんな彼女は、現実的である。

夢見がちどころか夢を見ない。金で命が買えることも知っている
し、命が金で買えることも知っている。命の重さに差があることも
知っているし、魂に意味がないことも知っている。感情として納得
出来ない部分も多々あるが、その納得出来ない部分を理性で握り潰
せるといふ、怖気が走るほどに現実直視型の人間で、幻想を真正面
から打ち砕く女だ。

ある意味、人の究極系の一つである。

そんな彼女はいつも通りに問いかける。

嘔吐きの天敵である彼女は、勇者と愚者に問いかける。

「で、君たちって結局のところお互いのことをどう思ってるの？」

嘘も吐けず、意地も張れず、虚飾すらも意味を成さず。

人としてあるまじき、全てを晒しあう戦いが今始まるうとしてい
た。

次回、Aランクエンディング・彼編：いやいやちよつと落ち着こ
う。

意地汚く、意地悪く、傲慢で、明け透けな人間の方が得をするん
だよ。

舞エンド：今、ここにいるばかり（後書き）

どうやってあの二人をくつつけるか考えるのにリアル時間で一ヶ月かかった。

物語中でツンデレツンデレ言われている黒霧舞嬢だが、実際のツンデレは彼女ではない。黒霧舞という少女はただ意地っ張りで、好意を隠すのが上手く、自分より妹を大切にしているだけである。いざとなれば、この女ほど潔い女もいない。

本物のツンデレは別にいる。

次の物語は、そいつを口説き落とすまでの物語である。

舞エント結 彼編：いやいやちょっと落ち着こう（前書き）

やっちまった。本当に不定期すぎる。一ヶ月単位でチェックしている方はちよつと損をするほど早く仕上がってしまった自分の馬鹿さ加減に嫌気が差します。

しかも長い。携帯で見ている人はパケット代注意。下手を打つとえらいことになります。

舞エント結 彼編：いやいやちょっと落ち着こう

注1：下らない前置きを試してみよう。

注2：この物語のヒロイン、高倉天弧は生粋のツンデレである。

注3：実際のところツンデレというものは『落差』や『ギャップ』に属する定義だろうと作者は思っている。最初の印象は最悪で、その後もわりと印象は良くなり喧嘩を繰り返し、なぜかある時を境に属性が反転する。その落差を総称してツンデレと呼んでいるらしいが、ここから先は様々に派生し、系統化され、よく分からない力オスなことになっているので、調べたい人はネットでツンデレを調査してみるといい。近年生まれた言葉でここまで爆発的に広がった言葉は萌えとこれくらいなもんだろう。ちなみに、田山はそれらの言葉はあんまり使わない。姉貴曰く『萌えつてのは言葉にならない魂の叫びを無理矢理言語に置き換えたもの』だそうなので、肝心な時に使おうと思うそだけど。

注4：話は脱線したが高倉天弧は生粋のツンデレである。屋敷にいる時にはほぼ全員にデレているのであまり詳しい描写はしていなかったが、こいつにもデレる前のツンという状態が存在する。コツコ嬢に対しては命を助けられる前、冥嬢に対しては命を賭して自分を助けてくれた時、舞嬢に対しては自分に説教をしてくれた時、京子嬢に対してはほぼ初対面から（可愛い＋格好いいでほぼ一目惚れ状態）、美里嬢に対しては自分をぶん殴った時、由宇理に関しては一見して馬鹿女だと思った女性が思ったよりもいい奴だと認識できた瞬間となっている。由宇理を例に取れば分かるが、実際デレる前の状態は惨憺たるものだ。女性扱いしているかどうかも怪しいところだろう。

注5：さて、ここで少し原点に立ち返ってみる。疑問を解くコツの一つは、まず疑問を抱くこと。伏線を見抜く力というのは物語を楽しむ力でもある。

注6：そもそも、なぜ高倉天孤は女性が苦手なのか？ 母親のせいか、師匠のせいか、コッコ嬢のせいか、他の要因が絡んでいるのか、それとも……全部が要因か。

注7：忘れてはいけないのはコッコさんつづあいの語り部は嘔吐きであるということ。そして、嘔吐きに限らず人間は時として無自覚に嘔吐を吐くということだ。

注8：では、予備知識を得たところで物語を開幕しよう。

注9：これは、勇者が愚者と語り合うだけの物語。

注10：難易度は毎度のごとく最強。相手は20年に渡り平気の平左で嘔吐を吐いてきたプロフェッショナル。そんな愚者を真正面から言い負かせば閉幕となる。

注11：まあ、嘔吐だけ。

エンディング条件。

・前置きが済んだところで、さらに前置き。

・これまで散々『舞さんとのフラグ』というセリフを書いてきたが、ごめん。あれは輪をかけて性質の悪い嘘だった。

・さらに付け加えると舞嬢との間にそもそもフラグなど存在しない。Sランクエンド以外のあの野郎に勇者を口説く甲斐性など存在しない。つまり、天孤 舞というラインはどう足掻いてもくつつくことはないのである。

・少しだけ悩んで、仕方なく相川ハーレム（地獄の総称。全ての悪意がここに在る場所）から一人の大魔王にご登場願った。相川ハーレム（人が存在できない世界。悪夢のように苦くて甘い場所）はあまりに濃すぎる人たちで構成されているために、現在ほんのちよつとずつ手直ししている猫日記くらいに濃い物語じゃないと登場できないのだが、なんかもう面倒だ。手っ取り早く説得してもらおう。

・いやまあ説得っていうより脅迫なんだが。

・Sランクエンディングではフラグが成立しているが、あれはこの

物語の亜流の経緯を経て大喧嘩の末デレに至ったと思いいねエ。

・まあ、喧嘩するほど仲がいいってコトで一つよろしく。

以上を踏まえて、ご覧下さい。

Aランクエンディング・彼編：いやいやちょっと落ち着こう。

五年前、こんなことがあった。

知り合いのにーちゃんに、どうしようもない男がいる。

その人は、僕から見てもわりとよくできた人で、オールマイティのさらに上を行く性能を有する男の人で、章吾さんに匹敵するんじゃないねえかってくらいに優秀な人だった。

なにをやらせても上手にこなし、なにより間合いの取り方が絶妙に上手い。母さんが世界最強ならその人は精緻の極限。力ではなく技術で最強に匹敵する達人だった。

ある日、にーちゃんはいきなり僕の家に来て、いきなり土下座をした。

なんでも惚れた女を助けるために、少しばかり遠出をしなければならなかったため、その間家族の面倒を見て欲しいとかなんとか。

美しい話に僕はあっさりとは快諾し、にーちゃんが戻ってくる間、その『家族』というやつ世話をする事になった。

世話といっても家事全般ということだったので、実際のところ大したことはないだろうと踏んでいた。家族構成は話してはくれなかったけど、まあなんといいっても『家族』のことだ。他人に話しづらいこともあるだろうと思つて、僕はあえて聞かなかつた。

最初から最後まで、僕がよく話を聞かなかつたのがまずかつた。

いや、あれだけの詐欺に遭つたのは生まれて初めてだったね。冗

談抜きで。

にーちゃんの言う通り、確かに用件は『家族』の世話だった。血の繋がらない妹。少々兄に傾倒する傾向あり。刃のように鋭い従姉。口から出るのは毒ばかり。

金髪の他人。にーちゃんとの共通点は殺害テクニクのみ。

黒髪のハツカー。家を度々留守にしては迷子になる超問題児。

いや……ないよね？ どう考えても、ないよね？

知り合いを虎口に放り込む人間がいるか？ どう考えても土下座程度じゃ割りに合わない。明らかに僕に殺意を抱いているようにしか思えない。

が、約束は約束だ。仕方なく僕は割り切ることにした。僕はあくまで『家政夫』として雇われたのであつて彼女たちとはあまり係わり合いのない人間だ。絶対に、確実に、間違いなく、にーちゃんには慰謝料を請求するけど、今はとにかく耐え忍ぼう。にーちゃんが帰ってくれば地獄は終了。僕はまたいつもの日常に戻るって寸法なわけだし。

とにかく、無関心を貫こうと決心した。

「下着を玄関に放置する女がどこにいるんじゃないやああああああああああああああ！」

30秒で挫折した。

にーちゃんの家族は、毒女を除いて家事が出来ない人たちだった。全員に10分程度の短い説教をした後、脱ぎ捨てられた服をかき集め、かなり嫌だったが洗い方と色別に洗濯機に色別に放り込み、大きなゴミと思われるものは全てゴミに放り込み、小さなゴミは例外なく掃除機で吸い取り、雑巾がけをして窓を拭いて、トイレや風呂場も完璧に綺麗にしたところで僕は疲れ果てて倒れ込んだ。

「テンちゃん、ご飯まだ？」

年上の女性をぶん殴ってやるうかと思つたのは久しぶりだった。

全員の好みがバラバラかつ、全員が自分の主張を譲らない連中だ

つたため、仕方なく僕は間を取って、僕が好きなものを作ることにした。当然のことながら全員からブーイングを受けたが、『これ以上なんか言ったら夕飯抜き』という言葉にはさすがに渋々従ってくれた。結局、作ったものは全部食べてくれたので、味は気に入ってもらえたらしい。

「テンちゃん、明日の朝食は手作りフレンチトーストとかがいいんだけど」

「材料があれば作るけど、もう卵はないよ」

「買ってきてよ。牛乳も今ので切らしちゃったから、よろしく」

「あ、テン。ついでに生理用のナプキンもお願い。そろそろだからにく。三丁目の角の店が安い。夕飯はすきやきがべすと」

「自分で買いに行けテメエら！ あと、さりげなく思春期の男が買っちゃいけないもん平然と頼んでるんじゃないよー！」

「……四の五の言っただけでさっさと買ってきなよ、クソ狐。君に分からない痛みを抱えてる人間の必死の訴えを無視するつもりかい？」

「あくむさん。分かったからアンタは寝てろ。貧血で顔真っ青じゃねーか」

「はっはっは……いやあ、ごめんごめん。……まじでごめん。嫌わないで。見捨てないで。この人たちの相手を一人するのは本当に辛いから！」

「いや、それくらいじゃ嫌わないから。むしろ顔が本気すぎて引くから。後でマッサージでもなんでもやってやるから、とりあえずお腹を中心に体を適度に温めて、安静にしといてください」

「わあ、テンちゃんやさしい。それってどう考えても口説いてるよね？」

「いや……ここまで弱ってる人間に対していつもの調子が出ないって、さすがに」

「えー？ テンちゃんって複数人の女の子に言い寄られて、にっちもさっちも行かなくなっただけで結局大好きだった年上の女性に裏切られ

「そんな顔してるよ」

「……え、なにその具体的だけど在り得ない未来予想図。そんな結末を想像しても、僕はこの世界に生を受けて以来、女の子にもてたためしはないよ?」

「それは女の子の見る目がないんだよ」

「テンみたいに便利な男の子、兄さん以外に見たことないわ」

「一家に一台」

「……ごめん、キツネ君。否定できない。君の便利さは異常だ」

「あつはつはつは……とりあえず今日だけで10発か。先が思いやられるなあ」

女性をぶん殴るわけにもいかなかったので、ストレスのぶんだけに「ちゃんをぶん殴ろうと心に誓った。

最初の一日で心が折れかけたが、に「ちゃんが戻ってくればなにもかもが元通りになると信じて、僕は家族の世話を焼き続けた。

に「ちゃんは、三週間ほど帰って来なかった。

「結局に「ちゃんが帰ってくる頃には五万発ほどぶん殴らなきゃいけない計算になってな、もう面倒だったから一週間死ぬほど奢らせる程度で済ませたんだ。……うん、親しい人に500万円ほど奢らせたのはさすがにやりすぎだったかなって少し思った。後悔はこれっぽっちもしてないけど」

「あ、流れ星だ! 田舎は空気が綺麗だから星も綺麗だね」

「おいおい藤原。怖いからなんか胸に残った思い出でも話してくれって言ったのはお前だぞ? ちゃんと、僕の人生の一端を聞いておくように」

「そんな香ばしい思い出だったら聞かないほうが良かったですよ!」

肝試しとは別の意味で、藤原は涙声だった。

周囲は真っ暗というより『真っ黒』。懐中電灯は持ってきたが、頼りになる明かりが月明かりくらいしかないため、詳しい様子は分

からないけど、さぞかしいじめがいのある顔をしているんだろう。

殺人鬼が出てこない闇夜はそれなりに慣れているため、僕はサクサクと歩みを進めるが藤原は僕の腕にしがみついたままおっかなびつくり歩いていた。

「うう……薄々予想はしてたけど、こんなに酷い人生を歩んでいるとは思わなかった。ある意味お化けより怖いよ。先輩の人生はどう考えても波乱万丈どころじゃない。最初からクライマックスだ」

「予想してたんだったら聞かないで欲しかったな。残念ながら、僕は人に自慢できるような人生を歩んでないんだよ」

「……じゃ、じゃあなんかこう恋愛みたいな甘酸っぱい思い出とか」
「……………」

特にないな。

いや、困った。本当はない。初恋と屋敷のことはあんまり話したくないから省くとしても、それ以外だと本当になんにもねえぞ。

と、ここで恋愛経験があまりないことを暴露しても良かったのだが、ふと気になったので普通ならあまり女の子に聞けないことを聞いてみることにした。

「で、そう言う藤原は誰かと付き合ったことってあるの？」

「ああ、まあ人並には。今は彼氏とかはいないけど」

あっさり人並とか言いやがったよ、この後輩！

別に女性と付き合ったことがないってのはコンプレックスでもなんでもないけど……妙な敗北感がある。なんだか異様に悔しいぞ。

「先輩はどーせ女の子と付き合ったりしたことはないんだろ？」

「いや、確かにないけどさ。……断定されるとさすがにちょっと悲しい」

「断定もするさ。先輩って、そもそも女の子苦手だしね」

藤原が言い放った言葉は疑問ではなく、まごうことなき断定だった。

僕の腕にしがみついている藤原を見ると、彼女はいつも通りにつこりと笑っていた。

月光でもはつきり見える透き通った瞳で……僕を見つめていた。
「うん、今だから言ってしまうけど、私は先輩のことは気持ち悪い
と思っていた」

「藤原。さすがの僕もフルパワーで怒るぞ？」

「仕方がないよ。……先輩は、私の理解の範疇を軽々越えてたんだ
から」

白髪と眼帯と着物。三人合わせて三馬鹿トリオ。

白髪も着物も高校生とは思えないスペックを誇っていた。誰も追
いつけず、誰も届かず、誰も追従できない。だから馬鹿をやっても
許される。それだけの力がある。

でも……眼帯は、高倉天弧は違った。

普通のくせに、他の二人にあっさりとついていくことができた。

「三馬鹿って言えばウチの高校だともものすごく有名だから、少しだ
け興味を持った。友樹先輩と刻灯先輩については『段違い』だった
から有名になったのも納得できるんだけど、高倉先輩だけはどこま
でも凡人だったからね。……そこだけは納得できなかった」

「藤原が納得できようができませんが、結局のところ『段違い』って
のはその程度のもんだってことだろ。スポーツじゃあるまいし、僕
らはわりとあやふやなルールの中で戦ってるんだから、その中でな
んとかすればいいんだよ」

「……それが出来る人間が、何人いるかな？」

「そこまでは興味はないな。僕は僕の世話だけで手一杯だ」

前は余裕のあるふりをしていた。無理をしていた。

今は違う。……僕は僕だけで手一杯で目一杯だ。余裕なんてあり
はしない。

藤原は僕の言いたいことを既に分かっていたのか、苦笑を浮かべ
るだけだった。

「うそつきなんだね、先輩は」

いつかどこかで、そんな言葉を聞いたような気がする。

いつかどこかかっていうか、わりとつい最近。遊園地でその言葉を聞いた。

そう……僕は嘔吐きだ。一流の嘔吐きで、嘔を嘔だと見抜かれてしまう言ノ葉使い。

嘔を吐くには才能が要る。僕には才能が欠けていた。それでも嘔を吐いた。

自分は大丈夫だと言い聞かせて嘔を吐いて、破綻した。だから、今回はちゃんと笑った。

「うん。僕は嘔吐きだ。これからも都合の悪いことには嘔を吐くよ。いつも通りに」

「都合の悪いことって?」

「人には言えない色々。自覚はあるけど他言はしたくない本性とかね」

破綻したことで自覚が芽生えるってのも嫌な話だけど、少なくとも考える時間が増えたおかげで、僕自身の願望ってのが多少は見えってきた。

いっばいっばいだった頃には見えなかったものが、悩みを重ねていくうちにほんのちよつとずつだけど、見えてきた。

他言できないほど恥ずかしいことだけど……それでも、分かったことがある。

「最近分かったのは、女性の苦手な僕に誰かと付き合ったりとかホント絶対に無理ってことなんだけどね。主従関係ならぎりぎりいけるくらいで」

「恋愛より絶対に主従関係のほうが難しいと思う! 先輩は色々おかしいぞ!」

「ハ、なにを言う。僕のような嘔吐きでひねくれ者を好いてくれるような女はこの世には存在しない。一家に一台あれば便利程度の男だからな」

「その発言は私に対する挑戦と受け取っていいんだな?」

藤原は顔を真っ赤にして叫んだ。

そこで、僕はなんだか奇妙な違和感に気づく。

あれ……なんか今、聞いちゃいけない言葉をうつかりミスで聞いてしまったような気がするけど、いやいやまさかな。ないだろ。ないさ。ないに決まってる。

「……先輩。なんだか呆けたような顔をしてるけど、まさかこの期に及んで全然気づいていなかったとかそういうことはないよね？」

「あっはっは、大丈夫だ。ちゃんと気づいているよ。……地球は僕たちみんなを守っていかなきゃいけないことくらい、ちゃんと気づいているさ」

「セ・ン・パ・イ？」

うお、ものすごい闘気だ。さすがの藤原も今のは怒るか。

いや……だって仕方ないじゃん。自分のことを日常的にいじめてる男を好きになるって、そんなの絶対にありえないっていうか、完全にマゾヒストじゃん。

ちょっと待て。まさか本当にマゾヒストなのか？

「先輩。言っておくけど、私はマゾじゃない。単につり目のヘタレが好みなだけだ」

「藤原、僕らの友情は永遠に不滅だからな」

「結果はなんとなく分かっているけどさあ！　せめてちょっと悩むくらいは素振りを見せる馬鹿野郎！」

怒鳴られた上に頭を殴られてしまった。ちょっとだけ痛かった。

まあ、濁したり誤魔化そうとはしているけど、決して悩んでいないわけじゃない。相性は悪いわけじゃないし、僕も藤原が嫌いってわけじゃない。むしろわりと好きだ。

軽く考えるわけじゃないが、付き合ってみるのも案外悪くはないかもしれない。

「一応確認しておくけど、真剣なんだよね？」

「真剣だよ」

「それじゃあ、こっちも真剣に切り返していいってことか」

少しだけ溜息を吐いて、僕は目を細める。

友情に罅が入ってしまうかもしれないが、ある程度は仕方がない。それも生きるってことの一つだ。

「正直言っちゃうと、藤原のことは嫌いじゃないし、むしろ結構好きだし、付き合うのも悪くはないって思うんだケド……逆に、相性が良すぎるような気がするんだよ」

「いいことじゃないか」

「いや、そうでもない。人付き合いにおいて、ある程度の相性の悪さってのは必要なだと今は思ってる」

昔は思っていなかった。相性の良さが破綻を招くだなんて思ってもいなかった。

色々あったしそれだけが原因じゃないと思うけど、同じ失敗は繰り返したくない。

「例えばさ、僕はわりと好きな人に尽くすタイプの人間だと思う」

「ああ、それはよく分かる。正直異常だもの」

「いやまあ、異常か正常かはこの際置いておくけどさ、じゃあ僕と藤原が付き合うことになったとして、藤原はそれに耐えられる？」

「言われるまでもない。私がいちゃつき程度で動じるとでも？ 昼間は多少面食らったが、思えば『彼氏』として考えればあの程度は普通の範疇だ。むしろ先輩の方が私の可愛らしさに理性を決壊させると断言しようではないか」

「……………ふむ」

異性と付き合ったことのある人間は言うことが違う。これが舞あたりだったら顔を真っ赤にしているし、冥あたりだったら一歩引いているところだ。

うーん……………本当に面白いな、藤原は。もういつそ付き合っていていいんじゃないかって思えてきちゃうじゃないか。おっかないなあ。

「ん…………藤原がそこまで言うんだったら、ちよつとだけ試してみようか」

「はっはっは、女性と付き合ったことのない男が、今更私のなにを

「試すと？」

「だいすき」

「ひいあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああっ!？」

ちよつと耳元に囁いただけなのに、藤原は飛び上がって僕から距離を取った。

闇夜でも分かるくらいに顔は真っ赤だったし、ちよつと涙ぐんでいた。

「い、いきなりなんだ!? わ、私をこの場で殺そうという算段かっ!？」

「いや、ただの不意打ちだけど……なんだ、付き合ったことあるって言っても大したことないんだな。僕と付き合うとなったらこんなもん日常茶飯事なのに」

「っ……い、いやあ、そーゆーコトなら教えて欲しかったかな。ちよつとびつくりしちゃったじゃないか、うん。要するに高倉先輩のセクハラに耐えればいいんだろ？」

「いや、お試してみたいなもんだから藤原からなんかしてもいいけど？」

「なんかっ……な、なに？」

「藤原がそれに耐えられるんだっ……僕を自由にしていいいけど？」

「……い、いや。ちよつと待て先輩。それは一足飛びどころかワーブしてる! そういうのはもっとこう、仲が深まってからやることだ!」

「はっはっは、これは異なことを。僕は抱きつく程度だったら普通じゃないかと思うわけだが、藤原は『自由』という言葉から、なにを想像したのかな？」

「っ……っあ」

藤原は端から見ても分かるくらいに、慌てふためいていた。

自由って言葉からなにを想像したのかは藤原だけが知っているが

……まあ、恐らく僕の想像の範疇外の、とても口に出せないようなことだろう。

面白そうなので、畳み掛けてみることにした。

「それで……藤原はなにを想像したのかな？ 僕にはちょっと分からないんだけど」

「ち、違っただ先輩。私は決してそのようなことを考えたわけじゃなくて……」

「うん。それで、藤原はなにをして欲しいのかな？」

「あ……だから、その……」

顔を真っ赤にして俯く藤原は、まあ本人が言うほどではないにしろ、かなり可愛かったことはまごうことなき事実だった。

本当に可愛いなあ。もつといじめたい。このまま一生面白おかしくいじめてやるうかと思うくらいに、この先輩は面白い。

ただ……やっぱり相性が良すぎる。そこは本当に残念だ。

「ふっ」

「にゃあああああああああああああああああああああああああああ
ああっ！？」

耳に息を吹き込んでやると、藤原は尻尾に火がついた動物のように、一瞬で恐慌状態に陥った後、とんでもない速度であつという間に走り去ってしまった。

逃げていく藤原の背中が見えなくなったことを確認して、僕はゆつくりと息を吐く。

それから、後ろに振り向いた。

「殺人鬼はいなかったけど……大魔王はいたって感じかな？」

「おやおや、久しぶりだっというのに随分と失礼だね。テンちゃん」

「失礼なのはお互い様だよ。……ミナねーちゃん」

肩まで届く長い髪。黒のロングスカートに編み上げブーツ。なぜか『獄炎』と書かれた皮のジャケットを羽織っている。意地悪っぽい笑顔はいつものことで、人をいじめる時は口元がやや上の方向に傾く。人を食ったような女性。人を食ったような存在。嘔吐きの天

敵にして正義の仇敵。

彼女の名前を相川美奈子という。知り合いのにーちゃんの義理の妹だ。

「アンナさんのことだから、絶対になんかやってくるとは思ってたけど……まさかミナねーちゃんを雇うとは思ってなかったよ」

「雇われたのはまこちーなんだけどね。私もついでに雇ってもらったの」

「まこちーって……ああ、にーちゃんが連れ帰った鬼のねーさんか」
三週間後。にーちゃんが帰って来た時に連れていたのが鬼のお姉さん。

正直あんまり面識はないけど、相川ハーレム（泥のように甘い甘い空間。並の人間なら3秒で逃げ出す）で最も苦労している人で、最も常識人だとか。

…… かわいそうに。

僕が心の底から同情していると、不意にミナねーちゃんはにやりと笑った。

「いやいや、それにしてもテンちゃんが女の子を振る場面を拝むことができるとは、長生きはするもんだねえ。おねーさんはちょっとドキドキしちゃいましたよ?」

「別に振っちゃいないよ。……僕がこれからふられるだけのことから」

「うわあ、もったいない。私が男だったら速攻で付き合うよ?」

あの子ものすごく可愛いじゃん」

「……………」

「おや? もしかしてわりと真剣だった?」

「まあ……そうだね。僕には珍しく、わりと真剣に考えた」

苦痛を堪えて、口元を緩めて、僕はゆっくりと息を吐く。

分かっているさ。分かっている拒絶した。心が痛むのを覚悟の上で、僕は藤原を拒絶した。拒絶しなければいけないと……自分で決めたんだ。

相手のことが分かるから、拒絶しなきゃいけないと思った。

「私には分からないなあ。あのままラブラブに突入すればいいーじゃん？」

「そうもいかないよ。……多分、藤原は傾倒しちゃう子だから。甘えられる相手が見つかったらとことん甘えちゃう女の子だと思う」「それが悪いというわけじゃない。むしろいいことだと思う。」

ただ……僕とそういう女の子は相性が良すぎる。相性がいいから破綻する。僕が一年前に彼女を甘やかした時と同じように、終わりは無残なものになる。

藤原にお似合いなのは、常に誰かのフォローが必要な、そういう男がいい。少し頼りないけどやるときはやる。……そういう男がちよつと良いと思う。

藤原は、空気が読めるいい子で、頭の回転がものすごく早いから、ちよつと情けないくらいに男が一番しっくり来るような気がする。

まあ……僕の推測に過ぎないけど。

と、僕が少しだけ考え込んでいると、ミナねーちゃんはここにこ笑いながら言った。

「難しく考えすぎじゃない？ 恋愛なんてノリでいいと思うけどねえ」

「ノリで破滅一直線じゃ意味がないんだよ。僕は誰かを好きになったらとことん甘やかしちゃう人間だからね。こればかりは気質だからどうしようもない。……僕は好きな人に好かれたくて、嫌われたくないから甘やかすんだと思うし」

切った張ったの言った者勝ち。恋愛ってのはそんなものでいいと思う。

好き嫌いは仕方がない。僕らは人間なんだから好きになって嫌いになって、それが当然なんだと思う。

けど……好き合っている者同士が、好き合っているが故に破綻するのは、やっぱり間違っている。

「藤原のことは嫌いじゃない。むしろ好きだし付き合ってもいいか

もしれないとも思う。でも、それは僕の個人的な意見であって、客観的に見た場合に明らかな破綻が待ち受けていたとしたら……やつぱり拒絶するしかないって思ったから」

「苦くて酸っぱい男の意見ですなあ。テンちゃんもしばらく見ない間にそんな顔をするようになってしまったとは……眼帯とかも含めて、実におねーさん好みです」

ああ、背筋が寒い寒い。このねーちゃんは基本ちゃらんぽらんなくせに、どうしてこう時折猛禽類のような鋭い目つきができるんだろうか。

「きつちり考えた末での結論だったら、おねーさんは所詮他人だから特に言うコトはないけど……もしも、テンちゃんの人物評価が間違ってたらどーするの？ その藤原ちゃんはテンちゃんの思っているような女の子じゃなくて、もっとしっかりした子だったら」

「逃がした魚は大きかったと思って諦めるよ。僕の見目が見えなかつたってことだろう」

「なるほどなるほど……相変わらずの諦め上手。そこはちょっと羨ましいかな」

猛禽類のように目を細めて、ミナねーちゃんはにっこりと笑う。背筋が凍える。ゾクゾクと寒気が駆け上がる。

「でもね……ほんのチョッピリ、気に食わないね」

ミナねーちゃんこと相川美奈子は、苦しい恋愛を続けてきた女だ。恋する相手は義理の兄という時点でわりと修羅の道なのに、その兄貴にはたくさんの女が言い寄ってくる始末。

壮絶な死闘の末に和解したらしいが、その経緯を僕は知りたくもない。

「特に『客観的』ってあたりが気に食わないなあ。恋愛なんて二人の主観的なものでしかないわけだし、将来の破綻なんてどーでもいいじゃない。今が幸せなら」

「いや……さすがにそういう刹那的な考え方はちょっと」

「恋愛なんて勢いだよ。それ以上でも以下でもない。人を愛するのは難しいけど、恋をするのは極めて簡単。誰もやらないだろうけど、試しに若い年代の男女をストレスのない環境に閉じ込めてごらんよ。よほど相性が悪くなければ、恋愛は成立すると思うけど？」

「ミもフタもないことをきっぱりと言い放つ。」

あまりにも残酷な発想だったが、ミナねーちゃんは顔色一つ変えなかった。

顔色一つ変えずに、明快に、明朗に、妖艶に、奇矯に、口元だけで笑った。

「うん、やっぱり気に食わない。気に食わないから尋問するね」

「っ!？」

「尋問されたくなければ、逃げるといいよ。まあ……無理だろうけど」

言いながら、ミナねーちゃんは僕に向かってダツシュをかける。相川美奈子は大魔王だけど、その身体能力は普通の女性程度に留まる。舞や由宇理のような特殊能力もない。思い切り人をぶん殴って気絶させる程度はやれるだろうが、僕を一瞬で拘束してしまうような技能は持っていない。

それでも、僕は一寸も油断せずにミナねーちゃんを迎え撃つ。

この人は本当に、なにをしてくるのか分からない。

「私、実は妊娠三ヶ月目に突入」

「え？」

信じられない言葉を聞いて、僕は一瞬だけ油断した。

その一瞬が命取りだった。

「ま、嘘だケドね」

どこから取り出したのか、砂の詰まった皮袋でぶん殴られる。一発じゃなく、二発三発と頭を容赦なくぶっ叩くミナねーちゃんに、僕は成す術がなかった。

五発目で目の前に火花が散って、僕の意識は闇に消えた。

テンと藤原ちゃんが一緒に出てから十分後、私と由宇理は手を繋いで歩いていった。

本当は手を繋ぐ必要はないんだけど、私はテンや由宇理や冥ちゃんのように夜目が利く方じゃない。放浪生活をしたこともあるけれど、危険な上に街よりも食料の入手が困難と思われる、夜の山には決して近寄ろうとはしなかった。

というか……幽霊とかは別に信じてないけど、ここの暗いやつぱり怖い。さつきからアンナちゃん仕込みのどつきりびっくりギミツクが発動しまくってるわけだし。

さすがに、地面から一斉に腕が生えてきた時は心臓が止まるかと思っただ。

そんな恐ろしい闇の中を、サクサクと由宇理は進んでいた。

「んー……やつぱり肝試しっていつでもあんまり面白くはないツスねえ。これなら枕投げでもしてた方が良かったかもしれないなあ」

「……そ、そーね。あはは」

「舞ちゃん。別にテンはいないんだから、こんな所で見栄を張らなくていいんすよ？」

「なんでそこでテンの名前が出てくるのよ？ いや……まあ、普通におっかないんだけどさ。いきなり生首が振ってきたりとか。あれってアンナちゃんの仕込みよね？」

「……うん」

由宇理は目を逸らした。決して私と目を合わせようとはしなかった。

「なんだか顔も真つ青だけど、私はなんか悪いことを言っただろうか？」

「ま、まあ、アンナちゃんの仕込みはどーでもいいとして！ 舞ちゃん、最近なんか面白いことあった？」

「面白いことはないけど、不愉快なことならかなり」

「キツネに下着姿見られたこととか？」

「アンタの愚痴に付き合わされる方が、かなりしんどいんだけど。テンは……まあ、食事とか作りに来てくれるし、昔ほど不愉快じゃないわ」

「昔って……あんまり知らないけど、キツネの屋敷があつた頃？」

「そう、その頃」

元々、テンのことを利用しようと思つて忍び込んだ屋敷だったけど……結局テンには全部お見通しだったり、お見通しだったくせにあえて見逃してたり。

執事長こと新木章吾さんが辞めてからは、色々ときつい仕事を押し付けられたりしたし、あまりに辛くなつた時はテンに八つ当たりしたりもした。

ホント……色々あつた。テンが甘やかしたあの人のことも含めて、色々。

「ま、今じゃそう悪くない思い出かな。テンにとっては別かもしれないけど」

「そのキツネのことだけど、藤原ちゃんがこの旅行中に告白するってさ」

「……………へ？」

えっと、ちょっと待て。

今、なんか。全身が焼け爛れるだけじゃ済まない発言を聞いたよ。うな。

「いや……え？　なんでキツネ？　アレはないわよ。うん、あるかないかって言われたら絶対にありえないって。間違いなくないわよ。いい性格してるもん」

「いい性格しようが、性格が悪かろうが、少々つり目だろうが、絶対に悪い奴じゃないツスよ。ついでに優しいし」

「……………いや、それって長所なの？」

「長所ツスよ。世の中の女性はどう見るか知らないけど」

由宇理は不意に足を止めて、苦笑しながら私に向かって言い放つ。

「少なくとも……優しさに飢えた女には、あいつはちょっと刺激が強いッスね」

うっかり惚れてしまう程度には、刺激が強い。

そう付け加えてから、由宇理はゆっくりと溜息を吐いて空を見上げた。

なんとなく、その横顔が若干切なげに見えたのは私の気のせいだろうか？

由宇理は再び溜息を吐いて、それから不意に苦笑を浮かべた。

「と、いうわけなんだけど、舞ちゃんは思うッスか？」

「どうって……テンが藤原ちゃんを選ぶんだったら、別にいいんじゃないの？」

「ちなみに、藤原ちゃんが失敗したら次はあたしだったりするんだけど」

「あ、そうなの？ ……いや、ちょっと驚いたわ。あいつってもてるんだ」

「……………」

由宇理は不意に真顔になって、首を捻った。

「あのさ、舞ちゃん」

「ん？」

「前々から思ってたケドさ……舞ちゃんってもしかして、男を見る目とかさっぱり？」

「えらい失礼ね、アンタ。特に男には興味ないだけよ」

「逃げてー！ みんな逃げてー！ ブリザードが来ましたよー！

彼氏もいない女の余裕を見せているフリした寒い発言！ 夏場で肝試しとかやってる場合じゃねえー！！」

「どついたらるか、馬鹿女！」

さっきまでの切なげな表情はどこに行った！ それともあれは私が見た幻覚とか幻想とかそういう感じだったのか！？ なんかさっ

きから霧が濃くなってるし！

「舞ちんって本当にクールビューティで腹が立つツス。まさかシスコンの上にレズなのかっ！？ だとしたら、あたしはダツシュで逃げるしか他に生きる術はないツス」

「本当に殴るわよ、由宇理」

「や、まあ男は別にいなくても生きていけるケド、キツネはちょっと欲しいツスよ？」

「……むしろ、私はキツネが要らないんだけど。というか、テンはもう冥ちゃんのものだから絶対にアンタらになびくことはないと思う」

あの男は、良い意味でも悪い意味でも一途だから問題はないだろう。

が、由宇理は頬を掻きながら、ちよつと困ったような顔をした。

「ありや……やっぱり言ってるのか、キツネの奴。まあ、仕方ないと言えば仕方ないツスね。どう考えても無理難題だし」

「どーゆー意味よ？」

「実は……これがなんというか、一休宗純でも匙を投げるくらいのも無理難題だね。あたしもほとほと困ってるわけだ」

「いやだから、どーゆー意味よ？ アンタにしちゃ歯切れが悪いわよ？」

「その辺はキツネに聞いた方がいいツスよ。あたしの立ち居地じゃ、舞ちゃんの味方をするわけにもいかないし、かといって藤原ちゃんに肩入れするわけにもいかない。倍率は悪くない漁夫の利を狙わせてもらうだけツスから」

「だから……どういう意味？」

「そういう意味ツスよ。分からないなら言い直すけどさ……」

由宇理は不意に鋭い目つきになって、きっぱりと断言した。

「舞が要らないなら、キツネはあたしがもらう」

本当に、きつぱりと、はつきりと、真正面から、宣戦布告した。戦意のない私に対して、きつぱりと勝負を申し込んだ。

「舞ちゃんがもしも夏休み中にケリをつけられないのなら、あたしがキツネをもらう。舞ちゃんの妹さんもその辺は了承済みだし、あたしが望めば多分あいつは悪いようにはしないでしょ。……あたしたちは、親友だからね」

「……………」

親友だから。

仲が良いから。

恋人にステージが変わってもなにも変わらない。

トモダチでコイビトなだけ。

それだけ。

「由宇理は……テンのこと、好きなの？」

「友情って意味ではね。愛情ってのは良く分からない。好きなのか嫌いなのかなんでどーでもいいんすよ。あたしは、単純にあいつと馬鹿やってただけなんだから」

「でも、あいつには冥ちゃんか……」

いるはずだ。

いたと思っていた。

私の思いを見透かすように、由宇理は呆れたように笑った。

「隣にメイドがいりゃ、あたしもこんなことは言わねえッスよ」

「……テンはふられたの？」

「キツネに聞けつてさっき言ったッスよ。……言っておくケド、普段のあたしだったらなんにも言わずに搔っ攫うところッスからね。

これは、あくまで友情サービス」

頭をガシガシとかきながら、由宇理は思い切り溜息を吐いた。

「舞ちゃんが動かないとなんにもならないんすから、ちゃっちゃんと動くように。ホントはもうちょっと空気読んでくれると、キツネの様子がおかしいことに気づいたはずなんすけど、それは仕方ないッスね。あの男、隠し事とかやたら上手いし。と、いうわけで以上。警

告及び出血大友情サービス終了。上首尾にコトが運んだら何か奢るように」

「……………」
私は啞然としていた。

なんとなく分かった。テンが由宇理に甘い理由。甘過ぎる理由。テンが冥ちゃんに無理難題吹き込まれたから、夏休み明けまでにはきつちり助けてやるように。由宇理は、確かにそう言っていた。

いやいや由宇理サン……………あんた、ちよつといい女すぎない？

「分かったわよ。妹の不始末は私の不始末。テンには散々迷惑かけてるし、ここらでちよつと恩を売っておくのも悪くはないわ」

「売るのは恩だけで済めばいいんすけどねエ……………」

「……………」

由宇理の苦々しい表情に、私は悪い予感がした。

黒霧冥。私の妹。現在は……………えつと、なんかメイドになるために修行中。

ちよくちよく連絡は来るんだけど、なにをやっているのかは未だに釈然としない。

と、私がこつそりと溜息を吐いたとほぼ同時だった。

「おや？ ねえ、舞ちゃん……………あのプレハブ小屋、なんか明かりついてない？」

「ん……………？ いや、全然見えないけどプレハブ小屋なんてあるの？」

「うん。肝試しのルートから外れた場所に、木々に隠れて目立たないようにプレハブ小屋が建ってるんだけどさ、昼間見た時は人はいなかったはずなんだけど……………」

「仕込み役の人たちの休憩所なんかじゃない？ さっきだって下半身のない落ち武者がものすごい匍匐前進で追いかけてきたじゃない。金持ちに雇われるのも大変よね」

「……………うん。そうだね。大変だね」

由宇理は思い切り顔を逸らして、平坦な声で相槌を打った。

やっぱり由宇理も怖いんだろうか？ 怖いならいつそ、怖いと言

つちゃえば楽になれるのに。由宇理も案外意地っ張りだ。

「んー……なんか腑に落ちないツスね」

「どういうこと？ ただの休憩所ならそんなに気にすることもないでしょ？」

「腑に落ちない根拠その1、キツネのくせに争った痕跡がない」

「へ？」

「腑に落ちない根拠その2、キツネのくせに拉致された形跡あり」
私は夜目が利かない。由宇理は月明かりでも多少は夜目が利く。

そう、私には見えないけど、由宇理は『男性を引きずった形跡』
を視ている。

「由宇理。それってもしかして毎度のことだけだ」

「そうツスね。……どうやら、また面倒なコトになりそうな感じツ
スよ」

由宇理と私は同時に溜息を吐いて、肝試しのルートから外れて歩
き出す。

全く、お姫様じゃないんだから毎回毎回面倒をかせさせないで欲
しいもんだ。

この時は……そんな呑気なコトを考えていた。

「ねえねえ、テンちゃんって好きな子とかいるの？」

「いるよ。わりとたくさん」

鮮やかなフライパン捌きでオムライスを作る高校三年生は、当た
り前のような顔をしながら最低の返答で切り返してきた。

テンちゃんをベースキャンプに運んですぐに、私はお腹が減った
のでテンちゃんを叩き起こして夕飯を作るようお願いした。テン
ちゃんは呆れたように口元を引きつらせていたけど、『あり合わせ
の材料でいいならね』と言いながら、自分を袋叩きにした相手に対
し謝罪を要求することもなく夕飯作りに取りかかっている。

うわー。やっぱいい男の子だなあ、こいつ。ちゅーしたい。

「あ、あの……ミナ？ 眼帯の彼は一体何者？」

私が男子高校生のエプロン姿にわくわくしていると、不意にまこちーに袖を引つ張られた。ちなみにまこちーは未だに鬼のコスプレをしたままだったりするので、不安げな表情がさらに可愛らしい。

「ああ。そーいえばまこちーは知らなかったね。あの子の名前は高倉テンコー。見ての通り一家に一台あれば便利な男の子だよ」

「勝手に伸ばさないでよ。それだとマジックが得意な人になっちゃうだろうが。天下の天に円弧の弧で天弧。なんか狐と良く間違われるけど、弓に瓜で弧の字だから。父さんの提案で、普通に『狐』の字だと面白くないから、丸くなった狐と三日月のイメージからこの字にしたんだってさ」

「ほうほう、なるほど」

そりやまた随分とロマンチストな父親さんだ。実に羨ましい。

こつちなんで、浮気しまくってあつちこつちに愛人作った末に海外に逃げて戻ってこないっていうのに。

まあ、父親と言っても血は繋がってない。そもそも私は養子なのだ。

養子じゃなかったらもーちよつとましな人生になっていたと思うんだケド、それは言わないお約束ってやつだろう。底辺には底辺の楽しみ方ってのがあるもんだし。

たとえば、食事前のビールとかはもう至福以外のなにものでもないわけだ。

「真さん、卵の具合は半熟と完熟どつちがいいですか？」

「あ……えつと、どちらでも。強いてあげれば半熟が好きかな」

「いやいや、まこちー。オムライスの卵は完熟以外は断固として認められないね。あと、オムライスの他に鳥の唐揚げとか食べたいな」

「じゃ、半熟でいいか。鳥の唐揚げは胃が重くなるから却下」

「こらこら天の字。人の意見を無視するのはよくないと思うよ？」。

「ハイハイ、分かったよ。それじゃあ、ミナねーちゃんの要望に応じてオムライスはガチガチの完熟にするし、鳥の唐揚げも作ろう。」

あと、僕が個人的に食べたいからヒレカツも揚げちゃおうかな。ミナねーちゃんも食べるでしょ？」

「うん、食べる食べる。いやあ、さすがはテンちゃん。話が分かるねえ」

「……そーやってガツガツ食うからブクブク太るんだろ。正直、さつきから見てて思ってたケド、腹回りがちょっとぽっちゃりしてない？」

「ぐはっ!？」

予想外に酷過ぎる言葉の刃が胸を穿つ。

いや……えつとね？ 分かつちやいるんだケド、普通そーいうことを臆面もなく女性に向かって言える男の子って果たしてどうなんだろうか。

ドン引きした私に対し、テンちゃんは溜息混じりに言った。

「真さん。食事はこの人の自由にさせるとたんぱく質オンリーになるから、なるべく適当にサラダとか海草も混ぜてやって。なんだかんだ言いつつも『あれば食う』から」

「あの、テンちゃん。その『あれば食う』っていう表現はちょっと

……おねーさんは尊厳ある人類であって、動物じゃないからね？」

「そう主張したいんだったら、鍋振ってる人間のご機嫌取りくらいはやってみせたらいかだろうと思っわけだけど、それはどう思いますか、ミナおねーサマ？」

「完熟にしてくれないとセクハラしちゃうぞ」

「塩でも舐めてればいいよ」

うおお……ものすごい切り返しだ。明らかに私を女の子として見てない。

以前はこういうことを言う顔と顔を真っ赤にして恥ずかしかったものだけど、数年で見違えるように性格が悪くなってしまった。おねーさんは少し寂しい。

おのれ、こうなったらなんか触れちゃいけないのかと思ってあえて触れなかった部分に思い切り踏み込んでくれよう。おねーさんを

舐めるなよ、少年。

「ところで気になってたんだケド、なんでいきなり眼帯なの？」

「年上のメイドを甘やかしまくったら、なんか眼球刺されて失明した。左側はまじで見えてないから、あんまり無造作に動かないでね」

「……………」

うーわぁい、ちょーっと困っちゃったなあ。思った以上に重い話だった。

男の子って生き物は成長期に突入すると別人みたいになっちゃうもんだけど、これはちょつと予想外もいいところ。まさか『メイドに刺された』という、異次元の言葉が知り合いの口から出てこようとは想定外の範囲外です。

えっと……………こういう時って、流石に謝った方がいいんだろうか？
「ミナねーちゃん風に言えば『事実』だよ。やらかした過去は変えようがない。今回の件に関しては、変えようとも思わない」
オムライスをテーブルに載せながら、テンちゃんは苦笑した。

「全部悪かった。だから反省して同じ失敗はしない。今回の教訓はそれだけ」

それだけでいいんだと、弟みたいな男の子は語った。

自分を責めて、他人を責めて、それでも足掻けばいいじゃんと言った男の子は、その通りに生きて、失敗して、その失敗を教訓に足掻いていた。

テーブルに載せられたオムライスは、テンちゃんとまこちーのぶんだけ半熟だった。

私のぶんのオムライスは、ちゃんと完熟だった。

「むう……………私のぶんだけ完熟にするくらいなら、ごねないで最初から素直に作ってくれればいいのに」

「それだけ焼くの失敗したんだよ。別にミナねーちゃんのためじゃないから」

「ほら、まこちー。よく見ておくんだよ？　これが世にも稀に見るツンデレってやつだから。色々辛いのに意地張って生きてる、わりと綺麗で愚かな男の子だよ」

「ミナはなんでそう、ちよっと困った物言いしかできないのかなあ……」

「うお、まこちーにまで呆れられてしまった。ちよっとシヨック。

……っと、すっかり忘れそうだった。シヨックを受けている場合でもないし、和んでいる場合でもない。テンちゃんの順応性が高すぎて忘れそうになったけど、私はあくまで自分勝手にテンちゃんを連れてきただけだ。

聞きたいことを、聞かなきゃならない。

「ねえ、テンちゃん。ちよっと相談があるんだけど、いいかな？」

「ん？　なにさ、やぶから棒に」

「あの子が駄目なら、この私で手を打つてのはどうだろう？」

「ぶっ!？」

テンちゃんは思い切り吹き出した。

うん、やっぱり天の字はこうじゃなくちゃいけない。ようやく男の子らしい可愛い反応が見れて、私は満足感を覚えた。

「い、一体全体なにを言い出すんだアンタは!？　やぶから棒どころか虎が飛び出してきたみたいに唐突かつワケの分からないことを言うんじゃない!」

「えー？　だって、テンちゃんみたいな優良物件、放っておく手はないと思うけど」

「にーちゃんに殺されるから絶対に嫌だ」

「おにーちゃんに殺されなきゃいいの？　おにーちゃんを黙らす手段なら百通りは思いつくから安心だね。同時にテンちゃんを陥落させる方法は……三通りくらいかな」

「マジ怖え！　なに考えてるのか微妙に分からない所が超怖い!」
テンちゃんは本気で引いていた。微妙に失礼な反応だった。

まあ、気持ちは分からなくもない。私だって私みたいな女が存在

していたら、躊躇なくボーリング球を投げるに決まっている。

「まあまあ、そんなに深く考えないで。試しに一ヶ月くらい付き合ってみようよ」

「その一ヶ月で、二度と戻れない谷底まで突き落とされそうな気がする」

「あつはつは、テンちゃんは深く考えすぎだよ」

相変わらず鋭いなー、この子。そーゆーコトを言われると本気で落としたくなる。

おにーちゃんたちと一緒にいるのはものすごく楽しいけど、将来性で言えば限りなくデンジャーなことこの上ない。一步踏み間違えただけで確実な破滅が待つデスマーチを毎日繰り広げてるようなもんだし。

テンちゃんがなにに悩んでいるかは知らないけど、今現在フリーならちよいとばかり本気で奪い獲ってみるのも、悪くない。

恋愛は戦争なのだから、獲られる方が悪いのだ。

「と、いうわけでどうかな？ 仮にここで断つても、惚れさせる気満々だけど」

「凄まじい自信だね……」

「ふっふっふ、昔からおにーちゃんに媚び媚びだった私は男のツボつてのをそこそこ心得ているのサ。……その頃を思い出すと包丁で自分を刺したくなるケドね！」

「なんてこった。確かに、昔を思い出すと思わず衝動的に自殺したくなる気持ちはものすごく分かる！ 中学校の頃の自分とかホント抹殺したい！」

「はっはっは、分かったようだねテンちゃん。相性以前の共感。このシンパシーこそが、私たちが接着してもなんら問題はないという証明なのだ！」

「……くっ、だがしかし過去の自分を抹殺したい程度は誰でもあること！ そうそう簡単に僕が堕ちると思うなよ！」

「甘いねえテンちゃん。経験不足が透けて見えるぜ！ 彼氏という

存在は、彼女に奉仕する代償としてある程度まで言うことを聞かせることが可能になるのだ！」

「……いや、僕は別にミナねーちゃんに聞いて欲しいこととかは別に」

「毎日和服とかでも別にいいケド。薄手の甚平で背中から抱きついたりとか。もちろん、振袖の時はそんなはしたない真似はしない。和服といえど多種多様。ケースバイケースなのは言うまでもないことだよな？」

「……………っ」

ケツケツケ、男の子め。今一瞬ものすごく悩んだな？

逆を返せば、私に対しては悩む余地があるってことだ。難攻不落の要塞といえど、穴が一つでもあれば簡単に崩せる。

さて……どうやって料理してくれようか？

「で、テン。アンタはここで一体全体なにをやってるわけ？」

背筋が寒くなるような、重い言葉が響き渡る。

一体何をやったのか、耳障りな音を立てていきなりプレハブ小屋のドアが吹き飛び、姿を現したのは凜々しい顔立ちの女の子。

外見では見るべき所は特にない。三つ編みにヘアバンド。パーカーにGパンというラフなスタイル。整えればそれなりに見栄えはするんだろうけど、ぱっと見ではその辺に必ず一人はいるだろう、ごくごく普通の女の子。

しかし……その眼差しは、とてもじゃないけど『普通』とは言い難かった。

勇者のように真っ直ぐで、英雄のように鮮やかで……だからこそ私は納得した。

彼がなんとかしたいのは、恐らくこの子だ。

高倉天弧は一途な男の子だ。好きな人ができたらその人しか見えなくなるくらいに一途で、だからこそ色々と理由をつけて女の子から逃げ回っているような男の子だ。

普通の男の子のくせに一番大切なものがなにかを知っているから、どんな時でも最速で行動する。散々悩むくせに一度決めたら真つ直ぐに突き進むような男の子だ。

恐らく、目の前にいる女の子は、そんな彼がたたらを踏むような子なんだろう。

まったく……女を見る目があるんだかないんだか。

彼女は真つ直ぐな敵意を私にぶつけてきた。

「で……貴女はどこのどちら様？ 肝試しの脅かし役の人かしら？」
「最初はそのつもりだったけど、昔ちよっとお世話になった弟分がずいぶんと立派に成長してたからね、ここに引つ張り込んで雑談してたんだよ」

「へえ。付き合うだけの付き合いわないだのって話が雑談ですか？」
「やっぱりタイミングをうかがってたか、この子。」

話の流れが悪くなってきたから、無理矢理乱入して話を濁そうってわけだ。

うんうん、悪くない。親しい人間に害が及ぶ前に、その障害ごと根こそぎにするタイプの女の子はそんなに嫌いじゃない。

味方にするのも、敵に回すのも。

「けどおあいにく様。その馬鹿は私の妹にとっくに売約済みだから、妙な真似はしないでもらえませんか？」

「……売約済み、ね」

「ええ。妹とその馬鹿は付き合ってる……とはちよっと違うかもしれませんが、とにかく一緒にいるんです。妙な横槍を入れるんだったら、容赦しませんよ」

きっぱりと言い放ちながら、彼女は私を睨みつける。

その眼光を真正面から見返しながら、私は曖昧に口元を緩めた。
「なるほど……よく分かったよ」

「なにがですか？」

「キミ、相当に荒唐無稽な勘違いをしているっぽいね」

「……どういう意味ですか？」

そういう意味です。

ゆっくりと息を吐く。テンちゃんが攻めあぐねるのも納得というものだ。

そもそも……本当に『彼女』のような存在がいるのなら、高倉天弧という男の子は私の誘惑ごときに屈するわけがない。

一途でお堅い男の子だけど、そこがいいのだから。

(本人同士で嘘偽りなく、本音で話し合ってもらった方が早そうだね)

そう結論付けて、私は目を細める。

やれやれ……本当に昔から、手のかかる弟分だ。

私はゆっくりと溜息を吐きながら、ゆっくりと立ち上がった。

「テンちゃん」

「なに？」

「一度だけチャンスをおあげる。立ち向かうつもりがあるなら、戦いなさい」

「はい」

本当に躊躇がない。昔のままに彼は一途だった。

その返答に満足する。残念なような誇らしいような曖昧な気分のまま、私は彼女と対峙する。勇者のような女の子と、真っ直ぐに向かい合う。

「ん、話は分かったよ。そういうことなら……あとは、キミと彼で話し合うといい」

「分かってもらえて良かったです。じゃ、そういうことで私たちはこれで……っ、な、なにこれっ!？」

真っ黒い手に足首を掴まれて、彼女は悲鳴を上げる。

残念だけど、虚飾だらけの場所で話し合わせるわけにはいかない。キミも彼も嘘吐きだ。いざとなったら互いに傷つけ合わない選択

を取るに決まってる。それじゃあ全然面白くない。全然さっぱりこれっばうちも面白くない。

「適当な言葉で、曖昧に濁さずに、真正面から、傷つけ合うといい」

私は口元を緩めて、まるで魔王のように笑う。

世界から世界を引きずり出し、一時的に上書き。展開して彼女を引きずり込む。

昔取った杵柄を弟のために使う。元魔王としてそれくらいはやっ
ておこう。

せいぜい、互いをぶつけて潰し合え。

そして……私は、『世界』に彼女を引きずり込んだ。

トゥルルルル、トゥルルルル、ピッ。

『私です』

『いや、冥。せめて名前くらいは名乗った方がいいと思う』

『いいではないですか。貴方は主で、私は侍従。一声で分かり合えてこそその主従……になれたらいいな』、と思っているのですから』

『十分に一声で分かり合ってるような気がするけど……ま、いいか』

『実は、ちよっと訓練が厳しすぎて心が折れそうになったから電話したんですけど、舞ちゃんはどうな感じですか？』

『クラスのみんなどとも仲良くなって、打ち解けてる。男子の受けは
そう多くないけど、女子からはラブレターをもらうくらいに男前っ
ぷりと発揮してるよ』

『ふっふっふ、私の思惑通りです。で、他には？』

『普通だよ』

『……………』

『あれ、冥？ 急に黙ってどうしたの？ なんかいきなり不機嫌にな
ったような気がするんだけど、気のせいかな？』

『いえいえ……なんていうか、やっぱり改善要求を出さないといけないのかなあって少しだけ憂鬱になっただけのことです。大したことはありません』

『どういうこと？』

『ですから、大したことはないのです。ただ、意地っ張りが意地を張り過ぎて、前進も後退もできなくなっているだけのことですから』

『いや……よく分からないけど』

『じゃあ、はつきり言いましょう。私が欲しかったら姉さんに口説かれてください』

『……………へ？』

『だから、姉さんに口説かれてください。期間は夏休みの終わりまで。もしも口説かれることがなかったら、私は別の主を探します』

『あの……冥サン？ 意味が分からないんで、せめて意図くらいは教えてくれないかなーって思うんだケド、駄目かな？』

『駄目です。意味は自分で見つけてください』

『……りょーかい。意味は分からないけど、やれるだけやってみるよ』

『おや、ご主人様にしては素直ですね。さては姉さんに惚れてますね？』

『惚れてるけど、冥みたいに相手にしてもらえないだけだよ。僕は、冥のことも舞のことも好きだから。……でも、冥には僕が必要だと思っケド、舞にとつて僕は別に必要はないとも、思っから』

『……ちゃんと考えてたんですね』

『考えてるよ。冥はともかく……舞は、ちょっと危なっかしいから。僕にだけは言われたくはないだろうけど、舞の生き方は、いつか僕らの声も届かないような遠くに行っちゃうんじゃないかって思っちやうくらいに格好いい生き方だからね』

『本当によく見てますね。ちよつとだけ妬けます』

『君が自分だけを見て欲しいって言えば、僕はそつする。正直、その方が楽だ』

『お断りです。貴方は、貴方以外の人を幸せにする義務があります。……では、期待を押し付けるようで申し訳ありませんが、少しだけ善処してください』

『そつちもね。心が折れる前に、たまには戻ってくるといい』

『はい。では……愛する我が主、お休みなさい』

『うん。愛してるぞ、我が従僕』
ピッ。

そんな会話を、夢の中で聞いた気がした。

いや……まあなんていうか、ちよつとシヨックだった。

二人から見た時の私って、そんな感じなの？

「それは仕方がない。君はいつだって誰かのために生きてきたんだから」

声が聞こえた。

どこかで聞いた声。聞かなかった声。誰かに似た声。誰かの声。

やたら寝心地のいいベッドは、いつかどこかで寝転がった覚えのある感触。定期的に洗濯されているんだろうけど、染み付いたおいは間違いなくテンのものだ。

いや……ちよつと待て。それはおかしい。

テンの部屋に遊びに行った時もあるけど、あいつの布団は今敷布団のはずだ。

慌てて体を起こす。寝惚けた頭に活を入れ、私はその光景を見た。

そこは、忌まわしくも懐かしい、一年前になくなったあいつの居場所だった。

清潔感のある広い部屋。本棚には専門誌が腐るほど。トイレやキッチン、空調なんかは当然のように完備され、この一室だけで人が楽勝で住めてしまう。

外を見ると、あの時と同じように奇妙な形にカットされた木々や、変な植えられ方をした草花が見えた。

なにもかもがあの時と……一年前と同じ。

全てが懐かしい部屋の中で、ただ一人、異質な人物が立っていた。よく鍛えられた引き締まった肢体。傷跡の残るつり上がった右目が印象的。顔立ちは可愛い部類に入るかもしれないが、見た目がきつそうなのでかなり好みが分かれるだろう。腰まで伸ばした黒髪はポニーテールにくくっており、服装は白いＴシャツとタンクトップという、ある意味健康である意味不健康。……下着くらいはつけて欲しい。

彼女はにっこりと笑いながら、私を見つめた。

「や、初めまして。ボクの名前は高倉天子。天の子供でテンコ。よろしくね」

「……は？ えっと、どういうこと？」

「うーん………どういうことと言われると、ちょっと説明しづらいな」
彼女は肩をすくめながら、苦笑した。

どこかで見た笑顔だと思ったら………なんのことはない。アイツの笑顔だった。

彼女は笑いながら、私を見つめる。

「ここはね、君たちが『高倉天弧』と呼んでいる人間の世界なんだ。人一人の心象風景を形にすると、こういう空間が出来上がる。分かりやすく言えば、この屋敷が『高倉天弧』という人間そのもの。ボクはその世界の住人ってわけだ」

「……………」

信じられない。というか、信じ難い。

そんなことは普通に考えて在り得ない。

でも………この部屋は間違いなくテンのものだ。どこからどう見ても………あの屋敷にあった、テンの部屋に間違いない。

「信じられなくても信じなくてもいい。どうせ、君は招かれざる客だ。ボクの世界にはボクと数人が住んでいればいい。『個』に『他』

は不要なのさ」

「数人？」

「君だって、人によって顔を使い分けるだろ？ 冷たい自分。暖かい自分。無関心な自分。……それと同じ数だけ、『自分』ってものは存在するのさ」

彼女は目を細めて、溜息混じりに言い放つ。

なんだか……理由は分からないけど、苛立っているようだった。

「この世界におけるボクの役割は『仮想敵』。分かりやすく言えば『高倉天弧が考えた最強のキャラクター』ってやつだ。両目の色は黒だし、金髪碧眼でもないし、翼も生えてないし、もちろん手からビームも出ない。それでもイメージ上では『世界最強』を超えているから、スペックはどう考えても破格だ。……この男は常にそういうモノを想定して、打ち勝つための手段を模索してるんだよ」

「……………なんで」

なんでそんなことを？

敵なんかいない。どこにも敵なんかいやしない。

だって……あいつの周囲には友達と可愛い後輩と年上のお姉さんくらいしかいない。

私が悩んでいると、口元に呆れ果てたような苦笑いを浮かべながら、彼女は重ねて言い含めるように、神妙な口調で言った。

「さて、ここで問題です。『高倉天弧』ってのはどういう人間でしょうか？」

「……………どうって」

なんでもかんでも自分を責める馬鹿で。自分に厳しくて、誰にだって厳しくて、でも好きな人には甘い。努力家で現実主義で成果主義で、高校生らしくはない。

最近は……少しだけ変わってきたみたいだけど。

「うん、そうだね。それで正解。自分に厳しく他人に厳しい努力家のように見せてるんだから、そう思ってもらわないと困る」

「見せてるって……どういうこと？」

「人は望んで努力はしない。怠けられるなら怠けていたいのさ」

意地悪っぽく口元を緩めて、彼女は続ける。

「でも、怠ければ怠けたぶんだけ『なにか』に届かなくなる。努力を続けていればできたことが、努力をやめることによってできなくなることを恐れている。だから頑張る。怠けたくても頑張る。……彼は、そういう強迫観念の下で生きている」

自嘲気味に笑いながら、彼女は言葉を続ける。

「小さな話をしよう。小学校の頃の話だ。愛すべき母親は数枚の万札だけを残して『ボク』を家に放置した。学校から帰っても誰もいない。帰ってくるかも分からない。それでも『ボク』は泣かずに耐えた。これはいつもの母親の気まぐれで、きつと帰ってくると思っていたから。……だから孤独が嫌いになった。寂しいのは嫌だった」

一人で生きていけるとしても、独りは寂しい。
そんな当たり前のことを彼女は語る。

「小さな話をしよう。中学校の頃の話だ。親友が転校してから、『ボク』は少しだけ荒れた。当然のことを言っているはずなのに、なぜか受け入れられることがなかったから、理由が分からずに荒れて、その時押し付けられた屋敷に傾倒するようになった。……だから家族を大切にしようになった。居場所があるのは嬉しいことだから」
今思えば、『あの人』の言うコトに従って生きていたから、清廉潔白に生きようとしていたから疎まれていたんだけどね。と、彼女は語った。

今は……ある程度、わざとやっている面もあるけどね、とも。

「高校の頃の話は、君も知っているだろうから省略するけど、少なくとも『ボク』は寂しがり屋で臆病者なだけの、努力家でもなんでもない普通の人間さ」

「だから……なんなの？ そんなの、当たり前のことじゃない。別にテンだけが特別ってわけじゃない」

「ああ、そうだね。でも、君はそれを直接『ボク』の口から聞いたことがあるかい？」

そんなの、あるわけがない。
でも、それも当然のことだ。あいつはとにかく口が堅い。

「口が堅いのは『他人』に対してだけだよ」

彼女は、あっさりとそんなことを言い放った。

意地悪そうな笑顔は……いつの間にか、悪意ある笑顔に変わって
いた。

「彼岸の女と書いて『彼女』と読む。言い得て妙とはまさにこのことだね。……結局のところ、『ボク』は君のことを信頼も信用もしているし、親愛も愛情も抱いているけど、黒霧舞という女の子が、まるで勇者や英雄のようにあまりにも立派に生きているもんだから、川向こうくらいには、遠くに感じているんだよ」

「私は、立派なんかじゃない。勇者でも英雄でもない。冥ちゃんのために人も殺した」

「立派だよ。立派で勇者で英雄みたいだ。冥もボクも君に助けられた。それを君が無自覚でやってしまっているから、『ボク』も気後れしているんだよ」

「……………」

自分から見える自分と、他人から見える自分は違う。

あの人がテンにとって憧れの人だったように……私は、テンにとって憧れの勇者様ってことなんだろうか？

彼女は、ちよつとだけ呆れているようだった。

「ねえ、舞さん。君は『ボク』のことが好き？」

「……………分からないわよ」

「じゃあ、それをちゃんと伝えてあげないと駄目だよ。分からないなら分からないでいいんだ。自分は勇者でも英雄でもないって、態度でも言葉でも伝えてあげないとさ」

「……………」

「ボクも、最近知ったことだけだね」

私はなにも言えなかった。

彼女は優しいんだか悪意があるんだかよく分からないけど、その『分からないなら分からないままでいい』という点は、いかにもあいつらしいと思う。

私が……あいつに望むこと。伝えたいこと。言わなきゃいけないこと。

好きなのかどうかは分からないけど……言わなきゃいけないことが、あると思う。

「分かったのなら戻るといい。ここは全にして個の空間。他人が押し入っちゃいけない領域だ。独りよがりになりたいところを我慢して、君に分かるように噛み砕いて会話をするのも面倒だけど、『ボク』は君が好きだからね。これでもサービスしてるんだよ?」

「ん……ありがとう。それは十分に伝わってるから、安心して」

「うん。あれだけあからさまに伝えてるのに伝わらなかったらどうしようかと思って、少し不安だった」

ちよつとだけ、安心したよ。

彼女がそういった瞬間にぐにやりと世界が歪む。

本当は、ボクは賢い生き方を知っている。

意地汚く、意地悪く、傲慢で、明け透けな人間の方が得をするんだよ。

でも、そんな人間になるのだけはお断りだ。

ボクは……君に好かれる『ボク』でいたいから、努力はやめないよ。

最後にそんな恥ずかしい言葉を聞いたような、気がした。

あの子のことは、本人たちは恐らく語ろうとはしないだろうから、部外者である私の口から語ろうと思う。

全部が終わった後、私は四個のたんこぶを作ることになった。

青あざを作ったテンちゃんが、手加減なく拳で一撃。

同じく青あざを作った舞ちゃんが、思い切り拳で一撃。

疲れ果てた由宇理ちゃんが、踵落として一撃。

同じく疲れ果てたまこちーこと鬼末真ちゃんが、手加減の一撃。

悪いことをしたとは思っているけど、間違ったことをしたとは思っていないかったりするあたりが、私の悪い所だと思う今日この頃。

一夜明けて昼下がり。目が眩むような太陽の下で、不意にそんなことを思った。

「で……なんで私まで殴られるんですの？」

「そりゃ、雇い主だもの。やったのは私だケド、方法までは指示されなかったし」

ビーチパラソルの下で同じく四個のたんこぶを作ってむくれているアンナちゃんに向かって、私は曖昧に笑みを返しておく。

「現場の判断って、そういうものだと思うケドね。誰も彼もがミスさんみたいに優秀でもないんだから、ちゃんと手綱は握っておかないと」

「本当に優秀じゃないんだっいたらいいんですけど、みなさんの場合は明らかかな確信犯じゃないですか」

「そりゃそうだよ。相川美奈子は、おにーちゃんを騙す極悪人なんだ」

はっはっは、と軽く笑いながら私は口元を緩める。

煙草も吸うしお酒も飲む。善も騙すし悪も利用する。おにーちゃんを好きになつて、大嫌いになつて、殺したくて殺せなくて、それでも開き直って生きている。

私は悪い人間だ。生きている価値もないと思う。

それでも……ああいうのを見ると、悪いことをするのも悪くない

とは、思う。

「いや、なんかもういいよ面倒臭い。無理に口説いたりとか別にいいじゃないし。冥も面白半分に言ったただけだろうし」

「うるさい。こーなったらもう意地よ。絶対に冥ちゃんとかくっつけて幸せにしてやる」

「そもそも今の状況が幸せじゃないんだけど……大体、舞になんか言われてもイマイチ嘘臭いっていうか、心がこもってないっていうか、とにかく全然嬉しくないし」

「あによ？ 言葉でも態度でも伝わらなきゃどーすりゃいいのよ？」

「努力すればいいじゃん」

「どーゆー風に？」

「だから、気持ちを伝える努力をしろって言ってるんだよ」

「だから、どーゆー風にすりゃアンタに伝わるのよ！？」

「だから、それを自分で考えろって言ってるんだ！ そもそも僕に聞くな！ そーゆーのはエロテロリストこと友樹が一番詳しいから」

「……うるせえ。死ぬ。バカップルがいちゃいちゃしやがって。死んでしまえ。面白そうないイベントに参加できなかった、俺の意思を汲み取って死ぬ」

「うん、その通りだ。死ぬばいいよ。私なんて夜が明けるまで放置されてて危うくちよつと泣きそうになってしまったじゃないか。まあ、実際には闇夜なんて怖くもなんともないんだが、本当にバカップルは死ぬばいいと思うよ」

「……泣きそうっていうか、号泣してたツスよね。まあ、藤原ちゃんの気持ちも分からないでもないツスよ。確かにバカップルは死ぬばいいと思うツス」

「アンタらね……こっちだつてやりたくてやってるわけじゃないのよー！」

「本当にね」

「アンタがさっさと口説かれればいい話でしょー！」

「いや、だつてさ。なんか色々違うんだよ。ミナねーちゃんの時はかなりグラツときたんだけどさ、これが舞になると『お前は口説くって行為を根本から履き違えてる』って言いたくなるもん。……っ
ていうかさ、『眼鏡さえあれば、相手がテンでもナチュラルに口説けると思っの！』って、力説してたケド、あれってどういうこと？
「失われてから大切なモノに気づくことって……意外に多いと思わない？ 眼帯も悪くないけど、テンには絶対に眼鏡だと思っの！
スーツとかすごく似合うし！」

「……まあ、言いたいことは分かるけど、夏休み中の完治は無理だから、口説きたいなら自力でなんとかして欲しい」

「じゃあ、一応参考までに聞いておくけど、アンタだったらどうするのよ？」

「どうにかするよ。冥が口説けって言ってくれば、話はもうちょっと楽だったかな」

「どうにかじゃ分からないわよ。どうやって口説くのよ？」
「……………」

優しく強く大らかに、ぐりぐりと頭を撫でる。

それから、耳元でなにを囁かれたのか、舞ちゃんは顔を真っ赤にしていた。

全力の追いかけてこが始まって、テンちゃんは本気で逃げ、舞ちゃんは本気で追いかけて、仲間たちはげらげらと笑いながらその光景を楽しそうに見ている。

うん、実に素晴らしい青春時代。本当に羨ましい。

「混ぜってきたらどうですの？」

「んー……でも、まこちーの世話をしなきゃいけないからねえ」

私の膝を枕にして寝入っているまこちーは、昨日由宇理ちゃんと喧嘩した疲れと今日の午前中に遊びまくった疲れで、どんなに揺らしても起きようとはしない。

子供の頃のツケを払うように、誰かを好きになって、誰かと遊ん

でいる。

鬼末真という女の子は、今をそうやって生きている。

「貴女も似たようなものですよ」

「ま、そーだね。私の青春時代はおおむね暗黒だ。取り戻せるわけはないけどね」

「取り戻せなくても、今を楽しむことはできますの。たとえば……ここで暇している金髪の美少女に、真さんの世話を任せてしまおうか」

「……獲っちゃ駄目だよ？ この子は、私の家族だから」

「獲りませんよ。私には他にもたくさん欲しい物があるですよ」

「なら、安心して任せようかな」

まこちーの頭をアンナちゃんの膝に移動させ、私はゆっくりと立ち上がる。

少しだけ足が痺れていたけど、まあこれくらいなら大丈夫だろう。

さて、それじゃあ太陽光線でも浴びながら、可愛い弟分をからかってきましょうか。

私は口元を緩めて、久しぶりに思い切り走り出す。

空は青く、海は冷たく、砂浜は熱く、ご飯は美味しく、みんなは優しい。

面白い夏は、まだまだ始まったばかりだ！

A ランクエンディング・彼編：いやいやちよつと落ち着こう。 E

N D

ちよーでらつくす・あとがき：ればたねねたばね。に続く。

舞エント結 彼編：いやいやちよつと落ち着ころ（後書き）

本当はBランクエンディングとか書きたかったんだけど、段々本編の方が書きたくなってきたので、それはいつかショートショートでやるうと思う。

と、いうわけで次回はデラックスあとがき。……自分が二年以上前に書いたものを今更読み直さなきゃならない地獄の作業の始まりなんだZ.E。

司会進行はコッコ嬢と

でお送りします。

お楽しみに

でらつくすあとがき ねたばればれたね パート1 (前書き)

最初に断っておこう。

これは物語ではない。落書きである。

やたら長いので携帯の方は要注意。

でらつくすあとがき ねたばればれたね パート1

机上で空論を騙るのはやめなさい。

承前。

自分の小説を読み返してて思った。

ああ……なんつーかね、ホント自分はお酒を美味しく飲みたかったんだなあと。

「いや、いきなり何の話ですか？」

お酒の話に決まってるだろう。日本酒とか飲んで『うめエ』とか言ってみたかった。そんな後悔をしている僕は間違いない下戸なのだ。お酒なんて飲めたこともない。ビール一杯で酔っ払う。ビールは一杯目が一番美味しいらしいからそれでいいのかもしれないけど、やっぱり熱燗とおでんとかそういう組み合わせに憧れるわけだ。ああいう風に美味しく吞まれるとね。少しばかり羨ましくなるわけだよ、主人公。

「最終的に主人公にしたのは、他でもない貴方でしょうか？」

読者様に人気がなかったら、普通に後味の悪い終わらせ方にしておいたさ。通称、Eランクエンド。作者が物語に飽きた……最悪のパターンのエンディングだ。

ちなみに、今から語る物語でもない後書きは、作者的にはZからの位置づけになっちゃうかもしれない。二年前の自分の文章を見返すっていうのは、本当に勇気の要ることなんだからな。

「や、正直貴方の苦労は至極どうでもいいんですが。どの道……私が今後苦労するのは目に見えてますしね」

うんうん、諦観が染み付いて実にいい感じじゃないか、メイド。

「……貴方ってメイドとか好きでしたっけ？」

OLや大正浪漫とかは好きだけど、メイドはあんまり。メイドに『さん』とか付けるのはもうこれ以上ないくらいにイラツとくる。メイド喫茶とか崩壊すればいいと思う。

あーあ、誰か大正浪漫書いてくれないかなあ。

「需要はともかく年代的に短いですからね、大正時代。和洋折衷がいい感じに織り交ざっているので、私も嫌いではないですが」

あとはなんかこー。後は俺に任せて先に行け』とか『待たせたな！』とか『勘違いするな、お前を倒すのは俺だ』とか『俺を誰だと思つてやがる！』とか『かかってこいやああああああああ！』とかもわりと好きだ。熱いのはいいことだと思つ。

つい最近気づいたんだけど、ライトノベルつてさ、なんかこー可愛い女の子が表紙を飾つててね、一寸も読む気が起きないんだよね。僕が望んでいるのは鼻血とか鮮血とか咆哮とか、そういう魂の雄叫びだというのに。GONG鳴らせ。

「……20歳過ぎてそういう趣向もいかなもんだと思えますが」僕もそう思うが、現実面白いけど熱くはないんだから仕方ない。それにシヨタコンよりはましだと思つがね。君が彼にときめいたのは、彼がデレた中学生くらいからだろう。果たして20近い女の子が中学生にときめいてしまうのはどうなのか？

「う……ま、まあ否定はしませんが。仕方ないでしょう、可愛かつたんだから」

恋愛経験とかなないからね、君。錬鉄技術ばかり磨いてきたから、学校にも通つてないし。ゆとり教育すら受けられなかった子がいかに迷惑かつていうのを、最近の若者には思い知ってもらいたいですなあ。はっはっは。

まあ、ゆとりつて言つても親が馬鹿だからゆとりになつてしまつた面もあるから、結局のところ全部悪いんだろう。どう足掻こうが教育つてのは絶対に必須だし、教育を受けられなかった惨憺たる結果がこれなんだから、ちよつと考えれば分かりそうなもんだね。

「いくら作者でも、しまいにゃぶん殴りますよ？」

算数の問題です。台形の面積の求め方は？

「(上底+下底)×高さ÷2です」

地理の問題です。インドとインドネシアの違いは？

「……か、カレーの作り方が若干違うんですよ。きつと」

国語の問題です。夏目漱石の代表作は、『我輩は である』ですが、
に入るのは？

「じ、人格者？」

機械工学の問題です。鍛流線とはなんでしょう？

「金属組織とは基本的に『点』の集合体で作られていますが、その『点』を叩くことにより『線』に変えることによつて金属組織は強度を増します。この作られた『線』のことを鍛流線と呼ぶのです。

具体的に説明すると、金属を叩くことにより固体の中の隙間をなくして一つの強い固体にすると同時に、鑄造時に生じた泡、ガス(気孔)を圧着させ結晶粒を微細化し、金属組織を改良し機械的性質を改善し、同時に目的の形状を作り、機械加工を省略又はその工数を減らすことができます。いかに上手く鍛流線を生成できるかが鍛造と呼ばれる技術の真価というわけです。さらに付け加えるなら」

みんな、お勉強は全体的にまんべんなくやろうね！ おにーさん
とのお約束だゾ！

「ちよ、待ちなさい作者！ まだ話は終わって……」

ちようでらつくすあとがき：ねたばればたね。

できれば、始まらないで欲しかった。

さあ、そういうわけで、でかいあとがきをやっちゃおうという自爆企画。ちようでらつくすあとがきの開幕です！ 司会進行は『本編で一番報われない女』こと山口コッコ嬢と、作者こと田山歴史で

お送りします

ブラウザの戻るボタンをクリックしたら開幕しますので、よろしくね

「とかつけても、嫌々やってるのがバレバレなんです」

うるせえな。本当はやりたくねーんだよ。あとがきに作者が顔を出すつてのはまあまあよくあることだとしても、なんで自分の作つたものを今更説明せにやなんの。……まあ、ここまで書いたら後はネタバレくらいしかやることがないのも事実だけど、それと感情とはまた別問題なんだよ。

大体、こんなハイテンションな物書きが世界に存在してたまるか。JKなローリングさんだろうが、夏目漱石だろうが、物書きつてのは基本スロースターターなんだよ。

「本編の時と更新速度が違いすぎますもんね」

まあ仕方ないよ。週に一度は更新できる。そう思っていた時期が僕にもありました。

大体、後半の遅筆の理由に苦手なジャンルを書いたからつてのものある。明るくしようが暗くしようが、恋愛モノつてのはいつになつても慣れないねえ。

「別に恋愛をしたことがないからではなく？　というか、あれつて恋愛モノですか？」

残念ながら恋愛モノだ。この世界には『切ない』、『心に響く』、『泣ける』とかふざけたお題目を掲げている人もいるみたいだけど、恋愛つてのは戦争で闘争だ。基本は抜き身の刀で斬り合うのが恋愛つてもんだらう。

物語の恋愛は、今まで読んだ限りじゃ本当にファンタジーに近い。真剣に恋愛小説を書いている人にはいや本当にまじで失礼だと思つて、超痛快妄想伝『恋空^{れんくう}』が一時的にでも流行つた時点でなんか色々おかしいと思う。

某高校ホス 部とかの めカンタービレとかは本当に面白かつたけど、あれは漫画だし恋愛要素よりも他の要素が面白さに拍車をか

けているしなあ。

「……いや、貴方みたいなモノの考え方はむしろ珍しいと思います
が」

恋愛。継承。戦闘。生存。娯楽。

生きる上で重要かつどんな物語にも含まれる要素だ。特に恋愛は『種の繁栄』という生物として欠かせない要素として存在している。厳しくても当然だと思うケドね。

「あの……ちよっと殴りしてよろしいですか？」

いや、待て。なんでいきなりそうなる？

「なんか言い方が学者的で異様に腹が立ったもので。むしろ殴りま
す」

待て待て！ さすがに一般人にぐーぱんちはないだろう！ ちよ
つと見栄を張るくらいいいじゃないか。現実には惨憺たるもんなんだ
から！

「むしろ引きこもり気味のオタクですよ？ フィギュアとかいっ
ぱいですよね？」

無理矢理キャラクターを設定しようとするな！ 引きこもってね
えし会社勤めだし美少女フィギュアの良さとかもさっぱり分からね
えよ！ 仮に僕にフィギュア製作能力があつたら、問答無用でバー
サーカーVSランサー（マスターはバゼット）とか作るわ！

あ、でもこの前電気屋で見かけたバイカンフーの超合金は欲しか
つたな。値段が諭吉さんの戦闘能力を軽々超えてたから諦めたけど。
「……どっちにしろ、まともな嗜好じゃありませんよね」

自覚はあるが仕方がない！ だって熱血とか大好きなんだもの！
「はいはい。とりあえず、サクサク次に進みましょうか」

次って……アレか。なんか一話ずつコメントしていくみたいな感
じ？

「いや、それしかないでしょうが」

……嫌だなあ。今見たけど、この小説って番外編含めて70話あ
るんだぞ？ 読み切りの無印コッコさん含めると71話だよ？ ま

ず読み返すのがかつたるいよ。

「貴方が書いたんでしようが！ いいからさっさとやりなさい！
貴方の小説は雑談が無駄に長すぎるんですよ！ そのくせ情景描写
がやたら少ないし！」

ちっ、これだから主人公はいかん。いきなり致命的な欠点を突き
やがる。

大体、情景とか描写しても楽しくない。朝の風景なんて窓の外か
ら見たそれでいいじゃないか。人のドロッドロした内面とか描写し
てる方が楽しいし。

小学校中学校の経験不足の方々には仕方がないとしても、高校生に
なったら妄想くらい自在に使いこなしてもいい頃合だと思うんだ。
K-1もそう言っているし。

「いいから、さっさと始めなさい！ こっちも暇じゃないんです。
どーせ貴方のことだから、現実空間に戻った時には記憶だけ綺麗に
すっ飛ばして、時間はそのまま経過させるつもりでしょうが！ 今
の私には30分のロスがそのまま命取りになるんですよ！」

ケケケ、どうせ仕事が遅れた時間だけぎゅーされるとか、そうい
う微妙な命取りだろうに。内心嬉しいくせに必死で否定する君に幸
あれ。それでこそ主人公にふさわしい。

「だ、誰が嬉しがってるんですかっ!？」

はい、そういうわけで本格的なあとがきの始まり始まり。

「あ、コラ！ またさっきと同じパターンじゃないですかー！
ー！ー！」

読み切り・僕の家族のコッコさんについて。

「えー……そういうわけで、まずは読み切りから。これは確か最初
は企画モノだったんですよね？ キャラクター案だけいただいたいて、
後は自由に調理するという」

うん、とりあえず『メイドのコッコさん』と穏やかな日常っていうテーマだけいただいで、後は本当に自由にさせてもらった。自由って素晴らしいよね。自由万歳。

「……自由って言葉は、決して『好き放題』って意味ではないと思いますか？」

自由にやっていいって言われたから自由にやらせていただきました。後悔は……いつも通りほんのちよつとだけしている！

本当にやりたい放題やつちやつたからね！

「まあ……反省しているなら私から言うべきことは特にありませんが」

ちなみにストーリーの方は少々王道を目指してみた。男の子がさわられて、メイドが助けに来る。問題なのは男の子の性根が腐っていて、メイドがチェンソーを携えているくらいだろうか。この時に彼女に渡すイルカのブローチは色々と重要なアイテムのはずなのだが……作者が忘れっぽいせいで最後の最後まで微妙な扱いになっているわけで。

「……いや、私が言うのもなんですが、どれもこれも大問題だと思います」

イルカのブローチは最初から決めていたんだケド、君の武器をモニングスターかチェンソーかの二択で迷ったんだよねエ。最終的には、やっぱりここは神殺しすら可能にするチェンソーしかないと思っただけだ。

「そうじゃなくて！ まあ、正直……もうちよつと格好いい武器にはできなかつたんですか？ 鋏とかチェンソーとか、他の人たちに比べると私だけなんか色物って気が」

剣を握っていいのは、覚悟がある人間だけだ。

刀を握っていいのは、決意のある人間だけだ。

槍を握っていいのは、剛毅な人間だけだ。

槌を握っていいのは、切り開く人間だけだ。

笛を握っていいのは、楽しませる人間だけだ。

弓を握っていいのは、専心たる人間だけだ。

銃を握っていいのは、意味を知る人間だけだ。

拳を握っていいのは、心ある人間だけだ。

「えっと……つまり？」

上記以外の武器から選んだ結果だ。これは物書きとしてのルールなんでね、悪く思わないで欲しい。

あと、格好いい武器なんてものは世界中のどこにも存在しない。

それは武器が格好いいのではなく、その製作者や使い手が格好いいだけだ。

簡単に言えば、格好悪い人間には格好悪い武器がお似合いたいイタイごめんなさい。

「やまかしいです。格好つけてないで、もっとちゃんとまともな返答を超越しなさい。心の中はどうであろうと、私が納得できそうな理由を！」

君の性格上遠距離系武器はありえないし、鍛鉄士が拳を握ったら設定の生殺しもいいところだろうさ。かといって、笛以外の上記の武器を使わせたなら最後の最後に彼が死ぬ。彼が適度に重傷を負いつつ、かつ生き残るためには鋏とか色モノの武器を使ってもらうのが一番手っ取り早い。……もちろん、そんなことを最初から考えていたわけじゃないが、色物の武器つてのはインパクトがある上にそういう風な『融通』が利きやすい。

正当であるが故に、使いつらい面つてのもあるんだよ。大体、庭仕事をするのに剣とか刀とかはかえってやりづらいでしょ？

「あー……そういうえは四年前は庭いじりばかりしてましたね、私」
いや、君がそれを忘れるのはどうなのよ？

「最近盆栽しかいじってませんからねえ。庭の世話は冥さんや彼がやっていますし、盆栽は盆栽で楽しいからいいんですが。知っていますか？ 盆栽ってああ見えても深い世界で……」

そういうわけで、長い話はスルーして一話に『ごーごー』

第一話 僕の家族と私の主人について

いや、導入だからか、第一話ってつまんねえわ。解説することもほとんどない。

普通の導入です。じーさんと娘とメイドと誘拐犯と少年の話。

「をい」

基本的にプロローグって嫌いなんだよ。最初だから伏線引き放題だし。

「最初が一番肝心だと思えますがね。小説なんて最初の三行を読んでもらえなきゃそれで終了って媒体でしょうが」

うん、それは確かに。読んでもらえなきゃ小説なんぞただの文字の集まりだし。しかも論文とかそういうものじゃないから役にも立ちたくない。

そこで、田山歴史は考える。目を引きやすい小説とは一体なんなのか？

「ライトノベルだと、基本的に可愛い表紙にしていますよね」

あれ実は逆効果だと思っただよなあ。みんながみんな可愛い表紙にしたらさ、結局は上手い絵師さんの小説が目立つじゃん。そのくせ挿絵って扱いだから報酬も安い。結局は絵師さんの絵を売るための展示場みたいになってるし。表紙に騙されてクソつたれた小説を何冊掴まされたか分からないからねえ。ホント、困ったもんだ。

「……ちなみに、貴方の言うクソつたれた小説ってどんなのですか？」

大抵途中で放り出すから、タイトルなんて覚えてないって。

ああ、でも一つだけ覚えてるか。ダブルブツド。

「自分で振っておいてなんですけど、タイトルを伏字とはいえ一部出してしまうのはさすがにどうかと思うんですがっ!？」

ああ、これは単純に好みの問題。僕はハッピーエンドが好きなんだよ。

あんな『ある意味ハッピー』なのは御免こうむる。……まあ、寿命が尽きようとする最後の瞬間にやりたいことやって満足したってことなら、僕が言うコトはなにもないんだけどね。これは本当に好みの問題だから。

……まあ、本当に文句が言いたいのは最終巻の発売が、その前の巻が発売されてから四年後っていう忌まわしい事実なんだけどね。いつまで待たす気だ。うつかり買っちゃったじゃねえか。前の話は大体覚えてたから読み返しはしなかったけど。

「四年経っても、前の話を大体覚えてる貴方はもう駄目だと思いません」

何回も読み返しちゃったからね、その辺は仕方がない。

それに、最近は西 維新先生の小説以外は読んでない。読めば面白いのは分かっているんだけど、小説のネタがまだ尽きてないからね。書く方に集中してる状態だし。

「で、話を元に戻しますが、目を引く小説ってなんででしょうか？」
ハードカバーにして、斬新な表紙にして、ばしばしテレビでCMをすればいい。

「……ぶっ飛ばしますよ？」

いや、わりと核心を突いてると思うけど？

結局のところね、大人って生き物は『ハードカバー』ってお題目がついていればなんとなく安心するもんなんだよ。大人が読む本を読め。立派な本を読め。子供っぽいのは駄目。活字を読め。感想を書け。ハリーポッターと指輪物語がOKで創竜伝があかんってのはどういうことだ？ 今思い出してもつくづく意味が分からないと思う。

感想文なんざ書きたいものだけ書いてればいいじゃないか。模範解答が欲しいならもっと利口な子供にオススメ図書を薦めろイ。

あと、源氏物語とかを熱烈に薦める国語教師がいたけど、あんなドロドロの恋愛小説のどこが文学だ？ むしろエロ小説に分類されるだろ、どう考えても。

「死にそうなくらいに暇が余りまくってた、貴族が考えた萌え小説ですからねえ」

……言い得て妙だね、その表現。

ま、小説にしるなんにしる、最初は見た目が肝心ってことだね。

だからそう……もつと血とか鼻血とかを出しまくった熱血系の小説を僕らは必要としていいんじゃないか！ 俺に任せるとか言ってみてもいいんじゃないか！？

「はいはい、それじゃあお次は第二話になりまーす」

残念ながらもまだ俺のターンは終わっちゃいないぜ！

ちなみに、『モモ』は熱血でもなんでもないけど冗談抜きで傑作だから、みんなちゃんと読破すること。おにーさんとのお約束だぞ！

「いい加減にしなさい」
げはーっ。

第二話 コッコさんと〇〇泥棒

一話の説明に八百字ほど使って正気の沙汰ではないですが、続いて第二話です。

えっと……ああ、中二病患者の話です。

「フー！」

ちなみに厨二病という表現は、中学校二年生、もしくは中学生の方には非常に申し訳ないと思っっているのですが、反論をする前に三年待つて欲しい。高校二年生になった頃、中学校二年生の頃の自分が一体何をしていたのかを思い出して、耐えることができれば、好きなように文句を言ってもいいと思う。

「……それ、ある意味確信犯ですよ」

やんちゃしたい年頃ってのはいつでももあるもんだよ。

あ、この話の話だけど、サラリーマンを磔にしたらインパクトがあるだろうかと思っただけですが、思っただけ以上にほのぼのして

しまいました。困ったもんです。

「いや……そもそも、この物語が目指してた所ってそういうものじゃ？」

最初はね。ただ、君とあのクソガキでほのぼのってのは無理があったね。あの狐は完全無欠のギャルゲー主人公だし。君は根性甘ったれたオンナノコだったし。

「うう……かなり否定できない部分もありますが、貴方にだけは言われたくないです。あと、彼は別に美少女ゲームの主人公でもなんでもありません。かなり誤解です。修羅で鬼畜な笑顔が可愛い男だけです」

誤解でもなんでもないさ。元々、僕はそういう野郎を主人公にしたんだから。まあ、当然のごとく作中では酷い目にあっているけど、それはあの狐を嫌うが故だ。

「主人公を嫌ってる作者って……いいんですか？」

他の人はどうか知らないけど、僕は主人公を考える時は、必ず『自分が嫌いなタイプの人間』を想定する。今回は『最低の男性像』をイメージした。

「……………」

実のところ、あの狐は一般常識と照らし合わせると『普通』でもなんでもない。四年前の君の行動を『仕方がないなあ』で済ませられる男が世界に何人いると思う？

「えっと……そう言われると、私としてはちょっと弱いんですが」

まあ、そういうことを許し続けて結局破綻したわけだけど、つまるところあの狐は君のわがままを許容できる程度には心の器が大きい男だったってことだ。

男に究極的に必要とされるのは、運動能力でも甲斐性でも顔の造形でもない。

女性を許せる心の広さと、あらゆることを面倒がらない『マメさ』に尽きる。

この小説ではわりともてている狐だけど、それは歴史的事実（豊

臣秀吉とかは女性に対してもものすごくマメだった（やら経験則）やたらもてる先輩はやっぱりマメだった）に基づいている。実際にこんな男がいたら、男としては普通にイラツとくるぞ。

「うーん……でも、かなり鬼畜な面もあるんですけどね」

鬼畜なのは、見知らぬ女の子と君にだけみたいだけどねえ。

ちなみに見知らぬ女の子と君への鬼畜っぷりは全然レベルが違う。

「……あの、一つだけ聞いていいですか？」
なにさ？

「私……これから彼と上手くやっていけるんでしょうか？」

君がくじけない限りは、確実にやっていけるよ。

まあ、わりと好き放題生きてきたんだ。ツケを返すと思って、精々あの男に微妙な感じでいじめられ続けられるといい。

「今の時点で思いつきり挫折そうなんですけど……大体、四年でなにかあったのかセクハラに磨きがかかってるんですけど、どういうことですか？ 急に後ろから抱きつかれたりとか、すごく心臓に悪いんですけど！」

……たぶん『可愛いから』とかそんな感じの理由じゃないかね。

僕には理解できないがそういう趣味の人もいるんだろっね。

あと、酒飲んだ時に分かんと思うけど『寂しがり屋の甘えん坊』が奴の素だからね。

本人にその自覚があって、かつ自分の素を嫌っているから、変な方向に努力しまくるような奴になっちゃったんだよね。……まあ、嫌ったのは変な風に甘えて生きている君を見ていたからなんだけど。そういうわけでおおむね君のせいだ。頑張って責任を取るといい。

「……うあああああああ」

さてさて、あんまり行数を食うのもなんなので、次の話に進みま
ーす

毎度お馴染みでもなんでもなくなっていく三人娘登場回。

一人は狐を振って百合ロードに踏み込み（とはいえ、百合とは少し違う。詳細は後で説明）、一人は最終話まで地味に登場、一人は最終的に執事をゲットしてわりといい役回りを演じてくれました。

後半で明らかになることですが、狐の野郎は本当に後輩に甘いことがよく分かる一話となっております。屋敷の登場は少なめ。

ついでに言えば、新木章吾登場回でもあります。

「あー……そういえばそうでしたね。あの男今どこでなにやってるんでしたっけ？」

嫁の尻に敷かれてるよ。境遇としては君とほぼ一緒だ。

「私は尻には敷かれてません。……と、私だけは思っています」
まあ、僕としてはどっちでもいいんだけどね。

それはそれとして、なんで君たちって仲悪いんだっけ？ 執事が頑固者で君も頑固者だからどっちも妥協する点がないのは分かるけど、なんかきっかけとかあったっけ？

「ああ……えっと、確か新人の頃にあまりにもうるさいんで『話は分かりましたが、それはそれとして新木さんって女性と付き合ったことあります？』って言った途端に音速で嫌われましたね。今ではちよつと悪いことしたと思っっています」

いや……なんつーか、昔から地雷を踏む人だったんだなあとちよつと感心。

「どーゆーことですか？」

温室育ちの君と違って、普通の人は学校に行くし恋もするってことさね。

「いえ、意味が分かりませんが。辛い失恋でもしてたんですか？」
ん、失恋っていうより、ほぼ死に別れだけだ。

「……………」
実際には生きてるけど、彼女の方が執事ともう二度と会うことはないと思っっていたりする。執事長とその彼女の物語を昔書いていた

ことがあつてね。結局結末しか思いつかなくてデスクトップの奥にしまつてあるけど。

「うーわあ。知らず知らずのこととはいえ、ちょっと罪悪感が」

まあ、その辺はお互い様つてことで。君も執事に『親の顔が見てみたいものだな』つて言われてマジギレしてるでしょ。

「……そういえばそうでしたね。ってなんで貴方がそれを知ってるんですか!？」

いや、作者だから！ 忘れるなよ！

「そういえばそんな設定もありましたね。作者のくせにさつきからネタバレせずに雑談ばかりですが、それはそれでいいのでしょうか？」

悪いケド、残り68話もあるのにこの時点でネタバレしてたらネタが尽きるんだよ。僕はそれほど裏設定的なものを煮詰めているわけじゃない。

そもそも、語り手が君と僕だけだから話に発展性がないしな。

「作者、言いたいことはそれだけか？」

やあ執事さん。ゲストキャラクターとしてご登場ありがとうございます。

「ゲストキャラなら君曰くの三人娘の誰かを呼ぶべきだろう。私なんか最後にちよろつと登場しただけだろうが！」

あーはいはい。これだから余裕のない大人は心が狭くて嫌だねエ。大人しく嫁さんに首筋でも噛まれて困っていればいいじゃない？

四年間の放浪生活に見合うだけの幸せくらいはあつて然るべきだと思つし。

「……はっはっは。さすがに殺したくなつてきたぞ」

「下には下がいるんですね」

「山口。なんだその哀れみに満ちた目は。親指とか立てながら肩に手を置いたつて、私は別に悲しくもなんともないからな！ 勘違いするんじゃない！」

ちなみにこつちのメイドもどきは、疲れ果てて思考力が失せた狐に『まくら』の一言で押し倒されて、そのまま抱き締められて寝入

った野郎を見ながらどうしたらいいのか分からず、結局夜明けまで一睡もできなかった逸材だけだね。

この女に首筋に噛み付くくらいに度胸があれば、もうちょい幸せになれると思う。

「……すまん、山口。今度酒でも奢ろう」

「幸せですがそれがなにかっ!? べ、別に悲しくなんてありませんからね! 勘違いするんじゃないませ……ぐすっ」

「はい、幸せ自慢も佳境になってきたところで三話にれっつごー! 『殺してやる!』」

第四話 坊ちゃんと愉快な友人たちWITHメイドについて

あのさあ……大人って普通我慢するもんだよ?

よってたかってボコボコにするのは、さすがに社会的にどうよ? つか、途中で執事をフェードアウトさせなかったら殺すつもりだっただろーが。

「いいから、物語の解説をしてください」

演技姉妹と馬鹿メイド。それから友人どもの話だ。

狐の人格が疑われる話で、剣道少女の話でもある。

ちなみに、物語中で黒霧姉妹が庭を破壊しているシーンがあるけど、あれはあくむさん経由の情報から危険を察した舞さんがやったことだね。

もちろんあくむさんとして詳しいことまで分かっているわけじゃないけど、念のため、折角手に入れた平穩を壊させないようにするために、目をつけられるのを覚悟で派手に暴れたわけだ。

最終話の伏線を、一応ここで張ってある。

「……や、それは嘘ですよな?」

本当だ。この『庭』のギミックについては最初から用意していた。使わないなら使わないで放置すればいい。こっそり張った伏線な

なんてそんなもんだ。

使わない方が楽で良かったんだケドね。……誰かさんが暴走したせいで使う羽目になっちゃったのが残念だ。

「はいはい、どーせ全部私のせいですよーだ」

いい大人が拗ねるな。あの狐はどう思うか知らないが、ちっとも可愛くない。

「……貴方もかなりひねくれてると思いますが」

いや、普通の女性だったら優しくするけどさ。僕は友人に無理矢理連れて行かれたメイド喫茶に嫌な思い出があるから日本人のメイドは大嫌いなんだよ。仮にいたとしても、エマ級じゃないとメイドとは認めん。

「あの……それはむしろ、貴方という人間がメイドマニアであることの証明なんじゃ」

メイドってのは英国あたりに普通に存在した職業だ。現在も存在するかは検索神ぐるぐる様の力を借りるつもりもないから知らないけど、ハウスキーパーから家庭教師まで色々あるが、それらを総称して日本じゃ『メイド』と呼ばれている。

職業としてのメイドはかなり好きだけど、『ご主人様、今日のメニューはいかがしまししょうか（はあと）』などと猫撫で声で言われても、可愛くもなるともない。わりと女性に縁のない生活を送っているけど、本物の殺意を覚えたのは久しぶりだったな。……そのくせ客が少ないからって厨房の裏で生クリームカツ食らいやがってブタになれ。

まあ、その店は潰れてもう存在してないケドね。ケケケ、いい気味だ。

「……どう考えてもメイドマニアとしか思えない発言なんですがいや、僕の好みはリン キューブ・アゲインのり ダミたいな女性だから。野生的で粗野でエロ可愛い女の子の方が絶対にいいと思う。」

「なんにしるマニアックですよね……」

君にだけは絶対に言われたくないセリフだ。シヨタコンのつり目好きのくせに。

「28歳と20歳じゃ、もうシヨタでもありませんし」

「確かに、社会的に8歳差は問題じゃないですけど、問題なのは山口さんが中学校の頃のご主人様にときめいてしまったという事実だと思っんですが？」

「……あの、舞さん。なにやってるんですか？」

と、いうわけで今回のゲストは勇者こと黒霧舞嬢だ。

ようこそ、ある意味勇者。

「いや……その『ある意味』ってなによ？」

あつはつはつは、まあ大したことはない。馬鹿の演技が得意だなあと思つて。

いや、第四話のことなんだけどね。

「う、うっさい！ 仕方ないでしょうが、まだ屋敷に入って間もなかったし、そもそも狐がどういう人間か知ってればあんなことはしなかったわよ！」

今ではその狐にふぁーりんらぶ・きゅんきゅん ですよ。とうとうデレましたよ、この意地っ張りは。妹にくれてやるつもりで共有財産。いい買い物しましたね

「デレとかそういうのはないから！ なんとも思つてないとはまあ言わないけど、テンとはどっちかっていうと友達とかフレンドとかそういう関係で！」

「あの、舞さん。さすがに力いっぱい否定されると……かえって怪しいんですが」

「ち、違います！ そりゃ確かになにもなかったとは言いませんけど、関係としてはわりとプラトニックというか、とにかく山口さんの思つようなことはありません！」

ではでは、そのプラトニックな関係の一場面をどうぞ

「ちよっ!?!?」

『あれ？ ちょっと、テン。冷蔵庫のプリン食べたでしょ？』

『ああ、ごめん。お昼前にちょっと小腹が空いて食べちゃった』

『むう……あれ結構楽しみにしてたんだけど』

『ん、分かった。じゃあこの課題が済んだら買いに行ってくるよ』

『ほほう？ なるほど、テンにとって私は課題よりも優先順位が下の女だったのね。いやいや、これは冥ちゃんにも報告しておかないと』

『どっぞー』

『ゆるっ！？ いや、ちょっと……なんていうかそっういっ反応って
どうなのよっ。』

『冥の名前とか出さずに、舞の言葉でちゃんと言えば動かないこと
もないよ』

『……今食べたい』

『じゃ、買ってくる。飲み物とか欲しい物ある？』

『コーラ』

『はっはっは、素直でよろしい。素直な舞の方が可愛くて好きだぞ』

『

『いいから、さっさと行きなさい！ ばか！』

『はいはいぎゅー』

『ひゃあああああああああああああああああっ！？』

『うっわ……なんですかこの激甘過ぎてとろけそうな空間は？』

Aランクエンド後の会話を一部抜粋。Sランクでもこんな感じの
会話はしょっちゅう、ちらほら、わりと頻繁に見受けられますなあ。
はっはっはっは

「これはつまり、寂しがり屋同士がくつつくとバカップルになるし
かないということなんでしょうか？」

その通り。……だから舞エンディングを書くのはためらいがあっ
たのサ。

結局、ああいう形にして誤魔化したけども。

ライフルだから。

「山口。お前も毎回面倒ごとに巻き込まれて大変だな」

「もうそろそろ慣れた頃合ですが……ホントいちいちイラツときますね、この作者」

「いやあ、君たちに嫌われてもさっぱり悔しくないなあ。はっはっは。」

「ところで作者。前々からちよいと知りたかったことがあるんだが、いいか？」

ん？ なんだい改まって。

「いや、テンのことなだけどさ。別にあたしとテンってそれほど特別なこととかなかったわりに、あいつってやたらあたしに優しいじゃん。……それはなんでかなと思って」

「そういえばそうですね。京子さんには異様に優しいですよね、彼。一目惚れとかそういうのともちよつと違うと思うんですけど」

「そーだな。確かに外見はアイツの好みじゃなさそうな気がする。テンの好みは……ちよいとスレンダーな感じだと思っただが。舞とか虎子みたいな」

「いや、その辺はあんまり関係ないかな。狐は外見にはあんまり頓着しない方だし。」

「というか……好きな人ができたら自分の好みなんざ完全にお構いなしになるからなあ。自分で書いてて引いたことも多々あるし。」

「じゃーなんでだよ？ 美里だつて鼻ブチ折るまで辛かったつて言つてたぞ？」

「ああ、あの野郎は生粋のツンデレだから仕方がない。……とはいえ、美里さんの場合は少し例外かな。あの時は美里さんのオーバーワークを解消するためにピエロを演じたようなもんだし。」

「ただ、京子さんの場合はツンの状態がほぼ存在しないと断言してもいいね。それは極めて単純なこと、分かりやすく明快で、とても大切なことだけだ。」

「どーゆーこつた？」

ありていに言えば、『ご飯が美味しかった』からなんだよね。

「……は？」

だから、ご飯が美味しかったからあの野郎は一瞬で君に惚れ込んだわけだね。他にも色々あるけれど、一番の要因はそれかな。

「いや……それだけ？」

それだけ。それだけけど、大切なコト。

母親不在が多く、基本的に自炊が大半、付け加えるなら寂しがり屋の人間が一人で食べるご飯ってのは不味さが20%ほど増しになる。

家に帰って来れば誰かがいて、ちゃんとご飯が用意してあるってのは、あの野郎にとってはそりやもう嬉しいことだったんだよ。

ついでに言えば、君は煙草を吸ってなんだかんだ言いながらも、きつちりちゃんと仕事をこなす人だったからでもある。煙草を吸うのは多少のマイナスだったかもしれないけど、あの狐はそういう人をないがしろにするような野郎じゃなかったってことでしょ。

「……一目見て気に入られたってのも、いいんだか悪いんだか」

「ですねー」

ま、今の状況はともかく、屋敷にいた頃は悪いどころか滅茶苦茶優遇されてたわけだし、今は今で出張してる時以外は宿の食堂でご飯を食べるようにはしてるみたいだから、今も昔も確実に好かれてるんじゃない？

「それが大問題なんだよ、ばかたれ」

おやおや、なにかご不満でも。愛情表現が多少ストレートになっただけで、あの野郎は今も昔も変わらずにああいう感じですよ？

それとも、それ以外になにかとても困るようなことでも？

「いや……だから、ちよつと対応に困るんだよ。困っちゃいるが……」

……まあいいけど」

「京子さん、なにかされてるんですか？」

「いや別になんでもない。問題はない。オールグリーンだ。あたしはまだ戦える」

「？」

いや、実は今厨房では三匹の猫を飼っているんだけどね。

「うああああああああああああああああああああ！ 言うなばかたれ！ 言ったら殺す！ 必ず殺す！ 絶対に殺すからな！」

はいはい、仕方のない人だねエ。ここからが楽しいのに。

「あの……どういことですか？」

可愛いものを見る時の人の笑顔ってのは、思ったより可愛いって
いうお話。

じゃ、今回はこの辺で、サクサクと第六話にれつつごー

第六話 コツコさんと綺麗な洋装について

各種衣装の話。美里嬢の誕生日ちよい前で、アンナさん登場の回。

ああ、よく読むとアンナさんってぶっちゃけ要らないキャラクタ
ー……。

「キヤアアアアアアアアアアアア！ い、いきなりなんてこ
とをほざきますのこのクソ作者！ 謝りなさい、私に謝りなさいで
すのー！」

と、いうわけで今回のゲストはアンナ嬢。最終回他色々な場面で
いちいち物語を引っ掻き回し、面倒にしてくれました。本当に出さ
なきゃ良かった。

あ、忘れる所だった。ごめん。

「謝罪がなんかもうこれでもかかってくらいに取ってつけたような感
じですのー！」

はっはっは、まあそんなもんだろつ。

さて……ところで、楽園の時間は楽しめたかな？

「……なんのことですか？」

とぼけるなよ、姫皇剣。舞さんのAランクエンディングは、Sに
至るまでの道のりだ。正確には亜流の流れを辿ってはいるが、大

筋では変わっていない。

狐の彼に恋をしたのは、無駄でもなんでもなかったらう？ 本来なら在り得ないはずのものが、君が諦めたものがたくさんできたじゃないか。恐らく、彼も白も滅も舞さんも、もちろん他の人たちも、君が望めば君を助けてくれる。

少しは、身の程つてものを知つたんじゃないかな？

「作者のくせに生意気ですの。なにもかも知つた風なことを」

知つた風じゃない。知つているんだよ。作者だからね。

かといって、僕は作者であつても全能じゃない。回収し忘れた伏線も腐るほどあるだらうし、登場させたまま放置したキャラクターだつてもちろんいる。話の流れは大雑把で場しのぎで、情景描写に至つては惨憺たるもんだ。

正直に言えば、君たちを思い通りにコントロールすることすらできない。

「……だから、なんですの？」

作者なんてその程度つてことだよ。読者に落書きもどきの小説未満を、君たちに娯楽を提供するしか能がない存在つてことだ。

それでも……わりと意地はあるんだ。こつ見えて10年ほど続けてきたからな。

ま、長いストーリーを構築する能力に難があるから商業的に評価はされないだらうけど、こつちは自分の書きたいものを趣味で書いているんでね。わりと後悔はしていない。

それと同じように、君にも意地を張れる趣味はあるだらう？

「ふん……貴方の言いたいことくらい、分かつてますの」

そりゃ重畳。じゃ、そういうことでフォロワーの方は頼んだ。

悪役のために住みやすい世界を。いい男のために在り得ない世界を。

「そういうこと言つてると、貴方がヲタクだつて勘違いされますの」
はっはっは、まあそれはそれで一興。読者様には作者つてのは精一杯に痛い人間だと思つてもらわないとこつちが困る。

作者なんかロクな人間じゃない。そういうもんだと思ってもらいたい。

「……相変わらずロクでもないですよ、貴方」

ひねくれ者だからハッピーエンドが好きなのさ。なにかを考えさせられるようなエンディングはもう見飽きた。世界が崩壊するような無意味なエンディングもまっぴらだし、壊れた人間が壊れたまま終わるエンディングも御免だね。

ハッピーエンドはどこにだって転がっている。必死で足掻いて手を伸ばせ。なんの伏線を張っていなくても、助けを求める手を掴む人間くらいはいるだろう。

「……それでも、助からない人だっていますの」

手を伸ばした後は運だ。その手を誰かが掴むか掴まないかは誰も知らない。

だが、独りでも足掻くことはできるだろう。戦場とかサバンのど真ん中とかそういうどうしようもない状況じゃなければ、わりとなんとでもなるもんさ。

「詭弁ですよ」

詭弁が大好きだから物語を書いている。君だって似たようなもんだらう？

「はいはい。それじゃあ、忙しいですからそろそろ退場してよろしいですよ?」

ああ、手間を取らせたね。記憶は飛ばすけど、後のことは色々よろしく。

「貴方に言われなくても私の意志でやりますの。……いつものように」

じゃあよろしく。君の働きに期待する。

「そつちこそ、書きたいものがあるんだつたらさつさと書けですよ。善処するよ。……ま、いつになるかは分からないが。」

「さてさて、私の休憩も終わったところで、次は第六話になります」

ドレスの話。山口嬢がわりと似合う服を着る話になります。

「……あれ、いつもの毒舌はどうしたんですか？ ツッコミどころがありませんよ？」

いや、別にいつもボケてるわけじゃないから。

美里嬢の誕生日の準備だけだし、それ以外に語るところもないからねエ。

「なんかあつたんですか？」

察しがいいやら悪いやら。なに、ちょっと詭弁で遊んでいただけのことさ。

「……むう。なんか気になりますね。そうやってお馬鹿を装っている時に限ってなんか重要なことに関わっているってのは、彼のやり口と同じです」

気にすることはない。君には心底関係のないことだからね。

アンナさんって実は要らないキャラじゃね？ とかそんな感じの話題だったぶげっ！

「おお、どこからともなく凄まじい勢いで鉄球が……って、生きてますか？」

あ、案ずることはない。作者はベ マが使えるから大丈夫。

ああ……星が見える。

「……えっと、そういうわけで次は七話になりまーす」

え？ だって、日本に『文』なんて単位は大昔にしか存在しないよ？

川向こうに渡すだけじゃん。ただでいいじゃん。六文なんてそんな金額は……。

第七話 みんなと楽しい誕生日会（幕間）について

いじめっ子冥さんのお話。完全なる息抜きに書いた模様。

軋む心に、はせる闇。あくまで『自衛』のために舞さんに刷り込

まれたバカキャラクターが少しずつ壊れていくように描いておりませんが、多分失敗してるネ、テヘッ

しかし、いじめっ子が覚醒していくのはこの時からと言えなくもないので、狐にしてみれば幸福の始まりという名の泥沼に足を踏み込んだ感じだ。

「冥さんっていじめっ子なんですか？」

そもそも、この物語に出てくるメイドはおおむねいじめっ子だ。

有坂さん家のメイドを見る。いじめ放題じゃねえか。

「それ、私の妹なんですが」

ホント、君たち姉妹は全員寂しがり屋なくせにSで困る。

正直言えば君はかなり環境的にはマシな方だったりするんだよ？有坂さん家はもとより、四季さんの家にいる灰色なんかもう完全なDSだったりするし。

斗馬くん登場時や度々出てくる彼女は、『他人用』の仮面をつけているし、四季さんと向かい合う彼女は『甘える用』の仮面をつけているが、由宇理と向かい合った瞬間に修羅になります。

由宇理って超可愛い。八つ裂きにしてやる　みたいだ。

「……………えっと」

ああ、これは別に君のせいじゃないからそんな責任感じなくてもいいよ。

「いやそれでもですね、妹の普段の所業を聞くのはちょっと恥ずかしいというか……………」

「分かります。特に姉の普段の行動とか、恥ずかしくて聞いてられませんよね」

「また唐突に登場しましたね、冥さん」

はい、そういうわけで今回のゲストはミス・生殺しことアルティメイド3の黒霧冥嬢となります。

「作者さん。なんですかそのグロいあだ名は。メイドはともかく生殺しって」

僕が言うのもなんだが、自覚がないってのが一番恐ろしいと思う。

ぶつちやけると、君がやっているエグい行動がそのまま宿の全員に影響している。

まあ、僕には関係のないことだから別にどーでもいいんだけど。

「そうですね。作者さんには関係ないんですから、あんまり不謹慎なことは言わないでください。いい加減にしないと首ちょんぱですよ?」

おいおい、さりげなく斬首するぞって言ったぞ、この冥土^{冥土}。

「お指パチンとかの方がいいですか?」

超おつかねーよ! パチンとか可愛い表現使ってなんとか誤魔化そうとしてるけど、切り落とす気満々じゃねーか!

「古代中国には四肢を牛に結び付けて一斉にダッシュさせるという処刑法が存在したのですが、現代日本でも牛を車に代用すれば十分可能なのではないかと愚考します」

考えるな! いい加減にしねーと普通に出番減らすぞ!

「ところで作者さん、我が宿おすすめのパフェなどはいかがでしょうか?」

素晴らしい手の平の返しっぷりだね。まあいいけども。

さてと……幕間だし、今回は短くていいか。じゃあ張り切って次の話へ……。

「いえ、ちよつと待ちなさい作者」

ん? なにさ?

「冥さんの行動で宿の全員に影響があるって……どういうことですか?」

聞いたままそのまま。あるがままに受け入れるがよろしかる。

「いえいえ、これは聞き逃せませんよ。……なんか前々から、彼のエロ行動が多くなる日があるんですが、それとなにか関係が?」

おつとまずい。名探偵並の鋭さだねコッコ嬢。

さすがにミス・生殺しは少しまずいネーミングだったか。反省反省。

では、次の話にれつつ……。……。

「で、具体的に冥さんはなにをやらかしてるんですか？」
おっとこれはものすごくまずい。逃げ出せる雰囲気じゃなさそうな感じ。

さて……ゲームをする際に狐を椅子代わりにしたり、戯れに狐の後ろから抱き着いて耳を噛んでみたりと甘えまくったりしてることが言ってもいいのかわいいのか？

「悪いに決まっています。本当に殺しましょうか？」

いや、でもねえ。その被害は主にコッコ嬢や舞嬢にセクハラという形で表面化してるわけだから、むしろ行き着くところまで行っちゃった方がある意味健全だよ？

「19歳なので無理です」

む、未成年なら仕方がない。煙草もお酒も20歳からだし。

じゃ、会話の流れがヤバくなってきたところで次の話に……。

「行けるわけじゃないでしょうが！ 冥さん及び作者！ とりあえず正座しなさい！」

『だが断る』

「ポーズ決めながら決め台詞言っても、格好良くはないですからね！」

「いえいえ、しかし私に限らずメイドという人種は主成分あるせいぶんを摂取しないと生きてはいけません。ちなみに主成分は彼にくつついたりすることで摂取でき、接触面積が大きければ大きいほど有効に吸収できると既に立証されています」

「作者、そんな設定は存在するんですか？」

設定っていうか定説なら存在するよ。付き合い始めとか新婚のカップルに。

「冥さん!？」

「……えっと、しかしですね。今の状態が私にとっては生きる動力源のようなもので、これを切らすことは、つまり死を意味していると言っても過言ではないかと」

「言いたいことは分かりますが、いきなり後ろから彼に抱きつかれ

るこつちの身にもなつて欲しいんですが？」

できないことに対する僻みに聞こえなくもないから不思議だね。

だから、さつきから言ってるように首筋に噛み付けばいいんじゃないかね？

「死にたいですか。そうですか」

大人なのに本気でぐーを握るのは本当にどうかと思うぞっ！？

まあ、別に首筋に噛み付かなくても、現状でわりとバランスは取れてるからそのままでもいいとは思うケドね。どっちかに偏ると狐がぶっ壊れると思うし。

「どーゆーことですか？」

美里嬢と生殺しメイドが甘え担当。

バカ勇者と君が甘えさせ担当。というか、苛められ担当。

割烹着のロリ巨乳はわりとオールマイティに振舞えるので、どっちでも可。

Aランクエンディングが一番書きやすかったのも京子さんだし。

「……改めて見ると、つくづく健全という二文字からはかけ離れますね」

そりゃ仕方がない。狐が本当に欲しがったのは恋人じゃなくて家族で、ついでに言えばその家族と過ごす楽しい毎日が欲しかったんだから。

その狐の甘言に乗ったのは君たちだ。狐つてのはあくまで『共有物』なんだから、大切なら精々使い潰さないように大切に扱ってやるといい。

ま、大切じゃないなら瞳のハイライトが消えるまで蹂躪してやればいいと思うよ。

「生々しい表現はやめなさい。まあ、そういうことなら現状維持にしておきますが」

「その通りです。変化を望むのは簡単ですが、それに伴う痛みは想像以上のこともあるのです。つまり、私がご主人様に甘えまくるのもわりと正しいことと思われまます」

「冥サン。貴女はすこーし自重なさい。こっちにも限界つてものがあるから」

「ひゃい」

では、和やかな空気のまま第八話にいきまーす

第八話 みんなと楽しい誕生日会（前半戦）について

お誕生日会の話。美里さん登場の巻。

読み返してて思ったケド、なんで僕の小説のエセ拳法使いはこんな無茶に強いんだろっか？ 言峰 父とか烈海 とか渋川剛 の影響なのは間違いないけども。

ちなみに、美里嬢は筋肉と骨の『質』そのものが常人とは違うので、普通の人が扉をブチ砕いちゃいけないよ？

「ああ、そうだったんですか。どんな鍛え方したらあんなになるのかと思つたら……」

や、それでも美里嬢は別格だけどね。『合気』という名目の人体構造を最大限に利用した破壊術だから。異世界の人とはいえ、普通だったら京子さんくらいの『若干すごい』程度の身体性能しかないはず。

まあ、彼女たちがいた世界は重火器で戦うのが基本だったし、拳で戦うんだつたら美里嬢みたいに愛と勇気だけでティガレックぶつ殺すくらいじゃないと、生きていけないくらいに敵が破格に強かつたからねえ。美里嬢も作中じゃ全力出してないし。

「どんな世界の話ですかそれは。……あと、モンスーハンターの話はやめなさい」

レウスとティガには殺されまくつたけど、ナルガさんは三戦くらいで慣れてしまったので少し拍子抜け。ディアブ スの強さは相変わらずチート。あいつは時間の使い方が上手すぎるんじゃない。特にDクエの角が一本しかないやつ。

あと、ヴォル ノスよりガノ トスの方が絶対に強いよね。異次元タツクルとか。

「女の子とか絶対についていけませんよ、その話題は！」
みんなモンハン厨になってしまえー。まそつぷ。

話を元に戻すけど、美里さんたちの世界は、虚獣っていう化け物じみた生物が跋扈する世界で、本来なら大人しいその獣たちは、全世界と敵対しようっていう一人の嘔吐きによって変異し、人類をメタメタに虐殺しました。

RPGに出てくる魔物が全力で人間を殲滅にかかったと思ひねえ。その世界を救って伝説となった部隊が、かつて美里さんの夫が率いていた10人から成る部隊。

結局、美里さんとその夫の人が最終決戦の途中で脱走して、一人は戦死、京子さんは伝説と化してしまったために戦争が完全に終結する前に世界に排除され、残りの六人は戦争終結後に故郷に帰ったり、戦争の後始末してる。

帰郷した六人の内、有坂友樹はこの戦争で魔法使いになっており、芳邦鞠も究極メイド化しているし、ちょい役アウラさんもその六人に含まれているけど、まあそのあたりはわりとどーでもいい設定だよな。

「いや……どーでもいいってどうか、それはもつと先の話でバラす設定では？」

蛇足蛇足。こっちの物語に関係ない事象は全て『どーでもいい』として扱います。

「それもまたざっくりしすぎてるような気がします……まあいいでしょう」

しかしこの話、読み返してみると……本当に狐つてただの女垂らしだよな。君たちが殴りたくなる気持ちも大いに理解できるわ。

京子嬢のくだりのあたり、口説いてるようにしか見えないもん。

「今思うと……あの人は心を許した相手には、あーゆーことをナチュラルにやってしまうところがあるんですね。特に長い髪とか手

入れするの好きですし」

通説によると、女性の髪をいじりたがる野郎は、大抵エロいらしいけど。

「んー……否定できない部分もありますが、肯定しかねる部分もありますね。テンさんはなんていうか、普通に女の子の髪をセツトしてしまう人なので。冥さんの髪も5割くらいはテンさんが結い上げてるそうですし」

それはつまり筋金入りのドエロス野郎ってことなんじゃ……。

「まあまあ、男の子は基本助平だから別にいいんじゃないかしら？」と、いうわけで今回のゲストは橘美里嬢。別名、人間凶器です。

「凶器とはいきなり失礼ですね、作者さん？」

いやまあ君ら全員凶器みたいなもんだけど、特に美里嬢の場合は凶器でしょ。

あらゆる意味で。

「……なんだか、色々と秘密を知っているようですね？」

作者だもん。ある程度は割り切って欲しいと切に願う。

別にこの場で殺してくれても構わないけど、この劇場内では僕には自動で蘇生レイスがかかる仕組になってるし、殺すと1ペナルティです。具体的には、出番がちょっと減ります。

逆に増えるかもしれないけど、その場合でも嫌な役どころになるかと。

「む……本当にさりげなく嫌なことしゃがりますね。作者権限って卑怯です」

いやまあゲームマスターみたいなもんだし。その代わりこの物語で君らを自由に動かさせた試しはないから、あんまり意味はないんだケド。

時折頭で考えてることとキータイプする指が別の動きをするしなあ。病気なのかな。

「病気だと思えます」

「間違いなく病気よね」

うつわ、ひでえ。……仕方ない。ここはあえて逆に出番を増やしてあげよう。

本編の第二話はドレス再び、第三話は狐の嫁入りの予定だったけど、ここは予定を繰り上げて第二話に温泉に行こう『美里っち編』を、第三話に買い物に行こう『阿修羅編』をお披露目するしかなさそうだねえ。

「タイトルだけで既に不吉なんですがつ！？」

「この人の場合、出番を増やすと言ってもバラエティ要員であることが大半ですからねえ。おまけに動かしやすい人に限って滅茶苦茶ひいきするし。京子ちゃんや舞ちゃんなんて、作中でひいきされまくりですしね」

人聞きの悪いことを言わないで欲しいな。別に動かしやすい人をひいきしてるわけじゃなくて、人に合った出番を提供してるだけだつてば。

大体そんなこと言ったら、友樹や由宇理や執事や死神さんあたりの出番が滅茶苦茶増えることになるんだけど、それだと君らの出番はほとんどなくなっちゃうよ？

基本的に、野郎と野郎のかけあいの方が書きやすいし。

「……いやそれはそれとしてですね、出番が増えるのはいいんですが」

「そうよねえ。もーちよつとこう……甘い展開というか、ラブい展開というか」

……読者がニヤニヤしそうな、蜂蜜のような展開がお望みだと？ 言いたいことは分かるけど、あんまりそういうの書き慣れてないからなあ……。

「では、修行だと思って頑張ってください！」

「ふぁいとですよ！ 成せば成る、なにことも訓練あるのみです！」

……どこの鬼軍曹なんだよ、君らは。

えっと……まあいいや。じゃ、君らの言う甘い展開ってやつをショートショートでちよつと書いてみようか。

「もちろん、主人公であるこの私を大ブツシユですよね!？」

「待ちなさいコッコちゃん! ここはメインヒロインの一人であるこの私がふさわしいんじゃないかと思えますよ!」

「美里出番多いじゃないですか! 私なんて意外と惨憺たるもんですよ!」

「出番が多いわりに扱いが惨憺たるものなんだから別にいいじゃない! たまには美味しい所を総取りしたってバチは当たらないと思うの!」

では、面倒になったのでやめたBランクエンドから一コマをどうぞ〜

『は?』

『キツネ。ちょっと聞いて欲しいことがあるんすけどね』

『なにさ?』

『日差しがあちい。溶ける。むしろ枯死する。海行きたい。蝉うるせえッス』

『それくらい我慢しろよ。大体、金が勿体無いからって理由で選んだ安アパート部屋に遊びにくるお前が悪い。つーか、なんだかんだ文句言うわりには二泊目じゃねえか。ちゃんと四季さんの所に戻れよ』

『いやだつてさあ、キツネはもう高校生じゃないし、むしろ中卒だし、学校辞めてるし、それどころか男も辞めてるし、むしろ高倉テシコーだし?』

『守るものがないと、わりとなんでも開き直つてできるもんだろ。知り合いのねーちゃんが手術とか不要の性別転換薬をくれたわけだし、やりたいことをやるためには女の方が都合がいい。なんせ、高倉家に限っては基本性能が違うからな』

『……アンタには足枷がついてるくらいがちょうどいいッスよ』

『ん、それは重々承知してる。……って、お前らもボクにしてみり

や足枷みたいなもんだけどな。二人とも好き勝手やってるわりに脇が甘い』

『キツネは全方位甘いツスけどねー。さっきからスカートから下着が見放題だぜ』

『あ、やっぱりこの角度だと見えるか。んー……女性らしい服つてことで由宇理オススメのメイド服つてのを着てみたけど上手くいかないな。仕方ない、甚平に着替えるか』

『あつはつは、待ちたまえキツネくん。甚平なんて無粋なものじゃなくて、そのままをキープが一番ベストでしょう。キツネつてのは気に食わないけど美少女メイドとかもう最高に勝ち組の気分ツスよね』

『……由宇理、普通にぶん殴っていいか？』

『まあまあ、それはともかく膝枕とかして欲しいツス』

『いやまあ別にいいケドさ、後でなんか奢れよ』

『手作り和風ハンバーグとかでよかつたらなんぼでも奢ってやるツスよ』

『さりげなく人のツボを突いてくるよな、お前は』

『と、いうわけでまくらまくら』 ひざまくら』 上を見上げ

れば夢がいつぱい、下を見下ろせばロマンが一杯のひざまくら』

『……前々から思ってたんだけど、由宇理って本当に女か？』

『いやだなあ……メイドつて存在の前には、男女の境界などもはや意味を持たぬのさ』

『いや、少し待て由宇理。メイドつてのはそんな浅いもんじゃない』
『お前はどっから出てきたんだよ、友樹！』

『メイドつてのは、自分より早く起きて、自分より家事全般が上手くて、自分より遅く寝て、時折主を慰めたり叱咤してくれる人じゃなきゃなっちゃいけないんだ。少なくともワンピースとエプロンドレスを着るだけでメイドと呼ぶことはできないな！』

『キツネにメイドの資格がないとも言つつもリツスか？ この家事万能超人の世話焼きレディが、メイドにあるまじきでもっ！？』

『ふ、資質は十分だが、果たしてそれでメイドたる資格は得たとは言えないな！ メイドを名乗るのであれば力を示すがいい。そう…選ばれしメイドだけが言えるあの言葉で、己が力を示すのだ！』
『くっ……そこまで言うんだったら、ばしっと言ってやれッス、キツネ！』

『お還りなさいませ、ご主人様 』

『ぎゃあああああああああああああああつ！？』

はっはっは、実に甘い展開じゃないか。我ながらよく頑張った。感動した！

「あ、コッコちゃん。それは悪手ね。飛車はいただいたわ」

「銀の打ち捨てで詰みですよ」

「えっと……あれ、一手足りないわよ？ むしろ飛車打ちで私の勝ちだし」

「ぬ……くっ」

いっそ清々しいくらいに無視かい、君ら。

だって、これはあくまであとがきだし、ここで普通にショートシヨートとか書いたらあかんでしょうが。

「いや……それ以前に、設定がかなりツッコミづらんですが」

舞さんのAランクエンディングは伏線だったというオチなんだけど、面倒なのでやめました。というかAランクエンドに時間をかけすぎたね。

そろそろ本編が書きたくなってきた場合だから、仕方ないっちゃ仕方ない。

甘い展開はそっちに残しておきたいんでね、悪く思わないで欲しい。

「舞さんの甘い展開は普通に書いてたじゃないですか」

あの二人は毎日大体あんな感じですよ。

「毎日大体あんな感じっ！？」

あれだつて実際はわりとまともな方だよ？ その危険物と狐の甘い展開なんて、アレをさらにスイーツ（笑）にしたような感じだし。

「……………見たい？」

「私としては見たくありませんけど、見たいって人はいるんでしょうか？」

「やー……………いるんだかいらないんだか。」

「二行程度公開しておくよ、大体こんな感じですよ。」

『あの、美里サン？ 帰つて来て早々にやってんすか？』

『説明しましょう。橘美里は一日一度高倉天弧の背中に顔を埋めて思い切り深呼吸しないと死んじゃう体なのですよ』

「……………」

「こ、コッコちゃん？ その『うわあ、こいつ本当に駄目人間だな』っていう目はちょっとやめて欲しいかと思って思うの。なんか心が痛いから」

「とりあえず……………お説教ですね」

「ち、違つもの！ ほら……………人肌恋しい時つて、誰にだつてあるじゃない？」

「美里と冥ちゃんが甘えまくるせいで、彼が色々と不安定になるんじゃないでしょうか！ ちょっとは自重しなさい！」

「ちょ、えつと……………こら、作者さん！ 貴方のせいでまた厄介なことに！」

「僕は知りません。二行程度の甘えっぷりで怒られることになる貴女の素行が悪い。」

「いいからちゃんと聞きなさい、美里。大体貴女は美咲ちゃんとい彼といい、心を許した相手にはとりあえず甘えまくりじゃないですか！ 少しは自重なさい！」

「だ、だから違つものよ、コッコちゃん。これには深い理由が……………」

「黙らっしやい！ 前々から思っていましたけど、美里は……」

「……あつうつうつうつ」

はい、そういうわけでお説教が始まったところで次の話に行きま
す。

第八・五話 みんなと楽しい誕生日会（舞台裏戦）について

彼と執事の出会いの話。要嬢のラブキュンストーリーその1と解
釈しても可。

さりげなく、陸君登場回でもありますが、誰もそんなコトには気
づかない仕様です。

「いや、絶対に気づかないと思いますが」

仮面とボイスチェンジャーつけてるし、そもそも名前も出てきて
ない。

まあ、陸君は事態に中心にはいなかったけど、空倉方面の話は、
書くと血生臭い話になっちゃうからあえて省いた部分も多々あって
正直書きづらかった面もあるかな。

実際、陸君が本物の実働部隊で、かつ狐が空倉家と話をつけなか
ったら、舞さんにさっくり殺されてた可能性もあるわけだしね。

「……実働部隊っていうと、冥さんみたいに人外殺し専門の方々っ
てことですよね？」

そーゆーこと。陸くんは情報収集の方が専門職だったから、實際
に前線に出て冥さんや舞さんを追うようなことはしなかったってだ
け。

追った人たちは一人残らず例外なく、皆殺しにされてるんだYO
「いや、そんな可愛く言っても、心に引っ掛かるものはありますか
ら。……まあ、私としては舞さんがやったことを肯定するつもりは
ないですけど、どーせ舞さんは自分自身を永劫に責め続けるんでし
ようから、なにも言いませんよ。私も同じ穴のムジナですし」

ほう？ 殊勝な意見だね。

「この程度は当然ですよ。彼なら『舞に害を及ぼすような奴は存在している時点で間違えてるから、死んでいいよ』くらいは言うと思います」

ああ……絶対に言う。それは間違いなく言うね。

でも、人を殺すつてのは果たしてどうなのかね？

「もちろん、駄目でしょうね。……でも、舞さんはその罪も背負って生きていくと、冥さんを助けると誓った時に背負っている」

ふむ、確かに。

「昔は分かりませんでした。でも、今なら分かります。そんな尊い覚悟を邪魔するような人間は、全員例外なくことごとく死んでいい。舞さんが願ったのは、ただ妹を助けたいだけ。しかも世界の敵でもなんでもなく、純粹で人殺しに耐えられないような、そんな可愛い妹を助けたかっただけ。たった……それだけですから」

……それだけで、何十人も殺してることを是とするのは、おかしいと思うけどね

「ええ、間違っていますよ。それがなんですか？ 私たちは身勝手に生きています。彼を利用し、みんなで寄り添って、互いの傷を舐めあいながら生きています。……前提から既に間違えているんですから、今更一つや二つ間違いが増えたってどうってことはない」

……
「ただ一つ確かなのは、私は家族を守ることだけ。元々死んだような身です。やりたいこともあんまりない。だったら……私を必要としてくれた人たちを全力で守る」

……なるほど、ね。

うん、実にシンプルで分かりやすい。

確かにそれは身勝手だ。家族が大切だから、家族を守る。家族がどんなことをやっていようが、それは一人一人が背負う罪で罰だから、自分には関係ない。

それでも……関係なくとも、その人を守ることくらいはできるっ

てわけだ。

はっはっは、呆れ果てた偽善っぷりだねえ。

「いや、偽善ですらないんですけどね。むしろ自己満足ですから
まあいいんじゃない？ 守りたいなら守ればいい。」

それでこそ……主人公たる人間にふさわしいってもんだ。

大体、女の子を利用して金を稼ぐつてのは最低な行為で絶対にや
っちゃいけないよね。暗殺でもなんでもさ、誰かを利用するつての
は駄目だ。

利用したかったら対価を払うのが原則つてもんだろっし。

「……さつきと言つてることが違いますか？」

物語りは嘔吐きなんだよ。当たり前のことだけど。

あ、勘違いしてもらっちゃ困るんだケド、別に君を試したわけで
もないよ。単純に君の意見が聞きたかっただけ。

四年後のキミつて最終話以外出番ないし。

「わりと痛い所を突いてきますね。……というか、タイトルになっ
てるわりに私の出番つて作品全体を見ても、そんな無茶苦茶多いつ
てほどじゃないんじゃない？」

……………。

じゃ、今回はゲストなしでお次は第九話になりまーす！ しーゆ
ーねくすと

「あ、コラ！ また逃げますか貴方はあああああああああああ
ああー！」

第九話 みんなと楽しい誕生日会（後半戦）について

宴会の話。彼と美里嬢の話。

独りで生きていこうとする女性を傍観できなかった、馬鹿野郎の
話。

「……シツ「ミ」どころは？」

いや、だから。僕だって毎回ボケてるわけじゃないからね。

ちなみに今回のコンセプトは『宴に乗り遅れた企画者』。せっかく企画したのに自分ではそれを楽しめないという寂寥感をちよっとだけ表現してみました。

「お祭とかに恨みでもあるんですか、貴方は」

高校の時に地元の祭に行こうと思って友達誘ったけど、全員彼女と行くってことになって結局一人で行ったケド、あまりの寂しさに速攻で帰った思い出くらいしかないよ。

「……すみません」

そこで目を逸らされると、なんかものすげえ悪いことした気分になるね。

ま、友情はその程度でいいんだよ。友達よりも彼女を優先するのは当然のことだ。ちなみにその友人はできちゃった結婚しちゃって高校辞めちゃったけどね。

ざまあw

「いやそこで『ざまあw』ってのはさすがにどうかと思いますがいやまあ幸せにやってるみたいだし、その程度は言ってもよかるうよ。」

ちなみに注釈あたりで芝村さんのゲームがわりと好きだと書いていたけど、アドレスになったあたりから、なにをやっているのかさっぱり分からなくなった。流れが理解できないゲームってのは傍観している立場の人間としては、ちよっとしんどい。

柘田さんのゲームは未だに大好き。俺の屍を越えていけ。そして謎の村雨くんはやっぱり打ち切られた。……チクシヨウ。

と、いうわけでツッコミどころを作ってみたけど、どうだろうか？

「はいはい。変な要求をした私が悪うございましたよ」

「コッコちゃんは変なところで凝り性だものねえ」

「……話の流れから予想はしてましたが、今回はやっぱり貴女ですか、美里」

はい、そういうわけで今回のゲストは危険物こと美里嬢となりま

した。

話の主要人物だし、まあまあ妥当な線かと。

しかし……改めて読み返してみると、美里嬢も野郎の扱いがそこそこ上手いことがよく分かる一話となってるわけで。

「あの……できればそっちの話題は避けてもらえないでしょうか？」

さっきのお説教がボディブローのように響いてる感じなので「

仕方ないなあ、それじゃあ別の話題にしようか。

ラブい話に見えなくてもないけど、今回の話には実は色々伏線を仕込んである。

狐の歪みが直接的に見えるのもこの辺りからだ。

「どういうことですか？」

簡単なことさ。ちよっと考えればよく分かる。

小説ってのは簡素な媒体だ。文字でしか相手に伝える手段を持たず、あとは読者の想像力に委ねることになる。故に……小説は色々なギミックを仕込みやすい。

たとえば、一つの恋愛描写があったとしよう。男女が想いを伝え合い、好き合っていることを証明する。そういう描写だ。

二人が中心のシーンだ。自然と情景描写は少な目になる。

そう……たとえば、その二人の背景で世にも無残なぞぶぞぶといった感じの、描写するのも吐き気を催すような残虐シーンが展開されていたとしても、その情景が描写されない限り読者にそれが伝わることはない。

「いや、そんな無茶なシチュエーションはないと思いますが……」

設定によっちゃ在り得るさ。男女が化け物だとか吸血鬼だとか、ホラーモノとか。そんな書き方をする作家がいるかどうかは不明だけど。

つまり……ただでさえ曖昧さが残る小説という媒体において、一人称という表現方法は既にトラップの一環なのさ。

一人称……独り語り、独りよがり。逆を返して孤独語り。

現実と照らし合わせてみれば、狐の異質さはよく分かるはずだ。

前向きだから誰も気づかないだけだ。あの方向性が少しでも後ろを向いた瞬間に、誰でも彼が『異質な存在』であることを見抜けたと思うがね。

「んー……異質とは少し違うような気がしますが」

「テンさんは、異質いうより一生懸命な人が好きな人で、自分も一生懸命に生きてる人ですからねえ。ちよつと行き過ぎたところもありますけど」

ま、そういうことだね。

お節介の焼きたがり。つまるところ、彼は一生懸命生きてる人に必要とされたいと常に思っているような男だった。

だから我慢強いし、容赦もない。優しいけれど、誰にだって厳しい。

そんな人間が普通の範疇に収まるわけがない。……裏の裏を読めば、この話からそれを推測することも十分可能なんだよ。

「いや、普通の人はそんなことはしないでしょう」
物語を楽しむコツ、その1。作者の嘘を見破る。一人称は真に受けない。

ひぐしの鳴く頃にも使われてる手法だ。鬼隠し編とかはまさにこれだし。

この物語の場合は、狐の言葉を君が真に受けちゃったことで破綻したわけだ。

「……分かってます。ま、あんなことはもう絶対にやりませんよ。今の彼も私も自分の心の内を多少は吐き出すようにしてますし。……」

……主に拳ですが「
ちゅーとかぎゅーの方が確実だと思うケドねえ。その危険物みたいに。」

「……なんかもう、怒るのも面倒になってきましたね。美里はそういう風習や文化を好む痴女だと解釈しておきましょう」

「ち、痴女って……それはいくらなんでもひどいと思うわ。それに、コツコちゃんだってさりげなく膝枕とかしてもらってたじゃない」

「あー……あの時は正直飲み過ぎました。京子さんのおつまみと、彼が持ってきた日本酒がやたら美味しかったのもありますけど」

ああ、そういえばキミらはお酒強かったね。

ちなみにお宿のメンバーでは美里>コッコ＝京子>舞>冥>狐の順番でお酒の強い順が決定しています。宿の中では筆頭で酒が弱い狐でも、度数の低いお酒をちびちび舐める程度だったらわりと飲める。ただし、酒癖が悪いので本人は自重しています。一口で酔っ払うと断言しているのは、コッコ嬢やら京子嬢が飲むお酒が強いせいもある。

ビール二口飲んだら酔っ払う僕とは違うのだよ、チキシヨウ。

「貴方本当に弱いすもんね」

保険の先生のお墨付きだ。文化祭でやったアルコール強度検査で、今まで見てきた生徒の中で五本の指に入るくらいに弱いからなるべくお酒は控えるようにだつてさ！

あ、付け加えるのを忘れてたけど、美里嬢はビール、コッコ嬢は日本酒、京子嬢はジンと泡盛、舞嬢は甘いお酒（カルアミルク等）全般、冥嬢は未成年だけど飲む時は赤ワイン、狐は甘酒が好み。

未成年には面白くない設定を暴露する作者、田山歴史！

「……書いてる途中で気づいて誤魔化そうとするのはどうかと思いますが」

「というか、普通はプロフィールとかから公表するもんじゃないんですか？」

馬鹿を言つな。そんな細々した設定を考えていたら、僕の脳が破裂する。

つーか、誕生日も血液型も設定しにくい人が二人ほどいるしね。異世界出身だし。

小説の人物設定を明確に決めない作者、田山歴史！

「なら、私と京子ちゃん以外の人は設定してることでもいいのかしら？」

……いや、なんぼなんでもスルーはいかがなもんよ。せつかく、

日本版スパ ダーマの良さが分かり始めてきたというのに。

まあ、それはどうでもいいか。とりあえず四人だけ血液型だけ紹介すると、狐はA型、冥嬢はB型、舞嬢はO型、コッコ嬢はAB型という感じ。

「……ちよい待ちなさい。何の資料も見てみませんでした。今決めませんでした？」

いや、前々から血液型だけは決めてたよ。

狐のきつちりした生活態度はA型（正確にはAA型）で間違いなし、冥嬢の時折見せる空気の読まなさっぷりは間違いなくB型に該当する。わりと強気な人間に流されるのはO型の舞嬢。流されると言えば聞こえは悪いが、要は柔軟性があり人に合わせることを知っているってこと。コッコ嬢はAB型の天才肌で若干二面性がある。爽と鬱の差が激しいのが特徴的だけど、独創性があり個性的でもある。

血液型占いってわけじゃないけど、人物の傾向から血液型だけは設定している。

逆に誕生日は適当だね。むしろ設定すら決めていない。四季のどれかに生まれたとかは適当に決めているけど。ちなみに誕生日回が唯一存在した美里嬢は初夏生まれ。

あまりにも細かい設定は、作品が破綻する原因の一つになりがちだ。書きながら決定してもいい部分は、人物のキャラクターが確定するまでは設定すべきじゃない。

読者ありきの読み物だ。読者が知らなくてもいい設定はむしろ決めなくてもいい。

「む……作者のくせにちよつと説得力あるじゃないですか」

逆を返すと、そこまで精密に設定を決めた上でキャラクターを自在に動かせるなら、それはもう確実に出版してもらった方がいい。

出版。実にいい響きだ。印税とか超欲しいなあ。金が欲しい。時間も欲しい。

「……こういう人にだけは絶対に出版させてはいけないと思います

が

「同感だわ」

はっはっは、僕もそう思う。

……っと、今気づいたがちょっとまずいな。

「まずいって、なにがですか？」

文字数。この時点でいつもの物語よりかなりオーバーしてる。

「……………」

あっはっは……やべえな。書き過ぎた。

「……………つまり、次回に続くってことですか？」

そうなっちゃうね。

「どーすんですか！ あと七話もこんなことやるんですか!?!」

いや、もうちょっとスピードアップするよ。いくらなんでもこれ

は引く。自分で今気がついて普通に引いてるし。

まあ……四話くらいはつき込んだじゃうかもしれんけど。

「私としては二話くらいで終わらせて欲しいんですけど?」

善処します。

と、いうわけで次回に続く！ シューあげいん！

「……………はあ」

「大変ねえ、コッコちゃんも」

「まあ……………いつものことですけど、ね」

と、いうわけでパート2に続く！

でらつくすあとがき ねたばればれたね パート1（後書き）

どうしよう。ものすごく自爆な気配がする。

っーか、あとがきでパート2ってなにさ？ ない。ありえない。そ

もそもこのあとがきでの自分の性格がありえない。まごうことなき

ドSじゃん！

途中で自分自身を抹殺しようかと思ったけど、残念なことにパート2に続きます。

さて……次はどうしようか。

でらつくすあとがき ねたばればれたね パート2（前書き）

新年直前に書きあがったので更新。間違いなくこれが今年最後の更新となるでしょう。

いつも通りに文字数がまずいことになっているので携帯の方はご注意ください

でらつくすあとがき ねたばればれたね パート2

汚れっちまった悲しみに。

第九・五話 祭りの後と世界で一番不幸な彼氏について

恋しくて泣き濡れた三十路岬。

この言葉だけで、この話を語るには十分すぎると言えるだろう。

「まあ……そうかもしれませんね」

おや、否定やツッコミの方はどうしたのかな？

「いえ、今思い返すと……やっぱり、嫉妬していたのかなと思っただけです」

それはある程度仕方ないと思うケドねえ。人間ってのはそういうもんだ。

妬み恨み嫉み憎み。そういう感情を持つのは人間として当然のことだ。行動に移すのは当然良くないケド、他人を恨んだり羨んだりするのは、意味がないケド仕方がない。

それが恥ずかしいことだと感じるなら、努力して改善すればいい。自分を良くしようと努力するもよし、他人は他人と割り切るのもよし。努力が報われることはないかもしれないけど、それでも努力は自分を裏切らない。

届かなくても、頑張った経験だけは絶対に無駄にはならないだろう。

そういうもんだ。

「結局、なにが言いたいんですか？」

一生懸命生きろってことだろうね。少なくとも、ゲームも漫画も童話も、ありとあらゆるエンターテイメントはそう叫んでいる。

と、まあそれはあくまで理想であって、実際の所、人間ってのは

多少息抜きをしなきゃやっていけない。

程々に息を抜けばいいのに、うっかりそんな風に生きた女の子がここに一人。

「はい、というわけで、橘美咲参上！ 登場からエンディングの一部まできつちり登場し、千切つては投げ、千切つては投げの大盤振る舞いの大活躍でした！」

初っ端から僕が絶対に言わないことを平然と断言すんなよ。

それはそうと……美咲嬢。キミ、友達いなさそうないい性格してるよね。

「他人の前では自重してるよ。……素を見せていい人と、そうじゃない人の区別くらいはちゃんとしておかないとね」

……ほら、コッコ嬢。狐を見て育つと、いたいけな小学生だった彼女でも、残酷な高校生になっちゃうんだよ。

「……私の責任じゃないのは分かってるんですが、妙な罪悪感がありますね」

「あ、そういえば章吾と出会った頃の私って小学生だったっけ。懐かしいなあ。……結局、章吾は要お姉ちゃんにあげちゃったけど」

……あげちゃったけどって。

「さすがに四年分のラブパワーには勝てません。一途なんだもん、要おねーちゃん」

うん……まあ、確かに書いててびっくりしたよ。予定ではもうちよいフラフラする予定だったんだけどねえ。ちゃっかりいい男をゲツトしてるわけだし。

ちなみに、言うまでもないことだけど要嬢のモデルはコトミネさん家の可憐ちゃん。

足が悪いところとかはオマーシユと呼ぶがいい。

「それって……つまり丸パクリなんじゃ」

「まあまあ、山口さん。作者さんはいつもそんな感じじゃん。私なんて時を駆ける少女の主人公がモデルだし」

んなわけねーだろ。事実を勝手に捏造するな、小娘。僕の好きな

作品を汚すような発言をするな。出番減らすぞ。

美咲嬢はアレだ……えっと、ポケンのサワムラー。

「確かに蹴り技は得意だけど、いくらなんでもそれはないでしょっ！？」

いや、まあ一応モデルがあるにはあるけど、あんまり知ってる人はいないかも。

惑星のさみだれの、さみだれ嬢。性格は当然違うけど、蹴り技のイメージはあの漫画の描写から抜粋。

「えっと……」

ん、まあ知らなくても無理はない。そういうもんだから。

ちなみにコッコ嬢にはモデルは存在せず『本当の意味で弱い女性』のイメージそのままを描写。冥嬢は見ての通り月の会社の琥珀嬢。攻勢に出ている間は無敵だけど、攻撃されると途端に弱キャラに変貌。舞嬢は僕の根幹に関わるのでモデルの名前は伏せる。武装だけはヘルシングのウォルターさん。京子嬢は教艦アトロの荒井センセー。美里嬢は母親と少女をこっちゃん煮にしたイメージなので特定のキャラクターはいないけど、強いてあげるならフェイト口のアイリスさん（ドS+黒にアレンジ）。

狐はさつきも書いたように『最低の男性像』。章吾さんは言うまでもなく弓兵だが開き直れられると面倒なので、女性と関わりと口くなく目に遭わないように調整。陸くんは熱血系の主人公をイメージ。真面目で一途な熱血漢。友樹は逆にギャルゲーの主人公をイメージ。竜胆礼司こと死神さんは疲れている満点パパのイメージ。

うむ、モデルがないキャラの方が書きやすいのが一目瞭然だね。

「なんか……根幹って表現がちょっと引つ掛かるんですが」

あ、ごめん。それは本当に説明できない部分だから。

小説内でもそれについては一切触れてない。どこかでポロツと言っているかもしれないけど、まあそれはそれで僕のミスだ。

根幹ってのはそのまま『根幹』って意味でね、つまり今現在まで好きだと公言している作品はあくまで枝葉に過ぎなくて、その根っ

ここに一つ、これだけはどれだけ年月が過ぎようが絶対に変わらない、でっかい作品があるんだよ。

14歳の頃に惚れこんで、今現在まで好きな作品だからね。多分今後も変わらない。

「……しつこいんですね」

「まあ、作者さんってそういう人種らしいですし」

あのさ……忘れてるようだけど、僕一応作者だから。

君らを思い通りに動かせたことは一度もないけど……キャラクター以外の物語の流れを考えるのは僕だからね？

第二話で、鬼と狐と灰色の食い倒れ珍道中なんて真似もできるわけだ。

「また嫌な予感しかしませんねエ……」

「下手なコト言つと、トーマまで簡単に女の子にしちゃいそうなのが怖いんだけど」

いや、あの鬼は……まあ、この話は後でいいか。

ではでは、適当な所で次の話にれっつこー

この続きはエンディング群のあとがきで。

第十話 風邪とお粥と小さなわがままについて

風邪引きと、黒霧姉妹が狐に自分らのキャラクターをばらす話。

実際には風邪引きの上に遅効性の猛毒を盛られて死にかけてますが。

「洒落になりませんよ、それは！」

うん、実際に洒落になつてないから、冥嬢も焦っていたわけだけど。

猛毒って言っても継続的に摂取しなきゃ尿として排出されてしまふ類のものだけど、それでも放つておいていいものでもない。体力が低下していればそのまま死に直結する可能性もあるものだ。主に

拷問とかに使われず。

ま、そこまで計算した上で陸くんはその毒薬を使ったわけだけど、彼の立場から見たら、舞さんと冥さんが『買い取られた』ように見えているからね。姉貴ラブの彼にしてはわりと切迫した行動だったってわけ。付け加えるなら、致死毒を使わなかったのは、冥や舞を取り戻すための材料として利用するためだ。

「へえ……色々考えてたんですね、陸少年は」

ところがどっこい、計算高いことをしようとするのと穴に落ちるのが空倉クオリティ。今回ももの見事に失敗し、屋敷に取り込まれる羽目になったわけだ。

舞嬢とかも本編では色々画策してたけど、大半を狐に潰されております。ちなみに付け加えるなら、狐に食わせたまですぎるお粥は毒の効力を緩和する薬だったり。

冥嬢は元々考えるのが苦手なので、これには当てはまっておりません。

考えるな、感じるんだ。

「相変わらずだね、物語り。とりあえず死ねばいいんじゃないかな。はい、というわけで今回のゲストは変態メイドマニアこと、この物語で一番のエロスさんこと恐怖のきよーちゃんになります。別の短編からのスピニアウトのようなものですがはつきり言っただけで出たくなかった人No.1です。

あと、死ね嘔吐き。子供の世話をちゃんと見る。

「あの……お二方にはどういう因果関係があるんですか？」

「いや、理由はないけど嫌いなだけ。観測者とか傍観者って本当にイラツとくるよね」

そこだけは気が合うね、嘔吐き。僕もテメエは大嫌いだ。

テメエの吐く嘘は優しい嘘ばかりだ。もうちょっと悪意満点の嘘を吐け。

「……ああ、なるほど。つまり自分がないものを持っている相手だから嫌いだと」

「馬鹿を言っちゃいけない。僕は傍観者や観測者が嫌いだけだ」
誰も手の届かない高みから見下ろして、好き放題言えるんだ。
彼女というメリットはそれに尽きるね。

「はうつ！？」

殺人？ 馬鹿を言っちゃいけない。害虫一つ潰した程度で法律に裁かれるなんて色々とおかしい。君は誰にも出来ない正しいことをやっただけさ。

さあ、手を取れよ、メイド。クソ面白い世界を一緒に作ってやるうぜ？

「や、やめるコノヤロウ！ 僕を殺すつもりか！？」

全部テメエの若かりし頃のセリフだ馬鹿野郎。

ついでに言えば、この物語の悪の組織っぽいものはほとんどテメエが作ったんだろ。嫁も子供の世話も口クにできん野郎が、世界を変えるとか生ぬるいことを。

「子育てをしながら世界を変えることはできる……そんな風に思っていた時代が、僕にもありました」

まあ、後悔してるんだっいたら別にいいけどさ。

「……なんつーかね、あの奥さんは色々は無茶をしすぎです。子供は三人いなきや絶対に嫌だとか言ってる色々は無茶をさせられるし」
聞きたくないわ、そんな話。

1対9くらいの割合で確実に18歳未満お断りなエピソードをアドリブで語るな。

「そもそも……なんでアレが僕の嫁なのさ？ もっと……こう、僕に膝枕してくれるようなメイドとかそのあたりにはできんかったのかね？」

無茶言っつな。アレの攻勢に耐えられるのは、お前の息子くらいなもんだ。

最初から言ってるように、僕ができるのは物語の概要を大まかに決める程度のもんなんだよ。テメエらを思い通りに動かさせた試しなど一度もないわ。

「そこをなんとか」

なんともなるか、ばかたれ。マウント取られた時点でお前の負けだ。

大体お前、奥さんがいるのに浮気し放題じゃねえか。

「んー……まあ、浮気と言われればそうなのかもしれないけど、戯式さんに始まり面白い女性と縁を切るのは、僕としてはちょっとなあ」

そーだな、白の阿呆と違って、お前の場合は本当の遊び相手だもんな。基本だらだらしながらゲームしたり、将棋指したり、ボードゲームに興じてみたり。

素直に、遊び相手って言った方が波風立たなくていいんじゃない？

「正直に言えば分かってくれる……そう思っていた時期が、僕にもありました」

いや、馬鹿だろお前。ちよつと考えれば分かるだろ。

「まさか、まじ泣きされるとはね。想定外もいいところでした」

感情的な人間って、大体情熱的だからね。そのぶん愛されてると思っておけよ。

「……………愛が重い」

お前の息子も大体そんな感じだからな、もうこれは血の宿命みたいなもんだ。

「息子が羨ましい。近くに巨乳メイドはべらせやがって」

はべらせるといふより、弄ばれているって感じがするけどね。

「つか……その巨乳をけしかけたのは、間違いなくお前だろーが。天弧君にやびつたりだと思っただけだ……思っただけ以上にびつたりすぎました」

甘えさせ上手と甘え上手じゃ、そりゃびつたりだろうけどね。

ま、あの二人に関しちゃそれほど問題はない。とりあえず、この主人公がいりゃなんともなるだろう。役割分担もばっちりだし。

「そつか……じゃあ、もう面倒なコトは彼女に押し付けていいってことだね？」

「別に構いませんが」

おお……随分と強気じゃないか、主人公。

「というか、彼のことはどーせ私たちに丸投げになるわけだし、それだったら新しく生まれてくる赤ちゃんに労力を費やした方がいいでしょう。……まさかとは思いますが、その子まで織さんに丸投げするようなことは、ありませんよね？」

「……………あう」

「で、どうなんですか？ 子育ての方針とか、そのあたりは？」

「い……………いやあ、その……………えっと」

ははは、ぐうの音も出ないでやんの。自業自得だ、ばーかばーか作者、お前本当に後で絶対に泣かすからな！ 絶対だぞ！」

「それはいいですから……………で、どうするんです？」

「えーと……………」

「とりあえず、名前は どうするんですか？ まさか、彼がつけようとした名前をそのまま流用するつもりじゃないでしょうね？ ちゃんと考えてあるんですよね？」

「ああああああああ……………」

はい、そういうわけでオチがついたところで次の話にれっつごー

第十一話 剣と涙と隠した心について

舞嬢の策略の話。テーマはテレビの向こう側。

あの場所にいたらどんなに楽しいだろうと思って、自分の今の現実に絶望して、結局逃げ出すことしかできなかった一人の女の子の話。

それを助けることしかできなかった、一人の女の子の話。

「……………まともな紹介ですね」

たまにはいいでしょ。わりと思入れのあるエピソードだし。

「もっと思い入れがあってもよさそうな話はたくさんありそうです

が……」

んー……まあ、確かにそうなんだけど。

ぶっちゃけると、君の対応によっちゃ物語はこの話で終わりの予定でした。

「……………は？」

現在停滞中の猫日記の方で少しばかり語ってるし、後半の要嬢の話でも少しばかり語ってるけど、この世界にはいくつか厳然たるルールが存在する。

その中の一つがバッドエンドルール。そのルールは以下の要素で構成される。

一つ、世界のどこかには大本になる絶望の世界がある。
一つ、絶望の世界は人知れず自分の分身である種子を撒き散らす。
一つ、種子は世界の誰かに寄生して発芽の時を待つ。
一つ、種子の栄養は宿主の負の感情。絶望に始まり殺意とか害意とか悪意とか。

一つ、種子は発芽した後、時間を置くと開花する。

一つ、種子は開花すると『絶望』になり世界を滅ぼす。

ネタバレと銘打ってるからにはネタバレするけど、この物語で絶望の種子を宿している人間は合計で三人。一人は開花済みだけどそっちは折り合いをつけて上手くやってる。

獅子馬麻衣。

清村要。

黒霧冥。

この内、冥嬢が要嬢が発芽すると、読者置いてけぼりのバッドエンドでした。

「あの、それって小説としてどうなんですか？」

どうもへったくれもないよ。そういうもんだから仕方がない。

確立としては、交通事故よりよっぽど低い。本当に心の底から世界に絶望してもらわないと、種子が発芽することは在り得ないからねえ。

ま、生きる上でのちよつとしたリスクだ。世界が減ぶとか言ってみたはものの、実際の所日常生活にはまるで影響はないから大したことはない。

「……………」

おや？　なんだか無言の眼差しがとても痛い。『どーせまたなんか裏でこそそそやってたんだろうけど、突っ込むのも面倒だなあ』
という感じの視線だネ。

「分かっているんだつたら、自発的に説明をどうぞ」
はいはい。りょーかいしました。

実は、この時点で既に田山は読者様にイニシアチブを渡してしました。

集計結果を見る限りではそれなりに好評っぽいけど、別に無理に続けなくてもいいし続けてもいい。需要がある限りはやってみようという気分だったというわけです。

逆を返すと、需要がなくなったら即打ち切るつもり満々でした。
「ホント……なんていうかつくづく読者様のおかげってことですね」
そういうことです。需要がそれなりにあったからこそ、ここまで続いたわけです。

「つまり、もしも仮にコメント欄あたりに『冥さんが邪魔なので死んでください』みたいなコメントが多数あつたら、その通りになつていたということですか？」

……………いや。

いやいやいや？　そんなことは、ねえ？　ほら。

コメディだもの。恋愛ものじゃないんだから、そういうのはないって。

読者様もモラルのある方々ばかりだし。物語に文句は出ても、登場人物に文句が出たことは一度もなかったんだよ？

「どーせ貴方のことです。そこまで計算してデスクペナルティに含んでいたとしても、全然おかしくないです」

ま、そうだね。後半のやりたい放題を考えればここのは表に出な

いぶん甘い方だ。

これはただの愚考だけど、人間の言葉には力がある。曖昧で茫洋としていくせに、その言の葉の一つ一つがどれだけの人間を幸福にし、不幸にしてきたか分からないくらいに力が在り過ぎる。

たった一言。たかが一言。それが人を左右することだってあるだろうさ。

小説だって例外じゃない。作者が妄想を垂れ流すだけのものかもしれないが、それでも読者様の声が届く以上、それを無視し続けることなどではしない。

殺せ、邪魔だ、そういう言葉があるなら、その通りにしてやろう。そういう覚悟で書き続けたけど……思いの他読者様は良心的な人たちばかりでした。ある程度の失言も許してくれたし、怒ってくれる人もたくさんいたね。

へっ……世界つてのもわりと捨てたもんじゃねえな。

「そうやって格好いいっぽいこと言っても、物語を書く人としてはかなり失格だと思うんですが？」

自覚はあるよ。でも、まあ仕方がないよね

「自覚があるなら直しなさい。……せめて、もうちょっとマシな程度に！」

ぐががががが。こ、こめかみをえぐるのはさすがにちよつと……

「そもそも、普通の小説にバッドエンディングの設定をするんじゃないありません！」

今後は自重するよ。可能性としては常に残しておくけど。

ま、伏線も大体回収してあるし、本編に突入したら今度こそ書きたいものを書くさ。

「それならそれでいいですけど……あんまり、やりすぎないようにはいはい、了解してますよ。」

とりあえず……第二話は君のドレス再びの予定だから、覚悟しておくように。

「はいはい、了解しましたよ」

と、話がまとまった所で、今回はさくつと次の話に行きまーす。

「……先のことを考えると気が重いですねえ」

そういうもんさ。

事実今僕も明日からの出勤が非常に辛い。眠い。疲れた。仕様を変えまくる阿呆がいるせいで今日も残業明日も残業。普通の残業ならいいんだけど社内規定の残業時間に抵触しそうなほど残業させやがるのでかなりきつい。他に忙しい方は腐るほどいるだろうけどあえて言わせてくれ。レアケースの発見は早めにね！！

「私だつて、明日まだなにが起こるかと思うとちよつときついです。あと眠いです。肩も腰も凝ってるし疲れてます。でも、下手に凝ったとか言つとえらいことになるので要注意です。こつそりと京子さんに言つたりするのがベストなのです」

……ま、お互いに頑張ろうか。

「……そうですね」

第十二話 彼女の想いと彼女の願いについて

色々あつたけどそれなりに丸く収まった話。

サブタイトル：戦うことしか知らない女の生き様。

「その色々を解説しなさい！」

いや、ごめん無理です。

いくら僕でも背中に突きつけられた刃の感触を味わってはとても解説などできはしないのです。

「初恋の話の解説なんて、メイドである私がさせるわけないのです」

まあ、そーゆーわけで今回のゲストは今回の話の主演である冥嬢なんです。

あの……さつきも言ったケドこの劇場内じゃ、僕は殺されようがなにしようが自動的に蘇生がかかるんだけど。

「ならば何回でもポツキリやつちゃえばいいだけのことですね」

またおっかねーこと平気で言うし！ポツキリとか可愛い表現使ってるけど、人間の部位で折られて致命傷になる箇所って首か脊髄くらいじゃねーか！

大体、冥嬢の初恋ってのは、思いつきり叶ってるんじゃないか。現状で幸せなら別に構わないけど、あの狐以外の選択肢ってのはなかったのかい？

「ぶっちゃけ、ご主人様以外の殿方ってイマイチ面白くなさそうなので。あと、メイドってだけでなんか色々誤解しそうな変な方々が多そうなので、嫌です」

えっと……それってベタ惚れ？

「ベタ惚れというより……私は常にサムライアリでいたいというか」

「サムライアリ？　なんか、格好いい響きのアリですけど」

名前だけはね。

サムライアリってのは、別種のアリの巢に侵入して幼虫や蛹を略奪して巢に持ち帰り、働き蟻として奴隷化するアリのことだよ。

まあ……逆を返すと、奴隷アリがいらないとなんにもできないアリでもあるけど。

「……め、冥サン？」

「くふふ……万人が理解していませんが、『人に従う者』というのはいつの時代も、主に隷属しているように見えて、実際は主を利用してしているものですよ。女王アリと働きアリ、どちらがどちらに隷属しているなど、ぱつと見では分からないでしょうに」

「あれは働きアリが女王アリに従っているのでは？」

……いやあ、実はそーでもない。

アリの指揮系統がどうなっているのかはファーブル昆虫記あたりで読んだことがあるけど、確か大きく分けて、指揮官アリ、世話役アリ、働きアリ、怠けアリ、雄アリ、女王アリくらいの種別だったような気がする。大昔に読んだからうる覚えだけど。

指揮官アリは現場の責任者で働きアリに指示を出す。世話役アリ

は幼虫や女王の世話を言い、働きアリはそのまま労働に従事する連中。怠けアリは指示に従わずただひたすらに怠け続けるアリで全体の二割くらいがこれに相当する。なぜ怠けるのかは詳しく知らないけど、生物つてのは統計的に見て二割程度は確実に怠けるらしい。雄アリは女王に種付けするだけのアリ。女王アリは子供を産むだけのアリだ。

人間のように色々なことをするわけじゃないから、役割はシンプル。本当に子孫を残すだけの役割を担っている存在だ。新しい女王アリが台頭すれば、あっさりと殺される。

さて……ここまで読んだ上で、さっきの問題だ。

女王アリが働きアリに奉仕させているのか、それとも働きアリが女王アリを利用しているのか。

女王アリは働きアリに命令できるわけじゃない。ただ子供を産むだけだ。

働きアリが子供を産める女王アリを利用しているとも取れなくない。

ま、種族の繁栄って観点から見れば、どっちでも同じ事だけだ。

「どっちにしてもわりとえぐい話なんですけど！」

「まあ、人間を昆虫に例えるのはちよつと駄目だとは思いますが、現状を考えると大体そんな感じかなあと。ちなみに山口さんも一枚噛んでいるので、なにも言うコトはできないと愚考しますが？」

「……………う」

「いやいや……あの狐の影響かね、随分と屁理屈が達者になって。」

「屁理屈ではありません。共生するにしろ寄生するにしろ、お互いに尊重し合い大事に消費していこうという話に持っていこうとしているだけです。……私もそうですが、山口さんも下手をするとぶっ壊しかねないので」

……………。

会話の手法の一つに、こんな方法がある。

人が思わず引く、あるいはとんでもなく興味をそそる話題を出し、

それに乗じて前の話題をなかつたことにするといふ……極々普通に用いられている手法だ。

虚構士の手口とも言つけど、まあそれはどうでもいいか。

「作者さん、なにが言いたいのでしょうか？」

「いやいや……なんも考えずに甘えまくりの女の子が随分成長したもんだと思つただけだよ。人の成長つてのは実に面白い。」

「いえ、確かにご主人様〓初恋つていうのはちよつと恥ずかしいですが、最初から大当たりを引いたと思えば別に恥ずかしくもなんともありませんよ？」

うん、確かにそれに関しては何もつきりその通りだ。君はそれを恥じたりはしないだろう。それは僕も予想がついた。

だったら、別にこの話の解説を無理に止める必要はないんじゃないかな？

「いやあ……でも恥ずかしいものは恥ずかしいですし」

虚構士の手口、その2。

嘘は吐かない。それでも嘘を成立させる。話を本題から徐々に逸らす。

会話が成り立っているふりをするのも、嘘吐きの手口の一つだ。

「回りくどいのは嫌いじゃありませんが、この際はつきり言つたらどうですか？ ……なんか、嫌な予感しかしませんけど」

うん、じゃあぶつちやけよう。

今回の話、冥嬢つてなんにもしてねえよな？

「はづつ！？」

陸君襲撃後は、狐連れてきただけだし、戦闘に限つて言えば今後の展開でもあんまり役に立ってる場面つてそれほど多くないんだよね、君の場合。

「わ、わりと役に立ってますもん！ 出番だつて山口さんよりはありますし！」

「……あら、なんででしょう。目から汗が」

いやあ、メイドになる前の君つて戦闘能力つて点で見ればお粗末

もいところなんだよね。人外相手には十分渡り合えるけど、超人相手には勝てないくらい。

ちなみに人外の定義はそのまま『人成らざる者』を指す。空倉一族がやっていたことを道徳や尊厳を撤廃してぶつちやけると、人体実験の果てに暴走してしまった被検体や、人に害を成す妖怪やそのあたりの始末……つまり、大抵は『被害者』の抹殺だ。

これとは逆に超人つてのは『ナレノハテ』。成って果てた者だ。分かりやすく言えば鬼ならオウガ、トカゲならドラゴン、馬ならキリン、鳥ならホウオウ、人なら現人神、メイドならシャーリーあたりがこれに該当する。

この物語だと、上記に該当するのは京子嬢、有坂友樹、桂木香純、刻灯由宇理、あとは例外的に相川ハーレムの極悪嬢と黒の魔法使いあたりになる。全員例外なくやたら強い上にチート能力の持ち主だけど、野郎はメンタルが非常に弱くなる反面女性に縁ができ、女性にはメンタルが非常に強くなる反面、男に縁がなくなる。

近しい属性の人とくっついたり、血の繋がらない身内とくっついたりするのも、ある程度はそれが絡んでいる。

「あの、作者さん。……どーでもいいんですけど、メイドならシャーリーのくだりは突っ込んでもいいところなんでしょう？」

その辺は仕方がない、僕基本的にメイド嫌いだから。

しかし、森薫先生の作品は非常にいい。男女共に非常にいい。デ
イ・モールト！

君らみたいな荒み系とは大違いだ。

「荒み系とは失礼ですね、山口さんのようなDV系はともかく、私は癒され系です」

回りくどいのは嫌いじゃないけど、誤解を招く微妙な表現は良くないだろ。

癒され系つて、冥嬢が癒されただけだろうが。

「メイドって職業は思ったより大変なのです」

ま、そりゃ分からないでもないけど。

「しかし、実はそれ以上に山口さんは大変だったりするのです。ね、山口さん？」

「……………ぐすつ」

「……………」

……………あの、冥嬢？　なんで彼女マジ泣きしてんの？

「わ、私に聞かれても……………」

「……………ぐすつ。どーせ私なんて、ヒロインにすらなれなかった女ですよ。甘ったれでクソみたいな根性なしで、さらに出番すらあんまりない女ですよ。……………うう」

冥嬢、君のせいなんだからなんとかしなさい。

「えつと……………いや、さすがにあれはちょっと無理ですよ。マジ泣きする大人の女性を慰める手段なんて、ウチの宿じゃ舞ちゃんかご主人様くらいしか知りません」

じゃあどーすんのさ？　このままだと、ここであとがき終了だぞ。

「……………それでは！　冥ちゃんの大奮闘の回、いかがでしたでしょうか！　さっぱりすつきりしたところで次の話に進みまーす」

あ、テメエコラ！　思いつきり逃げるつもりじゃねーか！

「ではでは、ゲストはこれにて一目退散のスタコラサツサなのです

ばーいー！」

ばーいじゃねえ！　僕だってマジ泣きしてる女の慰め方なんて知らんわ！

……………って、信じられん。本当にフェードアウトしやがったよ、あのメイド。この劇場からどうやって逃げ出したとかよりも、泣いてる人間放置するとかまじねーよ。

えつと……………。

あ、アメ食べる？

「……………くすん」

……………。

じゃ、サクサク次の話に進みまーす　次の話は進行役が一人いなくなっているかもしれませんが、お気になさらずに！

第十三話 闇のゲームと精神崩壊コンボについて

やってみたかった回。ぶっちゃけ、され竜のあの回のパクリだ。ぱ、パクリって言っても大富豪を小説で書いてみたかっただけなんだから！ 勘違いしないでよね！

んー……参った。慣れない作風ツンデレでなんとか急場を凌ツンデレごうと思ったケド、はつきりと無理だ。ツツコミ不在がこれほどしんどいとは。と、いうわけでツツコミ召喚。とりあえず舞嬢とかでいいか。

「だーかーらー！ 引っ付くなって言ってるでしょ、馬鹿テン！」
……………。

「……………」
……………失礼しました。

「あ、ちょ………違っ！ そうじゃなくて！ 話を……………」
フェードアウト完了。

ふう、まさかいちゃらぶ中に呼び出してしまうとは思わなかった。普通にびっくりしたわ。……さすがの僕でもちよつと罪悪感が沸いちやうじゃないか。

うーん……舞嬢が駄目なら、京子嬢あたりならどうだろう。むしろ最初からそうしておくべきだったやもしれぬ。

と、いうわけで召喚。
「あっはっは、お前は可愛いなあ。にゃーにゃーにゃー」

「……………」
……………「……………」
……………ごめんなさい。

「違ッ……………ちょ、ちよつと待て！ お前は今盛大な誤解をして……………」
フェードアウト完了。

……………まあ、これは仕方ないよな。猫好きなら猫を前にしては我を失ってしまうのも致し方ない。これはもう自然の摂理と言い換えて

もいいだろつ。

しかし……この流れから考えて、美咲嬢を呼び出すとまたきつとえらいことになるに決まってる。冥嬢はボケだから呼べないし。つまり、ここで次の話に進むのが妥当なことか。

田山歴史は死亡フラグを回避する作者なのである。

「やれやれ、相変わらず面倒な男だな、お前も」

面倒なのはいつものことだよ、デッドエンドタヌキこと、死を招き。

「つか、お前別にこの話に登場してねーだろ。さっさと帰れ。」

「ハ、なにを言う。我はいつだって狐の背に乗っていた。今は陸とかいう犬の小僧だが、それでも常に私はあいつの側にいたからな、出演の権利くらいはあるだろうよ」

使い捨ての伏線のくせに生意気な。読者からも別にツッコミがこなかったし、話の展開としても別に必要なかったから切り捨てたのに、まだ食い下がるか。

「はっはっは、お前がいくら切り捨てようが、我が存在する限り死を招くことは変わらぬよ。いつだって我は鼻つまみ者。そうでなくてはならん」

……ふーん。

じゃ、そういうわけで次の話に進みまーす

「考え付く限り最悪の対応をするでないわ、たわけ！」
最悪の対応なのは当然だろう。

言い忘れていたかもしれないけどな、僕は絶望は嫌いじゃないけど、死ぬとか殺すつてのは大嫌いなんだよ。

伸ばした手を掴んでくれる誰かがいるならまだいいさ。
生きるつてのは綺麗事じゃない。そんなことも分かっている。運と努力次第でどんな方向にも転がっていくことくらい、もう分かっている。

それでも……伸ばした手を払いのけられる不条理に耐えられるほど、僕は大人にやなれねえんだよ。

だからまあ、嘔吐きとは別の意味でテメエのことは大嫌いだ。

なにが死の試練だ。アイスソード奪おうとして返り討ちにあえ。

「頭髪と引き換えに強さを手に入れた男の話はまあいいが……お主、最近モンスターをひたすら狩るゲームしかしとらんだらうが。その内、ネタも頭打ちになるぞ？」

ゲームをする時間がねえんだよ。モンスターを狩りまくるゲームの方はワンプレイ最長でも一時間ありや確実に終了するから時間潰しにもってこいだし。

最近面白かったのは『勇者のくせ なまいきだ』かなあ。あれ、プレイ動画を見て買ったんだケド、難しくてやってないんだ。あっはっは。

上手くやろうとすると戦術、戦略レベルの知識が必要とされるゲームをやったのは久しぶりだね。やっぱ、ゲームつてのはコントローラーを壁に叩きつけるくらいの難易度がないといかんと思う。子供にはトラウマを、大人には少々の刺激をくらいが一番いい。

いやあ……ホント、勇者つてチート野郎ですよね。

呪文とか爆弾とかセーブとか……本当にチートもいいところですよね。

現実はこのなにも厳しく、やり直しも効かないっていうのに！

「現実とゲームを比較するのはお主くらいなもんだと思うぞ」

現実は厳しい。仕事は辛い。でも、金は欲しい。

金があれば大切なコト以外は大体なんでもできるようになるからね。

「薄汚い大人のセリフだのう」

ケケケ、なんとも言うがいい。お前みたいに人の背に乗って死の試練だのなんだの訳の分からないことを言っているようなタヌキの言葉に、説得力なんてあるかよ。

平成タヌキ合 ぼんぼこにでも参戦してればいいと思うよ。

「……ほう。青猫の小娘と違って、我はわりと我慢強い方なのだな。貴様がそういう態度に出るなら真正面から叩き潰してやらない

「こともない。どーせ、出番ないしのう」

最後の一言が本音っぽいね。まあいいけど。

でもまあどーせ、君は僕には勝てない。やれるもんならやってみる。

「はっはっは……ならば死ねイ！」

よーし、来い。返り討ちにしてやるぜ！

「僕らの戦いはまだ始まったばかりだ！」

「……あれ？　ちょ、まさか貴様、無理矢理次の話に進む気じゃないだろうな!？」

知らなかったのか？　作者に立ち向かうことはできない。

停滞中の猫日記に出番作ってやるから、精々苦勞するといいよ！

あーっはっはっはっはっはっは！

と、いうわけで次回に続く！

「待てこらああああああああああああああああああああああああああああああ！」

第十四話 修羅と羅刹とダイエットについて

体脂肪の話。あと、腐れ女垂らしヘタレ白髪男参上の回。

「……分かりやすい解説ですが、その解説で物語を読みたくなくなるかと言われれば、断じて否ですね。むしろ絶対に読みたくないです」

おや、コツコ嬢。復活おめでとう。

「ええ……よく考えたら、貴方の小説で出番がある＝酷い目に遭うって意味だということをつっかり忘れていましたよ」

はっはっは、よくぞそこに気づいた。おめでとう。

そういうわけで、君の出番はたっぷりと本編の方に用意してある。

「……うわあ、全然嬉しくない。さっきまで出番がないことで嘆いていたのに、一体どうということなんでしょうか」

「出番なんてなけりやないでいいんですよ。……俺みたいになりま

すから」

と、いうわけで今回のゲストは白い魔法使いこと有坂友樹。この物語での扱いは比較的常識人ですが、エンディング群の舞エンドでははっちゃんけております。

なお、Bランクエンディングではただのホモ野郎。死ぬ、B.L。
「初っ端から喧嘩大安売りすんじゃないやねえよ、作者」

でも、友達が性別変えてメイドになったからって、女性として意識するのは果たしてどうかと思う。

「……いや、俺もそう思うんだケドさ、外見が好きな上にメイドで、しかもこっちの心理とか把握されまくってるし……どうしようもありませんでした」

……いや、そんな悲しそうな顔をされても僕にはどうしようもない。ごめんなさい。

それにお前、物語の前半と後半でキャラ違いすぎるだろ。最初の頃、狐に対して『君』とか言ってたけど、あれはなんなのさ？ 爽やか演出？

「いやいや、単に警戒してただけ。あいつと別れたのは小学校以来だから、性格が全然違っててもおかしくないだろ。……まあ、実際の所は杞憂だったわけだけだな」

人の根幹ってのはなかなか変えづらいもんだ。

ま、狐のことは置いておくとしても、実は、この話はお前の登場によって色々伏線張っている。最終回における庭の話はこの頃からほのめかす発言があるし。

コッコ嬢の身内が近くににいるもんだから、全登場人物中お前だけは最終的になにが起こるのか大体知っていたわけだし。

そこまで知ってたんだしたら、あの狐を助けてやってもよかつたんじゃない？

「……し、仕方ねーだろ。迂闊に手エ出すと狐の野郎、超怒るし」

正義の味方は、見た感じ不幸な美女と美少女だけ守ってるが定例文句だもんねえ。

「ま、俺の話はいいんだけどさ……ふと気になったんだが、あいつの『屋敷』って本当になにやってたんだ？ 今みたいに『宿』っていう指標があるわけでもなし」

なんでもやってたよ。

「……へ？」

金貸したり、株式やったり、貿易関係の仕事のお手伝いとか、織さんが招く厄介なお客様の接客とか、分かりやすく言い換えれば請負と派遣が半分半分くらいだね。その他諸々本当に色々やってた。読者には関係ないから省いてたけど。

大抵はあくむさんから得た情報でイニシアチブを掴んだ上で、章吾さんのスーパ―執事テクニクで収益を上げていた。実際、潰される間際まで思いつきり黒字。

執事がいなくなつた後もあくむさんの情報だけで十分にやっつけていたみたいだったけど、狐の疲労困憊っぷりに従業員全員が見ていられなくなつて、結局父親によるドクターストップがかつたと思ひねえ。

巧妙に隠してたけど、疲労のあまりぶっ倒れたり、こっそり便所で吐いたり、煙草に逃げたり、寝る前にアルコールを飲んでなんとか疲労を少しでも回復しようとしてたり。

「あー……確かに、滅茶苦茶疲れてたな。毎日授業中は睡眠時間だったし、起きてたとしてもなんか色々やってたし」

「……………あう」

ま、コッコ嬢が気づかなくても仕方がない。こればかりは言わない狐が悪い。

頼りにならない人として認識していたとしても、助けて欲しい時に手を伸ばさなかつたら誰も助けちゃくれないからね。

だから……コッコ嬢はここで反省すべきじゃないな。

「前回のあとがきから思ってたんですけど、作者さんって手厳しいですよ」

僕は自分に甘く他人に厳しい、その辺にいる普通の人間なんでね。

正直に言えば、自分に厳しい人間の厳しさなんて知ったこつちやねーのさ。

周囲の人間の目を考えられない厳しさに意味なんてあるのかね？
とは思うけど。

「……ある意味きついですよねエ」

「普段言えないことを好き放題言ってる感じだよな」

ま、厳しいだけならまだいいんだ。厳しいなら厳しいで、それをちゃんと人に伝える術を知っていけばいいだけのことだから。今の世の中コミュニケーション関連の本とか読めば自分に足りないものくらいは載ってるし。

問題なのは、自分に甘く他人に厳しく、なにか都合の悪いことがあると周囲のせいにして自分が悪いと思わない人なんだけどね？

「いやー、今日はなんかあつついですね、山口さん！ こういう日は酒しかありえませんか！ あんまり暑すぎて目から汗が出てきちゃいますし！」

「そうですね、友樹君！ 今日は冷えた日本酒とか飲みたいですね！ ……ああ、痛い。なんだか胸がものすごく痛いけど、お酒があればなんとかかなりますよね！」

いや……ごめん。まさか冷や汗を滝のように流すほどのトラウマになってるとは。

とりあえず、お酒に逃げるのは勘弁してください。

お酒ってのは百薬の長とか言われてるけど、ありや嘘だから。どつちかっていうと確実に毒の長だよ。おつまみとかやたらカロリー高いし。

お酒を飲み始めると太るって言われてるのは、一緒につまみも食うからなんだよ。

「あれ？ でも、私はお酒飲み始めた頃から……屋敷を離れた頃くらいから、体重はむしろ減ってるんですけど」

いや、それ多分ストレスじゃね？

「ちなみに、あいつの宿の仕事って普段どんなことやってるんです

か？」

「どんなことと言われると返答に困るんですが……強いて上げるなら、全部ですかね」

「……………ぜんぶ？」

「ええ、とりあえずやれることは全部。冥さんは普段なにをしてるのかイマイチ分かりませんし、京子さんは厨房担当だし、美里は事務とか経理とか色々やってますし、舞さんと彼はパートタイマーですからね。一応他に人も雇ってますが、それでもおっつかない所は私が全部やってます。毎日忙しいんでちよつときついんですが……まあ、織さんと一緒にいる頃に比べればへでもありませんけど」

「あー……………そりゃそうか。あの人と一緒にいるとホント半端ねえかな」

ちなみに、どんな感じで半端ないのさ？

「……………あーあ、もう疲れちゃったな。燻製チーズといいワインがありますから、それで乾杯しましょうか」

「そうですね……………もう世界とか世間とか人間関係とか、どーでもいいですよ。お酒があればそれで十分ですよ」

いや……………その、ホントすみません。

つて、謝罪を無視して酒盛りムードになられると、こっちとしても対応に困るんだけど……………おーい、話聞いてますか？

……………えっと。

次回に続く！

第十四・五話 修羅と羅刹とダイエット（承前）について

要嬢の燃えきゅんストーリー エピソード2。

リアルラックを無駄な所で消費し、それを無に帰す執事の話……と、見せかけてここで運を放り出したことが後々嫁ゲットのフラグになることを、作者と他一人だけが知っていたそう。

全てを捨てた者が、全てを手に入れるってのは、お約束の範疇内かな。

「……………」
「やあ、他一名こと今回のゲストの獅子馬麻衣さん。本編ではお疲れ様でした。」

出番がなくて本当に悪かったね。

「いや……………出番がないのは別にいいんだけど、とりあえず謝って欲しいかな」

ごめんなさい。

……………僕は止めたんだケド、どうにもなりませんでした。

「いいーから飲めよ、作者。鞠お勧めのいいワインなんだから。銘柄は知らんけど」

「そーですよ、おねーさんのお酒が飲めないって言うんですか？」

いや、ホント勘弁してください。そんな度数の高いお酒は飲めません。

「アレだお前。俺たちのことを馬鹿にしてるだろ？ お酒が飲めないとか、とりあえず飲んでみなきゃ分からないだろうが？」

「そーですよ。……………とりあえず一杯飲んでみましょうよ」

いや、ホント無理です。僕はワイン一杯で爆睡して、翌日の昼まで起きなかった人間です。それ以来、僕の人生からお酒は消滅しました。

「いいから飲めって。ごたくはいいからさ」

「そーですよ。ほらほら、このワインすごくいいモノなんですから」

「んー……………確かに美味しいけど、あんまり素人に薦めるのは良くないかと思えますよ」

いや、だから無理だって。

そんな押し付けられてもね、無理なものは無理だから。飲めないってば。

とりあえず一杯じゃないからね。一杯飲んだらそれが命取りだからね。有坂、そんな頼に押し付けられても困るからね。あとコッコ

嬢、勝手に僕の鞆を荒らすのはやめろ。財布と携帯とモンハンくらいしか入ってないから。獅子馬、テメエ普通に財布から札とキャッシュカードを出すな。本当にしばくぞ。

……おい、頼むからそれ以上ゲーム機をいじるな。大人にはやっていいことと悪いことがあって、多分それは悪いことに相当する。ただの暇潰しだけど、真剣な暇潰しとそうじゃない暇潰しがあっただね……。

あれ？ ちょっと待ておい。今……とんでもねーことしやがったか？

注意事項

ここから、暴力表現が非常に多くなります。罵詈雑言、スラング、その他諸々の乱暴かつ過激かつ不適切かつ言葉の暴力表現が苦手な方はスクロールして次の話に飛んでください

はい、そういうわけですね！ 作者権限（握った弱みで脅迫）で全員に正座させるわけですけども、行き過ぎた酔っ払いには暴走する青春より性質が悪いっていうか、ぶっちゃけもう酔っ払いとかみんな死ぬばいのにね！

酒を美味そうに飲む人間は全員頭パーンってなれ！ ファック！

嫉妬乙！ でも、この怒りだけは止められない止まらない！

そう思わないか？ その気持ち悪いメイドマニア。

「……いや、その、すみません。調子こきすぎました。だから鞆には黙っててもらえると助かります」

うんうん、分かってくればそれでいいんだ。おにーさんも鬼じゃない。反省してくればそれで不問にしようじゃないか。

ところで、未だに自分のメイドのほっぺにちゅー（1回こつきり）までしか進行してないけど、それは悪質な放置プレイかなにかかな？ 「えっと……なんつーか、未だに鞠とどうやって付き合っていけばいいのかよく分からなくてですね。それでまあ色々悩んだりと」

舐めとんのか、キサマ。付き合ってる女の一人に真剣な顔で『なにも言わずにこれを着てくれ』ってメイド服差し出してる暇があったら、もつと真剣に生きる。

「……有坂先輩。さすがにそれはちよつと」

「獅子馬。男つてのはな無理だつて分かつてても、やらなきゃならないことがある！」

そんなにメイド服がお望みなら、ギャルゲーでもやればいじやん。

「ハ、なんにも分かつちやいねえな。そもそも、メイドつてのはそんなに浅いもんじゃない。もつと奥深く深遠なもんなんだよ」

家政婦に浅いも深いもあつたもんじゃねえよ、クソ白髪。

もつとちゃんと現実を見る。お前の隣にいるアレはメイドでもなんでもなく、単純にお前を虐待することに存在意義を見出しているサディステイツク星からやってきたメイド様以外の何物でもないだろうが。

狐の隣にいる巨乳と比べてみる。どっちがいいかは一目瞭然だ。

「……いや、まあその辺は好みの問題でいいじゃねえか。冥ちゃんもわりとSだし。それにえつと……鞠もそこそこ胸はある方ですよ？」

「というか、この物語に出てくる女の子って大抵胸大きいですよ？」

なんだその目は。僕が巨乳派だとも言うつもりか、クソ野郎ども。

どっちかといえば巨乳派だが、そこまでこだわってるつもりはねえよ。……というか、今のは僕に対する挑戦だと見ていいんだな？僕が理想の女性像を登場人物に投影しちゃってるイタイ野郎だとそう言いたいわけだな？僕が何百回える可愛い女性が大好きだと言つてもまるで信じちゃくれないわけだ。

よし、そういうことならいいだろう。女性の胸の話が出たから、同じような話題として、テメエらの股間の話でもしてやろうか。

じゃ、サイズの最下位から発表。

『お願いやめてそれだけは絶対に駄目！ 後生だから！』

女性読者もいるし、そういう話題も気になるだろ？ ほら、男ばかり女性胸やら腰やらの話で盛り上がるのもアレだし、でも筋肉の付き方とか背丈とかの話はクソつまんねえから股間の話なら多少は盛り上がるだろうという、粋な計らいだぞ？

「だから、やめろっつってんだろっが！ 18歳未満お断りにするつもりか！」

「そーですよ！ いくらなんでもそれは軽く最後の一線を越えます！」

ちっ、根性なしどもが。もっと挑戦する意欲を見せろっつてんだ。チキンが。

あと、一応言っておくが僕は巨乳派だけど、登場人物のバランスはわりときっちり取ってるつもりだ。

「そーなんですか？」

そっなんだよ。狐の周囲に胸のある女性が集まってるだけで、全体的に見ればそんなでもないぞ。

「ちなみに、比率はどんな感じで？」

バストサイズとかよく知らないからテキストだけど、多分以下のような感じ。

大：梨本京子、橘美里、黒霧冥、高倉織、橘美咲（高校生時点）。
中：山口コッコ、黒霧舞、芳邦鞠、有坂四季（桂木唯）、要嬢。
小：獅子馬麻衣、高倉望（高校生時点）、ルウララウラ、竜胆一族（女系）。

ほらね、わりかしバランスは取れてるだろ。

ちなみに、最小は竜胆家の次女がブッチギリ。最大は京子嬢か冥嬢。

着やせする隠れ巨乳は美咲嬢（高校生時点）って感じ。

「……本当にバランス取ってやがるし。でも、舞に関しては小に属するんじゃないのか？ いや、実際の所はそーでもない。」

あの小娘はスタイルが際立ってるんだよ。物語中でもちよいと書いてあるけど、栄養学やら薬学やらの知識もあるから、カロリー計算なんてお手の物らしいよ。

バストとアンダーの差が実際のサイズになるんだから、ぎりぎり中でもよかるうよ。

「しかし……読者様から異論が出そうな設定ですね」

はっはっは、それじゃあコッコ嬢のサイズは小、もしくは無に変えておこうか？ この世にはPADっていうモノもあるわけだし、強い要望なら僕も否とは言えないな。

「そついう意味ではなくて！」

さつきも言ったケド、『ぎりぎり』って線も十分に考えられるから、おおむね自分の想像力の範疇内での確だと思っつていいと思うケドね。わりとテキトーなところもあるし。

テキトーなので、気分によって変動させる可能性大です。イラスト化されていない小説なんてそんなもんなのさ。読者様のイメージ優先でお願いします。

「……相変わらずちやらんばらんですね」

やかましい。さつき、酔ってレアアイテムを売ってくれた女に言われたくないわ。

真剣な暇潰しを馬鹿にする人間に生きる資格とかないと思うんだ。

「いや、でもゲームですし」

……ほう？ 言ってくれやがりますな、盆栽にはまってるばばくさい大娘が。

「ぼ、盆栽はいいじゃないですか！ あれはあれでかなり楽しいんですよ！ あと、大娘って言わないで下さい。なんか妙に傷つきます」

あれはなにがどう面白いのか一切分からねーんだよ！ なんで木を切るだけなのにあんだけ価値が出るの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？

舞さんと京子さんはわりとまとまだけど、時折ものすごいことやらかすし、悪ノリした美里も手に負えないですしね！　いくらなんでも全員ぶんのフォローなんてできるわけがないでしょうが！」

ああ、なるほど。そういうことか。

それは確かに仕方がない。あの宿の連中と付き合っていくのは誰だって大変だ。少しばかりお酒に逃げたくなる気持ちも分かるうってもんだ。

うん、確かに過去のツケとはいえ、今の状況は辛いだろうね。

「……作者さん」

僕からはなにもできないけど、あえてこれだけは言わせてもらおう。

ざまあ　　山口さん本当にパネエツス

「……………」

ヒヤッハッハッハ！　そうやって一生煉獄の中を素足で歩いて、時折なんかものすごく幸せな気分になりながら微妙な気持ちで暮らしていくがいいよ！　何百回でも繰り返すけどそれが君にはとってもお似合い。一生報われないけど、一生幸せな人生つてのがサイコ―にぴったりつてもんだよ！

君の気持ちは分かるけど、理解はできません。だって僕はお酒が飲めないから！　酒に逃げられる人間の気持ちなんざ理解できるわけがねーのさア！

「……ああ、そうだ。いいことを思いつきました。殺しましょう」
殺される前に、殺してしまえ、ホトドギス。

僕を殺すと言つのなら、君が隠しておきたい狐とのラブイベントを全部暴露する！

「ならばその前に殺せばいいのですね！」

甘いな、作者とは常に現実逃避気味にストーリーの続きを自動的に考える者だ。

つまり……既に書き置いてある文章をコピー&ペーストするだけで済む！

お題、数行で書けるラブイベントを発動！ 君の動きは自動的に止まる！

「コッコさん、スイートポテト買ってきたんだけど食べますか？」

「あ、どうも。ありがたくいただきます」

「はい、あーん」

「……………えっと？」

「お仕事中みたいなんで、邪魔したら悪いかなと思ひまして。はい、あーん」

「……………あ、あーん…………？」

てな感じ。これくらいの軽くて甘いイベントだったらわりと書けるね。

「ぐっ…………ひ、卑怯な！」

甘いストックは千行を超える。ちなみに一行は四十文字だ。

「……………ぬぐぐぐぐ」

さあ、どうする？ 僕を殺すなら殺すで構わないが、自分が酷い目に遭うぞ！

所詮君じゃ僕には勝てないのさ。あーっはっはっはっは！

「……………楽しそうですねー」

「そーだな。俺ら忘れられてるけどな。というか、そろそろ帰りたい」

「じゃ、あの人たちは放っておいて私たちは帰りましょうよ。そろそろ文字数もまずいですし」

「おっ」

「それでは、次の話に続きますー」

「シーユーネクスト！」

注意 事項。

上記のレアアイテム売却イベントは実際には自分には発生しませんでした。社員旅行中の後輩に発生したマジイベントであり、酒癖の悪い先輩に酔っ払った勢いで貴重なアイテムを全て売られてました。

専門用語で言うと、溜め込んでいた天鱗と大宝玉を全部売られました。

後輩は顔では笑っていましたが、心の中で泣いていたと思います。多分、後輩の心の中で、アイテムを売った先輩はミンチになっていたと思います。

その後、心折られてなおゲームを続行した後輩の『装備作るまであとちょっとだったんだけどなあ……』と言っていた時の横顔が忘れられません。彼は素材を全部揃えてから一気に装備を作る派なので、悲劇は倍増でした。

たかがゲーム。されどゲーム。馬鹿だと分かっているけれど、真剣にやっていることには変わりありません。

真剣にやってることを土足で踏みにじられれば、怒るのは当然です。

どんなに馬鹿げたことでも、どんなに自分にとって価値のないことでも、です。

ちなみに、後輩は社員旅行後にその先輩と目を合わせようともしませんでした。

そういうわけで、お酒は控え目にネ！

……ホント、社長が持ってきた大吟醸とか洒落にならないほど美味かったんで、少しでも酒が飲める体になりたいです。

第十五話 修羅と羅刹とダイエット（惨禍編）

ダイエット編完結。京子さんがみんなを薙ぎ払った話。

ちなみに、この話で一番得をしているのは努力に見合う結果を出

した、黒霧舞と空倉陸の両名になっております。

「……まあ、それが理由でゲスト扱いなのは分かったんだけどよ」「さつきから劇場の隅でへこんでる山口さんがものすごく気になるんだケド……」

ああ、気にしないで。ちょっと度を越していぢめ過ぎただけだから。

と、いうわけでダイエツトの話なんだけど、舞嬢にはかなり縁がある話だね。

「まあ、気を抜くとすぐに太っちゃうから。食べたぶんだけ運動すればとりあえず問題はないし、ストレス解消にもなつて一石二鳥だけれどね」

凄まじいポジティブだね。世の女性が聞いたら発狂しそうだ。

ちなみに、狐も似たような発想してるから困る。本当に殴りたい。陸青年はどうなのさ？ とりあえず動いてれば太らない派？

「いや……太ったことないから、よく分かんねえな」

「……うっわ、我が弟のことながら殺したいわ」

「というか、太ってる暇がない。下手に脂肪つけて虎子に嫌われるのは死んでも嫌だし、かと言って虎子ってあんまり自分の好みとか表に出さないしなあ。太ってるのが好みつてのはあんまりないだろうから、とりあえず現状維持で。あと身長がもうちょい欲しい」

虎子嬢はトマトと柑橘類はわりと好みだね。

「お、そうなのか？ じゃあ、今度はオムライスでも作ってみるかな」

男の好みに関しては、虎子嬢の口から直接聞くといい。とりあえず、現状維持で頑張るのが一番の近道だとは出血大サービスで言うておくけども。

「ねえ、陸。どーでもいいんだけど……アンタ、虎子と付き合ってからなんかこう……変わったというか、変貌したというか、化けたというか、馬鹿になったというか」

尽くす男になったねえ。

尽くしがいのある女と付き合っていると、大体そうなるもんらしいけど。

「冥姉ちゃんに似たんだろ、多分」

物語中じゃ、実は君ら一回も会話してないけどね。舞嬢ともだけど。

一つの物語中で色々なストーリーを展開させていく関係で、陸青年は執事長よりのストーリーに組み込まれることが多かったから、仕方ないといえば仕方ないけど。

狐側に組み込まれる時は鬼畜展開が多かったし。

「今回の話とかは、正直な所トラウマだしなあ。冥姉ちゃんや庭の大魔神も含めた屋敷の精鋭に追われるんだぜ？ 美里チーフがいなかったのが幸いだけど、あ後は悪夢に出てくることもちらほらだったし」

「うっわ、それは想像したくもないわ。そんなメンバーを京子さんがどうやって一網打尽にしたのか想像できないんだけど」

畏を張って、一箇所におびき寄せて、睡眠ガスで眠らせたらしいよ。

努力だけで伝説にまでのし上がった人だからね。そのくらいは平気の平左でやってのけるでしょう。そのせいで世界に嫌われちゃったわけだけど。

「……その定義ってよく分からないんだけど、詳しい話ってできるの？」

あの、一応作者だから。そんな『こいつなんにも考えないでテキトーなことぶっこいてんじゃねーだろうな』っていう目で見ないで欲しい。

京子嬢のいた世界ってのは、某嘔吐きが変貌した絶望に侵蝕されてしつちやかめっちゃかになったってのはもう話したけど、京子嬢は最後の戦争で、その嘔吐きから肥大化した絶望を切り離す役目を担ってた。

その前にも、主力級の絶望をロングレンジからばしばし吹っ飛ば

してた。

「確かにすごいけど、なんでそれで世界に嫌われるのよ？」

世界つてのは命で成り立っていると思う。生まれて生きて殺して死んで。そうやって他者を蹴散らし、自己を育み、子供に後を任せて死んで行く。

強くない者は滅ぶのが運命だ。

とはいえ、それは悪いことじゃない。自然界だって強く在ることを推奨している。そして、強い存在を羨むことは、生き物として当然のことだと言える。

もつとも……その当然を嫌う馬鹿野郎やお人好しが大多数を占めている世の中だから……誰かを犠牲にして自分が幸せになるくらいだったら、自分が犠牲になった方がましだって思える人間の方が多から、世界は捨てたもんじゃないと思う。

さて、話を元に戻すけど、世界にはこの通りたくさん命がある。世界は命の履歴を蓄積する。生まれた時から現在まで、全ての命の誕生から終わりまでを、世界は蓄積している。絶望つてのは、その中でもわりと強い部類に入る『想い』の一つだ。……なにせ、幸せになれる人間の総数は常に決まっている。

幸せになれない人間の方が圧倒的に多い。
現に衣食住全て揃っているのに、自分は幸せじゃないと思っている人間が大半だ。もちろんそれは僕も含んでの話だけだ。

この物語に限らず、この世界での『絶望』つてのはね、そういうエネルギーを世界から引つ張り出して増幅させるシステムの総称だ。絶望に共感し、絶望を世界から引つ張り出す素質を持つ人間に種は寄生し、その人間を媒体にして世界そのものを血と絶望で染め上げて、世界そのものの絶望の総量を一気に肥大化させる。

その結果は……空気を入れすぎた風船を見れば分かるだろう。

「で……結局なにが言いたいのよ？」

分からないかな？

一人の人間が、世界の絶望全部と渡り合って、勝ったんだ。

普通の人間が英雄に畏怖を抱くように、世界がその人間に畏怖を抱いても仕方がないことだと、僕は思うケドね。

強過ぎる存在は排除される。これも当然のことかもしれないけど。……なるほどね、合点がいったわ。納得はいかないけど」

ま、世界にしる人にしる、行き過ぎれば疎まれるのは共通ってことよ。

世界は人より懐が少し広いだけ。京子さんがいた世界よりも、こちの世界の方が懐が広がっただけ。

最終的には悪くない結果に落ち着いたんだから、それで良しとすべきかな。

最近はわりと楽しそうだし。

「そーだな。姉御は屋敷にいた頃より暇してるけど、楽しそうだったかな」

「京子さんは暇そうなのがちょうどいいのよ。暴走したテンや冥ちやんを止められるのはあの人くらいなもんだし、なによりレパートリーが増えて私的にも大満足」

「……あんまり食うとまた太るぞ」

「ぐっ！……り、陸？ ちよつと、おねーちゃんに対して失礼すぎるわよ！？」

「事実だろ」

指摘してはいけない事実もある。そうじゃない事実もある。

もつとも、確信犯の場合はどうでもいいことなただけだ。

「どーせ太らないしな、舞ねーちゃんは。誰の目を気にしてるのかわらないけど」

「みんなの目に決まってるでしょうが！ 大体、痩身するのは女の子全員が抱える、生涯に渡って付き合っていかなきゃいけない問題なんだから！」

「……あー、はいはい。そーゆー設定だったな。すっかり忘れてたよ」

「ふーん……そーゆー態度に出るんだったら、私にも考えってもん

があるわよ。アンタのあれやこれや、虎子にばらしちゃってもいいのかしら？」

「はっはっは……お姉さま、本当にすみませんでした」

「弱っ！」

いや、まあ普通に考えて彼女にあれやこれやいいふらされたくはないでしょ。

君らみたいに、いい所も悪い所も腐ってる所も全部見てるわけじゃないんだし。

「テンにいい所なんてあつたっけ？」

一つや二つくらいは思いつくでしょ。そこそこ長い付き合いになりつつあるし。

で、正直な所はどうなのさ？

「んー、嫌いな所はたくさんあるけど、強いて気に入ってる所をあげるなら……今はあんまり見かけないけど眼鏡つてのもなかなか悪くなかったし、甲斐性はあるし、さりげなく料理とか超美味しいし、一緒にいて不愉快なことも多々あるけど基本的に退屈もしないし、あんまりしたくないけど頼み事をすれば100%なんとかしてくれるし、失敗を指摘すると慌てふためく様が変わりと可愛いというか……」

「なア、作者さんよ。聞けば聞くほどあのにーちゃん、なんでもできすぎねーか？」

年季が違うから仕方ないよ。女性の扱いに関してのみ、あの狐の右に出る者はほとんどいない。

世界最強の過剰な愛情に耐え切り、相川ハーレムから見事生還し、ドメスティックバイオレンスを受けながらあの屋敷を切り盛りしてあの面子で現在宿屋を経営してるといふ気持ち悪い経歴を積み上げてる狐だからできることであって、決して常人が真似できることじゃない。普通だったらとつくに自殺しててもおかしくないし。

女性を手玉に取る性根が腐った男は吐いて捨てるほどいるけど、『女性に利用される』ことを至上の喜びにできる男はそういない。

そういう意味では最低だし、最高だとも言えるのがあの狐だ。

ホンツ……ト、心底殴りてえわ。

「……というか、なんで嫌いなタイプの人間を主人公にしたのよ？
そのせいで山口さんを始め色々な人が苦勞をする羽目になってん
じゃないの」

んー……まあ、嫌いな人間ならどんな目に遭っても心とか痛まな
いじゃん？

「……………」

それが理由の第一で、あとは単純に対比。

コッコ嬢を心の底から駄目人間に設定したから、その対比で相方
となる坊ちゃんは、高校生とは思えないようなしっかりした人間で
あるように設定しただけ。

才能溢れるけどサボりまくる女と、才能はないけど努力に生きる
男。

黒霧姉妹や、京子美里ペアあたりも対比でキャラクターを構築し
てある。

冥嬢は救われた者。従う者。単純一途な想い。

舞嬢は救った者。従わぬ者。複雑な親愛。

京子嬢は立ち向かった者。ひねくれた者。諦観。

美里嬢は逃げた者。甘える者。執念。

他にも色々あるけれど、代表的なのはこんな感じだね。

「なんか……面倒なコト考えてんのね、アンタって」

面倒なコトは大抵楽しい。どんな趣味や仕事にも言えることだけ
ど、ツボにはまれば、楽しささえ理解してしまえば、あとの苦痛は
わりとどうとでもなるもんだ。

面倒や苦痛が楽しさを凌駕した時が、仕事の辞め時ってことだろ
う。続けられる仕事ってのは大抵の場合責任感やら充実感があるか
らできる。

弁当にごま塩を振るだけの仕事とか、責任やら充実とはかけ離れ
てるから誰もやりたがらないんだよ。

まあ、それはそれとして、僕の場合はどんなに面倒だろうが主人公をいぢめるためならなんでもやりますよ？

「……鬼畜がいるわ」

「にーちゃんも大変だったんだなあ……」

はっはっは、場合によっちゃ舞嬢あたりは主人公になっていた可能性も高いからねえ。ちゃんと奮起してくれたコッコ嬢に後で感謝しておくように。

「いやまあ……感謝はしてるけどさ。昔はそうでもなかったけど、今じゃウチの宿のエースだし。テンを素で止められるのは山口さんくらいだし」

「……ハハ、すげえなそれ。冗談抜きで尊敬する」

と、まあ話題が尽きないからとりあえずこの辺で次の話に移ろう。……実はもうそろそろ文字数がやばい。あと一話が限度だ。話数的にあんまり進んですらいない。このままじゃ約束を果たすのが先延ばしになってしまう。本編前にもう一本書く予定だというのに。……おかしいなあ、もうちょっと文字数を節約するつもりだったんだけど、なにを間違えたんだろう？

「全部じゃない？」

「全部だろ？」

身も蓋もねーな、君ら。

ま、いいや。それじゃあ次の話に行きまーす。しーゆーねくすと

第十六話 僕と彼女と温泉旅行（前編）について。

温泉に行こうの話。

狐野郎がロリ巨乳に萌える話。とはいえ、ロリといえどあの狐は基本的に可愛い年上が好きなので、京子嬢との相性はばっちりなだった。

「ロリじゃねえつつつてんだらうが。しばくぞ」

はい、そういうわけで今回のゲストは、さつきにヤーにヤー言っていた京子嬢。

司会進行は田山歴史と復活したコッコ嬢でお送りします。

「山口。あたしはあいつをぶっ飛ばしたい。本気で殴りたい」

「……殴ると出番が増えるそうです。まあ、私にはあんまり関係ないんですけど」

「嫌な脅迫だな、それ」

主人公だから仕方がない。京子嬢も主要キャラクターだから仕方がない。

この話で、京子嬢が運転手になってるのも、狐が未成年だから仕方がない。

いつそ電車でもいいかなと思ったんだケド、尾行が面倒なので却下しました。

「あー……そういうえば、京子さんって車運転できたんですね」

「エンジンさえついてりや大体なんでも運転はできる。免許はないけどな。……ま、無免許でも美里の運転より安全なのは保障するけど」

「……あの人のアレは運転じゃありません。暴力の一種です。あと、車の違法改造はもつと処罰をきつくるべきです。むしろ死刑でいいと思います」

そんなことしたら、かなりの数の走り屋が死に至ると思うケド……ま、いいか。

それには僕も同意見だ。車を改造する奴は死ねばいい。

スピード出しすぎの奴も死ねばいいし、やたら後ろから煽ってくる奴も死ねばいいし、ウインカーをつけずに車線変更する奴も死ねばいいし、自分だけは大丈夫とか意味の分からないことをほざいてバックミラーを封殺してる奴も死ねばいい。道路を自転車で走っているおじいさまやおばあさまは火葬場に行け。シートベルトを締めない奴は死ね。空気読まずにチンタラ走ってる奴も死ねばいい。あ、それは僕か。死ねばいいのかな、僕。

みんなーしねばいーのにー！

「作者さん。このまま発言を進めると読者様からものすごい批判が来る予感がぶんぶんします。なにかあったんですか？」

……ジェットコースターって、超安全だよな。

「へ？」

だって、滅多に事故らないもん。事故を起こさない乗り物は、みんな安全だよ。

いや……むしろ逆に考えよう。事故を起こす人間がみんな死んだらええんや。

みんなーしねばいーのにー！

「……あの、京子さん。これ、どうしましょうか？」

「まあ……気持ちは分からないでもないかな。山口は運転上手いからあんまり実感ないかもしれねーけどさ、事故った時、人間って『あ……こりゃ死んだな』って思うもんだからな。恐怖や絶望なんてどこにもねーぞ」

友人が見栄を張ってスピードを出しました。

事故りました、と。

教習所でさ、時速40キロ（衝突した時の速度。友人の自己申告なので実際の速度は不明）でぶつかった時の衝撃体験とかやればいいのよね？

「いや……『ね？』とか言われても、私には分かりません」

まあ、そりゃそうだろうね。コッコ嬢って事故ったことないし、それ以前に車で外出することもあんまりないし、あの狐とのデート回数も数えるほどだもんね？

「……それが、今の、話題に、なにか、関係が？」

今回の話は京子嬢と野郎とのデートの話だからねえ。関係あると
言えば、ある。

例えば、今回の京子嬢のように大人っぽい妖艶な服装で迫れば、あの狐には効果は抜群ではないかと思考するわけなんだけど、どう
だろう？

「む、しかし黒ビキニはちょっと恥ずかしいのですが」

「……あのさ、山口。なんかさりげなく、あたしのことを馬鹿にしてない？ 確かに今回の話だと黒ビキニだったけどさ」

「いえいえ、馬鹿にはしてません。京子さんにとっても、天弧さんが顔を赤らめたりするのは、かなり意外なりアクションだったでしょう？ ……まあ、胸は正直反則なので、仕方ないと言えば仕方ないでしょうけど」

「人の価値を胸だけに見出すのはどうかと思うんだが！ ……というか、舞みたいにやたら凝視すんな！」

あの狐はロリコンだから仕方ないよ。

「誰がロリだ、コラ。いくらあたしでも我慢の限界ってもんがあるぞ？」

「いだだだだ！ すみません、調子こきました。足の甲を踏みつけてぐりぐりするのはいぎゃあああああああああああああ！」

「年下に見られるのも、そういう扱いも慣れてるけどな、それを言った野郎がどうなったのか、身を持って教えてやろうか？ んん？」

いや、結構です。間に合ってます。そういうのは人として良くないと思います。

まあ、登場人物で一番『小娘』って言葉から逸脱した人だからね、京子嬢は。そういう意味では、あの狐が惚れてしまうのも致し方ないかと。

年上大好き、高倉天弧。嫌いなのは頭がいくせに馬鹿を装っている年下と、甘えたがりの大人全般。自分に甘い人間に敵しく、自分に敵しい人間には甘い。

小生意気な同級生とか健気に頑張る女性は全般的に大好きらしい。どれくらい好きかっていうと、一生賭けて尽くしてしまう程度。

同級生や普通の女性にもてないのも、領けるってもんだらう？

「それって、ある意味捻くれ者だよなあ」

仕方ない部分も多々あるケドね。さっきも言ったケド、あの野郎が辿った道筋を常人が真似しようと思ったら、十回程度自殺してて

もおかしくない。

相川ハーレムとかセクハラされ放題だもの。下手にプライドが高い男性だと、翌日には泣きながら引きこもりになってもおかしくないね。あれに比べれば、屋敷の君たちなんてちよろいちよろい。

「……具体的に、どういうことされたんだよ？」

んー……言葉では表現しにくいので、音声のみをお送りしようか。では、ショートショートでGO。

『テン、明日の夕飯なんだけど、やっぱりハンバーグがいいと思うの』

『……………』

『あら、鳩が機銃で掃討されたような顔をしてるけど、どうしたのかしら？』

『いやそれどう考えても原型も残らないだろ。それより……ナギねーちゃん。一応言っておくけど、僕は今風呂に入ってるんだけど、それは分かってる？』

『ええ、分かってるわ。思ったよりいい体してるわね。それより明日の夕飯のハンバーグのことなんだけど……』

『それより！？ 今のセクハラ行為がハンバーグより優先順位下なの！？』

『当たり前じゃない。私は他の料理はともかく、ハンバーグには美学を持つ女よ。ふわふわの手作り以外は、絶対に認めない』

『…………… 牛のひき肉から作れって言われても、無理だよ？』

『そこまではさすがに言わないわよ！ えっと……とにかく、冷凍とかレンジでチンとか既製品とか、そういうものは一切認めないわ！』

『いや、既製品は高いし使わないよ。まあ、明日は別にハンバーグでもいいけどさ、こういうハンバーグがいいの？』

『…………… どういうって？』

『煮込みハンバーグとか照り焼きとか色々あるでしょ。煮込みにし

てもケチャップと和風タレとか色々バリエーションもあるし、照り焼きって言っても上に大根おろしとか半熟の目玉焼きとか工夫の余地はあるよ。カレーライスにハンバーグって手もあるし。普通のハンバーグしか認めないって言うならそうするし」

「……………にやり」

「なにその悪人みたいな笑顔。超怖いんだけど!？」

「別になんでもないわ。《バックアップ》とか《オルタナティブ》とか《キープ》とか、そういう言葉を思いついただけだから。いやあ、お兄ちゃんもわりと便利な人だけど、それ以上に便利な弟分がいるってのはいいことよね」

「ふーん。…………ま、ナギねーちゃんがにーちゃんの代替品で満足できる人なら、僕としては一向に構わないけどさ」

「えいつ」

「ちょ、冷っ!? 待てばか、いくらなんでも放水は反則だろ!

後で風呂に入る人間の立場になって行動しやがれ! あと、僕が風邪を引かないかとか!」

「前々から思ってたけど、テンって…………他人のことしか考えてないわよね?」

「は? そんなわけないだろ。付き合ってる女の子とかもないし、僕は僕なりに、ちゃんと自分が楽しいかったり嬉しかったりするところを考えてるよ」

「例えば?」

「ん…………僕が作った料理をみんなに美味しいって言ってもらえるのは嬉しいと思う」

「……………」

「ナギねーちゃん? なんか、すごく微妙な表情浮かべてるけどどうしたの?」

「黙りなさい。まったく、思わず年下に萌えてしまつところだったわ。危ない危ない」

「?」

「ま、細かい所はいいか。明日の夕飯はテンの裁量で好きなハンバーグにしていいわ」

「ハンバーグは外せないんだね。……それじゃあ、和風おろしハンバーグにする」

「ん、味は期待しておくわ。それから、お風呂から上がったらちよつとおねーさんに付き合いなさい」

「言っておくけど、僕は晩酌には付き合えません。風呂を借りることになったのだって、ミナねーちゃんが僕にぶちまけたせいだし。

……そもそも未成年が酒を飲むなよ」

「大した用事じゃないわよ。ちよつと聞きたいことがあるだけ」

「……まあ、それならいいけどさ」

「じゃ、また後で」

「はいはい。今度はノックなしでいきなり入浴を覗かないようにね？」

「保障はしかねるわ」

「いや、そこは保障しろよ！」

はい、そういうわけで中学生のワンシーンでした。

ちなみにこの後、抱き枕派のナギねーちゃんがどつという行動を取ったかとかは読者様の想像力にお任せしたいと思います。

「……作者」

なんででしょうか？ □元引きつらせっぱなしの京子嬢。

「なんつーか……あたしも人のことは言えないけどさ、今の回想って、テンの情操教育に多大な悪影響を及ぼしてるような気がするぞ？」

うん、そうだね。プロテインだね。

それじゃあ、今回はこの辺で終了として、次回にサクサクと続きます」

「冗談もそれくらいにしとけや？ あたしも鬼じゃねーから、ちゃんと説明すれば命だけは勘弁してやつから」

あの……さすがに火のついた煙草を押し付けようとするのはどうかと思う。

悪影響なんて及ぼしまくってるに決まってるじゃん。世界最強と相川ハーレム、それからバイオレンスコッコ嬢によって、狐の『女が苦手』ってキャラクターが形成されてしまったわけだし。

可愛いけど、わりとざつくばらんな京子嬢と、世話を焼かなきゃいけないキャラクターである由宇理に対しては苦手意識は薄かったようだけどね。

「……そんなもんか」

そんなもんだよ。ま、辿って来た道筋はともかく、今が幸せならそれでいいっしょ？

責任者は他にいるわけだし、今はそっちの方に丸投げしてもOKなわけだし。

「責任者って、私ですか？」

その通りだコッコ嬢。あの狐を作ったのは君だ。責任は取るべきだろ？

まあ、言われなくても分かっていると思うけど。

「分かってますよ、それくらい。何回も繰り返さなくてもいいですん、分かっているならそれでよし。前回、いぢめ過ぎたからいじめるのは勘弁してあげよう。」

「……ふん」

じゃ、そういうことで次の話が続くってことで、今回は終了。

次回をお楽しみに

「……で、一応聞いておくけど、アンタ実は山口のこと嫌いじゃないだろ？」

僕は、大多数の例に漏れず優しい人間が好きなんでね。

あと面白い人間もわりと好きだ。遠くから見てるぶんにはコッコ嬢はとても面白い。

作者の立ち居地は基本傍観者だ。精々遠くからにやにやさせてもらうとするよ。

「やれやれ……後でテンに怒られても知らないぞ？」
望む所だよ。

それに、あの野郎には、まだちよいと仕事が残ってるからね。それを説明する上でもちゃんと怒ってもらわないと困るな。

「仕事？」

もう終わってることだけど、これから解説することだけど、伏線は活かさないかね。

旗を叩き折るのは、いつだって普通の人間だってことを証明するんだよ。

「……旗、ねえ」

ま、京子嬢にはあんまり関係ないし、これは僕ともう一人しか知らない物語だ。

全部終わって、本編が始まる前に、物語の原初を語る。
ありきたりなことだけど、悪くはないんじゃないかな？

「ハ……物好きめ」

だからこそ物語を書くんだよ。

ただ、時間がないとやっぱり書けん。ついでに金になれば嬉しいんだケドなー。

「……思いつきり金の亡者じゃねーか」

じーさんが残したボロ家はわりと快適だけど、台所回りと風呂をリフォームしたいから金はいくらあっても足りないんだよ。

別に服や趣味に金をかけるわけでもなし。貯めておいて損もない。
「……まあ、頑張れ」

おう。精々来年も愚痴と血を吐きながら頑張るぞ。
僕にはそれくらいしかできねーからな。

と、いつわけで来年もよろしく願います。しーゆー

でらつくすあとがき ねたばればれたね パート2（後書き）

……えっと、そういうわけで多分五話編成くらいになると思われる
あとがきのパート2でした。

あとがきでこんな文字数使ってる自分の精神構造を疑ってしま
いますが、もう少しお付き合いください。

少し早いですが、新年明けましておめでとございます。来年もま
ったりと書き進めていきますが、よろしく願います

第二話・楽しい年末の過ごし方（前書き）

はい、そういうわけでちょっとだけ出戻り。

一年放置とか洒落にならん。楽しみにしている方にはホント申し訳ない。

去年は・・・なんかもうよく分からないな！ ホント色々あった！

主に仕事の面だけど、なんかもうよく分からないくらいに色々あった！

と、いうわけでやることはタイトル通り。

いつものように、物語を書きましよう。

第二話・楽しい年末の過ごし方

お正月すぺしゃるのようなもの。

12月30日くらいのもんだけど。

曰く、男の子というものは永遠の馬鹿野郎なんだとか。

織奥様が言ったその言葉を最初は理解できていなかった私だけど、最近段々分かってきたような気がする。

かといって、女性の方が理知的であるかと言われればそうではないけど。

「前々から思ってたわ！ 香純はもう少し素直になるべきだよ！」

「前々から思ってたよ！ 鞠姉さんはもう少し大人になるべきだよ！」

鋭い剣戟。まるで演舞のようで、その実は真剣勝負。

妹二人の争いを見つめながら、私はお茶を飲みつつおせんべいを食べていた。

「いやー……二人とも相変わらず凄まじい腕前だね。全然見えないや」

私の隣でのほほんとお茶を飲んでいるのは、私の上司というか命を握っている人というか、ご主人様のな存在みたいな、高倉天弧という名前の鬼畜さん。

天弧さんはにやにや笑いを浮かべながら、自分の隣にいる誰かに話しかける。

「さて、君はどう見る？ どっちが勝ちそうかな？」

「どーでもいい」

ぼさぼさ髪、中肉中背、垂れ目、見た目は人懐っこそうなのはほん系、中身は狼。とずみしろつと書いて十墨志郎と読む名前を持つ彼は、サクサクとうい棒のチーズ味などを齧りながら呆れ顔で天

弧さんを見つめて口を開いた。

「そもそも……僕はこの宿におせちを作りに来たんであって、姉妹喧嘩を見に来たわけじゃねーんだよ、高倉の旦那よ。ってというか、なんで僕がおせち作るの？ この宿って専属のコックさんみたいないなかつたっけ？」

「京子さんは昔の友達と一緒に温泉旅行に行きました」

「……高倉の旦那よ。その寂しそうな表情は大人としてどうかと思っぞ」

全くの同意見だけど、天弧さんは子供のまま大人になってしまったような青年なので、基本的に大人数で騒ぐのが好きだし、誰かに甘えるのも好きなのだった。

まあ、それはこの宿の人間全員に言えることではあるけれど。

ついでに言えば、天弧さんを育てたのは私のようなものだけ。

ちなみに、京子さんだけでなく美里、舞さん、冥さんも色々と用事があつて年末は留守にするらしいとのこと。

必然的に宿も休業状態なのだけど、どうせ年末はお客さんは来ない。

というか、お客さんたちは年末こそがやたらと忙しい人たちばかりなので、むしろ年明けこそが忙しくなるのだった。

「ってというか、いい加減に止めた方がよくないか？ あれ」

「まあ、たまには姉妹喧嘩も悪くないでしょ。ほら、喧嘩するほど仲がいいってよく言うし、あれもコミュニケーションの一つだと思えば微笑ましくなるってもんだ」

「止めてくる」

「あれ？ 志郎くん？ 人の意見を完全無視っていうのはお兄さん感心しないぞ？」

「女同士の喧嘩を傍観できるほど、僕は大人じゃねーんだよ」

言いながら、彼は二人の喧嘩に割って入った。

鞠の剣をかわして足を払い地面に転がし、香純の剣を両手で挟み、手首を掴んで地面に投げ飛ばす。

投げ飛ばしたついでに、バケツに汲んであつた冷水を頭からぶちまけて、ぬかるんだ地面に顔を押し付け、頭を踏みつけているあたりになんらかの悪意を感じた。

「どうやら、十墨さんと香純は悪意の伴う知り合いらしい。」

「毎度思つんですけど、天弧さんの知り合いの方々ってどうしてあんなに規格外に戦闘能力が高い方ばかりなんでしょうね。」

「んー……彼の場合はちよつと事情が違うけどね。」

「見れば分かります。どうやら、天弧さんとは同質だけど真逆のタイプの人間みたいです。まあそれはどうでもいいことでしょう。」

「……あの、コッコさん。なんかちよつと怒ってない？」

鋭い指摘に、私は少しだけ目を逸らしてゆっくりと息を吐く。

「多少は。」

「……えつと。」

「乙女心は色々と微妙なのです。まあ、私は天弧さんの所有物なので別ににも言いませんが、冥さんあたりなんかは色々言ってくると思いますよ?。」

「んー……じゃあ、あとで一緒に買い出しに行こつ。」

「はい。」

天弧さんの身内に対する即決即断なところは、わりと好きだったりする。

お客さんを放置するのは悪いことだけど、二人は私の妹で、一人はバイトの人なので特に問題はないだろう。

「もーっ！ 十墨はいつつもそうだ！ 私の邪魔をして楽しい!？」

「はいはい、うるせえうるせえ。オメーは馬鹿の相棒と馬鹿やつてる馬鹿。」

「馬鹿つて三回も言ったな！ 由宇理はともかく、私は馬鹿じゃないわよ!。」

「はいはい、馬鹿はいつでもそう言うんだ。四の五の言っていないでさっさと風呂入って泥落としてこい。僕も入りたいたから3分以内に上がれよ。」

「なんで十墨は私にばかり冷たいんだよ！ 由宇理にはやたら優しいくせに！」

「はっはっは、僕は自覚のある馬鹿が大好きだからな」

どこかで聞いたようなセリフを言って、十墨くんは香純の襟首を掴んでズルズルと宿の方に向かって歩いて行った。

それはまるで……駄々っ子とお母さんみたいだった。

そんな二人を見つめて、鞠はゆっくりと立ち上がって私に近づいてきた。

「元気そうですね、姉さんも香純も」

「まあ、いつも通りって気がしますが。そう言う鞠はどうなの？」

「元気がなくなっただので、休暇をもらって骨休めに来たんですよ。」

……年末はかき入れ時だと思ってたんですが、当てが外れたところかお邪魔虫です」

「あはは」

邪魔をするつもりはなかったと、言外に主張していた。

普通の旅館は年末年始は忙しいだろうけど、このお宿はそうでもなかったりする。

と、不意に鞠は少しだけ頬を緩めた。

「しかし……なんというか、私たちの男運は本当に微妙ですよね」

「香純はそれほどでもないかもしれませんが。まあ……本人がい

い人を引き当てられるかは分からないですけど」

「……まあ、そうですね」

嬉しそうに口元を緩めながら、鞠は黒塗りの太刀を拾い上げて鞘に納める。

そして、ゆっくりと息を吐いて私に言った。

「それじゃあ、私もお風呂に入ってきます。香純たちの世話は任せて、姉さんたちは楽しい買い物に行ってください」

「了解。今回ばかりは鞠の言葉に甘えさせてもらっね」

「ま、これくらいはしておかないと」

にやりと楽しそうに笑って、鞠は背を向けて宿に向かって歩いて

行った。

私は口元を緩めながら彼の方に振り向いて、にっこりと笑う。

「と、いうわけで唯一のお客様の許しが出ましたので、買い物に行きましょう」

「はいはい。……で、なにを買おうか？」

「それは歩きながら考えましょう」

「了解」

苦笑を微笑に変えて、彼はゆっくりと息を吐く。

呆れたような、あるいは諦めたような、それでいて少し楽しそうな。

そんな表情を浮かべながら、私を見つめていた。

桂木香純。現在、高校三年生。

とはいえ、時系列的には現在は年末となっているものの、一年ごとにはいちいち年齢を進行させると色々面倒なことになっちゃうので、多分来年も受験生だろう。

と……まあ、そんなメタ発言が許される程度には、僕という男はろくでなしだ。

僕。十墨志郎。とすみしろつと読む。この名前だけは非常に気に入っている。

妹萌えという幻想に生きる、そんなクソみたいな高校二年生だ。

「まったく……志郎君は本当に全くよ！ どうしていつもいつも私に対して嫌がらせをするの？ 全く意味が分からない！」

「うるせーよ、百合先輩。可愛いバカツプルの邪魔をする前に、さつさと家に帰って由宇理先輩とクソみたいな絵師に世話を焼いて死ね。そっちの方がお似合いだぞ」

体に染み渡る温泉の効能に、頬を緩めてゆっくりとつかる。

ちなみにこの温泉宿、露天風呂は混浴となっているが水着での入浴が可となっているのでドッキリイベントはあんまり発生しません。

おもんねえの。

「志郎君……じゃあ、なんで君は普通にタオル一枚で入浴してるの？」

「香純に見られても恥ずかしくもなんともねーもん」

「だから、どうして私の扱いだけそんなに酷いのよ！ 呼び捨てだし、由宇理は先輩付きだし、四季に至ってはクソ絵師とか酷いこと言うし！」

「あの人の絵は僕にとっちゃ二束三文以下の価値しかない。よってクソ絵師。香純は色々と尊敬できないから、先輩みたいな敬称はつけたくありません」

「……なんで？」

「人に嫌われないように生きるのは、わりとしんどいことですが、人に嫌われないように生きていることが人にばれると、なぜか嫌われてしまうんですね、これが」

知ったかぶり。

知ってるようなふりをする。知った風なことを言うこと。

それでも、その言葉はわりと重かったのか、香純は目を細めて僕を睨みつけた。

「十墨君になにが分かるのよ？」

「知らねーよ。めんどいし、知りたいとも分かりたいとも思いません。でも……アンタの目付きは嫌いだな。なんかずつと観察されるみたいで気持ち悪い」

その言葉は凶星だったのか、香純は思い切り口元を引きつらせた。

自覚のない馬鹿はこれだから困る。

自分の馬鹿さ加減を理解せずに馬鹿をやるから、馬鹿を見る。

「年末で説教つてもアレだからこの辺で切り上げるけど、観察する人間の目付きを知っている人間もいる。そういうことをちゃんと理解しておいて欲しいかな」

「……この宿の主人だって、似たり寄ったりよ」

「そーかもな。でも、高倉の旦那のアレはただの趣味だ。あの野郎

は既に『人を選び終わっている』からなんの問題もない。あくまで敵対し得る人間を常時監視しているに過ぎない。それに、自分の身内以外には激烈に厳しいし、わりと自分勝手だろ。香純のは嫌われなくないから、相手に好かれたいから、相手を観察して、相手に好かれる拳動を心がけてるだけだ。そんなものはコミュニケーションとは言わない」

「……………」

「少なくともさー。四季さんとか由宇理先輩とか空倉の兄貴あたりには、わがまま言っていていいんじゃないかねーかと僕は思うんだけど、どうかな？」

「……………分かってるわよ、そんなこと」

ぷりぷりと怒りながら香純はそっぽを向いてしまった。

どんな根暗女だろうと、桂木香純は人のことを考えられるとてもいい女性だ。

僕としてはそんな彼女の本性ってヤツをちよいと見てみただけなんだけど、彼女としてはそれが色々と気に食わないらしい。

自分の姉貴に甘えに来る程度には甘えん坊のくせに、困ったもんだ。

「……………ねえ、十墨君」

「んー？」

「じゃあ、そういう十墨君はどうなの？」

先輩面した時は十墨君、本性が出ている時は志郎君。

呼び方が変わっているのに本人は気付いているのかいないのか。

まあ、それはどっちでもいいことだけど、香純の顔はわりと真剣だった。

口元を緩めて……………僕は笑った。

「僕は別にどうも。自分が良ければそれでいい性分だからな」

高倉の旦那のように言い訳をするわけでもなく。

空倉の兄貴のように彼女一筋でもなく。

由宇理先輩のように誰かを思うわけでもなく。

香純のように自分をないがしろにするわけでもなく。

僕は僕が良ければそれでいい。

僕が得して気持ち良ければそれがいい。

単純明快で分かりやすく文句のつけようもない最適解。

僕が得して気持ち良ければ、楽しく過ごせればそれでいい。

そのための努力なら惜しむつもりもない。

「僕は余計な首は突っ込まない。危ないところには近づかない。リスクを背負うようなことはしない。香純みたいな面倒な生き方はご免こうむる」

「……………」

「睨むなよ。桂木香純。その生き方を選んだのはアンタだろうが？」
「選びたくて選んだのではないとしても。」

今、正義の味方のように見知らぬ誰かを助け続けているんだっから、それは選んだも同じことだろう。

下らなくて尊い生き様を選び取った。

だったら、他人を羨んだり、恨んだりするのは、筋違いだ。

香純は思い切り拳を……血が滲むほどに握り締め、僕を睨みつけて言った。

「十墨君。私はあなたが嫌いよ」

「僕も香純のような人間は嫌いだよ」

嫌いだから嫌がらせをしているわけじゃないけれど。

嫌いなのは事実で、なにが嫌いかも明確に理解できるけど。

未来永劫、彼女にそれを語ったりすることはないだろうと確信しておく。

もしも語ることがあるとしたら……それは、僕が僕らしく彼女と向かい合う、その時になると思う。

「問題なのは、僕は香純のことは嫌いだけど香純のようなスタイルの女性はわりと嫌いじゃなかったりするあたりで、ぶっちゃけ……」

野暮つたい水着の上からでも分かるくらいエロい体してますね」

「っ…………だから、そういうことを言って茶化すんじゃないわよ！」

「僕は真剣だ」

「なお悪いわあああああああああああああああああああああ
あ！」

とうとう我慢できなくなったか、香純は木の桶を僕に向かって投げつける。

それを受け止めながら、やっぱりこの歪な先輩をいじるのは非常に楽しいなあとしみじみと思うのだった。

ゴトゴトと、田舎道を車が走る。

ハンドルを握るのは天弧さんで、私は助手席で悠々自適…………とい
うわけではない。

車が揺れまくるのは、わりと苦痛だったりするので話題を振って車酔いしないように心がけなければならぬ。

「そういえば、二人きりっていうのも久しぶりですね」

「まあ、普段はみんながいるからね。…………二人きりの方がいい？」

「たまには」

普段と違うことをするのはわりと新鮮だったりする。

新鮮さを保つのが関係を持続するコツだと、織奥様は言っていた。

まあ、あの人の言うことなので当てにはならないけど。

「とうか、二人きりとか死亡フラグ以外の何物でもないと思うんですが…………」

「そのへんはいつものことだよ。むしろ、みんながコッコさんと僕を二人きりにするなんて、なにか思惑があるんじゃないかと邪推してしまっくらいです」

「……………」

思惑とうか、なんとうか。

体よく押し付けられたような気がしないでもない。

特に、美里なんかは凶悪な笑顔を浮かべていたので絶対になにかしら悪いことを考えていたに違いない。

例えば、クリスマススの時に舞さんと天弧さんを二人きりにした時の私があんな笑顔だったんじゃないだろうか？

ちなみにクリスマススの時はお酒を飲んだ天弧さんが舞さんの膝枕で爆睡していたので、木に吊るす羽目になった。

空気を読めと言いたい。それとも確信犯なんだろうか？

「クリスマススの時は疲れてたせいで爆睡しただけなのに、なぜか木に吊るされて一晩放置されましたからね。死ぬかと思いましたよ」

「……天弧さんは膝枕で幸せでしたけど、舞さんは果たしてどうだったでしょうか？」

「んー……どうなのかなあ」

最近の舞はよく分からないからなあ、と……彼は困ったように言った。

まあ、確かに天弧さんから見れば分からないかもしれないけど、それは私の口から言うようなことでもないし、今さらと言えば今さらのことだろうとも思う。

あえて言うなら、本格的にデレてきたということだろう。

舞さんは意地っ張りな上に意固地な性格なので、絶対に自分から積極的に好意を口にすることはないと思うけど。

なんにせよ……てこ入れは必要かもしれない。

「天弧さん」

「なんですか？」

「舞さんとちゅーはしてるんですか？」

「ぶっ!?!」

ゴトッ！　ゴトゴトゴトゴトッ！

彼の動揺に反応してか、車が激しく揺れる。

シートベルトと柔らかいシートのおかげで私の方は無傷だったけど、天弧さんの方は精神的動揺が激しかったのか、思い切り口元を引きつらせていた。

「いきなりなんの話ですかっ!？」

「いえいえ、話を聞く限りでは黒霧姉妹にだけあまりセクハラ行為に及んでいない感じなので、思い切っつかまをかけてみたのですが」
「……いや、別にそんなことは……ないですけども」

天弧さんは基本恥ずかしがり屋なので、こういう話題は苦手なのだった。

ちなみに、話題を振る私も恥ずかしいと言えば恥ずかしいけど……織奥様と一緒に仕事をしていた関係で耐性がついた。

世界には天弧さんなんて目じゃないくらいに馬鹿な殿方がたくさんいるもんだし。

「舞さんは世話焼きさんのしっかり者ですが、基本は猫属性ですからね。甘えたい時に甘えさせないと、どこか遠くに行っちゃいますよ?」

「む……確かにそれは困るね」

「まあ、実はクリスマススの件に関してはある意味成功なんですけどね」

「吊るされたの?」

「私たちの心情で吊るしただけで、舞さんの心情とは関係ありませんもの」

膝枕。動けない。シャンパン飲みながらこっそりとにやにや。

世話焼きじゃなくても、嫌いじゃない人に甘えられれば嬉しいものだ。

「天弧さんは世話焼きさんのしっかり者ですが、基本は猫属性ですからね。甘えたい時に甘えておけば、わりと大丈夫だと思います」

「……むう。まさか、コッコさんにそんなことを言われる日が来るとは」

「私は天弧さんの所有物ですが、口も手も足も出します。私が天弧さんのことを好いているのと同じ程度には、今の職場を愛していますから」

「……………」

「そういうわけなんで、頑張ってくださいね。私も頑張りますから」
当たり前前のことを当たり前前のように言って、私は窓の外に目を向ける。

いい天気で、空気は綺麗で、道は最悪で、彼が隣でハンドルを握る。

まあ………なんというか。照れ隠しで説教じみたことを言ってしまったわけだけど。

二人きりというのも、意外と悪くない。

「なんというか………逃がした魚がクジラになって帰ってきた気分だよ」

「それは、私のウエストが太いとかそういう暗示ですか？」

「そんなわけではないでしょ。とにかく、運転と買い物に集中したいので、しばらくちゅーとかそういう話題は禁止。……でないと、この場で押し倒します」

「はい」

軽やかに返事をしながら、私は窓の外に視線を戻す。

さて、押し倒されないうちに色々と考えよう。せっかくの二人きりなんだし、屋敷があった頃のように、ちょっと甘いムードで過ごすのも悪くはない。

なにを買おうか考えながら、自然と頬は緩んでいた。

十墨志郎という人間は、オープンなドスケベである。

少なくとも、私はそう思っている。彼には慎ましやかさという概念が欠如しており、思ったことをズバズバ口に出してしまうため、凶悪な数の女子を敵に回している。

慎ましやかさというよりも………デリカシーがない。

とにかく、失礼な野郎なのだ。

そんな風に語った私の妹、浴衣姿の桂木香純は、珍しくぶりぶりと怒っていた。

「全く……本当にあいつは全くだわ！ 嫌いなら嫌いで無視すればいいじゃない！」

怒りながら牛乳を一気飲みして、ビンを机に叩きつける。

ビン底に罫が入ってしまったような気がするけど、それは今の私にはあんまり関係ないことだったりする。

弛緩した体をなだめながら、私は欠伸混じりに口を開く。

「目障りなら、香純が無視すればいいじゃない？」

「……そもいかない事情があるのよ」

「ふむ」

たとえば……何回か命を救われているとか。

たとえば……共通の友人を持っているとか。

たとえば……香純にとつて必要な人が彼を気にいつているとか。

たとえば……愚痴を叩きつけられる人が彼しかいないとか。

彼にしてみれば些細なことでも、香純にしてみれば大きなことだつたんだろう。

「なら、仲良くしちやえばいいじゃない？」

「鞠姉さんは、あいつの根性の悪さを知らないからそーゆーことが言えるのよ。大体、私はあいつのことが嫌いだし、あいつは私が嫌いだもの」

「……………」

なんとも……面倒な人間関係らしい。

宿に来る前にある程度調べておいたけど、彼自身については特筆すべきような情報がほとんどなかった。

銭湯で話した時も、普通の少年だったし。

(……いや、逆に考えた方がいいかもしれないわね)

彼自身は普通でも、彼の周囲は普通とはかけ離れている。

異常の中の普通。それはつまり異常の中で正常を保っていると言
い換えてもいい。

強固な自我。圧倒的な個性に埋もれない普通人。異常から逃げる
でもなく、立ち向かうでもなく、ただ真っ向から受け止める。

香純には悪意は向けているけど……敵意は向けていないのも気になる。

「直接話した方が早いかしら」

「……鞠姉さん。なんか悪いこと考えてない？」

「悪いことは考えてないわよ。色々考えなきゃいけない立場だけだね」

友樹様のこととか。姉さんのこととか。香純のこととか。彼のこととか。

それでも、考えても無駄なことだっただけたくさんあるけど。

と……私がそんなことを考えていた、その時。

私たちの目の前に、大きな紙袋が置かれた。

「……っ!？」

紙袋から放たれる匂いは、なんとというか吐き気をもよおすような匂いだった。

その紙袋を持ってきた少年……十墨志郎は私の隣に腰掛けて、躊躇なく悪臭を放つ紙袋に手を突っ込んで、中に入っているものを取り出す。

それは、どこかで見たことのある木の実だった。

「えっと……それって、銀杏？」

「ちよつと量を間違えたんで差し入れです。好きに食っていいですよ」

丁寧に殻と皮を剥きながら、彼は口元を緩めて笑う。

その笑顔だけは年相応の少年のものだったけど……なにかを諦めたような人間の笑顔に見えなくもない。

笑い方が、友樹様そっくりだ。

まあ……それはともかく、剥いた銀杏に少しだけ塩を振って口に放り込む。

匂いは少しきついけど、とても美味しかった。

「香純も食っていいぞ。僕のばーちゃんが住んでる田舎で取れた銀杏でな、匂いはちょっときついけど味の方は最高だから」

「……ふん」

鼻を鳴らして、香純は銀杏に手を付けずにさっさと立ち去ってしまっ。

まあ、それが当然だろう。嫌いな人間の側には一秒だっていたくない。

普通に……そう考えるはずだ。

その後ろ姿を見送りながらも、志郎君は銀杏を剥く作業をやめなかった。

ほんの少しだけ口元を緩めていただけだった。

「香純と仲が悪いのかしら？」

「ええ。……まあ、僕が喧嘩するように香純に仕向けただけですけどね」

「どうしてそんなことを？」

「僕自身の下らない事情です」

パキンパキンと機械的に銀杏を剥きながら、彼は苦笑していた。

そして……まるで、正義の味方のように、吐き捨てるように言った。

「香純は、すごくいい子だと思うんです」

パキンパキンと機械的に銀杏を剥きながら、憎々しげに呟く。

「でもまあ……なんつーか、香純がいい子過ぎてそれに甘えたりする絵師やら同級生やらが超むかつくというか、そのくせちゃんと世話を焼いてくれる相棒にはいつつも突っかかってばかりで、気に食わないことがあっても相手のことを気遣って言いたいことも言えないみたいだし……それが、見てて気に食わないというか、なんというか」

「好きなの？」

「んー……好きとはちょっと違いますね。仮に好きでも告白とかは
しませんか」

「どうして？」

「僕自身が最高に下らないことに巻き込まれてましてね」

苦笑いを浮かべながら、十墨志郎君は口元を緩めた。

「そーゆーことに、香純を巻き込んだんじゃいかんでしょ。ただでさえ
他人のことまで一緒に背負い込んだんじゃってにっちもさっちもいかな
くなってるんだから」

「……………」

うーん……不思議だ。世界は不思議に満ちている。

明らかにくつつた方がいい男女に限って、妙な感じでややこしく
なっているのはなんでだろうか？

別に恋愛漫画とか恋愛小説じゃないんだから、素直にくつついて
しまえばいいのに。

くつつかなくてもいいのに、大勢の女性とくつついてしまった馬
鹿野郎が二人いるけども、ああいうのは例外だと思っくい。

香純の見る目がないのか、あるいは彼が一步引いているのか。

はたまた、その両方か。

「ねえ、十墨君」

「なんでしよう？」

「香純の周囲で、香純に優しい男の子とかいない？」

「二、三人くらいは思いつきます。まあ、僕としてはそいつらの誰
かとかくつついてもらえればとつても安心なんですが……少なくとも、
あのクソ絵師と寄生関係を構築してるよりはいいんじゃないかとも
思いますし」

クソ絵師とは四季様のことだろう。

どういふ経緯かは知らないが、十墨君は四季様をとにかく毛嫌い
している。

四季様の方は十墨君を嫌っていないどころか、『彼はいい。一家
に一人欲しい逸材だ』と、絶賛されているあたりがなんとも性質が

悪い。

「まあ、僕には関係ないことですから、ぶっちゃけ、どーでもいいんですけどね」

「……十墨君」

「なんでしようか？」

「自分が嫌われるように会話を誘導するのは、あまり良くないと思うわ。確かに私の立場からすれば、四季様をクソ絵師と呼ばれたり香純のことをどうでもいいと言われれば腹を立てるしかないけど……君自身は全然そんなことは思っていないでしょ？」

「いや、別に僕はそんな……」

「覚えておくといいわ。世界には香純のようなお人よしもいれば、私のような人見知りもいる。……ただ、私は人見知りだけど成果主義者でもあるのよ」

薄皮まで丁寧に剥かれた、銀杏の山を見つめて言葉を続ける。

「どうでもいいと言いながらも、あなたはちゃんと香純のことを気にかけてくれる。お人好しに節操がなく、困っている人なら誰であろうと助けたがるウチの馬鹿な妹を、『すごいいい子』だと評価してくれた。……姉としては感謝の言葉しか出てこないわね」

「いや、その前にクソミソに貶してますヨ？」

「成果主義だと言ったでしょ？ 香純がいない間はあなたが四季様とあの家の世話を焼いてくれていることは、既に調査済みなのよ」

「私は言葉は信じない。言葉なんて解釈の仕方でも変質し変容する。でも、行動したことは疑いようがない。……あなたがいくら香純に嫌われたいと望んでも、私は騙されない。四季様のお世話をやり遂げ、香純を思い遣るあなたを信じる」

銀杏に塩をかけて口に放り込みながら、私は口元を緩めた。

「嫌われたいんだったら、もっとうまくやりなさい。十墨志郎」

「……ですね」

厳しいことを言われても、彼は少し寂しそうに苦笑するだけだっ

た。

私も苦笑を返しながら、彼を見つめて口を開く。

「で、十墨君は、どんなことに巻き込まれているのかしら？」

「僕の妹が世界の守護者になっちゃいますね。……大変残念なことに、妹には戦う力がないので、僕が代わりに世界を守っているわけです」

「……………」

その言葉に、嘘はなかった。

嘘偽りなく真実で、事実で、どうしようもないことだった。

それが……世界を守るという下らないことが、彼の事情だった。

「信じてくれなくてもいいです。でも、それと似たような……非常に面倒なことに巻き込まれていると思ってください」

「信じてくれなくてもいい、という言葉を使う人間は本当のことしか語らないと相場が決まっているわ。……それに言っただけですよ。私はあなたを信じる」

「……………」

剥き終わった銀杏を紙袋に放り込んで、彼は厨房に戻っていく。

が、不意に足を止めて少しだけ振り向いた。

「雑煮は何味がいいですか？」

「え？ お雑煮って醤油味じゃないの？」

「地方によって違うんですよ。醤油味もあれば味噌味もありますし、小豆を入れて甘くするところもあります。……味は違えど、どれも美味しいですよ」

「じゃあ、味噌味で。食べたことないし」

「了解しました」

可愛い恩返しだなあと思いながら、私は彼の背中を見つめる。

背は高い方じゃなく、平均的で、その辺にいる男の子と変わらない。い。

それでも、その背中が……一瞬だけ、とても広く見えた。

まるで勇者のように、まるで英雄のように、誰かの背中と同じに

見えた。

銀杏に塩を付けて口に放り込む。

「さてさて……ウチの妹はどうするつもりかしらね」

嫌うなら嫌うでもいいだろう。彼は表面的にはそのように振舞っているし、香純に嫌われることもどうでもいいと思っっているはずだ。

それでも、姉としてはこうも思う。

気を遣わなくてもいい人と。

好き放題悪口や愚痴を言い合える相手と。

友達になっておいてもいいんじゃないかと……思っていた。

現在、私は多額の借金を背負っている身なので、あまりお金は使えない。

それでも、天弧さんからは毎月ちよつとだけお金が支給されるので、必要なものはそれでまかっている。

もっとも、この一年私服とかはあんまり買わなかったし、仕事で忙しくて休んでいる暇がなかったので、それなりの額の貯金があるわけだけど。

「……ここはやっぱり、防寒より食い気に走った方がいいですかね？」

「いや、あの……なんの話ですか？」

「ひざかけを買うか、すき焼き用のお肉を買うか、そういう話なのです」

ひざかけを買えば冬場はわりと温かく過ごせる。

お肉を買えば今日一日だけ最高の満足感が得られる。

むう……実に難しい問題だ。総合すれば満足感はどちらも似たり寄ったりというあたりが、実に難しいと思う。

後々のことを考えると、やっぱりひざかけだろうか？

「いや……妹たちのことを考えると、やっぱり奮発して高いお肉を……」

「あの、コッコさん？ 夕飯の買い物くらいは僕が持つから」

「そういう甘言に乗って後悔したことは、一度や二度ではないのですが？ どーせ、後で大量の仕事を押し付けたり、昨日みたいに人を抱き枕にするつもりでしょう」

「……………あつはつはつは……………いや、ホントすみません……………」

「まあ、首筋に思い切りキスマークをつけておいたので問題はないのですが」

「嘘っ!?!?」

「嘘です」

慌てて首筋を抑えた彼に向って、ちよつとだけ舌を出してやる。

「私は天弧さんの所有物なので、生殺しでも特に問題はありませんが、時々……………他の四人の四分の一くらいでいいので、気を使ってもらえると助かります」

「……………気をつけるよ」

溜息を吐きながら、天弧さんは肉屋の店員さんに一番いいお肉を注文した。

お肉を受け取ってお金を払って、それから私に手を差し出した。

「じゃ、次に行きましょうか？」

「はい」

当たり前のようにその手を握って、ゆっくりと歩き出す。

その手は、ちよつと……………じゃなくて、かなり汗ばんでいた。

「天弧さんは、まだ女の子が苦手なんですか？」

「女の子が苦手というより、好きな人となると緊張するだけです」

「……………ふむ」

なるほど、私と似たり寄ったりか。

なんとかも……………こういうことにかけては経験の浅さが露骨に出るものだ。

仕方がないので、手を離して腕を組むことにした。

「……………あの、コッコさん？ それはさらに緊張を加速させるんだけど……………」

「知っています。私なんて心臓が破裂しそうですもの」

「いや、あの……それは分かっているけど……というか、直に伝わってくるというか」

「しかしですね、今この緊張を克服しないと私の野望が達成できないのです」

「野望？」

「まあ、時期が来たら話しますよ」

「……その時には、なんかもう色々手遅れになってそうだなあ」

危険察知の賜物なのか、なかなかいい直感を働かせた彼は、言葉とは裏腹に楽しそうに笑っていた。

笑いながら、私の歩調に合わせて歩き出す。

腕を組みながら、私もゆっくりと歩き出した。

逃がしたトカゲは、ドラゴンになって舞い戻ってきましたとき。そんなことを思いながら、梅酒を片手にぼんやりと天井を見つめる。

んー………なんというか、僕は相変わらず意志薄弱な人間なんだなと思ってしまう。

宿のみんなではないけれど、みんなと一緒に鍋を囲んで、鞠さんは十墨君を手伝ってから再び温泉に向かい、十墨君は仕込みが済んだ後はぼんやりとテレビを見て、香純さんは夜風に当たっていると、言っただけに出た。

皆さん、別にそこまで気を遣わなくてもいいんですよ？

僕としてはみんなでワイワイ騒いでた方が、落ち着くわけだし。

「……って、それじゃあ駄目なんだよね」

分かっちゃいるが、どうにもならないことってのはいくらでもあるわけ。

明確に、きつぱりと、十墨君流に言っただけならば、そろそろ理性が限界です。

意志薄弱ってどうか……誘惑に弱いだけなんだけども。

『誘惑に弱いというよりも、歯止めが利かなくなるってのが本当のところだろ。相川の馬鹿も高倉の旦那もそういう所はわりと似てる。紳士な空倉の兄貴を見習って欲しいね』

うるせえ、馬鹿。パーフェクトカップルみたいにはいかねえんだよ。

脳内の十墨君オプンスケに毒づきながら、ゆっくりと溜息を吐く。

十墨志郎。現在、高校二年生。

家族構成は母と妹。特に母親の方は敏腕キャバ嬢で、客と周囲に妬まれない程度の器量を発揮し、さりげなくとんでもない額の稼ぎを弾き出しているらしい。

その反動なのか、家に仕事を……というか、酔っぱらった同僚を招くことも少なくないらしく、十墨君の家事技能と女性に対する諦観と達観はそこで身に付いたものだとか。

『女の子ってのは、基本的に馬鹿で感情豊かで……みんな可愛いもんさ』

慣れたようにお酒を作り、慣れたように口元を緩める。

諦めたように、諦めきれないように、笑っている。

『いや、それは多分間違いだな。あいつらは馬鹿で感情豊かで可愛いと……そういう風に思わせている。理性的にじゃない。本能的に、どうすれば僕らを支配できるのか知っているのさ。子供から大人まで……女性は、あくまで女性なのさ』

男は頭で考える。

女はハートで考える。

理性じゃなくて、心に訴える。

だから、男じゃ永遠に女に勝つことはできない。

どうして彼がそんな考えに至ったのか、僕には分からない。

僕の周囲にいるみんなは、馬鹿でも感情豊かでもなく、ただ真っ

直ぐに誇らしく、それでいて可愛い人たちばかりだったので、彼の考えは理解できない。

『それは……アンタがついてない男だったのさ、高倉の旦那よ』

じゃあ、僕と関わった時点で君もついていないのかもね、十墨君。僕の周囲には、面白い子がたくさんいる。例えば、君の先輩に当たる灰色の髪の女の子とかがそうだね。あの子は……真正のお人好しだ。

『ああ、知ってる。噂も聞いてる。魔法使いで正義の味方。……いずれ、僕の前に立ちふさがること、分かっている』

そうかい。じゃあ、仲良くしてあげて欲しい。

お人好しなあの子は……昔、色々なものに裏切られた。

だから、裏切られるのが怖くて、お人好しのふりをしているんだよ。

『へえ……そうかい』

彼は目を細めて……口元を歪めた。

『そいつは 気に食わないな』

女性らしくはないけれど、ワインとビールを抱えて彼の部屋へ。

寝巻も色気のないもので……むしろいつも通りだけど、その辺は時間もなかったのでスルーするしかないだろう。

まあ、お酒の力を借りなければどうにもならないというのが本音なので、あえて突っ込みはなしの方向でお願いします。

「……………むう」

気分が高揚しているのは、ちょっと舐めてきたブランデーのせい
か。

あるいは、単に嬉しいせいか……どっちもどっちというところだろう。

まあ、こつという期待は大抵裏切られるのが常だけど。

「つたく……お約束というか、なんとというか」

部屋のドアを開けて、私は思わず肩をすくめる。

予想通りとはいえ、なんとも……肩透かしというか、なんというか。

彼は梅酒を片手にこたつに突っ伏して、ぐっすりと眠りこんでいた。

疲れていたのか、あるいは緊張がピークに達していたのか、それとも……私と同じくお酒でごまかそうとしたのか……ま、どれでも同じことだけど。

……舞さんの時もこんな感じだったんだろう、多分。

「天弧さん。こたつで寝てると風邪引きますよ?」

「……………ん」

「天弧さん? 起きてください。起きないとちゅーしますよ?」

「……………」

反応なし。完全に寝入っているようです。

うーん……彼を抱えてベッドまで運ぶことはできなくもないけど、それはなんか絵的に嫌な感じだ。

仕方ないので折衷案。電気代は食うけど、彼が悪いので仕方ない仕方がない。

まずはこたつの電源をカット。

それから、暖房を快適な温度に引き上げる。

空気清浄機兼加湿機は出力を最大に。これで翌日喉が痛くなったりもしない。

持ってきたおつまみとワインとビールをセット。いつもは冥さんの定位置である天弧さんの隣に陣取って、おつまみを食べつつお酒を飲む。

……色気は消失してしまっただけど、まあ……これはこれで悪くない。

少なくとも、アマゾンの奥地で敵の襲来と毒虫に怯えつつ年を越

すよりは、百倍以上くらいはましだと思つ今日この頃。

ちらりと天弧さんを横目で見ながら……ふと、いたずらを思いつく。

にやにやと口元を緩めながら……多分、舞さんもこんな気分だったんだろつと思ひながら……私は彼に顔を近づける。

さて、明日がとても楽しみだ。彼はどんな顔をするだろつか？

幸せの形は、人それぞれだ。

高倉の旦那のように家族と過ごしたい人もいれば、陸の兄貴のように好きな人と一緒に過ごしたい奴もいる。鞠の姉御のように、ゆつくりしたい人もいるだろつ。

誰も彼もが、僕のように自分勝手ではない。

幸せの形は様々で、人によって違つていて……だからこそ価値があると思つ。

「それで……私に何の用なのかしら？ 十墨志郎くん」

宿の近くにある草原。彼女はそこで剣を振るつていた。

戦闘モードに入つてゐるせいか、彼女の領域に踏み込んだ瞬間に両断されるイメージが頭を掠める。

殺気立つてゐるのは少し違つ。

多分……灰色の彼女は、そういう生き方しかできなかつたんだろつ。

好ましいことに、あるいは誇らしいことに。

月の光が反射して、灰色の髪は手にした刃のように銀色に光つて見えた。

「……なんでだろつな」

「？」

「僕は、香純に憧れるだけの一般市民で良かつたんだよ。本当は正義に対峙する理由もなく。

悪に属する勇氣もなく。

「……僕が知るかよ、そんなこと！」
叫びながら距離を離す。

実際に、僕はなぜ香純が世界の敵なのか、その理由を知らない。知っているのは世界の守護者である僕の妹だけで、教えろと何回言っても僕にだけは教えられないと突っぱねられた。

世界を危機から救うためには、僕が香純と戦うしかないと言っていた。

しかし……僕と香純じゃ、戦力はウサギと戦車程度には違う。

「……つたく、あの馬鹿野郎。なにが兄上様に任せるだ。無茶言いやがって」

「なにをこちゃこちゃほざいている、世界の守護者！」

「テメエの正義と違って、やりたくてやってるわけじゃねーんだよ！」

使うしかない。

相手は生粋の魔法使い。全世界でも有数の能力者。

対する、僕には世界しか味方がいない。僕以外には誰もいない。

これ以上味方を増やすつもりもない。

これ以上……こんな腐れ仕事に誰も巻き込むわけにはいかない。

息を吸う。息を吐く。

世界の守護者は一時的に空間を支配して、自分の望んだ力を得ることができると。

ただ、個人の限界を超えた力は引き出せない。普通の人間なら、自分自身の握力程度の力場を作るのが精いっぱいだろう。

イメージは粘土。僕の思い通りに形を作る粘土。あとは僕の想像力が全てだ。

僕の限界を超えないように、僕が作れる限界を見極めながら、形を作る。

「空間制圧：イダテン」

自分の四肢と各関節に力場の粘土を張りつけるイメージ。

力場で自己の運動強化補助と四肢の防御力強化を行う。今の状態では香純の剣が腕や足を掠めただけで吹き飛ばされる可能性が高い。最近、お高い自転車に付属されている電動補助みたいなもんだ。そして、てこ入れにもう一つ……こっちは戦いながらやらなきゃいけないが。

どちらにしる勝算は低いが、やらないよりはましだろう！

「っ!?!」

強化といっても大したもんじゃないが、それでも香純を短時間誤魔化せる程度の速度を得ることはできる。

しかし……彼女はにやりと笑いながら剣を構えた。

「なるほど、それが剣聖芳邦鞠と私を止めることができたカラクリってわけ？」

「半分当たりで、半分外れだ！」

今の自分は電動補助が付いた自転車のようなものだ。僕のイメージが続く限りは強化補助が行えるが、僕の集中力が切れたら補助が切れてそれで終わり。

あと、香純が速度に慣れちゃってもそれで終わり。

終わりばっかりなので、続くように戦わなきゃいけないのが非常に面倒くさい！

「っ!?!」

「しゃっ……らあああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

香純のバランスが崩れた時を狙って、剣を握る手を蹴り飛ばす。

不意にバランスが崩れた理由は極めて簡単。

香純の手首の関節に、力場を張りつけただけに過ぎない。

素人と玄人の差は経験に付随する完璧な姿勢にある。剣を扱う人間の場合は、剣を振るうという経験を積むことによって、どのような形で剣を振れば最大限に活かせるのかを体に覚えさせている。

ならば……その精密動作を少しでも揺るがせてやればいい。

しかし、手首を蹴られたはずの彼女は、剣を手放すことなく不敵に笑う。

「で……今のがもう半分つてわけ？ 由宇理に比べると、甘っちょろい能力ね」

「仕方ねえだろうが！」

壊すことに特化しながら、不殺を貫く彼女と比べないで欲しい。

僕は……あくまでその辺にいる一般市民に過ぎないんだから。

だから、ない頭で考えることくらいしかできなかった。

彼女が世界の敵になってしまう理由。その理由を考察することしかできなかった。

……だから、これでいい。

僕が納得しているんだから、これでいいんだよ！

「うん、大体分かった。避けにくく、戦いづらく、実に面倒な能力だね。よく考えてあるというか、小賢しいというか……」

「につきりと笑う香純の笑顔は可愛かったけど……同時に背筋が凍えた。」

「でも、こっぴつのは防げないでしょ？」

腕を掴まれる。足を払われる。投げられると同時に肩が抜ける。

激痛で目の前が真っ白になる。

剣で戦う魔法使いは、当然のように無手の戦いも心得ていた。

集中力が途切れて強化補助も解ける。痛い。シヤレにならないほど痛い。世界の敵なんてもんじゃない。こいつは相手にしちゃいけない敵だ。

逃げ出そうと一歩踏み出す。肩を蹴られて絶叫する。もう駄目だ。この時点で負けだ。命乞いするしかない。いや、無理か。命乞いなんてとてもじゃないが不可能だ。

嫌いだって言われたじゃないか。

嫌いな相手は、目の前からいなくなつて欲しいもんじゃないか。

ああ、嫌だ嫌だ。最近は嫌なことばかりだ。嫌なことしかしてないじゃないか。なにが世界の守護者だ。そんな職業は誰だって願いたい下げだコンチクショウ。

あの根性廃棄物妹のわがままに付き合った拳句が……末路がこれだよ。

死ねばいいのに。

みんな死ねばいいのに。

幸せそうな奴はみんな死ねばいいのに。

「さて……最後に聞いておきましょうか。なにか言い残したいことはある？」

僕を抵抗できないほどにボコボコにしておきながら、香純はまるで油断せず、たくさんの剣を作りだして、その全ての切っ先を僕に向けていた。

あー……超痛い。痛いけど、耐えられないほどじゃない痛みつてのが面倒だ。

戦わなきゃいけないのかもしれないけど、剣の切っ先を向けられては僕にできることなんて何一つない。

切っ先と共に夜空を見上げて……そこで、ふと気がつく。

この戦いの本当の意味に、気づいてしまった。

死ねばいいのに。

僕なんて死ねばいいのに。

彼女を悪しき様に言い放った僕なんて死ねばいいのに。

腐れ外道妹と己の道に準ずる香純と、どちらの言葉を信じるべきかなんて自明の理で、分かり切っていたのに。

くそつたれ。だから妹なんて大嫌いだってんだ。

「……香純」

「なに？」

「ごめん。なんか色々手違いがあった。やっぱり香純は世界の敵

でもなんでもねーわ。……「ごめんじゃ済まないとは思っけどさ」

「……………」

「遺言はそんだけだ。僕を殺したら、灰にして海にでも沈めてくれ」
「……手違いだったの？」

「ああ。今回は僕が全面的に悪い。本当にごめん」

「……………はあ」

香純はゆっくりと……呆れたように溜息を吐いて、口元を緩めた。
「間違いなら間違いでいいわよ。……たまにはそういうこともある
でしょ」

「へ？」

「いやー、びっくりしたわ。まさか世界の敵にされるとは思わなかった。あ、さすがに『やつぱり敵でした、死んでくれ』とか言われ
たら、今度こそ容赦しないわよ？」

「えっと……いや、殺さないの？」

「殺すわけじゃないでしょ。あんたのことは嫌いだけど、なんで友達を
理由もなく殺さなきゃいけないのよ？ ま、誤解でよかったわ」
友達だから、嫌いでもなんでも殺すわけがない。

そんな当たり前のことを、香純は平然と言い放った。

「でも、怒ってるだろ？」

「怒るより叱られる方が怖いってば。そっちの腕、抜いちゃったか
らしばらく使い物にならないでしょ。……四季はああ見えて平和主
義者だし、姉さんの旦那どもなんて、両方ともへたれのくせに私に
敵しいし」

「なんで香純が怒られるんだよ？ どう考えても悪いのは僕だろ？」
「正義の味方なら友達の手悩くらい見抜いて見せるとか言われるの
よ。なるべく努力はしてるつもりだけど、こればかりはどうにも
ね……………」

滅茶苦茶言いやがるな、あいつら。

香純が苦労性なのは前々から分かってたけど、ここまでとは思わ
なかった。

あー……きつついこと言っちゃまったな。

「悪かった」

「え？」

「いや、風呂場で色々ときつついこと言っちゃっただろ。あんなこと、別に僕に言われなくても香純自身が自覚してたことだろうし、あえて言うことでもなかったなと今更ながら反省してるわけだ。…

…うん、本当に悪かった」

「別にいいわよ。腹は立っただけど、事実だしね。……もっとも、私としては局部を丸出しにしてた方を反省してほしいんだけど？」

「はっはっは、それは無理だ。香純に見られても恥ずかしくもなるともねーし。……というか、そもそも内臓まで見られて今更恥ずかしいもへったくれもないし」

「治療と……その、ああいうのは意味合いが違うでしょうが！」

「内臓をまじまじと見られるのって、結構恥ずかしいんだぞ……」

「羞恥心の方向がおかしいでしょ！ 内臓より、下半身丸出しの方を恥らいなさい！」

「彫像とか局部丸出しじゃん」

「芸術と露出狂を一緒にするな！」

出しているものは一緒のような気もするが……まあ、下ネタはもういいか。

今後は少しばかり自重しよう。香純も『一応』女の子なわけだし。

「十墨、なんだか微妙な視線を感じたんだけど気のせいかな？」

「あだだだ！ 外れた腕をつつくのはやめる馬鹿！」

「んー……ちよつと筋を痛めてるみたいね。戻しておくけど、後でちゃんとお医者さんに行かないとまずいかもしいない」

「ちよ、戻しておくとか簡単に言ってるけど、脱臼って外れた時もある時も最高に痛いんじゃない？」

香純の奴はなんの躊躇もなく腕を捻り上げて、よいしょとか気の抜けたかけ声と共に僕の腕をはめ込んだ。

あまりの激痛に頭が真っ白になり……僕の意識は闇の中に落ちた。

いつも通りに目を覚まし、いつも通りに洗面所へ。

「へぶっ!」

そして、いつも通りじゃない衝撃にちよつと涙目になり、そこでようやく気付く。

「むう……そういえば天弧さんの部屋で寝ちゃったんだっけ」

おでこをさすりながら、私は欠伸をした。

別にやらしいことはしていないし、思った以上に楽しかったので、これはまあこれで良いんだけど、腑に落ちないのはいつものことだ。「……ま、いいか。別に今焦らなくてもチャンスはたくさんありますし」

それに……ぶっちゃけてしまえば、野望達成には私が頑張らなくてもいいのだ。

まあ、主に頑張ることになるのは舞さんやら美里あたりだろう。京子さんと冥さんあたりはなにを考えているのやら。そこは本人の自由意思とかそんな感じで。

私は……まあ、優先順位としては最後でいいだろう。背伸びをしながら彼の方を見ると、彼はぐっすりと熟睡していた。大学生と宿の仕事を兼任しているせいか、年末ということもあって最近目は回るような忙しさだったみたいだし。

ただ、本人もペース配分はしているようなので、屋敷の二の舞ということはないだろうと思う。

「やれやれ……今回は見逃してあげますか」

負け惜しみを口にしながら、口元を緩めて彼の布団をかけ直す。

それから、持ち込んだワインのボトルなどを手に、彼の部屋を出た。

大掃除などの仕事は大体終わらせてあるので、今年はもうやることもない。あとは今日帰ってくるみんなを出迎えて、年を越すくらいしかやることはない。

うん……まあ、なんだ。

みんなが帰ってくるまでは、一緒にいてもいいか。
ぼんやりとそんなことを考えながら、自然と足は厨房に向かう。
なにか、体が温まるものでも食べてから、久しぶりに二度寝でもしよう。

「十墨、茶碗蒸しってこんなもんでいいの？」

「こんなもんどころじゃねえよ、完璧だよ。どんだけ料理上手いんだお前は」

と、厨房では私の妹とその彼氏がせわしなく動き回っていた。

「誰が彼氏ですか。訴えますよ？」

「そうよ、大姉さん。十墨が彼氏とかまはずないから」

「まあ、それは冗談にしても……十墨君の右腕が吊られているのはなぜ？」

「……えっと、色々あって、私が抜いちゃった」

「ばつが悪そうに頬を掻く香純とは対照的に、十墨君は溜息を吐いた。」

「今回は全面的に僕が悪いです。お説教なら僕にお願いします」

「ん……まあ、双方が納得してるなら私から言うことはなにもないけど……ああ、天弧さんと友樹君は怒りそうかな。なんかあの二人、香純には厳しいし」

「香純が怒られるようなことがあったら、僕がぶん殴りに行きますけどね」

「……………」

あの二人に対して、そこまで言い放つ子も珍しい。

十墨君は左手に持った中華包丁で鳥を骨ごと叩き斬りながら、口元を緩めた。

「取引しませんか？」

「……また、唐突ですね。どんな取引ですか？」

「今から、美味しいご飯を作るので香純が怒られないように便宜を図ってください」

「天弧さんはともかく、友樹君の方はどうにもできませんが？」

「そっちは既にみそラーメンで取引済みです」

私より先に鞠を買収するとは、十墨君はなかなかの心胆の持ち主のようだ。

まあ……取引としては、思った以上に悪くない。

「それじゃあ、香純が食べてた茶碗蒸しを含めた和風御前で」

「了解」

わりと無理難題を言ったつもりだったけど、十墨君は厨房に引込まむやいなや、三十分程度で和風御前を作ってしまった。片手で、恐らく利き腕ではないだろうに。

アサリ出汁を使った炊き込みご飯、タケノコの味噌汁、銀杏の入った茶碗蒸し、漬物各種、卵焼き、鮭の塩焼き、梅と大根のサラダ、デザートにヨーグルト。

「立派なお嫁さんになれそうですね」

「僕はどちらかというと、立派なお婿さんになりたいんですが」

「大丈夫です。お嫁さんやお婿さんなんて、所詮は役割的なものです。偉い人にはそれが分からないのです」

「……十墨が嫁は嫌だなあ」

本当に嫌そうに言うあたり、私の妹らしいというかなんというか。しかし……まあ、なんだかんだ言いつつも、まだまだ甘い。

恋愛つてのはおおむね勢いだと織奥様は言っていたけれど、男女の仲というものは勢いだけではどうにもならないこともあるわけで、ぶっちゃけずつと退却姿勢でいたにも関わらずいつの間にか追い詰められていることなんてよくあることなのだ。

少女漫画ほどあからさまではないし。

少年漫画ほど単純でもない。

主役も主人公もいるかもしれない物語。それでも……いつ、誰が、

メインヒロインになってもおかしくはないのだ。

「じゃ、天弧さんの方は私がなんとかしましょう。あと……香純、喧嘩はいいけどやり過ぎないように。特に、脱臼は癖になっちゃうから」

「……うん……まあ、喧嘩ではなかったような気もするけど」

「んー……納得できないなら、お姉さんが直接体に教え込んであげてもいいけど？ ダンプカーと人が衝突したら、謝らなきゃいけないのはどっちかしらね？」

「すみませんお姉さま！ 香純はものすごい勢いで反省しました！」「分かればよろしい」

納得や理不尽など、わりとどうでもいいことだ。

問題なのは、香純は人より強く、十墨君は人並だという事実だけ。力には責任が伴う。その責任を果たすためには、強くならなければならぬ。

まあ……本当は、私が言っていることじゃないけど。

「じゃ、二人とも……あとはよろしく 私は別の場所でご飯食べるから」

「高倉の旦那の所に行くなら、お茶でも飲ませてやってくれ」

そんなことを言いながら、十墨君はさりげなく茶葉の入った袋を私に手渡す。

んー……なんだか、どこかで見たような気遣い。

天弧さんに似ているようで、似ていない。似ているけど真逆。

そう、あえて言うなら……天弧さんの気遣いは『家族』に向けたものだけど、彼の気遣いは『誰か』に向けたものだ。

家族だから大切にするし、愛して当然なのではなく。

自分がやりたいことをやっている。……そんな感じがある。

まあ、彼は彼で大変なんだろう。そういう時は、誰かに助けを求めるほどに、苦しんで足掻くのが正解だ。

足掻いて生きると……天弧さんなら言うだろうから。

「ああ、旦那の嫁さん。飯の前に一つだけいいかな？」

「なんででしょう?」

和風御前を片手に持ちながら振り向くと、十墨君は口元を緩めていた。

呆れたような、疲れたような、そんな微妙な表情を浮かべて問いかける。

「あなたは……絶望って見たことあるか?」

「ええ。毎日、わりと、頻繁に」

まるで……天弧さんのように不敵に笑って、私はきっぱりと言いつ放つ。

「だから、毎日それを叩き潰すのが私の役目です」

「……………」

「疲労は心を荒らす。荒廃して壊滅する。そこに絶望が巣食う。だからこそ……疲れて帰って来た誰かの愚痴を聞いて、頭を撫でて寝かしつけてあげるのが、私の役目です」

「それでアンタはいいのか?」

「いいに決まっていますでしょう。私は聖人じゃない。私は、私なりの野望と欲望のために絶望を叩き潰す。リスクとリターンがきつちり等価で釣り合っている……こんなに楽しい役目はないと思ってますよ」

「……………」

「なにを見たのか知りませんが、見えたのだったら叩き潰しなさい。あなたのやり方で、最高と最善を尽くして、ね」

なにが最高で、なにが最善なのかは、自分で考えることだ。

私は格好良くそれだけを言い残して……食堂を後にする。

さて、首尾よく美味しいご飯を手に入れたところで、天弧さんの部屋に戻るのか。

空を見上げる。今日はいつになく……年末には珍しく、いい天気

だった。

よいか、兄上様よ。世界はいつでも危機に晒されている。空を見上げる。昨日から見え始めた……可視なる絶望を見上げる。

猶予は一年。その間に兄上様を戦士として育て上げ、本物の絶望を直視できるようになってもらう。謝礼は願いを一つ。成功報酬でもう一つ叶えてやる。

空に浮かんでいるのは、青い空と白い雲。

だから……兄上様よ。早く気付くがよい。お前は資格を手に入れた。

星も両断できそうな、巨大な黄金の剣が見えた。

十年前に生まれた、最強の敵と相対する資格を、兄上様は手に入れたのだ。

後で妹から伝え聞くことになる、その剣の名はゴルディオンセイバー。

十年前に突如誕生した、最強の世界の敵。

あれを砕く術を探すことが……僕の使命らしい。

「十墨、なにしてんの？ お雑煮の味を見て欲しいんだけど……」

「この空は綺麗だなと思ってさ。……それより、香純の姉ちゃんって二人とも超おっかねえな。殺されるかと思ったよ」

「んー……まあ、色々と油断ならない男運だからね、二人とも……」

……それにさあ」

苦笑しながら語り出す香純に曖昧な返事を返しながら、僕は空を見上げる。

星に切っ先を突きつける、とんでもなく巨大な黄金の剣。

砕く術など思いつくはずもないけど……まあ、なんとかなるだろう。

魔法使いだろうが正義の味方だろうが、妹や香純やこの宿の連中に比べたら、どうでもいいくらいの雑魚敵に違いない。

世界を壊す……そんなことは世界を知ろうともしない子供しかやらない。

そんな奴相手に負けるつもりは、毛頭ない。

「ってなことがあってさ……十墨、聞いている？」

「聞いているよ」

今度は確かに相槌を打ちながら、僕は空から香純に視線を移す。

さて……それじゃあ、世界の敵と戦う前に。

まずは

半分ずつ食べたらしき、和風御前。

お茶を煎れる準備は万全で、あとはお湯を注ぐだけ。

隣の彼女はすうすうと寝入っていて、起こすのは忍びない。

ぼんやりとした頭でこたつの上に置いた手鏡を覗き込み、口元を引きつらせる。

首筋に赤い筋。……まあ、極めて分かりやすいキスマークというやつだ。

どうやら、僕が寝入った隙にやられたらしい。

「ったく……ずいぶんと、まあ、可愛くなっちゃって」

ドラゴンどころじゃねえな、などと呟きながら、僕は箸を手にする。

半分ずつつってのもアレだけど……今日くらいは別にいいか。

ご飯を食べたらお茶を飲んで、彼女を起こして、またデートでもしようか。

そんなことを考えながら、僕は口元を緩めて笑った。

さて、それじゃあ。
今年を越えて、来年も頑張りましょう。

キャラクター紹介っぽいもの

・十墨志郎。

凡骨。正義でも悪でもない一般市民。
なんの因果か、あるいは世界の選択か、世界の敵と戦うことにな
った少年。

ぼさぼさ髪、中肉中背、垂れ目、見た目は人懐っこそうなほほ
ん系、中身は狼。

中身は狼の名の通り、かなり積極的なオープンスケベ。おっぱい
大きいねくらいは平気の平左で言ってしまう野郎である。

まあ、そのオープンさ加減は過去の色々が関係している。

家族構成は母と妹。妹には色々と複雑な事情があるので、嫌いで
はないが現状ちよつと苦手な状態。

特技は料理……というか、家事全般。

趣味はボードゲーム。麻雀から囲碁までなんでもござれ。外堀を
埋めながらの戦いが得意で、持久戦、あるいは耐久戦に持ち込むと
かなり強いらしい。

能力は力場の作成。力場と言うと分かりづらいが、要は念動力。
遠く離れた物をつかんだりできる。彼の場合はその力を自己の運動
能力強化や、相手の行動の障害に使っている。応用力は広いが、劇
的な効果は望めない能力と言い換えてもいい。

自称、自分勝手。自己の快樂のために他人に尽くす。

全ての戦いで敗北し、全ての戦いで敗走し、たった一度の勝利を
もぎ取るために死ぬほどの苦勞を背負うことになる守護者の物語。

メインテーマは『みんなの嫁』。

他者を攻撃する人間は基本的に自分の弱さを見抜かれたくない人間のことで、つまり彼もそういう人間で、おまけにそんな自分に自己嫌悪を抱いている有様である。

自称自分勝手。自称、ちっとも優しくない人間。

他人から見ればそんなことはないが、彼自身はそう思い込んでいる。

おまけに、彼の敵……つまり世界の敵は、そんな彼の心に土足で踏み込んでくる無礼者ばかりなのだ、そんなことには頓着せず料理と笑顔を振りまいて友達になつてしまふ……というのが、概要。

友達を殺さず、いかに世界の敵から脱却させるかが勝負の鍵。

ちなみに、彼と死ノ森あくむ、相川透は世界の仕組みをある程度知っているため、メタ発言が許される立場にある。

ただ、そんなことはこの物語には一切関係ない。この物語においては、彼はおせちを作りになぞわざ宿までやって来た物好きである。

・桂木香純

灰色の魔法使い兼、高校三年生で受験生。

姉に誘われてノコノコ温泉旅行にやってきた、世話焼き女。

某エンディングに出てきた時と口調と態度が違うが、こっちの方が本性である。

本編の方では出番は多くないが、基本気配り上手で他人に好かれる。ただ、気を配り過ぎて依存関係に陥ってしまったのがたまにきず。

十墨君としては、それが色々と気に食わないらしい。

彼と彼女がこれからどうなるかは、作者もよく分からない。

・芳邦鞠

メイド。今回は妹を誘って温泉旅行に来た。

姉とは色々あったものの結局和解し、たびたびメールのやり取りをしている。

今回、出番は少なめ。

・高倉天弧

忙しい大学生。でも、忙しいのは年末だから。

お酒に弱いのは相変わらずで、最近はそのすごい勢いで下僕に振り回される毎日。

ちなみに、空気を読まずに下僕に対してなにもしなかったので、帰って来た宿の面子に一発ずつぶん殴られることになるが、それはいつも通り。

いつも通りじゃないのは、『まあ、冥さんと舞さんは若いからいいですけど、妹の誕生を心待ちにしている美咲ちゃんの気持ちは酌んであげてもいいんじゃないですか？』という、下僕の爆弾発言に口元が引きつりまくること終始。

それでまたひと悶着あったりするのだが……それはまあ、別の話

・山口コッコ

彼の所有物。最近は非常に楽しそうなお宿のお姉さんにして主人公。

主人公にのし上がる（あるいは主人公に成り下がった）だけあって、立ち回りがなかなかえぐい。開き直ると誘い受けの小悪魔さんだったそう。

ちなみに彼女の野望というのは『十人以上の孫に囲まれて、みんなより後に笑って死ぬ』という壮絶なもので、その野望のために現在色々と頑張っているらしい。

一人あたり二人産めば楽勝ですよ、とかなんとか。

とりあえず、宿の面子の息子や娘なら自分の子供も同然らしい。

我が師の師ならば我が師も同然……って、このネタは古いか。

作者的には恋愛みたいなプロセスをすっ飛ばして、いきなり妊娠

出産に挑ませるつもりは毛頭ありませんよ？ 魔女 宅急便の原作
だって子供産んで終わったでしょ？

今年の課題は『エロくないのになんかエロい』。苦手だったべたべたした人間関係ってやつをなんとか物語的に盛り上げられたらいいかと思う。

最近の趣味は息子やら娘の名前を考えてノートにまとめること。
高倉家の人間は自覚あるなしに関わらずネーミングセンスが最悪で、おまけに出産直後というのはテンションが上がっているため、変な名前をつけられる子供も多い。

それを食い止めるために、今日も彼女は口元を緩めて名前を考えるのだった。

第二話・楽しい年末の過ごし方（後書き）

この一年小説を書いていないかと言われれば、そんなことはなかったりするわけで、別の物語を別のペンネームで書いていたりする。

まあ・・・あんまり読者数は増えちゃいませんがw

増え過ぎない程度でちょうどいいお題なので、そっちはマイペースで書いていますが、区切りがついたらこっちの方でも紹介するかも・・・つつつても、一年放置してたから、見捨てられてるかもしれないが。

いや、これは本当に申し訳ない。時間があつたらちよくちよく戻つてこようかと思っっていますし、まだ書かなきゃいけないあとがきもあるんですが……社会人3年目に突入してから時間がなくなってきた。

うん、今年はおとがきの書き残しの消化をとりあえず目標にしよう。
・・・初日から仕事がクライマックスなので、ちと時間はかかりませんが。

ともあれ、新年明けましておめでとつございます。

今年もよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3586d/>

ココさんふらぐめんと(おまけ詰め合わせ集)

2010年10月9日01時03分発行